

協同教育実践資料 26

豊高校区幼・小・中・高一貫教育態勢への 取り組みの記録

—地域の課題を追究した離島の教育とバス学習

杉江修治 編



豊高校区幼・小・中・高一貫教育態勢への取り組みの記録
—地域の課題を追究した離島の教育とバズ学習

杉江修治 編

一粒書房

はじめに一経緯の解説を含めて

本書は、瀬戸内に浮かぶ^{とよしま}豊島と大崎下島にあった豊浜町、^{ゆたかまち}豊町のすべての幼稚園から小学校、中学校、高校までが、地域の教育課題に応えるべく一貫教育態勢を敷いて取り組んだ1977年から1984年までの資料を集積したものである。両町は、今は呉市に組み込まれている。

内容は、1978年度からこの取り組みに参加した編者が、その都度受け取った資料に加えて、取り組みを中心的に進めていた豊高校教諭、越智昭孝氏から譲られたものからなる。取り組みの過程では、記録を残す事より実践を進める事の方に関心が置かれており、必ずしも緻密な集積ではないが、なぜ、どのような考えから、具体的にはどのような活動がこの取り組みで仕込まれていったかの概要はつかめるものになっている。

この取り組みからすでに40年を経ているが、教育が本来求めるべき課題が変わっているようには思えない。時代の変化とともに「不易」より「流行」に目が奪われがちな近年の風潮は、教育も例外ではない。しかし、人が学び成長するという学習の原理は不変であり、人が幸せに生きるための要件も、その基本は不変であるはずである。地域の教育課題を追究し、子どもたち一人ひとりの巣立ちを支えるための教師の真摯な取り組みの事例は古くなるものではないと思う。あえてこれを出す意義は十分にあると思うのである。

さらに、この取り組みでは、実践づくりの基礎にバズ学習理論を置いたことが特徴的であった。複雑な地域課題に対して、バズ学習の、原理を重んじた理論がふさわしいと教師たちが考え、単なるグループ活手法としてではなく、その理論を、自分たちがめざす教育に有機的に統合していく過程も興味深い。

また、異なる校種、複数の学校が共同歩調をとって実践を進める難しさも、資料の各所で伺うことができる。日本の学校文化の課題が垣間見られるし、それをどう解決していこうかと、中心的に取り組んだ事務局の苦労が推測できる資料にも満ちている。

近年、小中一貫教育とか中高連携といった取り組みが広がってきている。しかし、この瀬戸内の一貫教育態勢の取り組みに比べると、そのスケールばかりでなく、なぜ連携が必要なのかという動機の高さがずいぶん違うように思えるのである。教育という営みへの対時の仕方を学べる資料でもあると思う。

この取り組みがなされていた時代は、報告書の多くはガリ版刷りであった。電子化が難しい文書も多く、編者自身が筆写・データ入力した資料も多い。多少の間違いは容赦願いたい。また、研修会での指導案集や学校単位で出された研究紀要なども多くあるのだが、これは筆写するには手に余る仕事であった。資料51に一部を掲載できたに過ぎないことを断っておく。さらに、ここでは就学前教育への取り組み資料を掲載しなかった。そこでの熱心な取り組みは大部な資料として残っている。何らかの形で紹介できればと思っている。

さて、変則的ではあるが、ここまで記した本書の意義に続き、この地域ぐるみの取り組みの経緯についても先に触れておきたい。結果として長めの「はじめ」になってしまうが、資料読み解きの手掛かりは先に出しておいた方がいいという判断である。

1. 幼・小・中・高一貫教育態勢の発足（1977年まで）

広島県旧豊田郡豊浜町と豊町2町にある5幼稚園、6小学校、2中学校、1高等学校の全教員150名弱が参加する、一貫教育態勢をめざした「広島県豊高校区教育推進協議会」（以下、推進協）が発足したのは1978年であった。それは地域の教育課題に応える一貫した教育のあり方を探るべく、教師たちが学校を、そして校種を越えて連帯し、多様かつ精力的な実践研究を重ねた大規模で希少な事例であった。その実践の理論的な背景として教師たちが選んだのがバズ学習の原理である。

名古屋大学名誉教授塩田芳久を中心として、複数の研究者*がアクション・リサーチの形でこの実践に深く関わった。編者もその一人として1978年から10年近く、この地域の実践と関わる機会を得た。教師たちの研究成果は様々な資料として残されているが、その内容について公刊されたものは、越智・杉江による『同和教育とバズ学習』（揺籃社 2001）を除いてはほとんどない。その本も自費出版として刊行したものであり、流布した数は多くはない。

*当時関わった研究者は、編者の他、梶田正巳、市川千秋、鹿内信善、石田裕久、石田勢津子であった。

（1）大崎高校下島分校からの問題提起

豊浜町と豊町は、大崎下島、豊島、斎島という、愛媛県との県境に近い3つの島にまたがる町である。両町の産業は、山を代々切り拓いて作りあげてきたみかん栽培と、豊浜港を基地とする漁業である。みかんは「大長みかん」として西日本にそのブランド性を誇っており、漁業では、豊浜漁民はその技量と新しい技術開発などで西日本一円にその名をとどろかせていた。

しかし子どもたちの家庭生活に目を向けると、農家の作業の厳しさゆえに子どもと親の接触が極めて少ない、また漁業では遠隔地への出漁が一般であり、長期にわたる両親不在の家庭が多くなっていた（資料3）。資料40に要覧を示した「学寮」で、親元を離れて過ごす子どもの数は100名に近かった。基本的な生活習慣が十分身に着いていない子どもたちの学力面での停滞は大きな問題であり、地域の活性化への不安材料となっていた。

離島という地理的条件は差別の対象となる条件でもあった。離島に住んでいるということで、本土により近い地域から差別を受けるのである。被差別部落があるこの町の、差別を助長させていく構造的な条件がそこにあった。また、子どもたちの学力を保障するための多大な経済的負担もあった。学力の高い者は高校進学に際しては本土の学校を選択していた。町内での十分な学力保障が可能な条件が整っていないという行政面の問題と、あわせて教育面でのこの問題を解決していこうというエネルギーが高校の中で生まれていった。

（2）態勢づくりと実践交流

町内の2中学校ではすでにバズ学習を取り入れていた。とりわけ豊浜中学校は1972年に第4回全国バズ学習研究集会を主催しており、特徴ある「町内バズ」の実践でも知られるバズ学習先進校であった（資料41）。高校の教師たちは、進学してくる生徒の学習態度、意欲、学力の不足を中学校の指導に原因があるのではないかと考え、中学校に参観に行く。しかし、課題は地域の教育環境に構造的に存在することに気づいていく。学校を越えた連携の必要性を感じ、それを模索しはじめ

たのは1975年ころであった。1976年からは高校でも各教科、帰りの会などにバズ学習を取り入れるようになる。

高校では1977年に「下島分校教育推進規定」を改訂し、教師集団の成長を図ることが何よりも必要であるという認識の元に、そのための条件づくりを行なった(資料1)。教師自身の課題を明らかにしていかななくてはいけないという一貫した態度は、この取り組みの特徴である。資料15の豊高校の実践報告にある「えてして教師は『分からんならよく聞け』『よく勉強しないから分からなくなる』と言って、『分からなくさせた』責任を『分からない』個の努力のなさに押し付けてしまい、『分からない』と言えなくさせてしまう」という記述などは、教師たちが取り組みの出発点をどう捉えていたかを確かに表していると感じられる。

豊浜町、豊町の教師たちは、生徒の進路保障を主眼に、バズ学習の原理と方法を、教師集団として、徹底して捉え返すことを図ったのである。1978年以降何度も、編者も参加した研修会終了後に、高校の教員のほとんどが教員宿舎に集まり(離島ゆえに若手の教員が圧倒的に多いのであるが)、研究者グループも交えて会食しながら教育論議を活発に遠慮なく交わした経験は、互いに貴重なものであった。若い教師たちは、一人ひとりが地域の教育を支える意欲を持っていた。その意義を学習し、確認する場であった。

地域の学校間の連携としては、すでに幼、小、中の連携組織は存在していた。同和教育運動の展開の中で、広島県同和教育研究協議会の下部組織として、各町単位の同和教育研究会が、幼、小、中をまとめた研究交流を行ってきたという前史があったのである。中、高は、1976年に高校がバズ学習による授業公開研究会を開催し、中学校からの参観がなされた。中学校の授業研究も高校から参観するという形で、不定期ながら交流が行なわれはじめた。1976年の豊浜中学校の研究紀要には、すでに「幼・小・中・高一体となり、地域にゆさぶりをかけ、地域ぐるみの教育実践と教育内容の創造性をめざす」という表現が見られており、中学校側もこの課題を積極的に受け止めていたことをうかがうことができる。

1977年には、春季に高校と豊中学校とで公開研究会が開催された。日程を2日に分けて実践交流が図られたのである(資料3)。秋季には高校と豊浜中学校で公開研究会が開催された。夏休みの終わりには、広島県教委、豊浜町教委、豊町教委の後援の元に、高校に置かれた事務局の企画で、1泊2日の「下島地区小・中・高合同合宿研修会」が持たれ、塩田芳久と名古屋大学の梶田正巳を講師として、各校の課題の交換と2学期以降の授業改善に向けた研修が行なわれた(資料4)。その経験は画期的な試みとして当時の教員たちの中に残ったという。

さらに、合宿での問題提起を受け、休み明けにさっそく「下島地区小・中・高・教育推進組織結成準備会」が呼びかけられ、町内各学校と教委が集まり、幼・小・中・高一貫した教育態勢づくりのための研究組織の結成の合意がなされた(資料5)。第2回の準備会は10月に開催され、規約、役員、日程などの議題が出された。組織づくりの具体化にともなう調整の必要性や、それまでバズ学習に取り組んでこなかった小学校でのバズ理論の受容などで論議が重ねられた(資料6)。バズ学習は単なる技法と理解され、複式学級を持つ学校での戸惑いが表明されたり、すでにテーマを持って実践を行なっている学校からは、それとバズ学習との整合性に納得がいけないといった反論が出

た。しかし論議の過程で、バズ学習を学習指導の原理として位置づけるという理解が得られ、1978年4月に、その年大崎高校から独立した下島分校が豊高校と改名し「広島県豊高校区教育推進協議会」が結成されたのである。なお、この地域に独立した高校ができたということは、地域からの教育要求に対する条件整備の成果であった。あわせて、推進協が母体となって、1978年度の第13回全国バズ学習研究集会を豊浜町、豊町で開催することも合意されたのである（資料7）。

（3）なぜバズ学習か

推進協の理論的基礎として、なぜバズ学習が選ばれたのだろうか。これは他地域のバズ学習実践者の間でも十分な納得が得られていない問題であった。推進協の文書にも、このことを直接に解説したものは見いだせない。その端々をたどって、なぜバズ学習だったのかを推し量ってみると次のようにまとめられよう。

この地域は先にも述べたように、島として被差別状況におかれ、内部に被差別部落を持つという複雑な差別構造を内包していた。目の前にも、潜在的にも存在する問題状況の中で、ここでは同和教育が地域と教師たちの主要な課題となっていた。同和教育の目標は、単に差別意識、差別行動を除去することに止まらない。被差別状況がもたらしたさまざまな矛盾、たとえば経済的問題、進路保障の問題など、そこには構造的な問題が存在するのである。そのような幅広い問題を根底から解決する適切な統合的指導原理と方法が模索されていた。

同和教育をそのように統合的図式で捉えたとき、信頼に支えられた人間関係を基盤とし、認知的側面と態度的側面の同時達成を図る、そして基本に科学的方法論を用いる、人間学習についての原理的視点を持ったバズ学習は、それに 応え得る可能性を持つものと考えられたのである。それまでに、バズ学習の実践で同和教育を前面に取りあげたものはなかった。しかし、推進協の中で、教師たちがバズ学習を自らの実践的関心に基づいて捉え返し、その意義を評価し、自ら応用的試みをするという、教育実践研究のモデルとなるアプローチがここでなされた。バズ学習もそれによって実践と研究の図式を広げることとなったのである。

2. 第13回全国バズ学習研究集会の開催と全員合宿研修（1978）

（1）全員合宿研修会

1978年の5月には、推進協によって第1回協議会が招集された。そこで全国バズ研究集会の持ち方、準備の手順の素案が練られ、翌月、第1回推進協総会・第13回全国バズ学習研究集会現地実行委員会が開催された。そこで全国集会の構想も全員に明らかとなり、7月には第2回の協議会を開催し、推進協参加教員全員合同合宿の構想が提起された。なお、6月中にシンポジウム「一貫教育態勢とはなにか」が開催された。塩田と徳島県でバズ学習の先進的实践を行なった四宮恒夫を講師として、一貫教育態勢の意義と課題に関する熱のこもった議論が交わされた様子が「推進協ニュース」1978年度2号からうかがえる（資料8）。

また豊中学校、豊高校での授業公開をともなう研究会も複数開催されている。7月下旬には、1泊2日の第1回全員合宿研修会が隣町の国民宿舎で持たれた。編者がはじめて参加した研修会である。

この会には2つの目的があった。一つはバズ学習の共通理解の促進であり、もう一つは全国集会での各分科会で、推進協として提起する内容と分担、取り組み方の決定であった。各学校から実践資料が出され、学校を越えた検討が交わされた。この会での「課題提起」として、推進協の活動の根に同和教育の抱えている問題の解決を志向するということがあり、進路保障と同時に同和教育の論理を一貫させた指導の可能性を追究する原理としてバズ学習が適合するものだという確認がなされたのである（資料11、12）。

全員合宿研修会は8月末に再度開催されている。1泊2日で9つの分科会に対して5名の研究者と県外の7名の定評あるバズ学習実践者を助言者として招き、実践報告を深めていくための話し合いが行なわれた。熱のこもった実践交流と、同和教育の観点からの問題提起は編者にとってもきわめてインパクトの強いものであった（資料13-15）。

ここでの経験をふまえて、全国集会に向けて、各学校は10月上旬まで、順に学校別の学習会を開き、実践を練りあげていった。

（2） 第13回全国バズ学習研究集会

バズ学習の実践を長く続けていた中学校2校は別として、小学校ではバズ学習は1978年度が取り組みの最初の年といってもよいものであった。したがって、2回の合同合宿は実践の入り口であったにすぎない。研究集会の基調提起には、この全国集会をきっかけとして一貫教育態勢を作りあげていきたい、そしてもう一度この集会を開催し、成果を見てほしいといった趣旨が述べられている（資料12）。

2日にわたる会期の初日の公開授業は、2町のすべての学校、幼稚園で行なわれた。推進協は9つの分科会すべてにわたって、他地域の実践研究にまじって発表を行なった。推進協会員以外の参加者数は、島外から302名、内県外161名と、地理的な不利にも関わらず盛会であった（資料18）。

（3） 全国バズ学習研究懇談会の設立

推進協が軸となって進めた事業に、全国のバズ学習実践者と研究者をつなぐ組織づくりがあった。塩田は1校1校の実践に力を注ぎ関わっていくことが自身の仕事と考え、積極的にバズ学習の全国組織を作ろうとは考えていなかった。しかし、バズ学習の広がりとともに、その実践者を支え、実践交流を保障する場が必要だという声から実践者から出はじめ、その仲介の労を推進協事務局がとったのである。1978年の6月に広島県竹原市に30名ほどのバズ学習の中核的实践者と塩田の会合を推進協がセットし、組織づくりの合意がなされ、「全国バズ学習研究懇談会」が設立された（資料16）。これが1980年に「全国バズ学習研究会」と名称変更された組織の前身であった。

推進協は、その活発さと確実に成果をあげていく有能さでは驚くべき活動性を示した。事務局のあった豊高校教員の力に負うところはきわめて大きいものであった。事務局はまた、そのような活動を可能にする予算的裏づけを獲得するための努力も重ねた。地域の困難な課題に応えようとする積極的意欲に対して、1978年度は豊町から約200万円、豊浜町から約100万円、県教委から50万円の助成金が支払われている。推進協の問題意識はまさに町や地域の問題意識でもあった。

3. 実態調査と実践交流 (1979)

(1) 実態調査の実施

バズ学習研究集会開催後の11月下旬、推進協では全員総括会議が開かれた。その中で、幼・小・中・高一貫教育という全国的にも稀な態勢を作りあげた実績には意義を認めながら、実際に実践に関わった教員たちは、思い思いの教育でしかなかったということ、体験を通して自覚していた。何を一貫させるかに関わって、その基礎となる実態把握が必要であるという点が明らかになっていったのである。そこで緊急に、共通する課題を明らかにするための、学校生活を中心にした実態調査を行なうという計画が提出された。推進協は、連帯による教師の意欲の高まりを目的とするところから、具体的に子どもたちをどう変化させるかというところに踏み込んだ新しい段階に進んだのである。現場からの教育改善に実証的アプローチを採用したことは特筆されてしかるべきだろう。

次年度予算策定期までに、塩田らとの検討に基づき調査の大枠を決定し、豊浜、豊両町に助成金申請を行ない、両町もその意義を認め、調査以外の予算も含めて合計300万円程の助成が予算化されることとなった。

調査は両町の園児、児童生徒全員を対象とした。次の調査を実施することとなった(資料20)。

①集団式知能検査：教研式新訂学年別知能検査(小、中、高校生)、新訂幼児用知能検査(幼稚園児)。

②標準学力検査：小学校は、国語、算数(数学)、理科、社会の4教科、中学校はそこに英語を加えた5教科、高校は国語、数学、英語の3教科で実施した。

③学習適応性検査(AAI)：学習態度、学習技術、学習環境、精神・身体の健康、の4領域についての標準テスト。

④学級構造調査：変形のソシオメトリック・テストを用いる。学習指導領域と生徒指導領域での对人的接近次元、勢力次元、目標志向次元に関する6つの質問を用いた。

4月中旬に2日をかけて、実態調査説明会を各学校の代表に対して行なう。調査の意義と実施の具体的方法について、研究者からの解説を受けた。下旬に一斉に調査を実施。データ整理は研究者に任された。編者もその一員として膨大な資料に取り組むこととなった(資料24)。

7月、夏休みに入って早々に実態調査の中間報告が、整理にあたった研究者を講師として、学校種別の分科会形式で行なわれた(資料23)。この調査結果は『教育課題を求めて』(1980)として報告されている。また、次年度に同様の作業を繰り返し、第1回を事前テストと位置づけ、推進協の実践的取り組みの効果を検討し、さらに、新たな課題発見の資料とすることを確認した。この調査は合計5回実施することも確認された。

(2) 実態調査結果から

このような地域をおおった悉皆的な実証的調査は、研究者にとっても研究機会としては稀なことである。われわれはその資料を分析し、次のような考察を行なった。

①知能は、中学校までは全国平均をやや下回るが大幅なものではない。高校は全国平均よりも低く、学年が進むほどその差が大きい。

②教科の学力は全国水準と比べてかなり低い結果が見られた。とくに小学校の中学年と高学年での不振が目についた。しかし、中学校になるとすべての教科で成績が向上する。両中学校では推進協結成以前からバズ学習を行なっていることが主要な原因と考えられる。高校での低学力の問題は、中学校からの進路選択上の要因が強く働いているものであった。

教科別では国語の落ち込みが各学年で目についた。言語能力は各教科共通の基礎的学力となるものであり、授業改善のポイントがそこにかがえたのである。

③学習適応性検査では、小学生では4領域ともに、高校生では精神・身体健康領域以外の領域で全国平均より明らかに低い結果が示された。一方中学生は、精神・身体健康領域は全国レベルであり、その他の領域も小、高ほどの落ち込みはなかった。また、中学校では明らかに学年を追って適応性の偏差値が上昇する傾向が見られ、これもバズ学習の成果と解釈できるものであった。

④学級構造調査の結果は事後の変化に関する資料がなく、また比較すべき基準もないため、1回の資料では明らかにできる内容は少なかった。ただ学年間で比較検討してみると、学級の社会的構造は小学校の場合、高学年になっても成熟していくという傾向が見られなかった。学級内の人間関係づくりで課題があることが分かったのである。

なお、報告書では、学校別の集計は報告せず学年ごとの報告としたが、各学校、各学級には学校、学級ごとに集計した資料を報告し、児童生徒の個票も含め日常的な活用が期待された。

(3) 実践交流

1979年度も、春と秋に各学校を会場とした授業公開をともなう実践交流会が開催された(資料23)。春は豊高校と豊中学校、豊島小学校と豊浜中学校と豊高校、沖友小学校と大浜小学校が合同で開催し、秋には豊島小学校と久比小学校と豊浜中学校および豊高校、また大浜小学校と沖友小学校の合同研究会を町外にも案内する形で開催した。前年度のバズ学習研究集会ほどの規模ではなかったが、非常なエネルギーと意欲の示された試みであった。

また、姫路市立白鷺中学校で開催された第14回全国バズ学習研究集会に、推進協からは4件の実践研究発表を行い、全国の実践者との交流を図った。その後のバズ学習研究集会には、第15回に3件、第16回に2件、第17回に3件、第18回に2件といったペースでコンスタントに発表を行っていった。

4. 地域の教育課題の明確化と実践化(1980年～1983年)

(1) 第2次、第3次実態調査

1980年、1981年の第2次、第3次実態調査の結果はそれぞれ報告書が作成されている。調査の内容は学級の社会的構造についてのみ3学期に事後調査を加えた他は1979年と同じである。2回の調査を通して、この地区の子どもたちの次のような実態と、推進協の活動の成果が明らかになった。

①知能：高校は学校選択の過程での要因が関わっているため、全国平均に比べて低いが、幼、小、中の結果を通して検討すると、学年による差はあるが、この地域の子どもの知能は全国水準に

近い。

②小学生の学力：1980年には、3年生と5年生を除いて学力偏差値は向上し、全国水準に達しているかやや下回る程度になっていた。1981年度では5年生で大きな伸びが見られたが、その他は前年度からの変化が小さかった。前年度成績の伸びの小さかった4年生と6年生はこの年度も伸びが小さかった。しかし、総じて推進協による活動が軌道に乗ってから、学力面での進歩が認められた。

③中学生の学力：1980年には、中学生は学年の推移とともに学力が高くなり、3年生では国語を除いた他はほぼ全国平均であった。前年度との比較では1年生はどの教科も伸びており、2年生はさらに大きな伸びが見られた。1981年度には2年生の伸びがさらに見られたが、1、3年生では前年度を下回り、学力に停滞が見られた。

④高校の学力：1980年度はどの教科も各学年で全国平均をかなり下回っている。また、1年生、2年生ともに前年度からの伸びが見られない。しかし3年生は進歩を示した。1981年でも同様の結果が見られた。

⑤学習適応性：1980年度では、小、中学生の学習適応性は全体的に良好であった。しかし、高校になると不適応傾向が見られるようになる。とくに学習技術の側面での適応が悪い。前年度との比較では、高校を除いては適応がやや進んでいる様子が示された。1981年度は、小学校5年生以上の学年ではわずかながらさらに適応が進んだが、それより下の学年では変化はなかった。

⑥学級構造：1980年度は、小、中、高校ともに、選択関係や凝集性については学級差が非常に大きかった。また1年間に望ましい変化を示した学級は少なかった。さらに中、高と進むにしたいが、対人関係が一部の者同士の少人数のまとまりに収束する傾向が見られた。1981年度は、小学校では学級構造が年間でやや好変する傾向を見た。中学校も望ましい変化を示した。高校は前年度と変わらず、学級集団に関しては望ましい変化を起こしていなかった。

(2) 実態調査をふまえた地域の教育課題の明確化

3年間にわたった実態調査資料は、1980年度の9回の実態調査研究委員会と7回の協議会で検討され、1981年の総会で「共に生きる集団づくりを」「教育活動の全領域で言語認識を」という2つの実践目標に凝結した(資料34)。調査で明らかにされたことから中から教育を進めるうえで本質的な部分を抽出した結果である。確かに、学級を中心とした集団づくりの観点が教師の側に欠けていたし、実態理解も不十分であった。また学力面での問題は、学力検査の検討を進める過程で、すべての教科理解の前提となる言語活動の弱さが明らかになってきたのである。それには、出漁や農繁期の忙しさで、親と十分に接することのできない子どもたちの言語環境の実態分析からの裏づけもあった。

この2つの実践目標が明らかにされたところで、推進協の実践が、各校横につながる条件ができたのである。

(3) 推進協における実践交流の継続

1980年から1983年にかけて、推進協内部での実践交流は変わらずに続けられていった。1980年、1981年は、春と秋に各学校持ち回りの合同研究会が開催され（資料36、39）、授業を中心とした実践公開がなされた。1982年と1983年は、春は各学校独自の研究会、秋は合同研究会の形で頻繁な実践公開が行なわれたのである。学校によっては独自のテーマを設定し、それと推進協の実践目標の統合を図る形をとった。豊小学校では視聴覚機器の導入を積極的に行なった。豊浜小学校、久比小学校では体力づくりに実践的関心が向けられていた。また、バズ学習の工夫として、豊高校と豊中学校では単元見通し方式のモデルに沿った実践の可能性を探り続け、豊浜中学校ではそれに加えて町別バズを継続していったのである。

1981年には就学前教育部会が発足し、そこでの実質的な実践研究態勢が作られた。1982年には教員の異動が多くなった状況に鑑み、基礎講座「バズ学習入門」が、塩田と他県のバズ学習実践校の実践者によるパネル・ディスカッションの形式で開かれた（資料39）。

（4）他地域との実践交流

春と秋の公開研究会はしばしば豊高校区外にも案内され、多数の参観者を見た。1980年秋には第20回広島県へき地小規模学校教育研究大会を推進協が実行委員となって開催した（資料31）。大浜小学校、斎小学校、沖友小学校、豊中学校で授業公開を行い、豊小学校で総会を持ち、各会場校に1校ずつ別の学校がサポートとしてつくという、推進協あげでの取り組みを行なったのである。

1983年度の総会では、1984年に第19回全国バズ学習研究集会を再度開催することが決定された。その主な意義は、第13回の全国集会を出発点とした推進協の実践成果を内外に公開し、評価、確認し、新たなステップを踏み出すところにあった（資料43）。

5. 第19回全国バズ学習研究集会の開催とその後（1984年～1986年）

（1）主題と内容

1984年は、5月の連休と夏休みに公開授業の準備としての集中的な研究会が開かれ、全国集会のテーマである「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造：共に生きる集団づくりを」を実現する授業改善に向けた努力が重ねられた（資料47）。この実践づくりには、複数の研究者の一人として編者も参加したのであるが、授業設計に対する推進協の教師たちの熱意は非常に高く、活動の盛り上がりを感じたのである。同時に両町の教育委員会や町長など、行政側も、多額の予算的裏づけだけでなく、個人的にも関心を寄せ、さまざまな形で接触があったことも印象的であった。他地区のバズ学習実践校に地域教師の大多数を派遣し、参観機会を設定したことなどは、よく実現できたことと思う（資料42）。全国集会は10月下旬、2日にわたって開催された（資料50）。授業公開はすべての幼稚園と学校で2時間ずつ行なわれた。授業のモデルは、基本的にはバズ・単元見通し方式によるものであった。豊浜中学校では、その内1時間は町内バズを公開した。豊中学校では生徒が自主的に進める特色あるクラブ活動を1時間公開した。参加者数の資料は失われているが、分科会の助言者として参加した編者の印象では13回の研究集会を上回るものであった。

(2) 成果とその後

推進協が発足してから第 19 回のバズ学習研究集会在開催されるまで 7 年間、決議機関としての協議会の開催回数は 40 回、実態調査委員会は 19 回、就学前教育部会は 16 回、その他領域別の会議は約 50 回、さらに、毎年、春、秋の各校の公開研究会、校内の自主的研究会、全国バズ学習研究会への毎年の研究発表など、まさに超人的な取り組みが地域をあげてなされていった。このような規模と内容と継続性を持った事例は過去になかったであろう。

第 19 回の研究集会后も実践交流は行なわれていった。しかし 1986 年、豊高校で異常な人事異動がなされ、事務局態勢が一気に脆弱化し、それまでのような推進協の活動は突然止んでしまう。推進協自体は残っても形式的な連携に矮小化されていった。1991 年に編者が豊中学校の研修会に招かれた折には、バズ学習の実践は学校として続けられていたが、学校間の共通の問題意識は希薄になっていた。90 年代半ばには、形骸化していた推進協も消滅したと聞いた。推進協の拠点であった豊高校は、生徒減で、1996 年に廃校となった。

時代の流れとは言え、へき地の衰退にはすさまじいものがある。実践の舞台となった豊浜町、豊町は 2004 年、共に呉市と合併している。1980 年と 2021 年の人口を比べると、豊浜町は 4,017 人から 1,223 人へ、豊町は 5,053 人から 1,631 人へと減少している。2 町合わせてほぼ 70% の人口減となる。小中学校は、1995 年に斎小学校は廃校、1997 年に沖友小学校が豊小学校と統合、2001 年には大浜小学校が豊島小学校と統合、その翌年には久比小学校が豊小学校と統合、そして 2014 年には豊小学校と豊島小学校が統合して豊小学校となった。中学校 2 校は 2014 年に統合し、豊浜中学校となった。今は旧 2 町に小学校 1 校、中学校 1 校となったのである。児童・生徒数は、1978 年のデータでは 2 町で小学生 922 人、中学生 544 人、さらに高校生 233 人が在籍したが、2021 年には小学校 36 人、中学校 34 人の単学級の学校である。高校は島内にはない。

地域と結ぶ実践としてはきわめて有意義なこの事例が衰退していった背景を探ることは、日本の教育文化の特徴を探る有力な手がかりになるように思われる。教育心理学者としての編者には荷の重い課題であり、解を見つけることは困難であるが、気づいたことがらをあげることでくらいはできそうである。

まず、推進協の活動の原理は同和教育に求められる統合的原理であり、教科指導までも含み込み、人間関係も同時的に、しかも効果的に達成させるというバズ学習の原理がそれに当てはまるということがなかなか個々の教師に理解されなかったということがあげられよう。バズ学習は小集団を使った固定的な技法であり、同和教育とは別物だという、技法にとらわれた発想から教師たちが抜け出すことは難しかった。また、教育の目標について日常的に突き詰めて考えない、いいかえれば教科書の伝達が仕事だというレベルで教育目標を捉えてすんでしまう教師の文化が優勢な現状の中で、地域の教育課題を捉え返し、自らの主体的判断で目標設定するという転換を、異動を伴う個々の教師に求めることも難しかったといえる。

さらに、豊高校区どの学校でも、教師自身の課題の明確化という方向性を持ちながら、改善への工夫が、結局は子どもに〇〇させるというような、指導の論理を基礎においた発想から自由でなかったことが、改善案の端々からうかがうことができる点も問題だったと感じられる(資料 34 等)。

最近でこそ、教師の間で学びへの理解が進みつつあるが、80年代ではまだまだ「教師よがりの実践」の色から抜け出することは相当難しかったようである。

指導的立場の校長の態度も強い影響力を持った。1982年度の実態調査では、中学校での成果に次第に陰が見えてくる様子が示されている。それまでバズ学習を主体的に取り入れてきた校風が校長の交替によって変化した可能性が高い。校長の逆方向の影響の最たるものが豊高校における異常な人事異動であった。詳細は外部の者としての編者には不明であるが、推進協に対する校長の個人的な考えがそこに強く反映した疑いが強い。それを支持する反教育的な勢力が地域の内外にあったことも確かであろう。

実質約10年にわたって精力的に繰り上げられた豊高校区教育推進協議会の実践は、学校と地域と子どもを結ぶ貴重なものであった。その間、多数の教師たちは子どもたちにとっての最適な教育環境を模索していった。それは子どもと教師の双方に後まで残る経験を与えたことであろう。また、地域が学校に期待し、純粋に積極的にその活動を支援した事例としても興味深いものがある。あわせて、このような実践が20年30年の長期にわたって継続され得なかつた日本の教育状況の課題も浮き彫りにしたのである。

*本稿は、越智昭孝・杉江修治『同和教育とバズ学習—地域の教育行く課題に応える実践をめざして』（揺籃社 2001）の第3部「地域課題に応える幼・小・中・高一貫教育態勢とバズ学習」を改稿したものである。

編者

目次

はじめに一経緯の解説を含めて	1
1 1977年度、大崎高校下島分校が動き始める	14
資料1 「下島分校教育推進規定改正案」	14
資料2 下島分校校内討議資料	17
資料3 春季公開研究会資料	18
資料4 第1回下島地区小・中・高合同合宿研修会開催要項	20
資料5 下島地区小・中・高教育推進組織 結成準備会案内	21
資料6 下島地区教育推進研究会（仮称）規約	22
2 1978年度、豊高校区教育推進協議会発足、動き出す	24
資料7 協議会、1学期の活動	24
資料8 教育推進ニュース 2号	29
資料9 第2回協議会	30
資料10 広島県教育委員会への「教育運営費補助金」交付申請	30
資料11 第1回全員合宿研修会案内	31
資料12 第1回全員合宿研修会配布資料	32
資料13 第2回全員合宿研修会案内	36
資料14 広島県豊高校区教育推進協議会第2回全員合宿研修会日程表	37
資料15 第2回全員合宿研修会配布資料（実践編）	38
資料16 全国バズ学習懇談会の発足	44
資料17 広島県解放・バズ教育推進研究会高校部会結成趣意書	46
資料18 第13回全国バズ学習研究集会案内	47
資料19 豊高校区教育推進協議会 第9回協議会資料	51
3 1979年度の豊高校区教育推進協議会の活動	55
資料20 豊高校区「推進協」ニュース 2号	55
資料21 79年度広島県豊高校区教育推進協議会「公開研究会案内」	57
資料22 実態調査報告・研究会案内	58
資料23 公開合同研究会案内2件	59
資料24 実態調査報告書作成編集会議資料	62
資料25 第13回推進協 協議会案内	64
資料26 研究委員会・実態調査研究委員会	68

資料 27	1. 28 狭山同盟休校をめぐる学校総括	70
資料 28	部落問題の正しい理解を目指す取り組みの提案	74
4	1980 年度の豊高校区教育推進協議会の活動	78
資料 29	推進協第 16 回協議会	78
資料 30	1980 年度総会資料	79
資料 31	1980 年度の豊高校区での諸研究会案内概要	81
資料 32	80 年度秋季合同公開研究会	82
資料 33	豊高校の授業研究レポート	83
5	1981 年度の豊高校区教育推進協議会の活動	89
資料 34	1981 年度総会案内	89
資料 35	1981 年度総会での各校の作成資料	99
資料 36	1981 年度各種研究会案内	118
資料 37	推進協実践具体案	125
6	1982 年度の豊高校区教育推進協議会の活動	154
資料 38	1982 年度総会開催要項	154
資料 39	1982 年度研究会案内	170
7	1983 年度の豊高校区教育推進協議会の活動	178
資料 40	「学寮」要覧	178
資料 41	豊浜中学校とバズ学習	183
資料 42	姫路市立安室中学校視察に向けての配布資料	184
資料 43	1983 年度総会資料	186
資料 44	実態調査の実践活用事例（第 14 回豊竹同教研究大会報告書）	207
資料 45	各種研究会案内	210
資料 46	第 19 回全国バズ学習研究集会準備資料	215
8	1984 年度の豊高校区教育推進協議会の活動	218
資料 47	1984 年度 広島県豊校区区教育推進協議会 総会資料	218
資料 48	第 19 回全国バズ学習研究集会ですべての実践を	226
資料 49	昭和 60 年度助成金申請	232
資料 50	第 19 回全国バズ学習研究集会案内	240
資料 51	小・中・高校の具体的実践	244

1 1977年度、大崎高校下島分校が動き始める

資料1 「下島分校教育推進規定改正案」

一昨年度末、私たちは昭和44年度から施行していた教務運営規定の改正を行った。その改正の趣旨は、生徒に学力を保障する営みは、ひとえに教員の主体性と、それを保障する民主的な職場づくりであり、模索から創造へと飛躍させるための態勢づくりであり、新しい段階に対応するためであった。そして、1年間の実践を行ってきた。この間、主任制度化と、でたらめな見做し主義に基づく主任の任命などがあり、ある意味では混乱の多かった年度でもあったが、一方、その事と関わりなく、私たちの校務運営規定に幾つかの欠陥が見出せた。それは以下の諸点である。

1. 私たちはバズ教育を教育実践の中核に据えた取り組みをしてきた。その目標とするところは、認知学習と態度学習の統一実践であり、単なる社会集団である学校集団を心理集団へと変革を図る取り組みである。そして具体的には、自主・協調・創造へと向かわせ得る教育内容の問題である。

その実践を实らせるためには、私たち自身が心理集団化しなければならないし、私たちがバズらなければならないはずである。しかし、残念ながら、私たち自身が受けた教育においては、そうした訓練は皆無に等しいし、差別教育そのものであったと言っても過言ではない。したがって、私たちが日常的に、より優れた援助者となりうるために、訓練し得る場の設定が必要であった。

その設定が不十分であった。

2. 学校集団は学級集団の集合体である。そして、学校生活の大半は学級集団を基礎にしている。それに対応する教員態勢としては、HR担任が、そしてHR委員会がここから出てこなければならない。現状では、HR委員会即全職員という構成ではあるが、企画立案機能をはじめ、ここを通らない内容は直接生徒に関わっては、あってはならない存在として位置づけなければならない。

その位置づけも不十分であった。

3. 私たちの運動の原点は、私たち自身の主体性を鍛える所に置いてきた。即ち「教師こそが最大の教育条件である」という命題の下に戦ってきた。その主体を鍛えるためには、自らの教育課題を明らかにし、実践を通じて、教師としての専門性を追求すること以外にない筈である。そして、それをより高めるためには、相互点検、自己点検が絶えず繰り返されなければならない。

そうした営みが保障される仕組みが弱かった。

4. バズ教育を通じて、私たちがめざしている集団は、協調によって相互に高め合う集団であって、特定のリーダーを養成し、あるいは、いわゆる核づくりによる集団づくりではない。相互に認め合い、誰もが役割を分担し合える集団を目指すならば、当然私たち自身もそうでなければならない。つまり、教師として、生徒を中心に据えたとき、誰もが等しく責任を負える態勢づくりがなされなければならない。そのためには、請け負いの仕事の分担や、ましてや上意下達的な仕組みは厳に排さなくてはならない。経験の有無や、若干の実践など、そうした水平的な関係の中で提出してこそ一定の意味を持つものである。

これらの点に対する配慮が少なかった。

以上のような視点から、校務運営規定を次のように改正することを提案したい。

「大崎下島分校教育推進規定（案）」

- 第1条 大崎高校下島分校における、生徒の進路保障をより完全に達成するために、教育推進規定を定める。
- 第2条 本校の教育目標である。民主的な社会人の育成を目指して、全教職員は本規定に従って教育の創造を目指す。
- 第3条 本校の教育実践をより推進するために、次の諸機構を設ける。
職員会議、HR委員会、および職員会議の決定による各種教育推進チーム。
- 第4条 職員会議
- 1 本校における最高議決機関であり、最高の連絡調整機関である。
 - 2 本校の常勤全教職員をもって構成する。ただし、非常勤職員の参加は妨げない。
 - 3 会議は討論を尽くし、全会一致を原則とするが、やむを得ず議決する場合は会議構成員の過半数とする。
 - 4 会議は全構成員の3分の2以上の出席をもって成立する。ただし、緊急時においては全構成員の過半数で成立するものとする。
 - 5 議長、及び書記は、別に定める方法をもって、原則として全構成員の輪番とする。
 - 6 会議は、別に定める定例会議、朝の連絡会議、及び、必要に応じて開催する臨時会議とがある。
 - 7 会議の召集は、当番議長によって行う。但し、構成員からの開催要求がある場合は召集しなければならない。
- 第5条 ホームルーム委員会
- 1 生徒の進路保障を目指す教育内容の創造を推進する。本校における中核機関である。
 - 2 本委員会は、職員会議によって決定されたHR担任、及び副担任をもって構成する。但し、他の本校教職員も構成員に準ずる扱いとし、発言権その他に何の制約も受けない。
 - 3 本委員会の運営は職員会議に準ずる。
 - 4 本委員会の役割分担は、当該年度当初、その役務内容を話し合い、互選によって決定する。
- 第6条 各種教育推進チーム
- 1 HR委員会と補完関係にある組織である。
 - 2 年度当初、当該年度の教育推進目標に対応し、校務全般にわたっていくつかのチームを編成し、職員会議において決定する。
 - 3 チームに編成する目的は、全教職員の仕事量の均分化と相互の協調関係を高め、合わせて研修の推進を図るところにある。
 - 4 仕事の分担にあたっては、本人の希望を優先することを原則とするが、常に話し合いによって全員納得のいく形の分担になるよう最善の努力をしなければならない。
- 第7条 教育活動における創造的側面を常に最重要視し、本規定が教育推進上いささかでも支障を

きたす場合には直ちに改正するものとする。ただし、その場合、全教職員の3分の2以上の賛成を必要とする。

第8条 その他、教育推進上生じた諸問題は、全て職員会議において問題解決を図る。

第9条 本推進規定は、昭和52年4月4日より実施する。

「教育推進規定 52年度 実施細則（案）」

I 職員会議に関わって

議長および書記について

- (1) 議長は、原則として、1ヶ月2名の輪番とする
- (2) 書記は、原則として、翌月当番議長が行う。
- (3) 年度当初に年間当番を決定する。
- (4) 議長が両名とも不在の時は、翌月議長が代行する。
- (5) 書記代行についても議長に準ずる。

定例職員会議について

- (1) 毎月、第2、第4木曜日とする。

朝の連絡会議について

- (1) 毎日、出勤時より10分間とする。

臨時職員会議について

- (1) 原則として、当日の朝までに召集連絡をする。

II HR委員会に関わって

- (1) 毎月第1、第3木曜日を定例委員会とする。
- (2) 本委員会は、研修に重点が置かれるので、委員会内におけるテーマ別グループの設置を考
えてみる。

III 各種教育推進チームに関わって

今年度は、次の各チームを設置する

- (1) 進路保障チーム（生徒に直接かかわる仕事）
- (2) 教育運営チーム（生徒に間接的に関わる仕事）

注1・2の両チームのどちらかに、全員所属する。

- (3) バズ教育特別推進チーム（解放研究）
- (4) 教育課程特別推進チーム（仕事内容は別記）

資料2 下島分校校内討議資料

「バズ教育を進めるために」

バズ学習を進めることによって、どんな学習効果が上がるか、お互いにどんな作用があるかについて、「バズ学習の理論と実践」という塩田先生たちの書かれた本に、次のように整理されています。これから、より効果的に実践を進めていくのにどうやったらいいかを討議する参考にしてください。

(1) 他人の意見や考えを聞くことから

- ・いろいろな考え方や見方があることが分かる。
- ・自分の考えや見方が正しいかが分かる。
- ・自分の考えや見方に誤りや不十分な点のあることに気づく。
- ・ぼんやりした点が明確になる。
- ・問題点がはっきりする。
- ・ヒントが与えられる。

(2) 自分の意見や考えを話すことから

- ・自分の意見や考えが自分自身にはっきりする。
- ・自分の意見や考えがまとまる。
- ・自分の意見や考えの不十分な点や誤りの点に気づく。
- ・あいまいな点がはっきりする。
- ・自分の意見や考えを評価することができる。

(3) 他人からの援助を受けることによって

- ・問題の要点が分かる。
- ・つまずきの点や誤りの点が容易にわかる。
- ・一層効果的な考え方や解き方が分かる。
- ・ドリルや練習が能率的にできる。

(4) 他人に援助を与えることによって

- ・自分の考えや理解が一層深まる。
- ・自分の理解が一層確実になる。
- ・自分の考えや理解の不十分な点に気づく。
- ・新しい問題点が発見される。
- ・自分自身のドリルや練習になる。

今までの実践の中で、以上のような効果が確かめられています。もちろん、30分学活や朝バズだけでなく、毎日の授業の中でもそうです。少しでも能率を上げ、みんなが力を付けていくためにどうしたらよいかを、各班で話し合っ、その結論を提出してください。

どんなやり方ですか、班ノートはどんなにするのか、班の司会はどうするか、各自の課題と解決はどうやって点検し合うか、等、何でもいいから、その範としての提案をしてほしいのです。集約をして、具体的な提案は教員の所ですますから。

資料3 春季公開研究会資料

「春季公開研究会を成功させるために」(主幹：バズ教育推進チーム)

はじめに

昨年、私たちにとっては第1回にあたる秋季公開研究会を持ちました。塩田先生をお迎えして、こうした研究会を持ち得たことは、はなはだ不十分ではありますが、学力保障を目指して、一つの具体的な活動を積み上げてきた成果と評価していいと思います。そして、永年の念願である独立校化が実現します。さまざまな要因があるにしても、私たちの側で捉えれば、いわば教育内容の勝利と言えましょう。

今回は、中学校との連携の下で、研究会がもたれ、その意味では下島地区の教育の歴史において画期的な意味を持っていると言えます。やや準備遅れの嫌いがありますが、本研究会を今後の教育推進へのばねとして充分意義のあるものにしたいと思います。

【以下、準備手順の計画の記載あり】

<案内状>

私たちは、下記研究目標を設定し、ここ数年ささやかではありますが、実践の積み上げをしてきたつもりでいます。もとより教育の創造性を重視する私たちには終わりはありませんが、一つの節目として下記研究会を開催いたすことになりました。ぜひご参加くださり、あらゆる角度からのご批判、ご指導を賜りたいと願っています。

記

1. 研究目的 会報教育、バズ教育に根差し、地域の教育課題を踏まえ、児童、生徒の進路を保障するために、小・中・高教育の一貫態勢の確立と、それに対応する教育内容の創造を目指す。
2. 主 催 豊町立豊中学校・同校 PTA 広島県立大崎高校下島分校・同校 PTA
3. 後 援 豊町教育委員会 豊浜町教育委員会
4. 開催日 下島分校会場 昭和52年6月24日
豊中学校会場 昭和52年6月27日
5. 開催日程及び具体的目標

下島分校会場 具体的目標：学習集団づくりを通じてわかる授業を。

8:20 8:35 8:40 9:20 9:35 10:20 10:30 11:15 11:20 11:55 13:00 16:00

朝バズ		公開授業 全クラス		公開授業 全クラス		授業研究 2クラス		30分学活 2クラス	昼食	研究会
-----	--	--------------	--	--------------	--	--------------	--	---------------	----	-----

豊中学校会場 具体的目標：自主・協同・創造的学習活動づくり

9:10 9:55 10:05 10:50 11:00 11:30 12:30 14:30 15:30 16:30

受付	一般授業 全クラス		授業研究 5クラス		30分学活 3クラス	昼食	分散会	全体会		講演
----	--------------	--	--------------	--	---------------	----	-----	-----	--	----

6. 講 師 名古屋大学名誉教授・南山大学教授 塩田芳久先生

7. 事 務 局 広島県豊田郡豊町 豊中学校（電話****）・下島分校（電話****）

【以下に参加要領と船便の時刻表を掲載】

公開研究会補足 子供の生活実態資料

豊浜町 出漁・出稼ぎ後の生活状況（1977年5月30日現在）

		両親と 生活	父と	母と	本人だ け	兄弟・ 姉妹と	祖父母 と	おぼと	親戚で	学寮	寄宿舎	合計
大浜幼	年少	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	年長	7	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8
豊島幼	年少	30	1	0	0	2	14	1	0	1	0	49
	年長	31	0	5	0	2	18	1	1	5	0	63
斎小		0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	4
大浜小		50	0	2	0	0	1	0	0	0	0	53
豊島小		159	1	24	2	44	94	4	0	53	0	381
豊浜中		128	2	27	13	57	29	3	1	18	4	282
合計		411	4	60	15	105	159	9	2	77	4	847

不在者人数（生徒数での調査・集計 1977年5月30日現在）

		日帰り	1週間	2週間	1ヶ月	2ヶ月	3ヶ月	4ヶ月	5ヶ月	6ヶ月	10ヶ月	1年中
大浜幼	14	2/0			1/0					1/0		
豊島幼	112	8/1	1/0		11/0	2/0	15/0	7/0	1/0	1/2	6/0	
斎小	4	2/0					2/0					
大浜小	53	3/3	1/0		1/0							
豊島小	381	31/9	17/3	23/2	39/2	22/0	36/3	26/0	7/0	9/0	3/0	2/1
豊浜中	282	27/17	5/3	16/2	52/4	8/1	6/0	13/0	1/0	3/1	1/0	2/0
合計	847	73/30	24/6	39/4	102/6	32/1	57/3	46/0	9/0	14/3	10/0	4/1

（表中の数値：出漁／出稼ぎ）

資料5 下島地区小・中・高教育推進組織 結成準備会案内

各教育委員会殿

1977年9月1日

各 学 校 長 殿

第1回下島地区小・中・高合同合宿研修会事務局

下島地区・小・中・高教育推進組織 結成準備会 御案内

拝啓 新学期も始まり教育活動に一段と活気を呈していることと存じます。

さて、8月初旬に御案内申し上げました。第1回下島地区小・中・高合同合宿研修会は、台風接近により、第1日の参加が不可能な方が出る程の突発的な事故がありましたが、予定通り8月24日、25日の両日開催し、一定の成果をあげて無事終了することができました。感謝申し上げます。

その席上において、参加された方々からの提起と、その提起を全員が賛同され、合同研修会事務局においてその準備をするようにとの要請がありましたので、標記の準備会を設定させていただきました。ぜひ、下記日時に御出席下さるよう御案内申し上げます。

なお、ここに至りました経過をご存知いただきたく存じますので、簡単に経過報告をさせていただきます。

今回の合同合宿研修会は、開催要項をご覧いただいて、すでにお気づきのことと存じますが、後援団体のみで、主催団体のないという変則的な会でございます。これは、昨秋の豊浜学区同研の研究会、下島分校の研究会、今春の豊島小の研究会、豊中・下島分校合同研究会などを通じて、小・中・高の枠を越えた交流がすでに始まっていたという背景の下で、解放運動に学び、地域の教育課題を踏まえ、地域の子どもの進路保障を目指す教育内容の創造者でなければならない教師が、その教育活動の推進上不可欠の条件である、小・中・高一貫した教育態勢を、具体的な教育内容の突き合わせの中で創り上げるために、とにかく一堂に会そうではないかという、半ば自然発生的に生まれたものだからであります。

一方、ここ十数年来、この地域の教育活動は、バズ教育の提唱者である、名古屋大学名誉教授塩田芳久先生のご指導をいただいてまいりました。そして、解放教育とバズ教育は、その切り込んでいった側面こそ違え、真に民主的な社会人の育成を目指す、その中身においてまったく一致するものであることも確認してまいりました。つまり、私たちが一堂に会するにあたって、そうした状況を切望されてもおられた塩田先生のご指導を仰ぐことも、一つの必然性を持っておりました。

そうした状況の中で生まれた合同研修会であり、今後の教育活動推進のために、組織的に、系統的にやっつけようではないかという呼びかけが生まれ、今日に至りました。

記

日 時 昭和52年9月6日(火) 午後1時30分より

場 所 大崎下島分校

参加要請対象 広島県教育委員会 豊浜町教育委員会 豊町教育委員会

豊小学校 久比小学校 沖友小学校 豊島小学校 大浜小学校 斎小学校

豊浜中学校 豊中学校 大崎高校下島分校

資料6 下島地区教育推進研究会（仮称） 規約

<第2回準備会の案内>

関係各位殿

1977年10月5日

下島地区教育推進研究会（仮称）結成準備事務局

第2回準備会ご案内

謹啓 秋冷の候となり、教育活動に好適の時期を迎え、ご多忙の事と存じ上げます。

さて、去る9月6日、下島分校におきまして開かれました第1回準備会において、下島地区における、幼・小・中・高一貫した教育推進態勢づくりをめざして研究組織を結成することが決定され、各校における態勢づくり期間を置いて、10月初旬第2回準備会を持つことが確認されました。その決定に基づいて、下記の通り開催いたしますので、必ず御出席下さるよう御案内申し上げます。

記

日 時 昭和52年10月11日（火） 13時30分より

場 所 大崎高校下島分校

参加要請者 豊・豊浜町教育委員会 県教育委員会

豊・豊浜町所在、幼・小・中・高、各学校長及び運営委員候補教職員
学区同研事務局

協議題 規約審議 役員選考 日程決定 その他

<規約試案>

第1条 （名称）

本研究会は_____と称する。

第2条 （目的）

本研究会は、解放教育、バズ教育を基底に、地域の教育課題を踏まえ、地域の児童・生徒の真の進路保障を目指す教育内容を創造するために、幼・小・中・高一貫した教育態勢の確立と、具体的な教育研究活動を推進することを目的とする。

第3条 （構成）

豊町・豊浜町に所在する幼・小・中・高の全教職員をもって構成する。

第4条 （事業）

本研究会の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 授業研究交流
2. 教科別研究交流
3. カリキュラムの一貫性づくり
4. 情報交換
5. 個人カルテ作成
6. 各種学習会

7. その他

第5条 (組織)

本研究会を推進するために、次の組織を置く。

1. 総会
2. 運営委員会
3. 各部会
4. 事務局

第6条 (総会)

総会は全会員をもって構成し、年1回以上開催する。

総会は、本研究会の重要事項について審議し、議決する。

総会の招集は、運営委員会の議を経て、会長が行う。

第7条 (運営委員会)

運営委員会は、各校代表をもって構成し、具体的な日常活動について審議し決定する。会長が必要に応じて召集する。

第8条 (各部会)

各部会は、教科別、問題別等必要に応じて組織するもので、運営委員会の議を経て設置する。

第9条 (役員)

本研究会を推進するために、次の役員を互選する。任期は学校年度に合わせて1年とする。但し、再任は妨げない。

1. 会長
2. 副会長
3. 運営委員
4. 事務局長
5. 会計監査

第10条 (顧問)

本研究会推進上、指導的、あるいは後援的役割を果たす個人および団体を顧問に推戴し、日常的に援助を仰ぐ。

第11条 (会計)

本研究会の経費は、会費、補助金、その他の収入によってまかない、会計監査を経て、総会に決算報告をする。

第12条 (規約の改廃)

本研究会規約の改廃は、総会において議決する。

【第2回準備会の参加者による討議メモが残っているが、バズ教育の理解、事業の多さ、連携の意義等についての態度の不一致がまだ多くみられていた】

2 1978 年度、豊高校区教育推進協議会発足、動き出す

【1978 年度より大崎高校下島分校は豊高校として単独校になる】

資料7 協議会、1 学期の活動

<第1回協議会総会開催通知>

広島県豊高校区教育推進協議会事務局

謹啓 初夏の爽やかな候となりました。皆様御多忙な毎日と存じ上げます。

さて、去る4月24日、皆様方にお集まりいただき、昨年度よりの懸案でございました、幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを目指す教育推進組織を、豊高校区教育推進協議会という名称のもとに発足することを決定していただきました。また、来る10月20日（金）21日（土）に開催されず、第13回全国バズ学習研究集会の地元実行委員会の推進母体になることも確認いただきました。

つきましては、当面する課題をご協議いただきたく、下記の通り協議会を開催いたしますので、ご多忙中とは存じますが、万障お繰り合わせの上御出席下さいますようご案内申し上げます。

記

日 時 昭和53年5月14日（金） 13時30分

場 所 広島県立豊高校 校長室

議 題 第13回全国バズ学習研究集会について

全員合宿研修会について

その他

【4月24日の準備委員会の資料は案内のみ残っていた（後掲）。議事内容は欠落】

<第1回豊高校区教育推進協議会総会／第13回全国バズ学習研究集会現地実行委員会開催案内>

広島県豊高校区教育推進協議会事務局

第13回全国バズ学習研究集会事務局

謹啓 爽やかな天候が続いております。先生方には毎日ご多忙の事と存じ上げます。

さて、先生方には、すでにお聞き及びの事と存じますが、昨年度来からの懸案でありました、豊・豊浜両町に所在する幼・小・中・高が一体となり、同和教育の観点に立って、地域の教育課題を踏まえ、児童・生徒の進路保障を目指す教育推進組織として、広島県豊高校区教育推進協議会を結成することが、去る4月24日各校代表者によって決定されました。

また、併せてかねてより要請のありました、第13回全国バズ学習研究集会の会場地区の引き受け組織になり、現地実行委員会を組織することも承認されました。バズ学習につきましては、すでに当地区において10年来取り組みをされている学校もあるのではありますが、会員の皆様にまだご理解いただいているとは申せないと存じます。

その点につきましては、今総会において可能な限り内容を深めたいと考えておりますが、端的に申しまして、教育と指導の本質を、私たち実践者と塩田芳久先生を中心とする研究者によって協同して追求しようとする研究組織であり、単なる方法や技術の問題ではなく、形式に流れることを最

も警戒しています。すすんで、主唱者の塩田先生は、バズ学習という名称も外していいとさえおっしゃっておられます。言い換えれば、私たち実践者が主体的に教育実践を行うための軸であるとお考えいただければと存じます。

以上のような趣旨に基づきまして、標記集会を開催いたしますので、万障お繰り合わせのうえ、全員御参加下さるよう要請いたします。

記

日 時 昭和 53 年 6 月 13 日 (火) 13 時 30 分より

場 所 広島県豊高等学校

日 程 (午前中豊高校全授業を公開)

13:30～14:00 開会行事

14:00～14:30 経過報告

14:30～15:30 基調講演 塩田芳久先生

15:30～16:30 分科会討議

16:30～17:00 各分科会報告

研究主題 地域の教育課題をふまえた教育内容の創造

一幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを目指して一

分科会について

別紙の通り、全国大会に向けて、9 分科会に全員所属し、研究推進をしたいと思っておりますので、各校で可能な限り各分科会にバランスをとった構成をし、6 月 10 日までに事務局へ名簿を提出してください。当日会員委員名簿にして配布します。

お知らせ

6 月中に下記の授業研究が公開されています。ご参加ください。

6 月 7 日 (水) 14 : 00 豊中 体育 (女子) 研究授業

6 月 12 日 (月) 14 : 10 豊高 国語、化学 授業研究 (塩田先生指導)

6 月 21 日 (水) 14 : 00 豊中 技術家庭 (男子) 研究授業

6 月 22 日 (木) 14 : 10 豊中 30 分学活研究 2 年生

(別紙資料)

教育推進の基本的視点

私たちが、幼・小・中・高一貫した教育推進態勢の必要性を感じるに至った発想の基礎は、教育実践の総和として捉えられている進路保障の観点にあったと言えましょう。今日、いまだに落ちこぼれとか、できない子とか、あたかも子ども自身が自ら望んでそうなったかのような表現が平然となされています。その子らを落ちこぼしたのは、できなくさせたのは一体誰なのか、その背景をえぐること、とりわけ私たちに関わる部分は避けて通って来たのが、これまでの現状ではなかったかと思えます。進路保障をし得たのかどうか、これは非常に難しい物差しで測らねばならない事であると同時に、その物差しもいまだに確立できないでいると言えましょう。

しかし、現実には、やはりさまざまにつまずかされている子どもがいます。そして、その大半は、私たちが段階的に継続的に追跡をし、その要因を取り除いてやることで、いくらかでも解消できる内容であると言えます。また、その内容は認知的なもの、態度的なものとは分けることのできない統合されたものであります。となるならば、小学校は小学校、中学校は中学校では済まされなくなりますし、ましてや、その子たちを取り巻く地域に目を向ければなおさらの事でありましょう。

進路保障とは一体何なのか、教育内容とはどういうものなのか。その事を今こそ私たちの専門性にかけて追求しなければなりませんし、子どもの全発達段階でとらえなければならないと思います。問題点をあげつらうのではなくて、真に部落の完全解放へつながる教育内容の創造へ向けて、共通して認識でき、協同してできることは何かを、幼・小・中・高一体となって推進したいと思います。

<分科会構成の視点>

第13回全国集会へ提起することが目的ではなくて、当面での一貫態勢は次の9分科会で推進しようというのが主眼であると考えたいと思います。

(第1分科会) 一貫教育態勢づくり

一貫教育態勢とはどういうことなのかを、もっと明確にしたいと思います。

(第2分科会) 学級経営

学校生活における子どもの基礎集団としての学級はどうあるべきか、とりわけ集団づくりの具体的な方向づけを明らかにしたいと思います。

(第3分科会) 特設バズ

豊浜中の町内バズ、豊中の30分学活等、直接地域の教育課題に切り結んでいく学習活動を広げる方策を明らかにしたいと思います。

(第4分科会) 言語と生活(国語、英語、関連教科)

思考の基礎である言語認識をいかに深めていくか考えてみたいと思います。

(第5分科会) 社会と生活(社会、関連教科)

社会生活に必要な社会認識をどう育てるか追求してみたいと思います。

(第6分科会) 自然と生活(理科、関連教科)

自然を見つめ、捉え得る力をどう育てていくのか考えてみたいと思います。

(第7分科会) かずと生活(算数、数学、関連教科)

生活に直接必要な数と抽象思考としての数学をどう結んでいくか段階的な発展を考えてみたい。

(第8分科会) 健康と生活(保健体育、養護、関連教科)

心身の健康こそ全人的発達の根底であり、教育の原点として考えてみたい。

(第9分科会) 芸術と生活(芸術、関連教科)

人間の豊かさをどう育むのか、子どもの感覚を磨く方向づけを考えたい。

◎全国大会への提起は、各分科会共に共同提起の形をとりたいて考えていますが、進め方は各分科会の自主性を尊重します。

1978年6月21日発行

広島県豊高校区教育推進協議会事務局

第1回総会・盛会裏に終了！

全会員150名中110名参加

去る、6月13日、13時30分より開催された、第1回広島県豊高校区教育推進協議会総会並びに第13回全国バズ学習研究集会現地実行委員会は、全国バズ学習研究連絡会長、永井辰夫先生を講師に招き、北恵豊浜教育長をはじめ、県教委、教育センター指導主事等、来賓出席のもとに開会されました。

関係役員の挨拶、来賓祝辞、経過報告の後、永井先生から、兵庫県においてバズ学習の先駆となった高丘中学校での実践をもとにして、バズ学習の基本的な視点についての基調講演を受けました。

講演終了後、今後の推進態勢の核となる9分科会に分かれ、分科会の責任者の選出と、今後の研究活動推進の方向づけを討論しました。

引き続き、各分科会代表者による会を持ち、各分科会の討議内容の報告があり、今後の方向づけについて話し合い、会を閉じました。

第1回としては大きな成果をあげた全員集会であったと言えますが、それだけに、一方では克服しなければならない諸課題が見え始めた集会でもあったと言えます。特に、私たちの認知的学習と態度的学習をどう結び付けて統合していくかに大きな課題があるように思われます。進路保障の視点に立った、児童・生徒の教育活動を援助する教職員の、今日的課題を明らかにする営みの中で、当面第13回全国バズ学習研究集会の成功を目指して頑張りましょう。

(裏面)

シンポジウム「一貫教育とは何か」

と き 6月28日

ところ 豊高校図書室

講 師 塩田芳久先生 四宮恒夫先生

参加者は第1分科会所属の会員ということになりますが、このテーマは全体の基調となる統一テーマでありますから、各校代表者(校長)、事務局、可能ならば各分科会代表者もぜひご参加ください。

小学校中心 学習懇談会案内

次のように小学校を中心に置いた懇談会形式による学習会を行いますので、会場校以外の先生方も都合がございましたらご参加ください。

講 師 塩田芳久先生

6月29日(木)午後 豊島小学校(豊浜地区)

6月30日(金)午後 久比小学校(豊地区)

<補足資料 第3回準備委員会案内状>

1978年4月20日

下島地区教育推進研究会（仮称）結成準備事務局

第3回準備会ご案内

謹啓 新年度も軌道に乗り、教育活動に御多忙な毎日と存じ上げます。

さて、昨年度から同和教育の観点に立って、下島地区の児童・生徒の進路保障を、地域課題を踏まえて推進するためには、当地区の幼・小・中・高一貫した教育態勢の確立が必要であるという視点から、そうした研究組織づくりを検討してまいりました。

しかし、昨年度は時期尚早という結論に達し、準備会のまま今日を迎えています。

つきましては、本準備会を今後どうするかをお話しいただき、一応の方向づけをしたいと思っておりますので、ご多用中とは存じますが、下記の通り第3回準備会を開催いたします。まげて御出席下さるよう、お願い申し上げます。

記

日 時 昭和53年4月24日（月） 13時30分より

場 所 広島県立豊高等学校 校長室

議 題 準備会の今後について

参加要請対象者 豊浜町・豊町教育委員会 広島県教育委員会 同三原教育事務所
豊浜・豊町所在幼・小・中・高校代表者および両学区同研事務局

REPORT ; シンポジウム「一貫教育態勢とは何か」

去る6月28日、豊高校図書館で、講師としてお招きした塩田芳久先生、四宮恒夫先生を囲んで、シンポジウム「一貫教育態勢とは何か」が開かれました。四宮先生、塩田先生から、45分程の時間で問題を提起していただき、その後、出席の先生方を交えて熱のこもった討論が交わされました。

以下、両先生のお話を簡単にまとめてみます。

四宮先生は、とかく我々がグループ学習と混同しやすいバズ学習とは何かという基礎的な言葉の定義から始められ、それを柱に、一貫態勢において何を一貫するのか、その一貫性の中の筋を理論的・体系的に話されました。

バズ学習は、知識・技能の習得を狙いとして、競争の心理に支えられているグループ学習と違って、協同の心理に支えられ、人間の人格形成を目標とするものである。ところが、今の子どもは非常に直線的で短絡的な考え方を、という先生のお言葉に、その意味を我々教師は取り違え、指導において何らかの欠陥があるのではないかと考えさせられました。また、先生はそのバズ学習を根底に、幼・小・中・高の教師たちが衆知を寄せ合いお互いに連携をとって教育活動を行えるのは、学習指導法においてであると提議されました。バズ学習では学習課題を子どもに与え、いかに話し合いの場を設け、子どもの問題意識をいかに高めるか、学年を追った段階別に、そうした学習の中でのものの見方、考え方をいかに伸ばしていくか、多様な思考を例にとって話を展開されました。最後に、多彩で多様な見方・考え方を幼稚園段階からずっと伸ばしていく学習指導がなされれば、子どもの人間性は高まり、考え方も広まって来るのではないかと、幼・小・中・高一貫の教育とは、ただ単に学年的な段階を追うのではなく、その中でそれぞれの学年段階に応じて段々深めていくような学習指導をすることこそ本当の一貫教育ではないかという所で締めくくられました。

四宮先生のお話に対し、塩田先生は、一貫教育態勢において、四宮先生の言われる多様性から出てくると考えられるメリットをいかに伸ばし、デメリットをいかに改善していくか、また一貫教育を一貫した教育理念に基づいた教育として捉えることから、我々はどういう人間を造る教育をしようとしているのか、という所からお話を始められました。

その推進が可能なのは学校教育における価値観の転換の必要性を説かれ、それを子どもが自分の興味や関心に応じて自己実現を成し得る「ゆとりある教育」に発展させて行かれました。また、社会教育の必要性と、地域の親たちの理解と協力によって支えられた小・中・高を含み込んだ地区の集団活動や学習活動を強調されました。子どもを教育することによって地域全体が変わっていく、それが地域に根差す教育であり、一貫教育のモチーフではないか、と地域づくりを中心にした一貫教育態勢を述べられ、そのための具体的組織づくりの例として3(幼・小1・2)、3(小3・4・5)、3(小6・中1・2)、4(中3・高1・2・3)体制を提唱されました。

塩田先生が最後に言われたように、現実段階においてはまだまだ一貫態勢に逆らって考えられる困難点・問題点を、お互いがどんどん出し合い、よりよい教育を目指して、時には現実と妥協しながらも、一歩ずつ前進していこうではありませんか。

資料9 第2回協議会

1978年7月12日

広島県豊高校区教育推進協議会事務局

第2回協議会開催通知

謹啓 連日30度を越える暑さの中、学期末を迎え、皆様にはご多忙な毎日と存じあげます。

去る6月13日には、幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを目指す教育推進組織として、豊高校区教育推進協議会が発足し、全員による学習会を持つ事ができました。また、第13回全国バズ学習研究集会の地元実行委員会の推進母体となることも確認できました。

各校、各分科会等におかれましても、10月20日、21日に向けて学習会が持たれるなど、取り組みが強化されてきております。合宿県の準備も急がれます。

つきましては、最終的な日程を決めるなど、多くの課題を早急に協議いただきたく、下記の通り協議会を開催いたします。御多忙中とは存じますが、万障繰り合わせの上御出席下さいませよう御案内申し上げます。

記

日 時 昭和53年7月14日(金) 13時30分より

場 所 広島県立豊高校 校長室

議 題 第13回全国バズ学習研究集会について

全員合宿研修会について

その他

資料10 広島県教育委員会への「教育運営費補助金」交付申請

豊高校校長、木谷陽氏が1978年7月21日付け申請書をもって補助金60万円の申請を行った。

事業名は「授業研究」、目的は「豊高校が真に地域の高校として位置づくため、独立校となったことを契機に、豊高校区内の幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを進めるための教育内容の研究と授業研究を推進するとともに、その成果の一部を第13回全国バズ教育研究大会において発表する」

予算科目としては

「調査研究費」	先進校視察3件	175,600円
「公開授業研究会費」	講師謝金を中心	266,800円
「宿泊研修会費」	宿泊料	104,000円
「研究資料作成費」	印刷費 材料費	53,600円

【承認額についての資料はない】

資料 11 第 1 回全員合宿研修会案内

広島県豊高校区教育推進協議会

第 13 回全国バズ学習研究集会（事務局）

豊高校区教育推進協議会第 1 回全員合宿研修会

連日、猛暑の中、先生方には学期末で御多忙なものと存じ上げます。

さて、6 月に開催いたしました第 1 回総会において決定していただきました夏休暇中の全員合宿研修会を、下記の要領で開催したいと思います。

この合宿研修会は、総会后、各分科会の研修会（授業研究）を持たれる中で、その方向性が出てきていることと存じますが、一堂に会し、より具体的な研究推進課題を決定するのが今回の研修会の目標です。

また、第一分科会（一貫教育態勢づくり）の提唱で実施された「一貫態勢とは何か」のシンポジウムを受けて、一貫態勢づくりとは何なのか、何のために一貫態勢づくりをしなくらはならないかについての意識統一をする会にしたいと考えています。

万障繰り合わせの上、ご参加くださいますようお願いいたします。

記

1. 日 時 7 月 24 日（月）（10 時～ ） 7 月 25 日（火）（ ～15 時）
2. 場 所 豊田郡木江町沖浦 国民宿舎きのえ
3. 日 程 7 月 24 日
10:00～11:00 開会行事
11:00～12:00 本研修会課題
13:00～15:00 バズ
15:00～17:00 全体会
18:00～ 懇親会
7 月 25 日
9:00～12:00 分科会
13:00～14:30 全体会
14:30～15:00 閉会行事
4. 申込期日 7 月 20 日まで
5. 申込方法 別紙の要領で第 2 回研修会と一緒に申し込みください

【資料 11 の要領を記した第 2 回全員合宿研修会の要領も添付あり】

資料 12 第 1 回全員合宿研修会配布資料

1 日 程

- 開会行事
1. 実行委員会挨拶
 2. 豊高校区教育推進協議会代表幹事挨拶
 3. 豊町教育長挨拶
 4. 豊浜町教育長挨拶
 5. 広島県教育委員会挨拶
 6. 指導助言者紹介
 7. 指導助言者挨拶
 8. 日程説明

指導助言者団

名古屋大学名誉教授	塩田芳久先生	徳島県バズ学習研究会長	四宮恒夫先生
名古屋大学助教授	梶田正巳先生	三重大学助教授	市川千秋先生
名古屋大学助手	杉江修治先生	大同工業大学講師	鹿内信善先生

- 閉会行事
1. 指導助言者団代表挨拶
 2. 実行委員長挨拶

2 分科会構成

分科会	研究主題	研究内容
第1分科会 一貫態勢づくり	一貫態勢づくりをどう進めるか	一貫教育態勢づくりの具体的な方向づけを模索する
第2分科会 学級集団づくり	学級集団づくりをどのように進めるか	学級手段からはみ出さされている子を中心に集団づくりを考える
第3分科会 特設バズ	地域バズなど、特設バズをどう広げるか	今日までの実践の洗い直しを軸に、今後の方向性を探る
第4分科会 言語と生活	言語と生活をどのように結び付けるか	今日最も欠落している表現力をどうつけていくかを考える
第5分科会 社会と生活	社会生活における社会認識をどう育てるか	社会人として、社会状況を的確につかませる教育内容を探る
第6分科会 自然と生活	自然を見つめ捉える力をどう育てるか	自然認識をどのような教材内容の中で作り出していくかを考える
第7分科会 数と生活	数と生活をどう結びつけるか	計算でのつまずきの分析から指導の中身を考える
第8分科会 健康と生活	健康な生活を送るためにはどうしたらよいか	体力増強に向けての動きの工夫を中心に考えてみる

第9分科会 芸術と生活	系術的な表現力をどう育てるか	感動し、創造へ向かう道筋を明らかにした い
----------------	----------------	--------------------------

3 第1回全員合宿研修会課題提起

はじめに

去る6月13日、豊町、豊浜町に所在する幼・小・中・高の全教職員が、豊高校体育館に会し、この地域の教育史上画期的な幼・小・中・高一貫した教育態勢づくりを目指した豊高校区教育推進協議会が結成されました。そして今日、ここに、第1回全員合宿研修会が万難を排して、高い結集度で、開催されることになりました。

いよいよ私たちはスタート台に立つことができました。しかし、ここまで来るには、大げさに言えば、地域の教育疎外100年の歴史があったと言えまじょうし、多くの曲折を経なければなりません。この地域の多くの先輩たちは、島なるが故に、少数であるが故に、差別し続けられてきた暮らしを跳ね返すべく、血と汗の戦いを続けてきました。今日の状況も、なお苦吟の毎日であります。みかんの生産量を割った、只働きの状態であり、漁業に関しても、環境破壊の中で漁の激減と200カイリ問題に関連して沿岸零細漁民は圧迫され続けている現状であります。

そうした状況であるが故に、地域の願いは、将来への展望を求めて、教育に集中しているととらえなければならぬと思います。その地域の願いという大きな流れの中に、今私たちは位置づけられ、限らない未来を創造する主体を援助し育て上げる使命を持っていると捉えなければならぬと思います。こうした私たちの統合された手仕事が、各学校という垣根を取り払って、協同してやっていくことによって、これから作り出されようとしています。

はじめに、この事実をしっかりと捉えたいと思います。

同和教育とバズ学習

本研修会の課題を提起させていただく前に、この出会いの根底に何があったかを少し整理しておきたいと思います。

私たちがここに一堂に会することができたことは、私たちの中に共通した課題意識があったという事実を示していると思います。それは、現実に目の前に子どもがいて毎日の教育活動があるという、極めて当たり前のことに端を発してはいるけれど、具体的には、同和教育の中で、子どもへの見つけ方、捉え方を厳しく提起され、進路保障の観点に立たざるを得なくなったという所にあると思います。とりわけ、被差別部落に顕現する差別実態に学ぶとき、私たちが日々の教育活動において差別教育をしていると認めざるを得ない現実が存在していると思います。そのことが、私たちをして、何かせすにはいられない思いを駆り立ててきたと思います。

道徳や特設の時間において、同和教育をテーマにし、皆で助け合って行こうと言いながら、一方、授業では結果的に分裂を持ち込む毎日を繰り返している。そうした事への反省が、同和教育を全教育活動の基底に置くという、いわゆる同和教育推進運動となったと言えまじょう。そして、一人一人の子どもを見つめ切る中で、具体的には学力保障の取り組みがなされてきました。その学力保障とは、当然のことながら、子どもの進路保障につながる中身でなければなりません。つまり、どん

な方法でもいい、文字を覚え、表現ができ、計算ができればそれでいいというものではないということです。全教育活動を通じて、被差別部落の完全解放を達成し得る教育内容の創造は、そうした意味において、優れた方法論を持たなくてはなりません。

みんなが助け合い、励まし合って、協同してより高いものを創造して行く、その営みを自らに体得させるものでなければなりません。そこまで推し進めてみると、すでにお気づきのように、その中身はまた、バズ学習の中身でもあるわけです。同和教育の持つ観点と、バズ学習の持つ観念とは、それぞれの起点においては違いがあったにせよ、教育の中身としては重なっています。

ここでもう一つの面から考えてみたいと思います。

それは、この地において、豊浜中学校、豊中学校両校で、すでに十数年来、バズ学習を軸にした取り組みがなされてきたことを持つ意味です。両中学校共に、その出発が、いわゆる学校の荒れた状況の克服にあったことはご承知の通りです。そして、その状況が克服される過程は、確実に、低学力の克服の過程でもあったという事実です。この事は、当時、下島分校として低位なる子どもの受け皿であった高校側で明確に見えてきた事実として、具体的に証明できます。

その事実があって、当時は中学校に対して不信の塊であった高校側に、バズ学習の取り組みを謙虚に学ぼうとする姿勢が出てきました。そして、その中身を知らないで、ただ現象的な部分だけで、何がバズ学習だと否定的に捉えていた傲慢さにも気づかされていきました。より良きものを求める貪欲さと、素直に学ぶ謙虚さを基調にした教育推進態勢を目指す取り組みが、ここから始まったと考えています。今、この私たちの組織が、バズ学習を一つの軸に考えていこうとするのは、その点にあると言えます。

私たちが、これから、協同して教育推進をしていくのですが、その根底には、同和教育とバズ学習の統合があり、また、すでにそうした実践がこの地域に存在しているのだということを踏まえておきたいと思います。

本研修会の課題

本研修会は、二つの大きな課題を持っています。

その第一は、いろいろ曲折はあったにせよ、会員校全校が来る10月20日、21日の第13回全国バズ学習研究集会の地元実行委員であり、公開授業校でありますから、まず何よりもバズ学習に対するの共通理解が必要だということでもあります。すでに各校段階で批判や疑問などが多く出されています。それを今日この場で出し合い、理解を深めたいと考えています。

みんなバズ学習を支持する立場に立ってください、というわけではありません。ただ、批判をするにしても、やはりその中身は十分わかってほしいということです。また、やられる同和教育ではいけないように、バズ学習も押しつけとられる位置ではいけないだろうということです。従って、具体的には、本日の午後の日程にありますように、前半2時間は、バズ班を編成し、そこで何もかもぶちまけて話し合い、各班ごとにまとめ、後半2時間で全体の場に出し、話し合おうということになっています。

次に、すでに御案内にも書いてありますように、全国集会へ向けて、各分科会の提起内容の具体的な分担や作業・日程を決めていただく仕事です。そして、第2回の全員合宿研修会では、その内

容の突合せができるところまで、明日の分科会で仕事を進めていただきます。

地域の教育課題を踏まえた教育内容の創造は、まず、何よりも幼・小・中・高一貫した教育態勢の確立からはじめなければならないだろうという見通しに立って、私たちは組織づくりをしてきました。現在の段階では、これは一つの仮説に過ぎないと思います。従って、あまり大きく構えるのではなくて、共通してやれるものは何か、共同作業のやれるものは何かということ、じっくり考えていただき、何か一つでもいいから具体的な仕事を決めていただきたいと思います。

明日、午前中はそれに費やしてください。そしてその中身を共通のものにするため、午後、全体会で報告をしていただきたいと思います。また、開催要項記入のために必要な事なのですが、各分科会の提起者、司会者の選出をお願いします。全国集会の集録を編集する予定にもしておりますので、大会当日テープレコーダーによる記録をします。その世話係もお願いします。

次に、これは課題と言っているかどうかと思いますが、もう一つ、本研修会のねらいに会員相互の人間関係を培うことがあります。教育は人間の信頼関係によって成立するものである以上、まずはお互いが知り合うことが必要でありましょうし、そうした人間関係のないところでは、お互いの思ったことを言い合うことも難しいと思います。みんなが友だちになる。この事も目的意識的に取り組ましましょう。

終わりに

この二日間の研修会が、常に眼前に子どもの姿が彷彿とするような、そんな研修会でありたいと思います。本研修会にかかる費用は、すべて地元豊、豊浜両町の助成によって賄われていることです。そして、そうした援助を得られたのは、両町町民の私たちに対する深い期待が寄せられているからです。そのことを踏まえて、本当に真剣な、しかも明日から実践へ直結する中身を創り出そうではありませんか。

資料 13 第 2 回全員合宿研修会案内

昭和 53 年 7 月 29 日

第 13 回全国バズ学習研究会長 新田正彦

(扱事務局)

広島県豊高校区教育推進協議会 第 2 回全員合宿研修会 参加のご案内

拝啓 記録的な酷暑の中、先生方にはご多用中の事と拝察申し上げます。

さて、私どもでお引き受け申し上げました第 13 回全国バズ学習研究会もどうやら地元の推進態勢も整い、準備も進んでまいりました。その中で、先生方には分科会の助言者をお願い申し上げておりますのですが、今回の研究集会は地元の推進態勢に合わせた分科会構成にさせていただいており、従来とは変わっております。

一方、地元も今春発足したばかりの組織で何ら中身がない現状でありまして、去る 7 月 24 日、25 日に第 1 回全員合同研修会を持ち、各分科会ごとに具体的な研究の方向づけを決め、具体的に作業を進め始めたところです。そして、来る 8 月 27 日（日）、28 日（月）の両日、レジメ原稿作製を具体的な目安として、第 2 回の研修会を持つ事に致しております。

つきましては、今次研究集会において、地元並びに全国の報告を取りまとめ、一つの方向づけをしていただく重要な役割をお願いしている助言者の先生方に、できましたら一つの基調にしなければならぬ地元の研究活動に参加していただき、ご指導を賜ると同時に、事前の協議もさせていただきましたらと思っております。

はなはだ勝手なお願いで恐縮に存じますが、できましたら右記要項でご参加くださいますようお願い申し上げます。

第 2 回全員合宿研修会 開催要項

1. 期 日 昭和 53 年 8 月 27 日（日）、28 日（月） 1泊2日
2. 場 所 広島県豊田郡木江町 国民宿舎きのえ
3. 日 程 27 日 28 日
10:00～11:00 開会行事 9:00～12:00 まとめ
11:00～12:00 課題提起 12:00～13:00 昼食
12:00～13:00 昼食 13:00～14:00 公開授業に関わって
13:00～17:00 分科会 14:00～15:00 閉会行事
18:00～20:00 交流会

助言者事前協議会

1. 期 日 昭和 53 年 8 月 26 日（土） 17 時 30 分より
2. 場 所 広島県豊田郡豊町御手洗 木村旅館

資料 14 広島県豊高校区教育推進協議会第2回全員合宿研修会日程表

期 日 昭和53年8月27日(日)・28日(月)

場 所 木江町 国民宿舎きのえ

参加助言者

第1分科会 塩田芳久先生 四宮恒夫先生

第2分科会 永井辰夫先生

第3分科会 鈴木武士先生 清水快雄先生

第4分科会 梶田正巳先生 鹿内信善先生

第5分科会 古川 巖先生

第6分科会 市川千秋先生 中川 豊先生

第7分科会 宿南勝之助先生 杉江修治先生

日程 27日

9:00～10:00 受付

10:00～11:00 開会行事

11:00～12:00 全体会(議題提起)

12:00～13:00 昼食

13:00～17:00 分科会

17:00～18:00 入浴

18:00～20:00 夕食・交流会

28日

7:00～9:00 朝食

9:00～12:00 全体会

12:00～13:00 昼食

13:00～14:30 全体会

14:30～15:00 閉会行事

第2回全員合宿研修会課題提起

1. 第1回全員合宿研修会の課題

- (1) バズ学習の共通理解
- (2) 各分科会研究推進の方向づけ

2. 第2回全員合宿研修会の課題

- (1) 分科会提起内容の具体的検討
- (2) 今後の活動課題
- (3) 公開授業に関わって

3. レジメ作製にかかわって(編集案)

4. その他

資料 15 第 2 回全員合宿研修会配布資料（実践編）

【手元に数種類の合宿当日配布の分科会ごとの実践資料がある。ただ、データのみとか、解説不十分なものがほとんどであり、資料のみからの内容の読み取りは困難であった。ただ 1 編、第 7 分科会に豊高校が出した数学科の資料は解説的であり、この日の研修の内容を推し量り得る資料として掲載しておく】

第 7 分科会「数と生活」（豊高校数学科）

活動概況

（1）はじめに

47 年、第 1 回全員合宿研修会が持たれた。数学の分科会では「学力格差をどう克服するか。数学的なものの見方、考え方をどうつかませるか」を討議する中で、生徒の姿が見えていない事、教育内容が実態に合っていない事が明らかにされた。そこで、継続的に実践を持ち寄り、内容を点検し合う中で、自主編成の方向を探ろうと数学部会が生まれた。

基礎的な計算ができず、どんな教材にも拒否反応を示し、理解を非常に困難にしている現実がある。そうした低位なままで放置されたために、分校に入学してくる生徒の背景は様々である。しかし、切り捨てられてしまうと、そうした自分が置かれている立場すら認識できなくなってしまう。学習意欲は奪い去られ、分からない事が分からない状況が作り出されていく。しかし、一方では生活年齢に応じた発達をし、社会生活に適応しているのである。

学習意欲の欠落と社会生活への適応が合体した時、現象的には怠学傾向として現れ、多くの問題行動へと派生していく。私たちは、この事を断ち切る事から出発しなければならないと考えている。今日の分校の低位性を学力保障の面で考えたのは、そのためである。

具体的には、私たちは、「分からない」としている生徒の「分からなさ」を発見する事、つまり、限りなく個を追いかけ、一人一人のつまずきの要因を発見する事を続けながら、生徒に自己の置かれている立場を認識させる働きかけをする事である。個の働きかけの中身が教育内容そのものであり、自己を見つめさせる事を通じてこそ、主体的学習者へと変革できるものと確信している。

私たちは、生徒の枠組みに立った生徒理解を深め、生徒理解の甘さを克服し、科学的に捉え、個を追いかけ、見続けようとしている。そして、生徒の姿が見えるようになるうともがいている。その一歩として、基礎計算についての学力検査を新入生に対して行っている。つまずかさ、能力を開発されずに来ている生徒のつまずきを明らかにし、各個が目標を持って、つまずきの克服に向けて主体的に取り組める中身を作ろうとしている。

誤答を大切に、どう考えたのかを引き出していく作業を大切に、日常活動に位置づけようとしている。その粘り強い取り組みの中から生徒に「分からん」と言わせる事もでき、「分からん」と言ったところから、学力を奪い返す戦いが始まるものと考えている。

補充授業や個別指導を利用し、効果を上げた生徒もいるが、授業の中身と結びつかず、拒否反応を示す者もいる。一方、できる生徒には、高い水準のものを与えている。しかし、物理的にも時間が取れず、中途半端な指導にならざるを得ない。前者については、教育効果を上げ、意欲を持たせ

得る教材の厳選に取り組む事で、後者については生徒同士が関わり合って高め合えるような学習集団づくりをし、単元単位学習活動を進める事で方向を見いだしている。また、二度と放置された生徒を出さないために小・中・高の連携をとり、一貫した教育内容、教育課程の創造も目指している。

(2) 間違いにもルールがある

基礎計算におけるつまずきを掴む事を目的として統一学力検査を行っている。一人一人の生徒につまずきを示し、どうしてつまずいたかを見据えさせ、克服に向けて主体的に立ち上がらせる一歩である。

結果の分析から、間違いにもルールがある事に気づかされた。ルールを正さず、間違いとし、できない子というレッテルを貼られてきていた事が分かった。私たち自身もできない子と見ていた事を反省させられると同時に、ますます学習意欲を奪っていた事に気づかされた。間違いとして切り捨て、考え方の筋道を見ない事で「分からん」と言えなくさせているのではなからうか。できるとされている生徒は、要領よく覚えているだけではなからうか。

えてして教師は「分からんならよく聞け」「よく勉強しないから分からなくなる」と言って、「分からなくさせた」責任を「分からない」個の努力のなさに押し付けてしまい、「分からない」と言えなくさせてしまう。その事が社会生活には適応できるという事と結びついて、「分からなくても・・・」となり、「分からない事」から逃げ出させてしまうのである。

私たちは、この事を断ち切る事を出発点とした。個を追い、つまずきを見つけ、それを生徒に見極めさせ、奪い返す戦いに立ち上がらせるべく働きかける事こそ教育内容であると考えている。その意味でも、一人一人の生徒の誤答を大切に、どう考えたかを引き出していく作業を日常活動に位置づけなければならない。

(3) サブテキストの作成—確認テスト—到達目標

できるだけ小項目に分け、段階を追って進めるような問題を作成していった。到達目標を提示し、意欲を持って取り組めるよう配慮し、しかも単なる計算に終わらず、実生活でも使え、考え方の訓練もできる事を目指している。個別指導や部分的には授業でも利用しており、意欲的に取り組む生徒もいる。その姿から、集団づくりが具体的に必然性を持って迫ってきている。

授業の中身とぴったり結びついたものへとしていく事が大きな課題となっている。どこまで理解できどこが理解できないかを掴むための確認テストとも結びついたものにしておこうと考えている。

プリントを実施し、SP 分析を通して個々の生徒の実態をつかむと同時に、単元の目標を提示し、課題を明確にしていく。段階を追って課題を消化し、最後に確認テスト（ポストテスト）を実施する。結果を見て補充を組む。これがうまくかみ合っていくような中身を作っていくか悩まなければならない。到達目標の提示、確認テストの実施などで意欲を増したという報告もある。

(4) 個人カルテ

個を追い続け、一人一人の課題を明確にしておくためにも、学習の記録が一目でわかるようなカ

ルテの作成は不可欠である。到達目標と関わって、プリテスト、ポストテストを作成し、実施後、SP 分析をしている。その結果をもとに、一人一人の生徒の歩みが分かるようなカルテの作成が大きな課題となっている。

(5) 教育内容の精選→自主編成へ

基礎計算すらできないという事にこだわり続け、確実に力を付けてきている生徒がいる。一方には、またかという反応を示す生徒もおり、取りこぼしてしまう。効率も悪い。そこで教育効果を上げ、もっと意欲を持たせる教材の精選に取り組んだ。

数学は難しい、分からないといった定着観念を持っている生徒は、整式の計算、因数分解・・・と授業を進めると「またあの分からんのをやるのか」といった拒否反応を示し、分かる生徒は「まだやるのか」と飽き足らなくなってくる。そこで、比較的全員が興味を示し、授業に参加したのは何かを検討していった。初めての内容という事もあるのか三角関数が上がってきた。

そこで、三角関数から入り、関数を一つの柱として、微分積分を取り上げる事で方向づけをし、次のような計画を立てた。

学年	項目	指導上のねらい
一 年	1.統一学力検査	基礎計算におけるつまずきを明らかにする。サブテキストを利用し、つまずきの克服をする。
	2.三角関数	関数の概念の理解と生活に密着した問題を取り入れ、具体化された問題に取り組む中で基礎力を養う。
	3.指数関数	指数法則を有理数にまで拡張し、理解を深め的確に能率的に使えるようにする。(その事を通して計算力を付ける。また、一次方程式を解くなどの復習も取り入れる) 指数関数の特徴を理解させる。
	4.対数関数	指数より対数を導入し、対数の性質をつかみ的確で能率的に使えるようにする。対数関数の特徴を理解させる。
	5.一、二次関数	関数の概念の理解を深め、一、二次関数の特徴をつかませる。 グラフをかけるようにし、グラフとの関連で一、二次、方程式、不等式が解けるようにする。因数分解や整数の計算を取り入れる。
	6.ベクトル	ベクトルの意味、演算について理解させる。物理の関連を持たせ、既習の三角関数の復習も取り入れる。
二 年	7.微分・積分	関数の極限、微分係数等関数の意味を理解させ、整関数について応用できるようにする。グラフが正確に描けるようにし、平面図形と式との関連を持たせる。 微分の意味を理解させ、応用できるようにする。面積、体積を求める事などで、計算練習にもなる。
	8.行列	行列とその演算について理解させる。 ベクトル、三角関数、連立方程式と関連を持たせる。
	9.確率	確率の概念の理解を深める。

三年 選択	10.微分・積分	整関数について復習し、関数の商や積、合成関数、逆関数の微分ができるようにする。 無理関数、三角関数、指数関数、対数関数等の微分、積分をし応用できるようにする。
----------	----------	--

関数は、あるものを他のものへ移す働き、機能を意味するものであるが、多くの生徒は、数の集合から数の集合への対応、グラフ、数値計算に重点を置き、変化する量の間の“働き”として理解していない。また私たちも、そうした指導に気づく中で、 $y=\sin x$ 、 $y=\cos x$ など生徒にとって、新鮮な教材から“働き”を強調しながら関数を導入している。そうして関数の概念、基本性質を理解させ、その指導過程で方程式、不等式、整式の計算等は扱っていきたい。

三角関数から入るについては、文字式に慣れていないとか、抽象的思考の訓練ができていないとか、他校との比較など、多くの不安が去来した。しかし、やってみると生徒はついてきた。初めてという事と合わせて筋道を立てながら積み上げていく事で、分かりやすかったようだ。また生活の中に問題を見つける事ができ、楽しみながら授業に参加できたのではないと思う。

昨年までと比較できないが、マイナスになっていない事は確かであり、意欲を示し始めた生徒も若干見られるようである。この事から、数学で何を教えるのか、全体構造を明確にし、到達目標を提示する事により、主体的学習者への変革もできるとの確信も得られた。最も有効な教材の精選に向けて模索を続けているのである。

(6) 学習集団づくりと単元単位学習活動

個を追いかける中で、ごく限られた範囲では「分からん」と言い、「分かれよう」と努めている。それは生徒対教師の関わりの中から出ている事もあれば、生徒対生徒の関わりの中から出ている事もある。生徒同士が関わっていく方が、より成果を上げている事実が多く見られる。

そこで、一人一人が分かるようになるという目標を集団の目標にまで高めていく事が必要である。ところが、現実には差別と選別の体制の中で切り捨てられてきた集団であり、集団として機能していない。まさに分裂している。この現実を変えていくために、お互いが仲間として認め合える集団へと高めていく手立てが必要である。

学習集団づくりを模索する中で、私たちはバズ学習に行き着いた。生徒一人一人が課題に対して分かっている事、分からない事、気づいた事等を班で出し合い、教え合い、練り合い、全体で確認をした後個に戻していく。この事で少しは授業への参加度は高められてきている。班への刺激を与え、班活動を活発にさせると同時に個別指導の必要な生徒の指導の徹底を図っている。しかし、小集団に目が行き、班全体として課題が消化された事で事足りるとし、個を集団の中に埋没させてしまう事も多々あった。一人の生徒の質問にすぐ答えてしまい、集団に返さず、ついに学習集団をつぶす場面もあった。

集団づくりに取り組み、バズ学習を取り入れてみて、集団として機能させるためには何を追いか、見据えねばならない事、より明確な課題を提示していかねばならない事に気づかされた。つまり、仲間同士が支え合える集団づくりと、授業を中心にした学習活動とが一体となった取り組みにしなければならない。そのためには、生徒に興味や関心を持たせ、自己の課題をはっきりさ

せる、課題達成学習が考えられる。

「課題を与える→問題状況を作る→追求する→達成する」という筋道を「個人→班→全体→個人（確認）」というサイクルの中で考えている。指導が1単位時間ごとの細切れになり、系統的統合的理解を阻害しがちであったという反省を踏まえて、特に、単元単位での課題学習活動に取り組み始めている。

(7) 授業研究

生徒一人一人を見続け、自己の置かれている立場を認識させ、主体的学習者を育てよう、そのための教育内容の創造をしよう、と今日まで取り組んできた。分校の低位性を学力保障の面でもとらえ、運動してきたのである。しかし、現実には、私たち自身が主体性を奪い返す事ができず、差別意識の虜になっており、その日暮しをしてしまう傾向がある。そして、いつの間にか切り捨てをしているのである。

その事を厳しく点検し合う事が、私たちの原点であったはずである。ところが、実践を持ち寄り、検討をするだけでは、点検活動が弱いものになってしまう。そこで、お互いに授業を見合う中で、生徒を中心に据えた点検をし合おうという事になった。

3年前から授業研究を始めたのであるが、厳しい指摘もできず、回数も少なかった。そして、次第に持たれなくなるというのが現状であった。その原因は、授業を見られるとなるとその時間だけでなく、ずいぶん前から計画を立て、その日暮らしとはいかない。そこを乗り越えられなかった事であった。

そこで今年度は、年度当初に計画を立て、1～2ヶ月に1回、授業研究をし、点検し合い、何とかその日暮らしから抜け出そうとしている。教材の精選もいづらか進んだ事も相まって、授業研究も苦にならなくなってきつつある。

生徒もほかの先生に見られる事で、格好をつけ、回数を重ねるにつれて、いい格好が身に付くといった事も見られる。

(8) 小・中・高の連携

個を追う中でつまづきを発見し、克服させるべく取り組んできた。しかし、常につまづかされた生徒が進学して来るのでは困る。義務教育側に提起し、共に戦う中で、幼・小・中・高と一貫した教育内容を創造して行かねばならないと考えている。そうなる初めて展望も開けてくる。

具体的には、年度初めには新入生について中学校で掴んでいる限りの事を聞き取っておく事から始められている。分校にとっては、すでに中・高で一人一人の生徒を中心に据えた事例研究会を持ったり、授業を見合ったりする中で、合同の研修会も組織できるようになってきている。それを更に推し進めて初めて、幼・小・中・高合同の研修組織づくりの準備がなされている。

(9) おわりに

私たちは、以上述べたような筋道に立ち、自己の力量不足を克服するために、実践の積み上げ

と点検を中心にした研修活動を行ってきた。

生徒が主体的学習者へと変革して行く事が、真に学力をつける事になると考えている。そのために、教材の精選、指導法の工夫をし、到達目標に向けて確認テストを実施し、定着度、理解度をより客観的に掴み、個々の生徒を追跡していかねばならない。その結果を個人カルテとし、生徒に自己を見つめさせ、課題を明確に掴ませる事により、学習意欲を高める。さらに、集団として機能していく中で、お互いに磨き合い、練り合って、学力回復もできる、一人一人がより力を伸ばす事にもなると確信している。その点検の場として、授業研究を執拗に繰り返さなければならない。

広島県においては、今日、高校進学率は98%となり、ほぼ全入が現実のものとなっている。しかし、それに対応する教育内容は確立されていない。つまり、生徒の学習権は保障されていない。この現状を打開していく事が、私たちの最大の課題である。私たちの運動の方向づけは、まさにこの課題を消化していく事であると考えている。

生徒一人一人を見続けていくために、限りなく進路保障を目指すために、私たちの取り組みの欠落部分を指摘していただきたい。

【以上の文の後に、豊高校が実施した「統一学力検査」の問題が掲載され、その結果のSP表も付いていた。さらに、具体的な誤答の例が挙げられ、それぞれがどのようなつまづきに基づいているのかについての分析が行われている。小・中・高連携における算数・数文学力の点検資料としての提案である】

資料 16 全国バズ学習懇談会の発足

第 1 回全国バズ懇談会案内

1978 年 6 月 20 日

全国バズ学習研究連絡会会長 永井辰夫

第 1 回全国バズ懇談会御案内

謹啓 初夏の候となりました。皆様ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、去る 2 月、塩田芳久先生を囲んで有志の者が集まりました折に、バズ学習が各地に広がり、しかも定着しつつある現状にかんがみ全国の同志の方々が交流し合える場として、あまり角張らない気楽な集まりを持ったかどうかということになり、当日参加の者たちが発起人になって標記の会を作らせていただきました。

その第 1 回の会合を、今年度、第 13 回全国バズ学習研究集会の会場引き受け組織である、広島県豊高校区教育推進協議会のお世話で開かせていただき、併せて、第 13 回集会を稔り多きものにするために、同志の皆様方から種々のご意見を賜りたく存じます。

ご多用中とは存じますが、上記の意をお汲みくださいまして、まげて御出席下さいますよう御案内申し上げます。

謹白

記

月 日 昭和 53 年 6 月 19 (土) 20 (日)

会 場 広島県竹原市西野町西湯坂 湯坂温泉 賀茂川荘

日 程 10 日

11 日

14:50 三原駅集合 (バス) 9:00~12:00 見学

15:30~18:00 懇談会 12:00~13:00 昼食

18:30~ 懇親会 14:00 三原駅解散

会 費 10,000 円

送迎について (時刻表など紹介あり、略)

現地事務局 広島県豊田郡豊町首 広島県立豊高校内 (越智)

出席者名簿

(記載住所は略)

塩田芳久 名古屋市	梶田稲司 春日井市	白井 仁 豊川市	永井辰夫 姫路市
塩津 進 龍野市	金治晴治 龍野市	四宮恒夫 徳島市	鈴木武士 姫路市
高馬正則 姫路市	宿南勝之助 姫路市	滝尾英二 広島市	新田正彦 豊町
横手 茂 豊町	賀戸文夫 豊町	長谷川敏 豊浜町	井川武彦 豊浜町
亀本邦彦 豊浜町	山根 正 木江町	林 義浩 竹原市	永戸 享 豊浜町
望月和夫 豊町	木谷 陽 豊町	越智昭孝 豊町	岡本一士 豊町
奥家豊治 豊町	竹田勝枝 豊町	新開涼子 豊町	纈纈良久 土岐市

<発起人からの具体案>

1. 名称はとりあえず「バズ学習研究懇談会」とする。

従来の「バズ学習研究連絡会」の組織はそのままとする。

これまでの顧問会は解散する。

2. 趣旨・目的

すでにご承知のように我々の研究のねらいは「バズ学習」という名のもとに「教育とは何か」「指導とは何か」の本質を究める事であり、単なる方法・技術の研究ではない。

我が国の教育界はいまや未曾有の危機に直面しているという認識のもとに、従来の消極的な態度を捨て、もっと積極的に研究同志に呼び掛け、一段と活発な研究活動を展開し、研究の輪を広げたい。この目的を達成するための中心的役割を果たすべき研究組織としてこの懇談会を発足させたい。

3. 会員

この懇談会の趣旨・目的に賛同される教育実践者（個人でも学校単位でもよい）ならびに教育研究者で、当分の間は会員の推薦による。

なお、かつてバズ学習研究に取り組み大い成果をあげられたOB先生方にもご参加願ひ、現役とOBの協力体制の下に研究活動を推進する。

4. 世話役

とりあえず現バズ学習研究連絡会長の永井辰夫氏、前連絡会長の白井仁氏、元連絡会長の梶田稲司氏、ならびに研究者代表として塩田芳久氏、梶田正巳氏、杉江修治氏の6名の方をお願いする。

この会の代表者は現連絡会長をお願いする。

5. 事業

- (1) 会員の研究情報交換並びに懇親のため年2回程度の会合を開く。
- (2) 全国バズ学習研究会を援助する。
- (3) 会員（個人並びに学校）の研究活動を支援する。
- (4) 全国各地のバズ学習研究組織と密接に連携し、その研究活動に協力する。
- (5) 会報の刊行（当分の間年2回程度）。
- (6) 講師の派遣。
- (7) その他。

6. 会の運営費

会費並びに寄付金（会費は当分の間年 円）

会報の頒布代金（会員は無料）

発起人（アイウエオ順）

越智昭孝	荻原克己	金治晴治	梶田稲司	梶田正巳	高間正則	塩田芳久
四宮恒夫	白井 仁	鈴木武士	清水快雄	永井辰夫	西尾為一	新田正彦
長谷川敏	前田義夫	森 寅三	望月和三郎	山崎千代松		

資料 17 広島県解放・バズ教育推進研究会高校部会結成趣意書

*1978年6月20日、第1回全国バズ学習懇談会配布資料

広島県尾三地区高校分校部継承

広島県解放・バズ教育推進研究会高校部会 結成趣意書

昭和46年、部落解放運動に学び、広島県尾三地区に所在する6分校によって、教育行政による分校差別解消の戦いを「教師こそ最大の教育条件である」という命題の下に結集した運動体として展開してまいりました。

その運動は、生徒の実態に対応し、進路保障を可能にする教育内容の創造をめざし、教育活動を主軸にして推進するものでありました。そして永い模索を続ける中で、バズ学習の提唱者である塩田芳久先生と出会い、理論的にも一本筋の通った方向づけの中で、いよいよ、実践者と研究者の連携の上での活動が始まろうとしていました。いわば、私たちの運動は緒についたばかりという状況でありましたが、当初からの目標の一つであった「規模の大小を問わず自立した高校に」という独立校化の運動が、無残にも6分校の募集停止という犠牲の上に実現することになり、大和分校を残して制度上分校でなくなることになってしまいました。つまり、分校部という運動の基盤を失うことになり、去る3月18日、思い出の賀茂川荘において最終総会を開催し、その幕を閉じました。

その最終総会において、運動の中核であった各領域別部会の最終総括も、各領域共に何らかの形で運動の継続を表明して締めくくられていました。事実、4月1日をもって分校ではなくなり、門標が代わっても、これまでの差別実態が解消された訳ではありません。とりわけ、私たちがめざした教育内容の創造は、本来永遠性を持つものであり、不断によりよきものを求め続けなければなりません。そうした観点から、最終総会において、これまでの運動を継続発展させる自主的な教育推進組織の結成と、その組織が尾三地区高校分校部の継承組織であることを決議しました。その決議に基づき、私たちが立ち上がるきっかけを与えてくれた解放教育運動と、その具体的な展開に理論的な筋道を明らかにしてくれたバズ教育とを結合させた教育運動組織として、標記の名称による組織を結成したいと思います。

また、私たちは教育をあくまでも運動として捉えてきました。そして運動である限り広がりを持つものでなければなりません。従って、元分校部という事に限定しないで、今日の教育状況に課題意識を持ち、謙虚に学び合おうとする高校の仲間にも広く呼び掛けたいと思います。

しかし、本会は全く自主的な組織であり、分校部結成当初の、まさに手弁当の精神を持ち続ける仲間の結集でなければなりませんし、常に生徒と切り結びながら、日常的に手仕事をする仲間の同志的な集団でなければなりません。そうした趣旨に賛同される同志を下記の通り募ります。

記

加入条件 広島県下高校教職員で、1. 原則として全員の意識統一による学校加入、2. 各校単位、3名以上のサークルによる加入、(但し結成時においては単独加入も認める)。

申し込み方法 各校単位で代表者を決め、名簿(氏名、年齢、教科)と過入金一人当たり千円を添え、結成準備事務局へ、5月末日までに申し込んでください。

結成準備事務局 広島県豊田郡豊町久比 広島県立豊高校内

資料 18 第 13 回全国バズ学習研究集会案内

昭和 53 年 7 月 30 日

各都道府県教育委員会 殿
各市区町村教育委員会 殿
各都道府県幼小中高等学校長殿

全国バズ学習研究連絡会長
姫路市立白鷺中学校長 永井辰夫
第 13 回全国バズ学習研究会長
広島県豊町立豊中学校長 新田正彦

第 13 回全国バズ学習研究集会御案内

「教育とは何か」「指導とは何か」と問い、教育の本質を究めようと「バズ学習」の名のもとに教育研究を行って参りました。そして、今年第 13 回の全国研究集会を迎えることができました。

今次集会は、教育の基盤である地域教育づくりをめざし、具体的には、幼・小・中・高一貫した教育態勢づくりを、各校教育実践者ならびに教育研究者が一堂に会し、それぞれの立場から実践を出し合い、討議し合う中で模索することを主要なねらいに致しました。今次集會を下記要項にもとづいて開催致しますので、ぜひ先生方に御参加いただきたく、御案内を申し上げます。

開催要項

- 1 開催期日 昭和 53 年 10 月 20 日(金)、21 日(土) (2 日間)
- 2 研究主題 地域の教育課題をふまえた教育内容の創造
一幼・小・中・高一貫教育態勢づくりをめざして一
- 3 主催 全国バズ学習研究連絡会／広島県豊高校区教育推進協議会
- 4 共催 広島県教育委員会／豊町ならびに豊町教育委員会／豊浜町ならびに豊浜町教育委員会／広島県高等学校教職員組合
- 5 後援 広島県同和教育研究協議会／広島県尾三地区高等学校同和教育推進協議会／広島県解放・バズ教育推進研究会高校部会／広島県豊田郡下島 PTA 連合会／広島県立豊高等学校 PTA
- 6 会場 広島県豊田郡豊町・豊浜町 (案内図参照)
全体会場 豊町立豊中学校体育館
分科会会場 豊町立久比小学校／豊町立豊中学校／広島県立豊高等学校
公開授業校 豊町立沖友小学校・同幼稚園／豊町立久比小学校 同幼稚園／豊町立豊小学校／豊町立豊中学校／豊浜町立斎小学校／豊浜町立大浜小学校／豊浜町立豊島小学校／豊島町立豊浜中学校／広島県立豊高等学校
- 7 日程
10 月 20 日

9:00～10:00 受付 (各校で) 13:00～15:00 開会行事・基調講演 (全体会)
 10:00～12:00 公開授業 (9校) 15:00～16:30 分科会 (3会場)
 12:00～13:00 会場移動・昼食 (全体会場) 16:30～ 司会者打合せ

10月21日

9:00～12:00 分科会 (3会場) 13:00～15:00 記念講演・閉会行事 (全体会)
 12:00～13:00 会場移動・昼食 (全体会場)

8 記念講演 講師 名古屋大学名誉教授 南山大学教授 塩田芳久先生

9 本研究集会のねらい

21世紀がそこまで近づいている今日の社会において、その21世紀を生きようとする児童・生徒は、何よりも人間尊重の精神に基づいた民主的な社会人として成長することが要請されています。それには、学校教育においても、あらゆる教育活動を通じて、児童・生徒が相互に認め合い、協同して、自己課題を達成していける力を体得できるように援助しなければなりません。そして、その教育内容は、児童・生徒とそれを取り巻く地域の実態を直視する中で教育課題をつかみ、幼・小・中に、準義務教育化された高をも包括し、一貫した教育態勢の確立をめざしつつ創造するものでなければなりません。その観点から今年度結成された組織が、本研究集会の地元実行委員会である広島県豊高校区教育推進協議会であります。

この教育運動は、差別を許さない子どもを育てる同和教育と認知的学習と態度的学習の同時的達成をねらうバズ学習とが統合される中で展開されようとしています。したがって、本研究集会においては、そうした地元の運動を援助する意味も含めて、全国の幼・小・中・高、それぞれの立場での実践を出し合い討論し、共通理解の上で地域教育課題とは何か、その教育課題をふまえた一貫教育態勢とは何をする事なのか、を可能なかぎり明らかにしたいと願っています。

こうした観点からの教育活動の必要性は認めながら、そうした実践の報告が極めて少ないのが現状ではないかと思えます。本研究集会においては、可能なかぎり幼・小・中・高の共通の場を求めて、この一点に集中した研究会として文字通り創造への第一歩として成功を期したいと思えます。

10 分科会構成ならびに役員一覧

分科会名	研究主題	研究内容	提案校及び提案者	司会者	助言者
第1分科会 一貫態勢づくり	一貫態勢づくりをどう進めるか	基礎提案を受けて一貫教育態勢づくりの具体的方向づけを模索する	船場中・姫路 白鷺中・姫路 校区推進協	尾上茂夫・兵庫 松本重雄・春日井 国実 忠・現地	塩田芳久・名古屋 四宮恒夫・徳島 梶田稲司・春日井 山崎千代松・高知
第2分科会 学級集団づくり	学級集団づくりをどのように進めるか	学級集団からはみ出さされている子どもを中心に集団づくりを考える	城南小・姫路 五個荘小・滋賀 寝屋川四中・大阪 上野小・三重 東部中・春日井 白鷺中・姫路	竹本篤松・豊田 石部清和・滋賀 堀江常登・現地	永井辰夫・姫路 荒木真寿男・長崎

			校区推進協		
第3分科会 特設バズ	地域バズなど、 特設バズをどう 広げるか	これまでの実践の洗い直し を軸に今後の方向性を探る	高丘中・姫路 林田中・姫路 寝屋川四中・大阪 校区推進協	綾瀬良久・土岐 永浜 進・姫路 舟越和吉・新潟 井川武彦・現地	鈴木武士・姫路 清水快雄・土岐
第4分科会 言語と生活	言語と生活をど のように結び付 けるか	今日最も欠如している表現 力をどう付けていくかを中 心に考える	八幡南小・福島 藤山台中・春日井 南部中・豊川 校区推進協	稲垣菊夫・春日井 古川 巖・徳島 宮崎淳右・長崎 塩田博久・現地	梶田正巳・名古屋 鹿内信善・名古屋 藤原克己・愛知
第5分科会 社会と生活	社会生活におけ る社会的認識を どう育てるか	社会人として、地域を中心 として社会状況を的確につ かませる教育内容を考える	勝川小・春日井 高座小・春日井 旭陽小・姫路 白鷺中・姫路 大里中・静岡 校区推進協	今尾啓一・春日井 牛尾照夫・姫路 池上誉雄・鳴門 大成 治・現地	高馬正則・姫路 瀬良賢一・姫路 前田義夫・明石
第6分科会 自然と生活	自然を見つめ、 とらえる力をど う育てるか	自然認識をどのような教材 の中で作り出していかを 考える	新宮小・兵庫新宮 八木小・姫路 城南小・姫路 富川小・山梨富沢 泉中・土岐市 校区推進協	石原 貢・姫路 木原信之・現地	市川千秋・三重 中川 啓・姫路 塩津 進・兵庫
第7分科会 数と生活	数と生活をどう 結び付けていく か	計算でのつまずきの分析か ら、指導内容を考えてみる	中央台小・春日井 篠木小・春日井 安室東小・姫路	水野 明・春日井 金原さきみ・東京 賀戸文夫・現地	宿南勝之助・姫路 望月和三郎・東京 杉江修治・名古屋
第8分科会 健康と生活	健康な生活を送 るためにはどう したらよいか	体力増強に向けての動きの 工夫を中心に考えてみる	小清水小・豊田 小宅小・龍野 高座小・春日井 東部中・春日井 校区推進協	山本重信・兵庫 田中雄介・姫路 宮地友成・現地	金治晴治・龍野
第9分科会 芸術と生活	芸術的な表現力 をどう育てるか	感動し、そして創造へと向 かう道筋を明らかにする	砥堀小・姫路 校区推進協	田中稔彦・兵庫 岩田鎮人・春日井 花木喬二・現地	白井 仁・豊川

*提案者名略

11 公開授業一覧

沖友小学校（4学級48名、同幼稚園1学級7名） 「問題との出会いを大切にし、課題をもって
追求する子どもを育てる」

1校時 理科 幼、2年、3・4年(複式)、2校時 理科1年、5・6年(複式)

久比小学校 (6学級 115名、同幼稚園2学級 42名) 「音楽と体育を中心にして」

1校時 音楽 1、2、3、4年 体育5、6年 健康 幼稚園

豊小学校 (12学級 311名、同幼稚園4学級 95名) 「学習指導の効率化と視聴覚教育機器の活用」

1校時 算数2年 社会4、6年

豊中学校 (9学級 296名) 「出し、ねり、たしかめ合う学習活動づくり」

1校時 社会・理科1年、保体・国語・英語2年、音楽・国語・数学3年

2校時 30分学習活動

斎小学校 (1学級2名(3年、5年各1名)) 「思考性を伸ばす」

1校時 算数3、5年(複式)

大浜小学校 (4学級 52名) 「子どもの基礎能力を高める指導のあり方」

1校時 国語1・2年(複式)、算数5年、2校時 国語3・4年(複式) 算数6年

豊島小学校 (13学級 394名、同幼稚園6学級 117名) 「基礎学力の充実をめざして」

1校時 算数全学年

豊浜中学校 (10学級 248名) 「地域課題

をふまえた指導のあり方」

1校時 音楽1年 体育・社会2年

理科・数学3年

2校時 町内バス

豊高校 (6学級 233名) 「単元単位学習を
中心に」

1校時 1-1 英語、1-2 生物、2-1・2-A 体
育

2-1・2-B 家庭科 2-1・2-C 現
国

3-1・2-A 英語 3-1・2-B 商法

3-1・2-C 数学

2校時 1-1 数学、1-2 地理、2-1・2-A 食
物 2-1・2-B 計算実務 2-1・
2-C 化学

3-1・2-A・B 日本史

3-1・2-C 体育

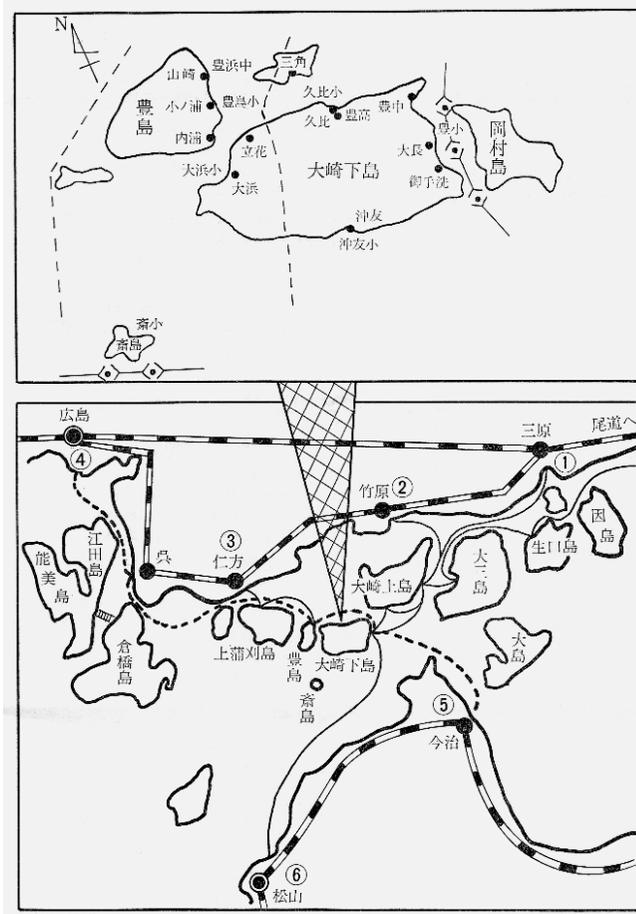
12 参加費 1人 3,000円

* 「13 参加申し込み期日」「14 申し込み方法」

「15 交通について」「16 昼食について」「17

宿泊について」「18 その他」は略

第13回・全国バス学習研究集会・会場案内図



1978 年 3 月 14 日 於、豊高校

協議題

1. 来年度計画について
 - (1) 実態調査
 - (イ) 悉皆調査を行う
 - (ロ) 実施時期 4 月下旬を予定
 - (ハ) 集計・分析 1 学期中を目標
 - (ニ) 報告書は遅くとも 2 学期初めまでに
 - (2) 校区推進協 公開研究会
 - (3) 各校授業研究会
2. 推進組織態勢
 - (1) 両町の同教組織と連携の形態
 - (2) 研修日の設定

昭和 53 年度 広島県豊高校区教育推進協議会事業報告 (12 月末まで)

4 月 24 日	第 1 回協議会 (実行委を兼ねる 以下略)
5 月 23 日	第 1 回協議会
30 日	合同学習会
6 月 2 日	第 2 回協議会
10 日	全国バズ学習研究懇談会 役員参加
11 日	
13 日	第 1 回広島県豊高校区教育推進協議会 総会
28 日	教育一貫態勢とは シンポジウム
29 日	豊浜町合同学習会
30 日	豊町合同学習会
7 月 13 日	第 3 回協議会
19 日	第 4 回協議会
24 日	第 1 回合同合宿研修会
25 日	
8 月 27 日	第 2 回合同合宿研修会
28 日	
9 月 4 日	第 5 回協議会
7 日	各校別学習会 (豊高)
8 日	〃 (豊中)

12日	〃	(豊島小)
13日	〃	(沖友小)
14日	〃	(豊浜中)
20日	第6回協議会	
26日	各校別学習会 (斎小)	
27日	〃	(大浜小)
10月 2日	〃	(豊小)
3日	〃	(久比小)
5日	第7回協議会	
6日	下島PTA連合会 協力要請	
19日	第13回全国バズ学習研究集会 打ち合わせ会	
20日	第13回全国バズ学習研究集会	
21日		
11月 8日	第8回協議会	
22日	第13回全国バズ学習研究集会 全員総括会議	

第13回全国バズ学習研究集会 参加状況

1. 島外参加者 302名 (県外161名 県内141名)
 2. 推進協参加者 150名
 3. 来賓・PTA 150名～200名
- 総計 602名～656名

昭和54年度 広島県豊高校区教育推進協議会 活動案

私たちは、第13回全国バズ学習研究集会を、幼・小・中・高一貫した教育態勢づくりによる、真の地域教育確立のための出発点と規定した。幸いにも、その所期の目的は多くの関係各位によって達成されたと考えている。

しかし、これはあくまでも出発点であり、今後少なくとも10年間を見通した継続的な、創造的な活動を具体的に展開しなければならない。そして、具体的な活動の方向は、言うまでもなく地域の実態、とりわけ地域の児童・生徒の実態を科学的に把握することによって決定される。就中、学校教育の主要な課題である学力保障と集団訓練とが、どのような相関関係にあり、その実態がどうであるのかを早急に明確にする必要がある。その科学的データに基づいて段階的に具体的な取り組みが実施されなければならない。

そうした視点から、54年度頭初、少なくとも一学期をめどに、児童・生徒の学力と人間関係を中心にした実態調査を行いたい。また、推進協の母体である両町の同研組織の差異を、これまでの経過を十分に尊重しながら、推進協として同一歩調が取れるように、組織的な整備を図りたい。

次に、そうした活動をまとめ、継続的に積み上げを図るために、一年に1回以上、定期的な公開

研究会を実施したい。また、他の先進地域との交流を図り相互に学び合うために、全国バズ学習集研究集会をはじめ各種研究会に積極的な参加を図りたい。

昭和54年度 予算申請書

【原案のため宛名無し】

昭和54年2月 日

代表者 豊浜町立斎小学校長 脇本 操
豊町立久比小学校長 畑本達磨
広島県立豊高等学校長 木谷 陽

昭和54年度豊高校区教育推進につきまして、下記の通り、研究推進を図りたいと存じますので、助成の程よろしくお願い申し上げます。

記

1. 研究推進主題

地域の今日行き課題をふまえ、幼・小・中・高の教育の一貫態勢づくりを基底として、何を、どう教育するかの内容の創造的実践を進める。

2. 昭和53年度の実践をふまえての課題

(1) 幼・小・中・高の一貫教育づくりの態勢とは、を求めて、幼・小・中・高の教育に直接かわる人々の構えづくりを目指して、「一貫教育づくり」とは、の志向性を全国の人々に問い求めた。即ち、全国バズ学習研究集会の主権がそれであった。

(2) この大会で得たものに多くのものがあったが、特記すべきは、幼・小・中・高の一貫を唱え志す者の多き中で、具体的に行動を起こし得た者は全国でも少ないということで、重大な意義がある。

(3) しかし、思い思いの教育でしかなかったという事を、事実体験を通して自覚的立場に立ったのは、地元の教育に直接携わっている豊高校区教育推進を図ろうとしている教職員と保護者達であった。

(4) そこで、具体的には、幼・小・中・高「何を一貫するのか」に関わって、基本的に求める実態把握が一貫していない実態が分かった。教育は具体的事実の上に立って、それをどう保障するかを考え実践することが本質であり、それを一歩一歩積み重ねる事である事を自覚した。

3. 54年度の実践の大綱

(1) 幼・小・中・高に在学する児童・生徒の科学的で一貫した調査を実施すること。

(2) その事態調査をもとに、何のために、何を、どうしなければならぬかを幼・小・中・高の発達プロセスの中での適切な教育内容の発見的設定をすること。

(3) それをもとに、研究的実践を他に公開し、正しく評価し、地域に根づく教育態勢と教育内容の創造的実践を深めることである。

4. 実践的研究計画

(1) 幼・小・中・高、園児・児童・生徒の「知能検査」「標準学力検査」「人間関係調査」と専門

的分析検討。

(2) 実態調査をもとに、教育、指導の力点、視点の一貫的見通し。

(3) これをもとに、実践実証の推進のための合同研究会

(4) そのための研修

5. 予算

経常経費

1 公開研究会 (年1回)	300,000 円
2 各種研究会参加旅費	300,000 円
3 事務費	100,000 円

実態調査費

知能検査 (幼小中高)	1960 名×145 円	284,200 円
学力検査 (小)	922 名×4 種類×80 円	295,040 円
" (中)	544 名×5 種類×80 円	217,600 円
" (高)	233 名×5 種類×80 円	93,200 円
人間関係調査	1699 名×300 円	509,700 円
検査分析費		200,000 円
報告書印刷費(300部)		200,000 円
総計	2,499,740 円	
補助額単価 園児・児童・生徒 1 人に付き		1,276 円

振興補助分担基本資料

	幼稚園児	小学校児童	中学校生徒	高校生徒	計
豊浜町内	113	428	239	105	885
豊町内	138	452	279	130	999
総計	251	880	518	235	1884

3 1979年度の豊高校区教育推進協議会の活動

資料20 豊高校区「推進協」ニュース 2号

1979年4月11日

実態調査決定する

昨年11月の第13回全国バズ学習研究集会、全員総括会議において、来年度以降の活動の方向を討議する中で、学校生活を中心にした、児童・生徒の実態調査を統一的に行い、その結果から具体的な実践課題を明らかにして取り組むことが確認されました。

その後、この調査に要する経費捻出のために、豊、豊浜両町及び県教委に請願すると同時に、実施方法について、塩田芳久先生にお願いして研究いただいております。両町とも、3月議会において、年度当初予算の中にほぼ要求金額満額に近い金額が盛り込まれ、非常に好意的な形で可決されました。

それに基づいて、塩田先生のご指導を受けて、以下のような構想で実施することに致しました。

検査内容

1. 知能検査 教研式 全員実施
2. 学力検査 教研式 診断的学力検査（前年度を実施）
小学校（含中1） 国、社、算、理
中学校（含高1） 国、社、数、理、英
高校（2、3年） 国、英、数
3. 学習適応性検査 教研式 小、中、高
4. 人間関係検査（オリジナル）

日程

4月11日（水） 豊高校区教育推進協議会 豊高校

4月16日（月） 14時 実態調査説明会 豊高校

～17日（火）

今回の実態調査に関して事前に十分な共通認識を持っていないとむしろマイナスになる場合が考えられるので、各校から実情に応じて数名の参加を求め、確実にその週内において校内伝達をしていただく。

4月23日（月） 実態調査実施

～28日（土）

5月19日（土） までに採点終了

採点集計はコンピュータにかける検査以外は各校で行う。

5月20日以降、研究者による分析及び調査書作成にかかり、1学期末を目標に報告書を完成させる。夏休み中に2学期以降の活動計画を報告書に基づいて立てる。

付、資料 校区推進協実態調査説明会（4月16日）

【説明会当日の配布資料あり。メモ書きの形であるので会の内容を要約する】

次第

- 1 代表幹事挨拶
- 2 講師紹介、日程説明
- 3 塩田先生による説明
(内容の概略)
 - ・実態調査の全容と活用方法の解説
 - ・知能と学力の関係および、適応性検査を合わせた考察の仕方
 - ・実施する知能検査、学力検査、人間関係検査の種類の説明と解釈について、併せて処理の手続きの説明
 - ・標準検査の意味と信頼性、妥当性、客観性を保障するための統計処理の解説と偏差値の意味の解説
 - ・標準検査実施上の注意

資料 21 79 年度広島県豊高校区教育推進協議会「公開研究会案内」

各教育委員会殿
各学校長 殿
関係教職員 殿

1979 年 5 月 28 日

広島県豊高校区教育推進協議会

代表幹事 越田 正記

松浦 宏守

木谷 陽

豊町立 沖友小・久比小・豊幼少・豊中

豊浜町立 斎小・大浜幼少・豊島幼小・豊浜中

広島県立 豊高 各学校長

事務局広島県立豊高校内

79 年度広島県豊高校区教育推進協議会公開研究会御案内

昨年度、地域の教育課題をふまえた、幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを目指して、本推進協を結成し、同和教育とバズ学習を結合させる中で、第 13 回全国バズ学習研究集会を開催し、皆様の御支援により一定の前進を果たすことができました。

その成果を受け、今年度加盟各校の児童生徒の学校生活を中心にした実態調査を実施し、それに基づく課題の具体化を図ろうと致しております。また、それと同時に、下記日程によって、各校持ち回り方式による、公開研究会を開催いたしますので、是非ご参集下さり、ご指導賜りますよう御案内申し上げます。

なお、1 年間にわたる日程ですので、変更も予想されますから、来る 6 月 7 日に開催いたします豊幼稚園研究会以外は、その都度改めてご案内させていただきます。

記

月	日	時間	公開校	研究テーマ
6	7 (木)	10~16 時	豊幼	幼・小・中・高一貫教育の中で、幼稚園教育の本質を明らかにしよう
	28 (木)	10~16 時半	豊中	自主・協同・創造の学習活動づくり
	29 (金)	10~16 時	豊高	ユニット学習による授業研究
7	30 (月)	9 時半~16 時	久比小	実態調査報告・研究会
10	4 (木)	13~16 時	斎小	基礎的な計算力を付け、考え方を伸ばす
11	20 (火)	10~16 時	豊島小	進路保障を目指し基礎学力の充実を図る
	"	"	豊浜中	
	"	"	豊高	
	"	"	久比小	体育：充分運動を行い筋力・持久力・調整力のバランスの取れた体を育てる 音楽正しい発声法を身に付け、歌唱力を高め、素直に表現する心情を育てる
12	7 (木)	"	沖友小	問題との出会いを大切にし、課題を持って追求する子どもを育てる
	"	"	大浜小	一人一人の子ども能力を高める授業の創造
2	21 (木)	"	豊小	子ども一人ひとりの能力を自己開発し、学習活動を深めて：学習指導の効率化・教育機器の活用

殿

1979年7月20日

広島県豊高校区教育推進協議会

代表幹事 越田 正記

松浦 宏守

木谷 陽

事務局 広島県立豊高校内

児童生徒の学校生活を中心にした実態調査報告・研究会ご案内

暑中お見舞い申し上げます。かねてより当推進協に対し深いご理解を賜り感謝申し上げます。

さて、今春、豊、豊浜両町の絶大なるご支援によりまして、幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを目指す具体的な取り組みをするための基礎資料として、全児童・生徒を対象に実態調査を実施いたしました。その調査結果の集計・分析研究を、常にご指導いただいております塩田芳久先生にお願い申し上げておりましたところ、中間報告の形ではありますが、その結果が出ましたので、下記の通り、報告・研究会を開催致すことになりました。

御多用中であり、しかも暑中の折にまことに恐縮に存じますが、是非御臨席賜り、現時点での地域の児童・生徒の実態をお知りいただくと同時に、いろいろご指導いただきたく存じ上げ、御案内申し上げます。

記

日時 昭和54年7月30日(月) 午前9時30分より

場所 豊町立久比小学校 体育館

日程 9:00 9:30 10:20 12:00 13:00 15:00 16:00

受付	開会行事	全般報告・課題提示	昼食	分科会	全体会
----	------	-----------	----	-----	-----

講師 名古屋大学名誉教授・南山大学教授 塩田芳久先生

研究員 名古屋大学助手 杉江修治先生 大同大学講師 鹿内信善先生

名古屋大学研究生 石田裕久氏 名古屋大学大学院生 塩田勢津子氏

分科会構成 第1分科会 幼稚園・小1・小2・小3・小4

第2分科会 小5・小6

第3分科会 中学校

第4分科会 高校

第5分科会 PTAを中心に会員外参加者によって地域や家庭の役割を討議

その他 昼食は推進協で準備させていただきます。

*当日は、研究者グループ作成の調査データ B4版 23ページにわたる資料が配布報告され、それをもとに分科会が進められた。

資料 23 公開合同研究会案内 2 件

<豊島小学校・久比小学校・豊浜中学校・豊高等学校公開合同研究会>

各教育委員会殿

1979 年 10 月 10 日

各学校長 殿

広島県豊高校区教育推進協議会

関係教職員 殿

豊浜町立豊島小学校長 松浦 宏守

豊浜町立久比小学校長 畑本 達磨

豊浜町立豊浜中学校長 長谷川 敏

広島県立豊高校校長 木谷 陽

1979 年度 広島県豊高校区教育推進協議会 豊島小・久比小・豊浜中・豊高

公開合同研究会ご案内

謹啓 皆様には教育内容創造のためにご精進の事とご推察申し上げます。

さて、私達は昨年度から 2 年間にわたって広島県同和教育推進研究校の指定を受け、微力ではございますが幼・小・中・高校の一貫体制を図る中であれこれ模索してまいりました。下記の要領に基づきまして公開合同研究会を開催し皆様のご指導を賜り、今後の教育推進の方向を確立していきたいと思っておりますので、是非ご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

記

1. 研究主題 進路保障を目指し基礎学力の充実を図る。(地域課題をふまえた指導のあり方)
2. 期 日 昭和 54 年 11 月 27 日 (火)
3. 会 場 公開授業・分科会 (豊島小・久比小・豊浜中・豊高)
全体会 (豊島中)
4. 主 催 広島県豊高校区教育推進協議会
豊島小学校・久比小学校・豊浜中学校・豊高等学校
5. 共 催 豊町教育委員会・豊浜町教育委員会
6. 後 援 広島県教育委員会・豊校区内各校 PTA
7. 講 演 名古屋大学名誉教授・南山大学教授 塩田芳久先生
助言者 広島県教育委員会指導主事
8. 演 題 地域教育の展望
9. 日 程 9:30 10:20 11:50 13:00 13:20 14:50 15:50 16:00

公開授業	分科会	昼食 (移動)	開会式	研究発表・協議	講 演	閉会式
------	-----	---------	-----	---------	-----	-----

10. 公開授業

豊島小学校会場

学年	1	2	3	4	5	6
教科	国語	算数	国語	算数	国語	算数

久比小学校会場 (9:10 全校朝会)

学年	1	2	3	4	5	6
教科	音楽	体育	音楽	体育	音楽	体育

豊浜中学校会場

学年	1	2	3A	3B	3C
教科	社会	音楽	理科	英語	数学

豊高校会場 (8:40~9:25 公開授業、9:35~10:20 授業研究)

学年	1の1	1の2	2の1	2の2	3の1	3の2
教科	化学	生物	現代国語	英語	政治経済	日本史

学年	3のA	3のB	3のC
教科	家庭経営	計算事務	数学Ⅲ

(コース)

11. 研修内容 イ. 公開授業

ロ. 分科会 (公開授業完成・研究協議)

ハ. 全体会 (基調提案・各校の取り組み発表・協議・講演)

<大浜小学校・沖友小学校公開合同研究会>

各教育委員会殿

各学校長 殿

関係教職員 殿

広島県豊高校区教育推進協議会

代表幹事 越田 正記

松浦 宏守

木谷 陽

豊浜町立大浜幼稚園・小学校長 日浦 芳穂

豊町立沖友幼稚園・小学校長 服部 秀峰

後援 尾道教育事務所 豊田竹原教育振興会

豊浜町教育委員会 豊町教育委員会

尾道管内へき地複式教育連盟

豊田竹原へき地複式教育連盟

豊田竹原小学校国語教育研究会

1979年度 広島県豊高校区教育推進協議会 公開合同研究会御案内

昨年度、地域の教育課題をふまえた、幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを目指して、本推進協を結成し、同和教育とバズ学習を結合させる中で、第13回全国バズ学習研究集会を開催し、皆様の御支援により一定の前進を果たすことができました。

その成果を受け、今年度加盟各校の児童生徒の学校生活を中心にした実態調査を実施し、それに

基づく課題の具体化を図ろうとしております。

そこで、下記の日程により、へき地複式の公開研究会を開催いたしますので、ぜひ御参集下さりご指導賜りますようご案内いたします。

主題 「地域の教育課題をふまえた授業（複式授業の中で主体性をどう育てるか）」

1. 期 日 昭和54年12月7日（金）
2. 会 場 豊浜町立大浜小学校・豊町立沖友小学校
3. 会場校の教科と研究主題

大浜小学校 教科名 国語・算数

主 題 一人一人の子どもの能力を高める授業の創造

沖友小学校 教科名 理科

主 題 問題との出会いを大切にし、課題を持って追求する子どもを育てる

4. 日 程

大浜小学校	10:50	11:35	12:30	13:00	14:00	14:50	15:00
	受付	公開授業	昼食	開会行事・経過報告	研究協議	指導講話	閉会行事
沖友小学校	10:50	11:35	12:30	12:50	14:20	14:50	15:00
	受付	公開授業	昼食	開会行事・経過報告	分科会	講 評	閉会行事

5. 公開授業

大浜小学校

学年	教科	単元名
幼稚園	生活	かいもの
1・2年	国語	たぬきのいとぐるま かさ地ぞう
3・4年	国語	力太郎 吉四六話
5年	算数	面積
6年	算数	式

沖友小学校

学年	教科	単元名
幼稚園	自然	秋の自然物で遊ぶ
3・4年	理科	3年 空気てっぼう 4年 空気や水のかさと温度
5・6年	理科	5年 酸素と二酸化炭素 6年 物のあたたまり方

6. 分科会（司会者、記録者は現地教員、助言者は指導主事、各1名。氏名は省略。配置のみ記す）

大浜小学校

分科会	司会者	助言者	記録者
幼稚園			
国語			
算数			

沖友小学校

分科会	司会者	助言者	記録者

7. 指導講師

（大浜小は尾道教育事務所指導主事3名、沖友小は尾道教育事務所指導主事、広島県教育センター指導主事、三原市教育委員会指導主事各1名。氏名は略）

資料 24 実態調査報告書作成編集会議資料

報告書の概要

- I 調査の目的と意義 塩田 (5)
- II 調査の計画 塩田 (20)
 - 1 調査の種類と対象 2 調査の方法・手続き 3 調査の期日 4 結果の整理
- III 調査結果と報告
 - 1 知能の実態と考察 石田 (30)
 - 2 基礎的教科の学力の実態と考察 塩田 (50)
 - 3 学習適応性の事態と考察 鹿内 (40)
 - 4 学級の社会的構造の実態と考察 杉江 (30)
- IV 調査結果の要約と今後の課題 塩田 (15)
- V 次年度の調査計画 塩田 (10)

その他

原稿締め切りは1月10日→2月末に完成

最初の挨拶は推進協の事務局で、編集・印刷は杉江担当

費用は30万前後、印刷部数は600部

来年度の調査について

ねらい 2回目にしてどれだけ伸びたか、一般的状況を捉える(進歩、停滞、悪化)

54年度、55年度の調査で一段階の調査

56年度については、これをもとに再考慮

種目 54年度と同じもの

実施時期 学力、知能、AAI、ソシオメトリックテストとも4月中旬の予定。→定例化

原則として校区一斉に実施、ソシオについては5月でもよいのではないかと

人数の確定 各学校の学年、人数を+αを見込んで一覧表を

ソシオメトリックテストについては年度初めと年度末を比べ合わせて変化を見るために、54年度末(1月)にも実施

年度初めに行ったテストの反省点と考慮すべきこと

・高校生ともなれば意図を見抜いたりふざけたりで真面目に記入しない→教員側は何のためのテストであるかを明確にし、実施要領を厳しく指示すべき

・小学生でも教師の意図を組んで◎を付けたり、また×を付けるのに抵抗を感じたりするのは調査実施で認める所である。

・データを出すとき、◎を全部付けた子に関してはデータとして除くこともある

・AAI、無意識にやっても望ましい方に付ける者がいる

その他 換算表、二揃いは事務局に保管

AAIのクラス表、個票の取り扱いについて→原票、コピーは各校で保管すべき

54年度の生徒の番号を55年度のクラス表に書き換える作業は新担任
個票は研究者グループが作成してくれる（各校共有の様式で）

ソシオメトリックテストの処理

・凝集度を見るためにはできるだけクラス担任が記入したほうがよい。自分のクラスの
生徒実態の把握のために

経費について

ソシオメトリックテストにかかった費用は7,500円、学年末は3～5000円

全体で用紙代66万、調査費用30万、計96万

来年度の予算について

・単純作業は大学生のバイトに委ねる

・教師が把握すべき部分は担任がやる

個々の生徒の資料はあくまでも教師が扱うべき

研究者は一般的データを出したり一般的傾向を見つける作業を受け持つ

実態調査実施のために

12月7日以降、推進協議を開いて実態調査のための委員会（各校から1～2名）の人選に
ついて提案。委員を通して報告の見方を各校において徹底する。研究者グループに報告
書の見方を依頼する

研究者グループによって次の3冊の報告書が作られ、会員全員に配布されている。

- ・『教育課題を求めて—第1次実態調査研究報告書 1979年度』 1980.
- ・『教育課題を求めて—第2次・第3次実態調査研究報告書 1980年度・1981年度』 1981
- ・『教育課題を求めて—第2次・第3次実態調査研究報告書 1980年度・1981年度』 1983.

資料 25 第 13 回推進協 協議会案内

1979 年 12 月 6 日

各学校長殿

広島県豊高校区教育推進協議会事務局

第 13 回推進協 協議会開催通知

冠省 下記の通り協議会を開催いたしますので、ご出席ください。なお、今回の協議会は来年度へ向けての重要案件が多くありますので、可能な限り学校長の出席を要請します。

記

日 時 12 月 12 日 (水) 13 時 30 分より

場 所 豊高校 校長室

議 題 (1) '79 年度会計中間報告

(2) '80 年度行事計画

(イ) 実態調査 / (ロ) 県へき連研究大会 / (ハ) その他

(3) '80 年度予算要求

(4) その他

<協議会資料>

79 年度会計中間報告

内訳は省略

収入概算 2,520,222 円 (予定分含む)

支出概算 2,010,358 円 (12 月 12 日現在)

80 年度予算案

内訳は省略。費目は「実態調査関係費」「全国バズ学習研究集会」「各研究会補助費」

「県へき連大会関係費」「事務費」

支出総計 3,655,000 円

【両町への申請額は児童生徒数で比例配分する】

実態調査研究員指名リスト・推進協児童生徒数一覧 (略)

助成金申請書 (略)

昭和 55 年度 事業計画

I 実態調査

1. 54 年度と同種 (知能検査、学習適応検査、標準学力検査、学級調査) のバッテリーで実施する。
2. 実施時期は 4 月中旬に全校一斉に行う。

3. ただし、学級調査は学級編成替えのある場合、5月実施とする。
4. 学級調査は変化をつかむため、翌年1月実施する。
5. 第2回調査は、第1回調査との対比を行い、一般的な状況（進歩、停滞、悪化）をつかみ、その原因を探る。
6. 全校児童生徒の個人表を作成し、一人一人の追跡ができるようにする。
7. 各校実態調査研究員を選出し実態調査委員会を作り、学習と研究を行い、各校での定着を図る。
8. 資料の散逸を防ぐために、データベースを開設する。
9. 報告書の刊行と学習・研究会を実施する。

II 研究交流（公開研究会）

1. 54年度、各校持ち回り公開研究会が、予期以上の研究交流効果をあげたと判断されるので、55年度も実施する。
2. 従って、来年度も年度当初に年間計画を立て、各方面へ案内する。

III 第20回広島県へき地教育研究大会

1. 豊町、豊浜町両町の同意が得られれば、本推進協が現地実行委員会を組織し、大会運営に参加する。
2. 公開授業校、全体会場等については、共催決定後あらためて検討する。

IV 全国バズ学習研究集会

1. 本推進協は、同和教育とバズ学習の統合を目指しており、全国バズ学習研究集会に積極的に参加し、先進校に学び、研究交流を図る。
2. 54年度同様、会の運営にも参加し、役員を派遣する。

V 広報誌発行

1. 地元PTAを中心に、他の地域での会合などに、本推進協の事がしばしば話題になるが、地元住民が知らないでは困るという声がある。
2. したがって、年1回をめぐりに、両町民を対象にした広報誌を発行する。

VI その他

1. 事務体制の強化を図る。
2. 会員間の交流の強化を図る。

広島県豊高校区教育推進協議会5ヶ年計画案（1979年度立案）

はじめに

広島県豊高校区教育推進協議会は、この地域における学校教育を主軸にした教育活動推進組織である。そして、その結成に至る経過でも明らかなように、被差別部落の完全解放を目指す、同和教育運動の一環として明確に位置づいているのである。従って、本推進協は、被差別部落の完全解放に寄与し得る児童・生徒の育成が任務である。

その任務を遂行するためには、この地域の児童・生徒の進路保障を達成しなければならない。その方向性を示した命題が「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」であり、その具体的な展開

として、当面「幼・小・中・高一貫教育態勢づくり」を目指しているのである。

その教育推進の具体的な共通基盤として、優れた教育理念に基づき児童・生徒の民主的な人格形成を、より科学的に追求していこうとしているバズ学習があり、その体系化された道筋に同和教育との統合の見通しを立てているのである。したがって、同和教育とバズ学習の統合を、日常実践の中で推進しようとしていることになる。

以上のような基本的な観点に立って、1979年度を起点とする、本推進協の短期計画としての5ヶ年計画を策定したいと考える。

5ヶ年計画の基本的な柱

I 実態調査

教育活動はいかなる場合においてもその学習主体である児童・生徒の実態を、個人として、そして集団として、的確に把握することが大前提である。その自明の条件が、しばしば学校教育において欠落していたことを私たちに鋭く指摘しきているのが解放運動である。それは教師の恣意的な姿勢の問題であり、教育の非科学性の問題である。そうした差別性の克服は、最も緊急にして重大な課題である。

その基礎的な大前提をより科学的に把握するために、標準化された諸検査、即ち心理学の理論を基礎に、統計的検討が十分になされ、基準化されたテストで実施するのである。もちろん、現在実施されている諸検査によって、児童・生徒の全てが把握されるわけではないし、そのデータが当該児童・生徒に予断や偏見を持つ事になればむしろ弊害の方が大きくなることは言うまでもない。したがって、そのデータをどう読み、どのような具体的課題があるかを明らかにし、実践に移すのでなければならない。その中核になる推進組織として、実態調査研究委員会が先日発足した。

次に、いかなる教育実践も、これまた当然の事であるが、その実践がその目標に対してどれほど定着したかという教育効果度の測定、即ち評価活動抜きには考えられないのである。それも集団として、個人として、またその両者の相関性において、評価活動をする場合、1回の諸検査ではその時の実態をつかむだけに終わるのである。実態把握と、その克服のための実践、そしてその効果度の測定を繰り返す中で、具体的な教育実践の中身が明らかになるのである。

そうした中で、科学的な一定の傾向が学問的に明らかになるためには、最低5ヶ年の追跡が必要であると考えているのである。とりわけ、原点ともいうべき。一人一人の児童・生徒の向上を目指す個票を中心にした追跡に重点を置いているのである。

第1時実態調査報告書は印刷の関係で遅れているが、近日中に刊行される。この学習会も組織しなければならない。

II 授業研究交流

学校教育における、最も日常的であり、学校生活の大部分を占める、いわゆる授業の改善は、言うまでもなく私たちの主要な任務である。また、すでに本推進協の活動の中心として定着しているといえる。そして、推進協の主催による公開研究会は、日常的な授業研究交流の集積を公開し、私たちの独善を排除するために批判を受けるためである。したがって、日常の校内研究において、会

員校間の交流を計画的に図らなければならない。また、散発的にならないために、テーマの設定に系統性、一貫性を持たせる配慮が必要であると考えられる。

Ⅲ 教科別、領域別の研究組織の確立

第 13 回全国バズ学習研究集会における分科会設定に端を発した研究グループが、いくつかは継続されているが、ほとんど解消されている。それは、両中学校区の同研組織の不統一に起因している側面が大きい。可能な限りの歩み寄りが要請される時点に来ていると考えられる。

それぞれの主体性は尊重されながらも、一定の方向性を示す努力をする中で、領域別の研究体制を図りたい。

以上を本推進協の基本的な柱立てとして、5ヶ年計画、実質的には4ヶ年計画を立てたい。

1980 年度事業計画

4 月第 2 週～3 週 実態調査、諸検査実施（学級調査は 5 月、幼稚園年少組は 2 学期）

4 月第 4 週 総会・実態調査学習会

夏季休業中 全員学習会

10 月 22 日 県へき連研究大会

1981 年度事業計画

1. 第 3 次実態調査
2. 後掲研究会（県内全域対象） プレ全国大会
 - イ. 授業研究
 - ロ. 領域研究

1982 年度

1. 第 4 次実態調査
2. 実態調査報告書
3. 全国バズ学習研究集会 開催地

1983 年度

1. 第 5 次実態調査
2. 実態調査最終報告、研究大会
3. 自薦報告集刊行
4. 公開研究会

同伴組織の統一による実質的な推進協による運営が考えられる時点では、それが加えられていく。

予算関係見通し（基本的な考え方）

1. 81 年度以降は、経常経費と単年度事業経費の 2 本立て構成とする。
2. 行政負担の軽減を図るために、自己財源の確保に努力する。

資料 26 研究委員会・実態調査研究委員会

第 1 回研究委員会報告及び学級調査の取り組みについて

1. 第 1 回委員会 1980 年 2 月 13 日（水） 13：30～ 於、豊高校図書室
2. 実態調査研究員及び役員
【氏名リスト掲載あり】
3. 当面の取り組み
 - (1) 学級調査について 年度当初との対比が必要なため、各校とも 2 月 14 日以降に実施し、集計表に整理したうえで、3 月 6 日までに集計表の写しを事務局に送付する。
 - (2) 報告書学習会について 報告書（『教育課題を求めて—第一次実態調査研究報告』）ができた段階で委員の学習を行い、更に学校現場での学習を行う。
 - (3) 次年度実態調査について 次年度調査用紙は今年度中に準備をしておき、2 年目の実態調査に備える。
4. 各校における学級調査の取り組みについて（案）

委員会の確認に基づき、以下の取り組みを行う。

 - (1) 2 月 21 日（木）～2 月 27 日（水）の間に各クラスにおいて学級調査を行う。（30 分学活の時間を使う）
 - ・質問用紙は生徒数だけ準備してあります。ただし、回答用紙は生徒氏名の印を押し、必要数だけ印刷をしてください。
 - ・欠席者については後日、個々に行い、クラス全員について実施する。
 - (2) 調査が終了後、後日配布する集計表（2 種類）に記入し、その写しを 3 月 6 日までに研究員に提出する。

集計表への転記作業は単純作業の上、かなりの量があります。そのためミスをしがちになりますので、十分に注意してください。また、集計表の選択者、被選択者についても間違いのないよう注意してください。

第 1 回実態調査研究委員会資料

1980 年 2 月 13 日 於、豊高校図書室

1. 開会・挨拶
2. 司会者
3. 自己紹介
4. 経過報告
5. 役員選出
6. 当面の作業
 - (1) 学級調査
 - (2) 報告書学習会

第2回実態調査研究委員会資料

1980年3月21日13:30～

於、豊高校 図書室

1. 開会あいさつ
2. 経過報告
3. 当面の取り組み
 - (1) 報告書学習会について
 - (2) 1980年度実施調査について
 - ①実施期間 4月第2週、第3週で終了する(ただし、学級調査は5月以降に実施する)
 - ② 調査の種類
 - ・幼(年長)・小1 知能検査、AAI(学習適応性検査)
 - ・小2～中1 知能検査、AAI、学力検査(国・社・数・理)
 - ・中2～高1 知能検査、AAI、学力検査(国・社・数・理・英)
 - ・高2、高3 知能検査、AAI、学力検査(国・数・英)

【委員リストと推進協児童生徒数リストが掲載されている】

資料 27 1.28 狭山同盟休校をめぐる学校総括

広島県豊高等学校（1980年3月5日）

はじめに

本校における1・28狭山同盟休校の総括を行う時、この同盟休校に絞って記述することは結局総括にならない、という重大な問題が存在している。

その第一は、昨年、部落研が中心となり、5.23、10.31の狭山デー全学学習会が行われたとき、その感想文に表出した差別事象である。そして、次は、1.28直後に露呈した賤称語差別事件である。この両者には、その背景として、地域の根深い差別性があり、その差別性を予測しながらも、何ら有効な手立てを行えなかった本校の差別体質に起因しているという問題である。

5.23、10.31、1.28と、それぞれの闘争に主体的な取り組みをした解放奨学生たちの活動が、本校の解放教育の取り組みとは無関係に、支部活動による立ち上がりであったことは率直に認めざるを得ない。むしろ、彼らの取り組みが進めば進むほど、他の生徒たちをして、差別意識をかきたてさせる結果になるように仕向けていたことになる。この事の総括なくして、本校における教育課題は明らかにならないのである。

このように、当然の道筋に沿った取り組みがなされず、地元支部の糾弾を受ける中で、今やっと、動き出そうとしている段階である。したがって、そうした本校の差別体質を徹底的に総括することが、何よりも緊急な課題であると認識している。ただ、その課題に応えるためには、ひとり本校だけの取り組みでは展望が見いだせない側面があることも事実である。それらを含めて、今後の方向性を示すに留まる段階であることを、残念ながら認めざるを得ない。そうした、きわめて表層的な総括であることを、はじめに述べさせてもらわざるを得ないのである。

1 事実の経過

本校に在籍する解放奨学生は1年3名、2年1名、3年3名の計7名であり、一応全員支部活動と部落研活動に位置づいている。したがって、支部活動と部落研活動とは一体化した側面があり、学校側から言えば支部活動に依存していたともいえる。そのために、事前の取り組みに関しては、学校側からの組織的な働きかけは何もされていない。

5.23 狭山デー全学学習会

5月22日（火）、登校時にビラ配布、15時より体育館において全学学習会が開催される。

解放奨学生7名中6名が、順番に登壇して、予め用意されたプリントにしたがって「狭山事件のあらすじ」「警察の部落差別の利用」「部落差別と石川さん」「職業差別について」「定時制高校について」「黒人差別について」「まとめ 私たちとのかかわり」を訴えた。

翌23日、ロングホームルームの時間に、全クラスにおいて前日の全学学習会に参加しての感想文を書く。その内容については、各クラスで掌握するものとした。後日、部落研が全校の感想文を集め、整理する。

6月21日、部落研から学校長に対して、その整理された感想文から問題性のある文を抜粋した文書が示され、その差別性に対する取り組みが提起される。その間に、5月13日付、豊、豊浜両支部より前年度総括の提出方申し入れがあり、同じ15日、賤称語差別事件発生、17日、豊支部に報告、5月31日付で総括提出延期方を両支部に依頼する。

約束の6月末日になるも総括できず、校内での作業はあったものの、結局放置した形になる。その後も部落研から対応についての申し入れが数度ある。

10.31 狭山デーの取り組み

5.23 の総括に基づいて、部落研はより具体性のある取り組みを考え、映画「朝の空気は冷たい」の上映、狭山再審請求署名活動の二本を軸に、10月31日1年、11月1日2年、2日3年と学年別に映画を上映し、併せて学習資料を全員に提供し学習する事を訴える。それを受けて、各クラスとも感想文を全員が書き、また、東京高裁宛の再審請求を生徒会の名において教職員を含め全員署名の上送る。今回は映画が感想文の中心になったせいも、5.23の時ほどには露骨な拒否反応は表面化しなかったが、やはり同質のものを感ぜさせる。

11月15日、豊支部より豊町教育委員会主催の人権週間行事である児童生徒の人権標語募集に、豊高校から一編の応募もなかったという事実にもとづく提起があり、個人総括を中心に糾弾会を受けることになる。

第1回糾弾会、12月24日、第2回、1月17日。

1.28 狭山同盟休校

統一行動に参加した解奨生7名中5名。豊支部3名、豊浜支部2名。参加しなかった解奨生の理由、流感にかかり数日前より欠席中1名、支部より参加しないよう指導を受けた者1名、当日欠席する。

当日の行動

早朝7時より始業時まで、ゼッケンをつけて校門でビラ配布を行う。支部員も数名応援する。月曜日は全校朝礼日であるので、中庭に整列した全校生徒の前に突入者5名が並び、代表が壇上より当日配布したビラにある決意表明を読み上げる形で訴えを行う。これを受けて、校長が登壇し激励の言葉と全校生徒への呼びかけを行う中で下校する。

突入者はそれぞれ支部に帰り、終日学習会に参加。両支部に1名ずつ教員も参加する。当日放課後、30分学活において全クラスとも朝配布されたビラと自主教材とを中心に学習会を持つ。翌日以降の取り組みは次の通りである（別紙参照とあるが、別紙欠落）。

3年生は1.28をきっかけに、最後の部落問題学習を担当達がそれぞれ作成した自主教材をもとに金曜日まで毎日30分学活を使って展開した。2年生は、水曜日、LHRと30分学活を使い、自主教材と石川一雄氏獄中書簡「本当に私は殺しません」（狭山差別裁判66号）と10.31石川アピール（73号）を教材として使用した。1年生は翌日の30分学活と水曜日のLHRにおいてそれぞれ担任の自主教材を中心に展開した。

1月31日、2年2組において賤称語を落書きするという差別事件が起きる。そしてほぼ同一のメンバーが29日にも賤称語を使用していたことが判明する。当夜両支部に事件の概要報告を行う。2月19日(火)、第3回糾弾会の席上、学級総括を行う。

2 全体的な課題

初めに述べたように、本校における解放奨学生は、支部の指導によって今年度においても、少なくとも尾三地区の高校で言えば最も活動した解奨生たちである。狭山デーの全学学習会を組織し、その前面に立ち向かっていき、同盟休校も質的には100%突入可能な状況下にあった。

そうした主体的な力量を高めつつあるときに、その他の生徒の状況はどうであったかと言えば、端的に言って、また狭山か、いい加減にしてほしいという拒否的姿勢が次第に表面化してきているのである。そのことが示す問題点はいくつも上げることが可能であり、やはり背景として明らかにする必要もある。

しかし、この事実から、まずなによりも、本校においては、解放奨学生を支えていないことに、結果的になっていることを厳しく受け止めなければならない。そしてそれは、確実に、学校内において、彼らの持つ差別意識の妥当性を主張させる内容、即ち差別性が厳存していることを意味する。それには、依然として解消されない分校差別実態があるにしても、やはり中心は教師の持つ差別性である。そうは言うけれど、先生らはどうなんか、という対応を許さざるを得ない現実がある事である。この事をまず直視しなければならない。

次に、生徒が地域の差別性を露呈する形で表出した感想文、ならびに今回の賤称語差別事件の中で明らかになった、部落差別の日常性の問題である。賤称語が日常的に使われており、被差別部落出身者のいないところでは、そうした言動は差別にならないとする認識の問題である。そして、本校内でも、しばしば差別発言が飛び交っていることが予測される事である。しかも、それは、教師や解奨生のいる場では決して吐かないという訓練が徹底している事である。その事は、過去、解奨生の提起による差別事件が一件もないことから裏づけられているように思われる。

この差別性の解決は、ひとり本校だけで解決できる問題ではない。というのは、すでに、小・中学校時代にいつとはなしに植え付けられてきた差別性の問題であるからであり、同時に、基本的には、今日までの学校生活において、クラスにおいて分裂集団でしかなかったことになるからである。2月4日に、支部の指摘を受ける形ではあったが、この地域の幼・小・中・高一貫教育態勢づくりをめざす豊高校区教育推進協議会に、5.23、10.31の感想文の抜粋した文書に趣意書を添付して全会員にわたる部数を持って提起してある。

そうした取り組みを、学校教育のみならず社会教育の分野にまでも総合的に、しかも地道に進めていかなければならないが、これにはなお多くの日数を掛けなければならないであろう。しかし、その日まで待つという性質のものではない。今のまま生徒を社会へ送り出すことは、差別者を送り出すことになるからである。その差別性の克服を目指した取り組みを、教師の差別性を克服しながら推し進めていくための基本的な方向性を明らかにする必要がある。それは、やはり一人ひとりの生徒の課題を明らかにすることから始めなければならないと考えている。それぞれの生徒の生育歴

は、当然のことながら、かなり大きな差異がある。そのすべてを捉えきけることはもちろん不可能なことであろうが、今、私たちが緊急に要請されている部落解放の視点で、可能な限り生徒を捉え直す事である。

これまでの集団づくりが、生徒の差別性の上に築かれた、まさに見せかけの集団でしかなかったことが明らかになった以上、その根底に着目しなければ、解放集団には到底なり得ないはずであるからである。その逆の考え方、つまり集団づくりという規制の中で変革を図るという方向もあるかもしれないが、今日の状況に対応しきれるとは思えない。そうした観点に立って、生徒を捉えようとするならば、必然的にその生育歴の背景である地域の実態を捉えなければならない。そしてその把握された実態をベースに一人ひとりの生徒の部落解放への課題を明らかにする。

その課題を中心に、最終的には集団の基盤を広げることが目標に、個別のあるいはグループの指導を継続するという方向性が考えられる。具体的にはそこから取り組みを始めなければならない。

3 解放奨学生への取り組み

まず第1に、5.23ではついに1人だけ訴える側に回らないでおり、1.28では支部から不参加の指導を受けたLに対する取り組みである。

現在、支部支部解奨生による取り組みが行われており、そこと連動する形の取り組みを考えている。現在のLの課題は、自分自身の持つ問題性に自らが気付くことである。そして、現在はそうした自己総括から逃れようとする意識が働いていると考えられる。現実には、一人ひとりの教師に対して対応を変えている。つまり、しなくていい口実を探している側面がある。その事は教師がしっかり押さえておかなければならない。Lは来年度、ただ一人の3年生であり、本人の解放の課題もさることながら部落研においてもリーダーシップをとらなければならない立場にあるだけに、できるだけ早い時期の立ち直りを期待しなければならない。

初めに述べたように、本校の部落研は、運動側の指導におんぶされた形でこれまで進んできた。それでも一定のリーダーシップが取れる解奨生がいたが、来年度の状況を現在の解奨生の状況から考えてみる時、教師の側の強力な援助が必要であることが予測される。もはや運動側に依存する形では許されない事態に陥っていると言えると同時に、やはり学校の主体での欠落を克服しなければならない。運動側との密接な連携の上に部落研と部落研の中核に位置づくべき解奨生への取り組みを軸にした推進態勢の確立を図らねばならない。

当面、具体的には、部落研部員に新しい息吹を吹き込むための刺激として活動家の活動報告や老人たちの生きざまを聞く会を教職員と共に持つ事から始めたいと考えている。

4 むすび

既に報告している内容との重複を避けるように、1.28 狭山同盟休校をめぐる総括をした。現在進行中の学校総括において、この総括が明確に位置づけられるよう、各クラス総括との関連で押さえてみることで、より具体的な課題を明らかにしていきたい。

資料 28 部落問題の正しい理解を目指す取り組みの提案

部落問題の正しい理解を示す取り組みの提案

—豊高校の提起を受けて—

1980年3月18日

広島県豊高校区教育推進協議会事務局

1. はじめに

去る3月13日に開催されました豊高校区推進協の第15回協議会において、2月4日の第14回協議会の席上で、推進協全会員に向けて豊高校から提案のあった「豊高校における差別事象に関わる提起」をどのように具体的な取り組みへつないでいくのかが協議されました。そして、その内容を文書にし、全会員に提起することが決定しました。その提案は次の通りです。

2. 提案の背景

2月4日付の豊高校提起の内容は、昨年5月22日、10月31日狭山事件全学学習会において、その事後の感想文に表出した差別性は、最大の要因は豊高校の差別体質によるものであるが、彼らの背景として、地域の差別性と、これまでの教育における差別性がうかがえるので、明確に同和教育運動の一環である推進協において考えてもらいたいという提起でありました。

つまり、差別性を露呈させた生徒たちは、これまでの作文の中では、教師の意図に迎合した白々さはあるとしても、とにかく問題を感じさせる文章を書かないできたのであり、いわゆる本音を吐かないできたこととなります。そしてその積み重ねが遂に爆発した姿であるという事となります。

また、今年度豊高校において二つの差別事件が起きています。

その一つは5月15日（火）に2年生のクラスで授業中起きています。その時間生徒が騒がしかったので、担当教員がその指導のために授業を中断し、教師の主観的意図としては、そうした学習意欲のなさが結局権力支配に乗ぜられることだという話をして、「権力」と板書したところ、その権力という言葉との連想の中で、平民とか口々に色々なことを言い始めた時、そのさまざまな声の中に「エタ」という賤称語が出たことを耳にしたのでした。

この事件は、残念ながら発言者が誰であったかが確認できずに終わってしまいました。しかし、この事件は極めて重大な提起をしています。それは、この賤称語はこの地域において歴史的に見ても一度も用いられていない言葉であるという事です。すなわち、この言葉を覚えたのは、学校教育の中の、部落問題の学習においてであるという公算が極めて高いからであります。教師の主観的意図を越えて、賤称語が独り歩きしている、この事実こそが教育内容において克服しなければならない問題を提起しています。

第2の差別事件は、今年1月31日（木）、授業開始直後に同じ2年の教室で起きています。教室に入った担当教員が、教卓を取り囲んでいる生徒がいるのでその中を覗いてみると、ボールペン原紙に大きく「ちゃせんぼ」と書いてあるのを見つけます。ちょうど一人の生徒がそれを修正液で消していました。

その日の放課後、事実確認が終了した段階で、1月29日にほぼ同一メンバーによって方言の話の延長線として「ちゃせんぼ」と「四つ」という言葉を知っているかと尋ねる形で差別発言があったことが判明します。ボールペン原紙に書いた生徒、差別発言をした生徒はいずれも豊島出身の生徒ですが、他地区出身生徒もその中にいて、しかもその賤称語をすでに知っていることが分かりました。

以下、事実確認の結果はっきりした事実の概略を述べます。

豊島出身生徒はいずれもこれら賤称語は中学校の頃にはすでに知っており、日常会話の中で、一つの軽い冗談として使ってきたこと、そして決して被差別部落出身者のいる場では言うてはならないとする訓練が行き届いていることが出てきました。その上、基本的確認として、賤称語は被差別部落民の前で発言しなければ差別にならないと捉えている。また、高校入学後、その賤称語を知った他地区出身生徒の場合、自分に向けて言われた意味が分からない、そこで尋ねたが教えてくれないので豊島出身の女生徒に尋ね回ったが誰一人として教えてくれなかった。そこでますます疑問が増したので、また発言者に尋ねると、同一クラスの解奨生の名前をあげ、そのような人を指すのだと言ったので知ったという事であった。

これが事実確認の概要であるが、いずれの場合も、そうした対応の中で、そうした行為自体が差別であるという捉えはないのである。つまり、問題にならないようにすれば良いのだという点では、どの地域でも同じであるという事である。このように、日常的に部落解放の視点からは負の働きかけがなされているという事実であります。そして、それぞれの地域で、その潜航の仕方は違った特徴を持ちながら、圧倒的な負の情報量が注入されています。それに対処し、部落の完全解放が己の生活課題と関わって自己課題となり得る子どもを育成するために、今私達は何から始めなければならぬかを考えて見なければなりません。

以上のような、私たちの主観的意図を越えた事実が存在する限り、これまでの指導内容を、ひとまず全面的に否定する立場からの再構築が前提にならなければなりません。一口に言って、私たちは建前だけで教育をしていたと、結果的には考えなければならぬと思います。地域の差別性をそのまま温存した上での仲間づくりなどは、まさに砂上の楼閣以外の何物でもないのです。

3. 何が最大の欠点か

上述の提案の背景でお判りいただいたように、結論としては、私たちの取り組みが建前で走ってしまったと考えざるを得ません。なぜ、そうなってしまったかを、私たちは明らかにする責務があります。もちろん、その要因は行政差別を核に、さまざまな問題があることも事実であります。しかし、学校の主体である児童・生徒を中心に、それを支える教師集団の位置に私たちがいると考えるとき、厳しく私たちの主体の問題として考えなければなりません。

その考える鍵は、幸せなことに解放運動が私たちに示し続けてくれていますし、それは同和教育運動の原点ともいえるべきものであります。つまり、子どもたちの上に現象している諸問題を、その一人一人の子どもがそうした問題を抱えさせられてきた、その背景となっている根源の部分で捉えなければ、その解決の方途はありえないという指摘であります。即ち、「被差別部落の差別の現象に

学ぶ」という事です。同和教育運動は、この基盤を抜きにして考えることはできません。

また、部落の完全解放を期するという事は、一人被差別部落のみの完全解放を期するという意味ではないの言うまでもありません。今日なお、部落差別が温存されている現象と、その差別構造をいくらかでも知っている者にとっては、きわめて当然の事であります。被差別部落をとりまく被差別状況が、部落解放の視点で見つめるとき、また当然の事として見えてくるはずであります。それが見えていて、しかも目をつぶって走っている者は、少なくとも私たちの位置ではないと信じています。それならば、どこに最大の克服点があるかは、自ずと明らかになってくると思います。

4. 部落解放の視点に立って地域の実態を明らかにしよう

前述の方向で考えてみたとき、私たちは差別実態に学ぶことが極めて弱かったことに気づかざるを得ません。そして、それは被差別部落の差別実態に学ぶことだけでなく、それぞれの学校に通学している児童・生徒を取り巻く地域の実態において同じではないかと思えます。

島である事自体がすでに被差別状況下におかれているという現実の中で、先に述べたような分裂状況が生じ、不断に差別意識が吹き込まれている事実の上に立たない取り組みであっては、今日までと同じことを繰り返していくこととなります。そして、これまで扱ってきた人権教材にしても、地域の実態からかけ離れたところで進めていたのではないかと反省せざるを得ません。また、広く一般的にある傾向として、うちの学校には被差別部落出身生徒がいないので、差別の現実を学ぶこともできないし、取り組みもできない、果ては、だからしなくていいといった考え方があります。中には公然と口にする者もいます。私たちの学校で、あるいはクラスで、そうした傾向がないとは言い切れない現実もあると思えます。

そこで、ともかくも、各自の学校に通学する児童・生徒をとりまく地域の実態を、表題のごとく「部落解放の視点」で捉えてみることを推進協として全会員に提案します。言うまでもなく、どこまでやったらいいかといった問題ではありません。今、私たちがどう捉えているかを出し合い、各学校でまとめる作業を始めていただきたいのです。また、地域の実態を明らかにしようという事は、その否定的側面、即ち差別性だけをむき出しにすることでもありません。肯定的側面も充分つかみ出して下さい。なぜなら、その肯定的側面こそが否定的側面克服の糸口を示しているからです。そうして各学校でまとめた実態を出し合います。すると、幼・小・中・高の三つの実態像が各地区ごとに重ね合わされることとなります。その中で、より地域の実態が明確になることと、幼・小・中・高のそれぞれの発達段階がつかめるという予想も立ちます。

それでもなお不十分であることも予想されますが、その場合は一定の解放の視点を持った地域の方々の協力を仰げばいいと考えています。その中心は言うまでもなく部落解放同盟の各支部であります。そうしてでき上がった地域実態と眼前の子どもたちを見据えたとき、決定的な必然性を持って自主教材編成という方向が見通せると思います。

5. むすび

本提案は、今私達が現実を踏まえて具体的に取り組みを開始するための手掛かりとしては、この

方向しかないのではないかと考えてしたものです。ほかにより優れた提案があれば、それもどんどん出していただきたいと思います。そうした視点で本提案の検討を要請します。

なお、本提案では細かい内容には触れないで、大筋だけを示しています。それは、本来的に決められてことを決められてようにやるという受動的なものではないからであります。自己課題とするためには、自己の位置で自由に記述した内容を出し合ってもらうことが大切だと考えているからです。そして、その方がより広範に核心が突けることになると考えるからであり、私たちの解放の視点を鍛えることになるからです。

また、本提案では、各自でいつまでに作業を終え、学校で何日までという期日の設定もされておられません。これは、この作業がまず何よりも学校の主体において行われなければならないからであります。その意味で、各学校において決定していただきたいと思います。この作業の中身は、全体でまとめられてからそれから活用するといった性質のものではなく、学校での日常活動と連動しなければならないはずのものです。また、新年度人事異動によって新しく着任する人たちも当然予想されます。その人たちとも早く共有された内容にならなければなりません。そのように考えると、いささか拙速であっても早急な取り組みが要請されると思います。

以上、かなり荒っぽい提案になりましたが、各会員の取り組みを要請します。

4 1980年度の豊高校区教育推進協議会の活動

資料 29 推進協第 16 回協議会

各学校長殿

1980年4月23日

広島県豊高校区教育推進協議会

推進協 第 16 回協議会ご案内

新年度になり、教育推進上の計画等ご多忙の事と存じ上げます。

さて、今年度第 1 回の協議会を下記のとおり開催いたしますので、必ず御出席下さいませよう、ご案内申し上げます。

記

1. 日 時 1980年4月28日(月) 13時30分～
2. 場 所 豊高校 校長室
3. 議 事 (イ) 80年度役員決定
(ロ) 80年度行事計画決定
(ハ) 県へき連研究大会の件
(ニ) 会計に関わる件
(ホ) その他
4. その他 当日、今年度各校の会員名簿を持参ください。

別記 今年度、初会合ですので、会費持ち寄りによる懇親会を終了後持ちたいと思いますので、そのおつもりでお出で下さい。

80年度日程

総会

豊幼稚園研究会	6月11日(水)
県へき連公開3校(プレ)	6月初旬
豊中・豊高校合同研	6月下旬
県へき連研究大会	10月22日
久比小研究会	11月中・下旬
豊島中。豊浜中合同研	11月13日
豊小研究会	2月

【資料として「第 20 回広島県へき地教育研究大会助成申請資料」が付いている】

資料 30 1980 年度総会資料

1980 年度広島県豊高校区教育推進協議会 総会資料

1980 年 5 月 29 日 (木) 於、広島県立豊高等学校

総会行事

1. 代表幹事挨拶
2. 来賓挨拶
3. 基礎提案

第一次調査研究会

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 第 1 分科会・・・幼稚園・小学校低学年 | 第 4 分科会・・・中学校・高校文科系 |
| 第 2 分科会・・・小学校中学年 | 第 5 分科会・・・中学校・高校理科系 |
| 第 3 分科会・・・小学校高学年 | |

豊高校区教育推進協議会会員名簿【138 名の氏名と所属リスト掲載】

1980 年度基調提案

広島県豊高校区教育推進協議会が「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を研究主題に、その具体化の第一段階にある<幼・小・中・高一貫教育態勢づくり>を標榜して、78 年度発足し第 3 年目を迎えました。第 13 回全国バズ学習研究集会の開催をスタートにした本推進協は、豊・豊浜両町並びに両町教育委員会の全面的なバックアップにより、具体的な活動を展開してまいりました。昨年度から公開研究会の各校持ち回り開催、教育課題を科学的に把握し具体的な諸活動を展開するための実態調査が一応 5 ヶ年の計画の下に実施され、これらも第 2 年目を迎えています。第 1 次調査研究報告書も完成し、各校での学習会も終わり、昨日は塩田先生においていただき実態調査研究委員会を終日持ち、各校の学習内容の集約と学習を深め本日の総会を迎えております。

本総会は、せっかく全会員が一堂に会しながら、単なる総会行事に終わらせてはならないという考え方から、ご案内のように実質的な研究会となるように、本日の日程が作られています。したがって、本提案の後、本日の具体的な作業について、実態調査研究委員会より提起がありますので、本提案では触れないことに致します。、そこで、本提案では基本的な課題の再確認だけを簡単におきたいと思えます。

豊高校区推進協は、同和教育とバズ学習の統合を図る

本推進協は、明確に同和教育の一環として、地域の児童・生徒の進路保障を目指す、両町の同和教育推進組織と、同じく一環として分校問題解決を軸に戦いを進めた豊高との 3 者が、バズ学習の歴史的な取り組みを一つの基盤にして結合した教育推進体であります。したがって、教育実践とその実践を理論化し、体系化しながら、教育推進を行うことを基調にしています。

つまり、教育の科学化を目指し実践者と研究者が連携しながら進めるところに特色があります。

自主編成を目指して、地域の実態を！

豊高校の差別事件を通じて露呈した、地域の克服すべき課題、学校の克服すべき課題に具体的に取り組むために、実態調査結果と連動させながら、子どもを通して地域の実態を明らかにすること

が提起されました。今年度、部落解放をめざす、地域の実態に根差した教材の自主編成を見通した取り組みが始められることになりました。もちろん、短時日に完成される内容ではありません。しかし、その方向へ向けての日程を明らかにしなければならないと考えています。近日中に協議会の議を経て具体的な提案が行われる予定になっています。しかし、子どもに限りなく迫っていく営みこそが教育であり限り、推進協云々は抜きにしても、私たちの責務であるにとらえなければならないと思います。

子どもを見つめ、子どもと共に進む日常を創造しましょう。

第20回広島県へき地教育研究会を成功させよう

来る10月22日(木)(研究会第2日)の会場は、本推進協が現地実行委員会を引き受け、共催団体となっています。会場校は、大浜小(斎小を含む)、沖友小、豊中の3校が授業研究を行い、午後の全体会は豊小と4校に絞られておりますが、あくまでも推進協全体のレベルアップを図るための行事であります。従って、会場校4校に、各1校ずつ応援校を配置し、一体となつての取り組みを計画しています。へき地であることが教育上の阻害条件にならない中身の創造は、私たちの当面する重要課題であることは言うまでもありません。研究会を成功させるという事は、研究会そのものを言うのではなくて、私たちの日常生活の成功であると捉えたいと思います。

子どもたちに協同を呼びかける私たち自身の協同を結実させましょう。

私たちの推進協にしよう

本推進協が結成される経過の中で、会員に天下り式の押し付け組織であるかのような印象を与えたことは事実であり、合宿研修会でも多くの発言がありました。それから2年、未だにその印象は払拭できないのが率直に言って現状であると思います。しかし、本推進協は、私たちの自主的な組織であり、今年からは月額100円にしる会費を自弁している組織です。両町の財政援助も、両町当局から一度も注文を付けられたことはありません。もちろん、私たちのギリギリの所での予算申請であるということもありますが、それよりも私たちの具体的な実績を評価していただいたという事であり、その背景には、この地域の人々の熱い教育に対する願いがあるという事です。その事だけを考えても、本推進協は私たち自身の組織として責任が持たなければならないと思います。そのためには運営方法をはじめ多くの克服すべき課題があると思いますが、常に一方通行にならない配慮をしなければならないと同時に、会員の主体的な参加が、その前提となると思います。

まず何よりも、皆が仲間という連帯感に結ばれなければなりません。幼・小・中・高一貫教育態勢とは何か。私たちは結成当時から追求してきました。全国バズ学習研究集会では分科会まで設定して討議しました。しかし、現時点で明らかになっているのは、大前提である、一人の子どもは幼・小・中・高と一貫して成長するのだという事実から、まだ何歩も前に進んでいるとは言えないという事です。ここを見据えて、私たちの推進協です。

本日の課題(実態調査研究委員会)

- (1) 実態調査の意義と目的について
- (2) 実態調査の実施方法と信頼度について
- (3) 第1次実態調査報告書からどのような課題を引き出すか

資料 31 1980 年度の豊高校区での諸研究会案内概要

<第 20 回広島県へき地・小規模校教育研究大会開催案内>

(昭和 55 年 7 月 30 日付、広島県へき地教育研究連盟会長と研究大会実行委員長名での案内である。)

期日：昭和 55 年 10 月 21 日 (火)、22 日 (水)

会場：21 日は、三原市内 4 つの小学校と竹原市内の 3 つの小学校が会場となる。

22 日は、豊浜町立大浜小学校、斎小学校と豊町立沖友小学校、豊中学校で学習公開と研究協議会を開催。全体会を豊町立豊小学校で開催。

日程：22 日は、いずれも午前中に校内全学級の授業公開 1 時間とその後の研究協議の形で進める。昼食後全体会場に移動し、開会行事と経過報告最後に 75 分の講演を行う。演者は広島県教育委員会指導課長、高場昭次氏。演題は「へき地小規模校の教育課題」。

<昭和 55 年度 第 4 回視聴覚教育研究会>

昭和 55 年 12 月 15 日付、豊町教育長、豊田竹原小学校視聴覚教育研究会長、豊高校区教育推進協議会、豊小学校長の 4 者の連名での案内である。

期日：昭和 56 年 1 月 29 日

会場：豊町立豊小学校

主催：豊町教育委員会 豊田竹原小学校視聴覚教育研究会 豊高校区教育推進協議会 豊小学校
後援：尾道教育事務所 豊田竹原振興会

日程：午前中 2 コマの公開授業、昼食後協議会、全体会では経過報告と講演。16 時終了

公開授業：1 校時 3 年生 3 クラスで国語、算数、理科。

2 校時 5 年生 1 クラスで国語、6 年生 3 クラスで社会、算数、理科。

協議会：国語、社会、算数、理科の教科別分科会で進める。

経過報告：豊小教諭による報告 20 分。

講演：「やる気を育てる教育機器の活用」 講師 才能開発教育研究所研究部長 古藤泰弘氏

資料 32 80 年度秋季合同公開研究会

(1980年11月1日付、豊高校区教育推進協議会と久比小学校長の服部秀峰氏、豊高校長の新田正彦両氏名での案内である。)

期日：昭和55年11月20日(木) 豊高校会場

11月21日(金) 久比小学校会場

主催：広島県豊高校区教育推進協議会 豊田竹原小学校保健体育研究会
豊町立久比小学校 広島県立豊高等学校

後援：豊町教育委員会 豊浜町教育委員会 豊田竹原振興会 久比小学校 PTA 豊高校 PTA

講師：名古屋大学名誉教授・南山大学教授 塩田芳久先生

広島大学助教授(福山分校) 吉原博之先生

尾道教育事務所指導主事 花本次男先生

〃 中 正彦先生

研究主題と日程

<豊高校会場>

研究主題 バズ教育におけるユニット学習の研究—教材研究を中心に

今次研究会においては、学習計画における教材研究のあり方を考えることを主眼にしている。

日程 9:00～9:45 全体会 12:00～14:30 分科会

9:45～10:30 授業研究① 14:30～16:00 全体会(塩田先生講評)

10:40～11:25 授業研究②

授業内容 授業研究①：2-1 倫社、2-2 英語

授業研究②：A 被服、B 計算事務、C 世界史

<久比小会場>

研究主題 体育 「からだをきたえるたくましいこども」

十分運動を行い、柔軟度を高め、筋力・持久力・調整力のバランスのとれた体を育てる。

音楽 「美しさに感動できる子供」

正しい発声法を身に付け、歌唱力を高め、素直に表現する心情を育てる。

日程 詳細は変更があり原案削除、未定

【公開授業2時間と体育、音楽に分かれた研究協議、さらに実技研修を行う予定】

資料 33 豊高校の授業研究レポート

(高校課題別研修会レポート)

自主・協同・創造を目指す学習集団づくり—ユニット学習の取り組み

1980年8月26日

はじめに（自己紹介に代えて）

私はいくらかの組合活動などを通じて、被差別な状況下におかれている分校定時制などに対し、一定の理解があるかのように思いあがり、いささかヒロイックに郷里の大崎下島分校に帰って来ました。

しかし、現実の下島分校は学校ではなかった。まさに差別実態そのものでありました。私は自分の思い上がりを恥じ、いくらかでも自己のできる何かを創ろうと心に決めてから、早くも15年目を迎えています。

'69年度当初に起こった第一次下島分校賤称語差別事件をきっかけに、県境の島にも部落解放運動がおこり、その運動に参加させてもらう中で、初めて差別に立ち向かう闘いの道筋をつかみ、何よりも私自身の主体性を確立することが最大の武器であることを知りました。

下島地区での教育内容を中心とした闘いは、やがて尾三地区高校分校部を生み、分校差別の解消に向かって運動を展開していきました。当初の目的の一つであった独立校化を尾三地区6分校全校が勝ちとり、'78年度末解散しました（大和高校のみ今春独立）。また、私どもの下島分校においては、独立校化に照準を合わせながら、島であるがゆえに教育疎外を受けてきた地域における高校教育のあり方を、地域の将来展望とともに模索してきました。いわゆる地域高校構想です。そうした中で、'79年度豊高校として独立校化を果たすと同時に、その学区ともいべき地元2町、豊、豊浜両町に所在する幼・小・中・高9校5園の全教職員が結集して、広島県豊高校区教育推進協議会を結成しました。

<地域の教育課題をふまえた教育内容の創造>をテーマに、教育課題を科学的に明らかにするための実態調査も、すでに第3次調査を終了し、報告書の編集に入っています。

こうした一連の闘いの中で、私たちは一貫して授業改善を中心に据えてきたつもりです。それは次のような経緯を持っていたからです。

差別され、切り捨てられ続け、やっとたどり着いた分校。その学校の目に余る差別実態、それに照応して形づくられた地域の分校に対する抜きたい差別意識。もちろん分校の教師も例外ではない。そのような状況下に放り出された生徒が荒れずにはおれません。「命の危険を感じずる」などとオーバーなことを言って、わずか20分程度で授業を打ち切って職員室に帰ってくる教員もいました。その中で、たっぷり50分授業をしてくる教師もいました。それもいわゆる睨みのきく経験のある教師ではなくて、若い女性教師もいました。

気づいてみれば簡単なことです。その授業は生徒に分かるからです。ただ、その分かるという事が、実はやり方が分かるという事であったと知るのはずっと後でした。ここが私たちの出発点だったのです。

しかし、去年はうまく行ったと思った実践が、なぜか今年は通用しないといった堂々巡りが続いていました。最初は間断なく続く分校に対する差別人事、すなわち3年クールのごとき人事異動、後任は決まって新任という、まったく積み上げのできない状況に最大の原因があると考えていました。もちろん、この状況はいくらかの前進はあるものの、現在もあり、やはり大きな要因になっています。

そうした状況の中で、バズ学習の提唱者である、現在名古屋大学名誉教授塩田芳久先生との出会いがあり、先生のおっしゃる教育の科学化がいくら理解できるようになる中で、いわゆる経験主義に陥っていることを知り、整理できたことのレポートの一部であるのです。

基本的な前提

今回与えられているテーマが、「学業不振の生徒に対する教科指導のあり方」である。その学業不振という事に対しての私の捉え方を述べておきたい。

学業不振とは

今日の段階では、学業不振ということばの科学的概念は次のようになろう。学業不振とは、何らかの原因によって、その本人の持てる能力を学習過程に十分反映することができず、学力がその本人の知能水準から当然期待される水準を大幅に下回っているような場合をいう。

したがって、学業不振かどうかの診断は、標準化された知能検査と学力検査の成績を比較して求められる成就値や新成就指数で行う以外にない。また、学業不振も全教科に亘る場合と特定の教科の場合がある。

いわゆる学業不振とは

今日学校現場などで言われている学業不振は上述のような概念によって使われているのではなく、教師が自己の担当教科において要求している水準を大幅に下回っている生徒の事を言っているのではなかろうか。その意味で教師の恣意性が極めて強く、生徒の均一化を知らず知らずに求める結果となり、管理的発想を呼び起こし、選別、輪切り、果ては能力別編成などと差別教育へとつながる危険性が大きい。人間社会は自己の得意を生かし、互いに協同し合う事で成立しているはずであり、いわゆるできる子とできない子があっても、相互に助け合って行く態度こそめざすべきであろう。生徒観を基本的に変えていく必要があると思う。

学業不振の背景

学業不振を招来させた背景は、本人の心身の状態、取り巻く環境等多様であり、しかも通常いくつかの要因が絡み合っているのは言うまでもない。したがって、学業不振を克服させるためには、個別のその主要なつまずきの要因を明らかにし、その要因を取り除かなければならない。つまり、個別に対応することが基本になる。

そのためには、科学的な諸検査、教育相談等、総合的な検討を加え、その本人に対するより有効

な手立てを考えなければならないし、一朝一夕に成果が上がるものでもない。いわゆる事例研究の継続的な取り組みが要請される。すなわち、個を追う取り組みであるが、その有効な手立てとして、常に当人を取り巻く集団とのかかわりを留意しなければならない。

学業不振の背景としての授業

上述のような一般論において、次の要因の中で、正確なデータを持っているのではないが、教科指導そのものが要因になっている場合の占める割合が一番大きいと考えている。授業そのものが勉強嫌いを作っているのである。

その事では幾らでも例証があげられるし、逆に優れた授業者によって生徒が変わる事態を見てきている。ここでは、学業不振の主要な背景として、教科指導をはじめ学習活動があるという1点に絞りたい。それでなければ、一般論として学業不振の克服を目指す方策を論じることはできない。

I 私たちの教育の基本的な捉え方

1. 教育の基本目的は、教育基本法である。すなわち、民主教育の実現である。
2. この目標達成のために、今日最も緊急な課題は、被差別部落の完全解放を達成し得る教育内容の創造、即ち解放教育の確立である。
3. 解放教育とは、教育の場において過去から今日まで紛れもなく差別教育が行われてきたという事実の告発が起点である。従って、本質的には過去の教育の否定であると捉えている。
4. 人間の可能性をより良い方向に育成するのが教育であるにも関わらず、主観的にはともかく、教育の場において切り捨てが行われてきたという事実（現象）を本質に返して考えるとき、教育、とりわけ学校教育が競争の論理の上に成立していたのがその本質であると考えられている。
5. それは、今日の社会が競争の原理の上に成立していることと照応しているのであるが、それゆえに教育において、あるべき姿をめざす日常活動がより重要となる。
6. 人間が相互に尊重し合い、思想、信条などの相違は相違として認め合いながら、一定のコンセンサスに達して、社会が形成されていくという民主社会は協同の論理を基本としなければならない。
7. また、差別が分裂支配の道具として使われている事実は、逆に解放教育は団結によってその分裂支配をはね返す力を創り出すことにあることを意味している。
8. 従って、学校教育はその基本において徹底した「協同」の論理によって貫かなければならないと捉えている。
9. 私たちは、この基本的な点において、解放教育とバズ学習の一致点を見いだしており、その具体的な展開を、解放教育とバズ学習の統合を目指す取り組みと呼んでいる。

II 具体的な展開の基礎的な条件

1. 競争の論理で勝ち残った側に立っている、いわゆるエリート層に位置づいている教師自身

の差別的な体質の克服。

2. 教職員集団が共通の目標に向かって心理的に結合した、いわゆる心理的な集団になっているかどうかの点検。
3. 科学的な思考の訓練が絶えずされているかどうかの点検。
4. 端的に言って、教育の場においては、教師個人もしくは教師集団の実態の反映が生徒の実態であるという捉え方が常にできるかどうかである。
5. その捉え方がないところには教育課題は生まれない。

Ⅲ バズ学習の基本的な考え方

別冊「バズ学習とは—基本的な考え方」を参照してもらいたい。それは教育の科学化を志向しており、実践の理論化、また心理学的な実験の結果の実践化というように、研究者と実践者との相互交流による研究推進を基調としている。

Ⅳ 具体的な実践への背景としての、私たちの実態

1. 認知的な目標は教科指導において、競争と評定の論理によって行う。
2. 態度的な目標は生活指導、LHR 等特活で行い、その場では協同を訴える。(二律背反的であった)
3. 教科指導においては、生徒に対して見通しすら与えない、細切れ授業をしていた。
4. 当該授業の目標が達成されているかどうかを、きわめて主観的に分かっているはずであるとして済ませていた。つまり、効果度の測定が科学的になされていなかった。
5. 評価を評定と捉え、しかも中間・期末などのテストの成績で結局はランク付けをしていた。部分的にあった望ましい取り組みもここで壊していた。
6. 教育よりも管理に重点の置かれた教育活動であった。

Ⅴ バズ学習におけるユニット学習法

以上のような視点に立って、具体的な教科活動において単元単位に見通しを立て、その学習効果を測定しながら進めていく学習法を、私たちは「ユニット学習（単元見通し学習）」と呼んでいる。

(1) ユニット学習の視点

- イ. ユニット学習は、言うまでもなく認知的目標と態度的目標との同時達成を目指しているバズ学習である。
- ロ. ユニット学習の生命は、生徒の事態に対応して、体系的な目標の明確化と、その目標達成のために生徒が主体的に働ける課題提示にある。
- ハ. 全ての活動は、評価（確認）活動を伴う。
- ニ. ユニット学習の構成は、流れとして次のようになる。

導入	ブリテスト	その単元学習に必要な知識等をどの程度持っているかや、レディネス的な内容を含めたテストを行う。目標によっては提示課題そのものでもいい。
	学習課題	ブリテストの結果による指導案の修正も含めて、ユニットの課題全てを提示する。それに基づいて生徒に学習計画を立てさせることが望ましいが、当面こちらの計画を提示し、話し合わせる。
展開	学習活動	1 単位時間の流れは 課題提示→個人活動→班活動→全体→補足・修正・まとめ→個人確認 (情報交換) (教師)
最終	テスト	単元の目標が到達されているかどうかをテストする。 SP 分析を行い、通過率を見る。
	補充	ポストテストの SP 分析によって通過率の良くない課題があればその補充を行う。

- ・現状ではどうしても個別指導によらなければならない実態がある。それには個別に指導しなければならぬが、展開中、個人、班で活動を行っているときに、可能な限り個人指導を行う。

VI 学習指導案のモデル

可能な限り簡素化して、次のようなモデルを設定している。

○○指導案		指導者 _____			
1. 学年 年 組 男子 名 女子 名					
2. 単元 (単元名 必要に応じて単元設定の用紙など記入)					
3. 目標 認知目標 (1)					
(2)					
態度目標 (共有的、継続的、一般的な目標は別記し、特に強調すべき目標のみの記入でいいがしばしば一般的な目標が欠落するので、その観察も行いたい)					
4. 学習計画 時間 期間 月 日～ 月 日					
時間	課題	活動		評価方法	修正事項
		生徒	教師		
1 時 間 ご と に 区 切 る	ブリテスト 課題 (1) 課題 (2) ・ ・ (認知目標と照応し て見出し程度で良 い。) ポストテスト	生徒の学習活動を 予想に基づき記入	教師の援助活動を予 想に基づき記入	確認作業の方法 等を記号などによ って記入。	ブリテストある いは展開途中に おいて計画の修 正があった場合 記入。 記録の公共化と 次年度のため に。
5. 提示課題 (課題を生徒に提示する形で記入) (相互点検のために)					
課題 (1) (ここは学習計画に記入したもの)					

1. 課題によってはテキストのページ数を示す。

2.

3.

(現実の学力格差を考え、誰もが消化することを目標にした基礎課題と、それを通過した者のための発展課題を可能な限り用意する。)

6. 修正内容

修正が行われた箇所（修正事項）の具体的な内容を事後に記入する。

○学習指導案の簡素化のために略号を決めている。

1) 学習活動に関わって（流れは→で）

S=個人で P=2人で（隣と） G=班で C=クラスで L=教師が T=課題 B=黒板に free=フリーに

2) 評価方法に関わって

D=机間巡視 H=挙手 Pre=プリテスト Post=ポストテスト st=小テスト mt=中テスト

name=指名 ch=点検 note=ノート提出 pub=発表 print=プリント提出 an=アンケート

SP=SP分析

○態度目標のチェックポイント（参加度等）

（まだ未完成である）

○班活動における基本的な留意点（協同を体得させるために）

1) 班活動においては、常に交代制を中心にした役割分担をさせる。

2) 班競争はさせない

一見競争という刺激によって活発に見えるが、その結果請負的になったり、いわゆるできない子が原因となるビリ班においてはその子に非難が集まる。そうした形の疎外を受けた生徒が多くいる実態があり、班活動自体を拒否する現実がある。

3) 話し合いのルールを、繰り返し指導する。

4) 班替えは原則的に定期的に行い、全員が常に違った組み合わせになるようにする。

5) 班活動は全体活動の補足手段である。

5 1981年度の豊高校区教育推進協議会の活動

資料34 1981年度総会案内

1981年5月17日

広島県豊高校区教育推進協議会 会員各位

広島県豊高校区教育推進協議会

代表幹事 山根 正

中岡 正男

新田 正彦

1981年度総会御案内（開催要項）

1978年度「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」をテーマに、幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを目指して結成された本推進協も4年目を迎えました。

豊・豊浜両町の深い御理解と御支援によって、実態調査による、より科学的な教育課題の抽出を軸に、やっと日常的な活動が定着してこようとしています。会員各位のご研鑽に敬意を表します。

さて、本年度総会を、例年通り全会員が集って下記のとおり開催することになりました。会員各位のご参加を要請致します。

1981年度推進協実践目標

<共に生きる集団づくりを> <教育活動の全域で言語認識を>

開催要項

日時 1981年6月1日（月） 13時40分～16時30分

会場 豊町立久比小学校体育館他

日程 13:10 13:40 14:20 14:30 16:30 16:40

受付	全体会	移動	分散会	司会者集約会議
----	-----	----	-----	---------

分散会構成 下記のとおり7分散会とする。実践目標に照らして全員どこの分散会でも討論が可能である。

【分散会構成は、「就学前部会」「小学校低学年部会」「同、中学年部会」「同、高学年部会」「中・高第1分散会」「同、第2分散会」「同、第3分散会」である。司会者名の記入もあり】

ねらい 本推進協の総会は、全会員一堂に会して当年度の活動を確認し合う事に目的がある。従って、いわゆる総会行事的な内容は可能な限り簡潔にし、実質的な学習会になるように運営されてきている。特に今年度は、別掲の通り実態調査研究委員会が昨年度実態調査結果から研究し集約した実践目標の具体化の起点という位置づけにしている。

29日までに、各校において、実践目標に対する具体的な実践案を作成し、分散会において相互に交流し合い、共通して実践に移せるように討議を深めることをねらいにしている。

<総会資料>

目次

日程ならびに分散会会場案内

豊高校区教育推進協議会会員名簿

基調提案

1980年度決算報告

実践目標の各校具体案

斎小学校／大浜小学校／沖友小学校／豊島小学校／久比小学校／豊小学校／豊浜中学校
豊中学校／豊高等学校

日程ならびに分散会会場案内

【前頁の案内と同様の日程。会場案内については略】

豊高校区教育推進協議会会員名簿

【136名の会員名簿掲載。氏名、所属略】

1981年度教育活動の方向

はじめに

1978年4月、1年間の準備期間を経て、「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」をテーマに、豊・豊浜両町に所在する幼・小・中・高、9校5園の全教職員が結集して、広島県豊高校区教育推進協議会が結成されました。地域に根付いた教育活動を推進する態勢を創るために、「幼・小・中・高一貫教育態勢づくり」を当面の目標としてスタート致しました。

全国的にもあまり類例のない、この教育運動がこの地に誕生した背景は、言うまでもなく、被差別部落の完全解放を期する教育内容の創造を基盤とする同和教育運動の日常的実践でありました。また、教育疎外に呻吟してきた地域の100年の願いの結実でもありました。

一方、豊浜中をこの地の発祥とするバズ学習の実践も、すでにこの地で15年の歴史を持つに至りました。バズ学習の生みの親である塩田芳久先生のご指導を一貫して仰ぎ、徹底した協同の論理の中で、教育の科学化を推し進めようとしてきました。塩田先生の学問的御研究に裏打ちされた実践理論に対して、あまりにも私たちの実践は未熟ですが、その理論体系によって私たちは大きな展望を持つ事ができました。

私たちを実践の場でより強く結び付けてくれたのは、やはりバズ学習でありました。その事実を、私たちは「同和教育とバズ学習の統合を目指す」と表現してまいりました。同和教育も、バズ学習も、私たちの中で統合され、より深められ、児童・生徒の進路保障へつなげていくことをはじめに確認したいと思います。

80年度の活動

80年度、推進協が主催もしくは共催した行事と会合を日付順に列記すると次のようになります。

4月28日	第16回推進協議会	10月6日	第19回推進協議会
5月1日	下島地区国語部会	〃	第7回実態調査研究委員会
8日	第3回実態調査研究委員会	10月21日	第20回広島県へき地小規模校教育研究大会 第2日目会場
12日	第20回へき地小規模校研究大会実行委員会	22日	
15日	第17回推進協議会	11月6日	第15回全国バズ学習研究集会参加 滋賀県五個荘町立五個荘小
28日	第4回実態調査研究委員会	7日	
29日	80年度推進協総会	13日	豊島小公開研究会
6月11日	豊幼稚園公開研究会	18日	県へき地研究大会会場校反省会
19日	合同公開研究会(沖友小・大浜小)	20日	合同公開研究会 (豊高校・久比小)
23日	合同公開研究会	21日	
24日	(豊高校・豊中)	27日	
30日	第18回推進協議会	12月4日	第8回実態調査研究委員会
7月15日	推進協・同教小委員会	16日	第21回推進協議会
16日	第5回実態調査研究委員会	1月8日	豊・豊浜両町予算申請説明会
8月28日	第6回全員学習会	13日	第9回実態調査研究委員会
9月3日	第6回実態調査研究委員会	29日	豊小公開研究会
30日	第20回県へき地小規模校研究大会実行委員会		

この表を見ていただくだけでもご理解いただけると思いますが、80年度、つまり結成3年目にして、推進協の活動が日常的な実践と結合してまいりました。そしてその中心は言うまでもなく、実態調査に基づく教育課題の明確化と、その具体的実践を創造することでありました。したがって、その研究と実践を推進するための中核組織として、前年度末に推進協に設置された実態調査研究委員会が活動の中心でありました。前後7回の委員会を開催し、実態調査結果の分析と課題抽出、そして各現場での討議、その持ち寄りによる研究討議と、実に精力的な活動をしてもらいました。

その結果、標記の81年度実践目標が導き出され、第22回推進協議会において、各校共通の実践目標が決定され、今年度を迎えたのでありました。ただ、第二次実態調査報告書が年度内に出せませんでした。これは、第一次調査はスタートにおける基礎データではありますが、それから1年を経過した時点での第2次調査は現実には向上の方向を示していますが、その分析に必要なデータ、即ちどのような目標を設定し、その目標達成のためにどのような実践がなされたかが明らかでなければなりません。しかし、私たちがその段階に達していないため、第1時報告書と同じようになるからでありました。

従って、今年度実施された第3次調査と併せ、可能な限り実践記録を入れ、2学期には報告書を完成する予定にしています。その意味では1年遅れになっている状況を克服する必要があります。

一方、日常生活と直結した授業研究が定着し、各校共年1回以上の公開研究会の開催が定例化されました。日常的な授業研究とその実践の確かさを点検する公開研究会の開催とは、いわばセットであることの確認であったと思います。

その中でも、80年度の中心は、第20回広島県へき地小規模校教育研究大会、第2日会場並びに

全体会場を引き受け、推進協が現地実行委員会を組織し、大会を成功裏に終わらせたことは特筆すべきことであると思います。この大会の成功もさることながら、学習公開校3校、全体会場校の4校に対して、他の学校は1校ずつ協力校として全面的な協力態勢を敷き、文字通り協同した取り組みが実現したことは、本推進協の推進態勢の前進を示すものとして、画期的な事でありました。こうした営みの一つずつ積み重ねていくことで一貫態勢づくりが着実に育っていくのでありましょう。

次に、第15回全国バズ学習研究集会へ、全国バズ学習研究会加盟組織として初めて組織的参加を果たしました。おそらく今日の学校教育のひとつのトップ水準を示すと考えられる五個荘小学校の実践に学び、全国の仲間との交流を図ってきました。そして、その報告書が作成され全会員に配布されたことも収穫でありました。

81 年度活動方針

今年度は先に述べたように、事態調査から導き出された実践目標を軸に活動が展開されることとなります。実践目標については、次項においていささか考察をしてみたいと思いますので、実践目標を軸に、どのような活動の方向が計画されているかについてのみ述べたいと思います。

[公開研究会]

80年度の活動の所で述べたように、本推進協活動は日常実践が中核であり、その実践の検証の場として公開研究会は重要な位置を占めています。今年度も年1回以上の公開研究会を開催することになっており、すでにその日程もほぼ決定しております。各校の主体性を十分に尊重しながら、可能な限り協同研究へと発展させていく方向性が確認されています。実践目標をふまえながら、共通するテーマの設定が課題となってきています。

[就学前教育部会]

今年度より、推進協内組織として、全幼稚園教員による就学前教育部会が設置されました。5園のうち3園はすでに1人の教員となり、複式の保育になっています。しかもその取り巻く環境は日増しに厳しいものになりつつあります。研修の機会も十分に得られない状況下にあるのですが、その困難性を克服し、一貫教育態勢の要としての就学前教育の充実を図るべく、継続的、系統的な研究が推進されることになりました。指導者には、美作大学、村上冽先生を常任講師としてお願いしています。

[領域別研究部会]

本推進協議会によって自主的な研究サークルが作られ、推進協の目標達成に寄与する研究活動が行われる場合、その実績に対して積極的に後援することが提起され、わずかですが予算化も致しました。すでに昨年度からその動きはあり、今年度具体的な活動が展開されようとしています。日程に上っているサークルに、小学校理科における基礎実験講座があります。実態調査における理科学力検査の分析を行う中で、実験にかかわる事項に落ち込みの傾向があるということが分かり、自分たちの反省を含めて、実験についての再学習をしようという事から始まりました。

このように、自主的な研究活動の活発化を期待すると同時に、その領域は教科別、問題別を問わず連携していただきたいと思います。また、両町学区同研の結合も課題となっています。

[第16回全国バズ学習研究集会]

第16回集会は来る11月13日、14日、兵庫県加西市北条小学校で開催されます。今年度は役員派遣だけでなく、各校代表1名の参加も予算化してあります。他地区との交流もまた大切な学習であります。

活力ある推進協活動を推進させるために、会員の相違を要請すると同時に、活動の方向性よりも柔軟な対応にすることが確認されています。推進協の活動方針が、会員を拘束するというのではなくて、会員の積極的な参加によって活用する組織であるにとらえていただきたいと思います。この活動は私たちのためにあることは言うまでもありませんが、その私たちを通して、結局子どもたちの所へ帰っていく営みであることを、常に念頭に置いた営みでありたいと思います。

常に、「私たちの」が頭についた推進協に、私たち自身が創り上げていこうではありませんか。

81 年度推進協実践目標に関わって

<共に生きる集団づくり>

<教育活動の全領域で言語認識を>

実態調査研究委員会が昨年度1年をかけて導き出した実践目標であり、その具体化のための実践案を各校が持ち寄り、本日これから研究討議されることになっています。

それに先立って、一つの試案を提示したいと思います。

上記2項の実践が出された背景は、いうまでもなく実態調査の結果から導き出されたのでありますが、それは現状において極めて不十分な状況にあるという認識があったからだと思います。今日の日本の教育を覆っている差別と選別の体制と、それによって惹き起こされている分裂状況から、私たちの地域も決して無縁ではないことを意味しています。子どもたちは競争の原理に駆り立てられ、民主主義の基盤である協同の論理の体得が極めて困難になってきていると言わねばなりません。しかし、これは子どもたちの世界だけに存在している現象であるのかという問いかけが必要ではないでしょうか。今日の社会においては、などと振りかぶるのではなくて、そのことを私たち自身の所で捉えてみたいと思います。

つまり、子どもたちに克服させなければならない課題について、私たち自身は克服しているのかどうかという事です。私たちが共に生きる教師集団になっているかという事です。活発な話し合いを子どもに要求する私たち自身は、教師集団として常に活発に話し合いがされているかどうかという問題です。私たちの姿の繁栄が、子どもたちに現象するという側面のあることは、誰も否定できない事実であろうと思います。

私たちができない事、あるいはできないが克服しようとしていない事を子どもたちに要求するとしたら、それは子どもたちを引き廻すだけの事になって、一番大切な主体を育てることにはならないのでしょうか。

いま、私たちが集団づくりの方向性として<共に生きる>と規定した、その共に生きるとは、いったいどんな内容を含んでいるのかを考えてみる必要があるように思います。また、その中身は私

たちの実践を通じて深まっていく性格のものであると思います。

しかし、その基調は、人間をまさに人間として認め合い、協同して課題解決を達成し、その成就感を共にする、そうした人間関係にあると思います。そして、それは子どもたちの人間関係云々の問題ではなく、人間の生き方そのものであると考えます。そのように考えていきますと、共に生きるというとき、その共にとは、子どもたちと私たちを含めた共にでなければなりません。私たちはややもすれば子どもたちと私たちとは別であるという考え方になる傾向があります。ここに、「ドルトンプランの教育」(パーカーズ著)の中から、教師の役割に関わる部分を引用してみます。

「学習は生徒自身が自分でするものであり、教師はその機会を与え、次第に発展していく彼らの道連れとなる事である。道連れになるためには、教師自身が絶えず発達していなければならない。なぜなら成長発達の根本の不足はあらゆる発達段階においても共通のものだからである。」

このような位置で、共に生きる集団づくりを考えてみたいものです。私たちがまさに人間である証として。

<推進協総会(6月1日)まとめの会報告>

1. 分散会報告

(1) 就学前部会

[決定事項]

- ・世話係 2名
- ・研修計画 大浜 6月5日、豊 7月10日、沖友 10月16日、豊島 11月20日
大浜 12月11日、久比 2月19日 or26日、豊 3月5日
講師 村上 冽

[豊幼の取り組み]

- ・乾布摩擦や駆け足を昨年からはじめて健康上良かったので、今年も続ける。
- ・基本的な生活習慣が集団からはみだしになりやすいので、その点に気をつける。
- ・返事や挨拶をはっきりとする。
- ・テレビや紙芝居を最後までしっかり聞く。
- ・先生や友達の話を終わりまで聞く。
- ・単語を並べるだけでなく、言葉を最後までしっかり言う。
- ・給食などの当番活動で、準備をしたり世話をしたりしていく。
- ・集団の中に入れない子ども(3歳児検診、就学前検診)には家族の協力が必要。

(2) 低学年部会

実践の中で困っている問題を出し合い話し合ってきた。

[話し方について]

発表の仕方についての指導の問題点

- ・型が先行し、それを教え込もうとすると中身が希薄になってしまったり、特に低学年の場合は、

反対の事を型で行ってしまう(?)ので、自分の気持ちとは反対の事を言ってしまう場合もあると思う。だから前提として、子どもの中身、本当の心情を分かってやる教師でないといけない。

[字が読めても内容が理解できない子の指導]

・身体を通し、具体的なものを通して教えている実践があった。身体を通して動作化、吹き出しによって書かせる、劇化させる、というような気持ちを素直に表現することにつながったり、物を動かしているうちに自分の気持ちが表現できることもあるのではないかな。

[発表させる]

・座ったままなら良い意見、ピカッと光ったものが出るが、指名されると発言しない子にどう指導するか。

・子どもが発言しない要因を探る必要がある。内気か怠惰か、発言しなくても平気な子への意欲づけが必要。

・おはじきを使った実践、発表する喜びを与えるなど、段階的に合った指導が要る。学級全体へは「何々です」「何々と思います」の発言方法を指導していても、子どもによっては名詞だけの発言であっていい直しの指導はせず、ほめてやるのが要るのではないかな。

各校の実践に関わる指導目標が決まっていたが、各校の研究主題と、実践目標(推進協)の結合の上での公開研究会であってほしい。そこまで討議できていない淋しさを感じる。

(3) 中学年部会

実践目標に沿い、全領域で言語認識を高めるための方法という事で、発信の仕方について何か共通したものが出せないかと話を進めた。しかし、学級の実態、教員の個性等で、統一したものを決めないほうがいいのではないかな、またきちっと決めてしまうとどの学校へ行っても同じようなカラーになってしまったり、また地を決めてしまうと意見を言いたくてもそれにこだわって意見を出しにくくなるんじゃないかなという意見が多く、自由に意見を出してもらった。

・言語認識では、自分の意見がはっきり言える子という事で「です」「ます」がはっきり言えること、大きな声で話せるとかいうことぐらいの事で良いのではという意見だった。

・集団づくりという事で、意見が出かかっていたが、具体的なものは出なかったのでまとめるところまでいかなかった。

その学校の実態、学級の実態に即して、今日の話をもとに自分たちに合ったものを取り入れて実践していこうという事で終わった。

(4) 高学年部会

全員発言を心がけ、14/15の発言があったのはよかった。

[言語認識について]

・各校いろいろなやり方があり、それでも良いが、統一したものが出せなかった。

・日記指導は、人数が少ない所は批評も書いてその日のうちに子どもに返せるが、児童の多い学校では家へ持ち返って仕事をしないと間に合わない。何とか簡単にチェックできる方法はないかとい

う話をしたが、よい方法はなかった。しかし、しんどいけど日記はよい方法なので継続しようという事になった。

- ・教科書の書写もよい方法として出た。半面マンネリになったり字が乱雑になる面もあるので、気を付ける必要がある。

- ・話す力、聞く力を付けようというので、朗読集会をやった学校もあった。これはよい方法なのでやっていないところもやろうという話になった。

- ・ほとんどの学校でやられているようだが、発表するときの形式を決めておいた方がよい。決めていないところは決めてやろう。

- ・漢字ドリル、計算ドリルを朝のドリルの時間にやっている。

[集団づくりについて]

- ・集団登校で集団づくりが養われる。ほとんどの学校で良い面が表れているが、ある学校では悪い面が出たのでやめたところもある。しかし、やってみようという事になった。

- ・縦割り集団を作って活動していこう。小さい学校は比較的取り組みやすい。大きい学校も工夫すればできる。登校時、休憩時間の集団活動などでも活用できる。集団づくりの面で大事だと思う。

[語尾をはっきり言わない子について]

語尾まではっきり言わせるよう、各校もやっている。現に効果が上がりつつあるが、全教員が一緒になってやらないと効果は上がらない。

(5) 中高 1分散会

- ・バズ学習ということについて、地域の人に聞かれて説明しきれない状況になっている。何とか意識統一できる場が必要ではないか。この事については、子どもたちに話し合いを指導し、バズ学習指導をしている教師集団がお互いに自分のやっていることを出し合い、バズ学習の中身をより深めていくことが基本ではないかの話が出た。

教師集団がバズ集団となって各職場の中で機会あるごとに実践している中身を出し合うことを確認した。

- ・語尾まではっきり言えない子が就学前、小学校と同様、中・高にもある。どこも同じ事を気にしながら解決できていない原因はどこにあるのだろうか。

- ・豊浜中の地域バズもあるわけだけど、教科の中だけでなく、生活の中でもバズを取り入れていくことが大切ではないか。

- ・話し合いのモデルづくりについて、小・中の協力を得ながら、発達段階に応じたものを考えていきたいということが高校の要望として出された。

- ・バズ学習の中で、課題を解決させていこうとした時、どうしても進度の事が気になる。教科書が半分も進まないことがある。内容の精選の必要性は分かっているが、実際にはできないため悩むことが多い。

(1) 中高 2分散会

各校で実践目標に関わって、どのようにして共通認識を持ってきたか、各校の取り組みの過程を出し合おうという事で始めたができず、不十分なまま話が進んだ。

[話すという事について]

・生徒が話し合いができないという事については「教師の教材の与え方はどうか」また、聞く方の集団「話せる土壌づくりはどうか」について話があり、特に話せる土壌づくりという事をもっと考えてみる必要があるのではないかの提案があった。

・休憩時間は友達同士でいくらでも話ができているが、いざ授業になると全然話ができない状態を子どもに作っている。

・中学でも、高校でも、1年生の早い時期に「話し合いのルール」「話す方法」を徹底させなければいけないのではないかと。

・地域の生徒を全教職員が、学校の枠を越えて指導していこう。現状は観察で終わっている面が多いのではないかと。

・掃除、朝礼など、生徒と一緒に行動の場面では、教員が率先してやっていこう。その場を集団づくりの場として考えていこう。教員が集団のリーダーの役割を果たしていく必要があるのではないかと。

(7) 中高 3分散会

・勢いが少ないために、断片的な発言が多く、そのため自分の思うことがなかなか出せない子が出た。しかし、これについては、語りが少なくても自分の考えはあるのではないかと。なかなか表に出せないのは、大きな集まりになると話せないのではないかとという事が出た。

・高校1年のアンケートでは、司会の経験をしていない子が多い。どんなふうにまとめていけばよいかわからない。こんなことを行ったら人に笑われるのではないかと、課題の意味が分からない、話し合う必要がなかった、後で先生がまとめるから一人で考えることが少なかった。このような生徒集団になると、やはりそんな考えになるのではないかとという事が出された。(話が少ないということでは逃げていないのではないかと、またなぜ少ないと決めているかに問題があるのではないかと)

・教員の指導力、体質、姿勢について考えるべきだ。

・課題の創出に関わって、1年生ではしゃべるが、2、3年は話し合いに参加しない、学習意欲に欠けるのではないかと。豊高校に行くから勉強しなくてはいけないという方向に持っていかななくてはならない。自分がやらなければいけないという考えにするにはどういう方法がよいかという事で話が出たが、結論は出なかった。

2. 討議

・クラスの中で話ができない子が、保健室で気軽に話をしている。子どもは皆の中に入らねばとか、皆と一緒に遊んでいきたいとか、話す努力をしていく気はあるとか言っているが、話せない原因として1年生のある授業の中でバカにされたことが今も引っかかっていると言っている。担任だけでなく、色々な意見をいろいろな角度から出していく事が、解決につながるのではないかと。

- ・高校で「話し合いができん子と話し合え」と言ってもほとんど反応がない。そこでアンケートをとってみると予想通り話し方を知らない。今まではおんぶにだっこみたいな格好でも話し合うような恰好だけは付いていた。何とか1学期のうちに話せるようにしようという目標を立てている。
- ・教師主導型になっている。時間を気にし、最後は教師が自ら答えを出して最後には教師がまとめてしまう。話し合いはしなくてもやっていける。そのことが話し合いをできなくさせている一つの原因ではないか。
- ・誰でも発表しなければならないという事で、ふいに当てるという方法は時には生徒の発表の意欲を削ぐこともある。
- ・教師がすべてとは言わないが、教師が話し合いをさせる部分を削いでいるところだけではなくしていく必要がある。教師が立ち合わない場では話しているが、教師が立ち合うと話し合いが途端にパタリと止まってしまう現象がある。
- ・1年は話す、2、3年は話さないという事について、ムード作りも必要ではないか。教師主導では行き詰まるし、子どもの発達段階も考える必要がある。子どもにも恥ずかしい時期がある。
- ・1年は話はするが、2、3年になると下手になる。高校になるとさらに話をしなくなる。話そうという気にならなくなる。そこに焦点を当てると、いわゆる課題の創造という、そこらに焦点を当てる必要がある。
- ・そのところは、厳密に発達段階に応じた形での課題が提示されている。階層化もひっくり返して考え、もし、1年の時に本当に話ができているのか、上になるにつれて話ができなくなるというなら本当に教員のワザだ。
- ・教員がしゃべりすぎる。豊小でデータをとってみたところ、先生が70%くらいしゃべっていた。これはいけんというので、1ヶ月で50%台まで減らそうとしたが、10%も減らない。先生がおしゃべりする分だけ話し合いは行わない。話し合いのルールは、話す人と聞く人が要ると言いながら、話す側にはいつも立たせていない。
- ・入試という目標がなくなった時に学習する理由がなくなる状況がある。勉強に結び付く課題をどう作り上げていくかが問題。
- ・教師の姿勢も大事だけど、例えば語尾まではっきり言えない子の指導を見たとき、学校だけでなく家庭の協力も必要だ。豊浜でも大長でも経済的には最悪の状況にある。むしろ単語だけ並べて済ませてくれた方が忙しい中ではよい。結果的には、人前で話のできない子を作っている。われわれの実践目標を作っても地域の人には知らない。バズ学習についての勉強も教師は必要だが地域に推進協の目標を知ってもらい協力を願ったらどうかと思う。教師の力だけでは困難。

資料 35 1981 年度総会での各校の作成資料

<斎小学校>

「斎小学校の教育」

昭和 54 年度

1. 児童について

過疎の中にあつて児童も減少の一途をたどり、本年度は第 6 学年男子 1 名、第 4 学年女子 1 名、計 2 名となる。児童の両親は共に長期出漁中で、年に数回帰島するのみである。共に乳児期は両親と都会に在り、幼児期は船で過ごし、学齢に達してからは近所に預けられる等した。今学年では、1 児は姉と、1 児は祖父母と生活し、通学している。こうした中で多くの教育課題をもって日々の教育に取り組んできた。

2. 学力づくり

研究教科 「算数」

研究主題 「学級実態に即応した学習指導の創造」

研究会 10 月 4 日 町同研算数部会 指導主事

変則複式の困難性の克服、自学、自習の力を付ける基礎指導のあり方、家庭学習の習慣化とその定着、これらは研究教科に限定するのではなく、毎日の生活の中で常に職員室の話題として研究実践を進めた。

3. 体力づくり

高学年児が指導して児童同士が運動したり遊んだりしている中に教師も参加させてもらうという事から始めて、始業前と放課後の体力づくりが定着していった。無医地区であることから、基本的な生活習慣と共に、健康安全の指導を考えた。

4. 集団づくり、その他

2 名の児童の間には問題はないが、広い社会性を育てるには何らかの手立てが必要であると思つても名案はなかった。広く社会経験を得させるため春秋の遠足は 1 泊 2 日で計画した。ニュースの視聴、読書を多くすることに努めた。

昭和 55 年度

1. 児童について

卒業生を送り本年度は児童数 1 名（第 5 学年女子）となり、単式学級となる。10 月 1 日より転入生 1 名（第 2 学年女子）あり。父親の転職に伴い町内小学校より転校した。これにより変則複式学級となる。転入生にとってこれは非常に大きな生活の変化であり、これに対応する指導の配慮が必要である。

2. 学力づくり

研究教科 「算数」

研究主題 「学級実態に即応した学習指導の創造」

研究会 2月5日 町同研算数部会 指導主事

研修の進め方については昨年と同様である。10月まで1対1の単式指導で、ともすれば教師に頼りがちな学習の仕方の克服に努めた。学習にも集団づくりのためにも、より大きな集団を経験させることが必要であるとの考えから、推進協を中心に関係校並びに地教委の御理解をいただき、週1回大浜小学校での1日の生活を送ることとなった。児童は大きな喜びの中でこれに参加していることを報告し感謝したい。

新入生は学年も低く学習の仕方についても戸惑いがあった。複式学習に対応して自学自習の仕方を学び取らせる指導に努めなければならない。朝会を利用して、朗読や掛け算、九九の発表をさせるなど、学習の定着化のための試みもした。

3. 体力づくり

初めのころ、児童が一人になったことから、体力づくりについては教師のリーダーシップが必要であった。このため教科等の時間の終了後体力づくりの時間として位置づけ、前半をサーキットトレーニング、後半を自由運動として体力づくりを図る。朝はテープを用意してラジオ体操と行進を朝会での毎日の行事とした。保健安全の指導についてはもちろんのこと、体力づくりのリーダーシップにも養護教諭の若さが大きな力となった。

4. 集団づくり、その他

児童数が最小限にまでなったことから、大浜小学校での学習を考えたことは先に述べた通りである。転入生は、多数の級友から離れて寂しいこともあるし、学習の仕方の相違による戸惑い、生活環境の変化は心理的な影響を与えたと思う。学校としては、児童対児童、教師対児童の触れ合い、結びつきがうまくいくよう努めた。幸い現在までの所問題なくうまくいっているようである。

昭和56年度

1. 児童について

卒業生、入学生共になく、在校生は2名（第6学年女子、第3学年女子）である。児童の生活環境に大きな変化はない。精神的には成長しているので、心理的にも微妙な変化がある。適切な指導を心がけなければならない。

2. 学力づくり

研究教科 「算数」

研究主題 「学級実態に即応した学習指導の創造—児童が主体的に取り組む学習指導の創造」

研修会 7月中旬 指導主事

研究会 2月上旬 町同研自然認識部会 指導主事

昨年度研究会で指導を受けたことの最も大きなものの一つに「個人思考に徹すること」を考慮してほしいという事があった。これは、中学、高校に進学してからも大きな力となる。普通の学級でも10分間位こうした時間が持てるようにするのが望ましいという事であった。こうしたことを可能にする基礎指導の在り方や学習過程の研究が今年の課題である。推進協での共通テーマとして「全領域での言語認識」「共に生きる集団づくり」の二つが挙げられた。読むことができなければ、自学

自習も成立しない、個人学習を支えるものはまず言語認識であるとの考えに立って努力していく。

本年度職員朝会をできるだけ切り詰め、児童朝会を長くすることにした。児童朝会では体操の後、月・お話（児童が自分のテーマで発表する）、火・大浜小学校での学習、水・朗読（教科書を練習してきて読む）、木・読書（この日は朝会をなくし登校したらすぐ図書室で本を読む）、金・音楽（練習してきた曲を笛で演奏する）、土・学級指導、とすることとした。高学年児は読書習慣がかなり定着しているので、中学年児に上手くつなげるよう指導したい。

3. 体力づくり

体力づくりがマンネリ化したり、やらされる体力づくりになりそうだと反省から、音楽テープの活用により楽しくできるように考えた。登り棒を新しくし、高く運動量を大きくした。15分をサーキットトレーニング方式、あと15分を自由運動としている。高学年児は近年体格的成長が著しく、体力が追い付かない傾向を心配している。こうしたことも理解させながら努力させたい。

4. 集団づくり、その他

体力づくりの他清掃作業などと共に汗を流すことは集団づくりに欠かせないものとする。鯉幟、七夕、凧揚げ、雛祭りなど、楽しい行事の他、毎週月曜日を奉仕活動の日と定め、学校や地域のためになる作業をすることを計画した。春秋の遠足は今年は春の遠足を大浜小学校と一緒に計画した。高学年児の修学旅行も大浜小学校と共にする計画である。

<大浜小学校>

「豊高校区実践目標の推進について」

1. 教育活動の全領域で言語認識を

教育活動の全領域で言語認識をという課題は、自然認識を、あるいは社会認識及び芸術認識を教育活動の中で育てなければ言語認識は養われないという事であり、その事自体は教育の営みそのものであると考える。言ってみれば、正しく読む力、書く力、見抜く力、考える力、理論づける力、聞き取る力、表現する力は教育の全てである。したがって、教育活動の全領域で言語認識をという課題は、言語認識がそれのみで独立して育成されたり、深化されたりするものではない。全ての事に対して科学的認識が深まる中で、その事が保障されるものである。

仮に、ここで、言語認識を技術的にいかに高めるかの問題を考えると、例えば、全教科の中に話し合い活動を取り入れるとか、書くことを取り入れるとかは決して教育の本質に迫るものではないし、言語認識は高まるものではない。このような意味から、本校では各教科の目標を焦点化し、科学的認識にどう迫るかを模索していきたい。

○国語科

読むことを通して表現力を高める。読むことは人生を間接経験することであるが、間接経験を最もリアルで感動的にするために、動作化、劇化、挿絵法によりイメージを鮮明にし読書の中の人物に同化し、共感できるよう指向する。

○算数科

算数科は本来理論的な思考が要求される教科であるので、筋道を立てた考え方を育てるために、

操作活動の場を設定し、飛躍した論理をセーブするための操作的思考から理論づけをする。

○理科

科学的なものの見方、考え方を養うために、仮説を立て、実証し、更に一般化するサイクルである。つまり、法則を導き出すための帰納と演繹の論理であり、真理を追求するための働きを通して、きまりを探し出し求める力を付ける。

○社会科

社会的なものの見方、考え方、即ち事象の背景を理解する、また、資料の持つ意味が理解されなくてはならないし、その事象の資料から正しく見抜く力を育てる。

○音楽・図工科

表現を通して豊かな感性を育て、創造的表現力を伸ばす。音楽では聴きとる力、図工では表現する力、自己を語る力を育てる。

○家庭科・体育科

家庭生活の構成員の一人としての自覚、その為に自分の果たさなければならない役割等の自主的な態度の育成に努める。体育科では自分の健康とその維持の為に考える体育のあり方を創造する。

○教科外の活動

クラブ活動、委員会活動、集会活動等であるが、特にクラブ活動では本年度演劇クラブを新たに設けた。指人形劇や演劇等を校内で発表したり、老人クラブ等に出かけて児童自らが学習する場とした。なお、児童朝礼の木曜日は表現活動を実施している。

以上のような各教科の焦点づけが妥当であるかどうかは、今後の問題として考えて行きたい。ただ、現時点では、地域産業の斜陽化が過疎に拍車をかけ、地域の労働過重の現状が子どもの表現力、語彙力を奪い、筋道を立てたものの考え方ができにくいという地域の課題を抱えているので、本校では言語認識を高めるために、すべての教育活動を進めていく中で、国語、算数を頂点にして本年度の教育実践を進めていきたい。

2. 共に生きる集団づくりを

集団づくりは、教育の目的の中でどう考えられ、教職員集団及び学級目標の中でどう生かされているかが問われるべきである。そういった意味で、学校教育目標を掲げ、更にそれを推進していくための学級集団づくり、教職員のあり方を指向して、本年度の実践目標とした。

○本校の教育の目標

人間の尊さを、なすことによって学び、地域に根差した生き方を思考し、自主的に行動できる子どもの育成に努める。

①具体的目標

- ・生産活動に参加できる子
- ・自己主張ができる子
- ・不合理や矛盾に気付く子
- ・筋道を立てて解決できる子
- ・仲間と共に伸びる子

②学級目標

- 幼稚園
 - ・友だちと仲良くなれる子
 - ・自分の思っていることをはっきり言える子
- 1 学年
 - ・誰とでも仲良くなれる子
 - ・よく聞き、何でも話せる子
- 2 学年
 - ・よく聞き、よく考える子
 - ・自分の考えがはっきり話せる子
- 3・4 学年
 - ・互いに助け合い、励まし合い、教え合う学級
 - ・みんなの良い所を見つける子
 - ・学習の仕方を身に付けて、やる気のある子
 - ・元気で励まし合える子
- 5・6 学年
 - ・自分で考え実践できる子
 - ・自分の仕事は最後まで責任が持てる子
 - ・一人の問題をみんなの問題とすることができる子
 - ・全校的視野に立ち進んで行動できる子

③教職員集団

部落が存在する限り差別が存在するという認識に立ち、教職員としての立場を見失わない集団づくりを進めていく。

<沖友幼稚園・沖友小学校>

「豊高校区教育推進協議会 実践目標」

はじめに

子どもとの毎日の出会いを大切にしながら、学区の実態を通して教育活動に専念する中で、部落差別の現実から深く学び、一人一人の子どもを見つめ、お互いに人間として人権を認め、進路の保障につながる学力を身に付けさせなければならないと思います。

昨年度に続いて、本年度は特に、日記指導により、子どもの生活実態や家庭の実態を探りながら、適切な指導の下に子どもの変容を目指す取り組みをしていく。そのために私たちは、①子どもたちに暮らしの中から真実を見つめさせ、集団の関りを通して、物事に対する正しい見方、考え方の指導、②自己の暮らしと人権について確かな認識を築いていくための表現力の指導、③身近な生活の中から不合理、矛盾に気づき、それを解決しようとする実践力を養うことに重点を置いて実践していく。

教育活動の全領域で言語認識を

地域の実態や子どもの生活から学ぶ教育実践に取り組み、子どもの進路を保障していこう。

①子どもの生活実態の把握については、家庭と連携をとる中で、行動の観察や子どもとの話し合いを多く持つ事により、把握するように努めたが、十分ではなかった。もっと心理的、肉体的な発達段階をよく考えて、より実りある実践に向かって取り組みようにすることが課題である。

②基礎学力を充実する取り組みとして、ドリルの時や放課後を利用し、計算、書き取り等を全校の児童に定着させるように指導していく。

・子ども同士で話し合いの場を多く持つ授業形態をとることにより、お互いに協力し合い、活動が活発になってきたが、意見交換するまでに至ってはいないので、SFを利用して、意見交換の場が持てるよう指導してきた。進歩の跡は見られるが、十分とは言えないので、今後も続けて指導していく。

③学習指導の効率を上げる。

- ・発表のマナー、仕方について学年に応じたものを職員で話し合い、徹底させていく。
- ・小人数化の一途をたどる本校では、意見を戦わせる場が少なくなり、考えが偏りがちになるので、発問の仕方、授業の展開のさせ方を、さらに工夫して行く。

共に生きる集団づくりを

①学校の中で仲間外れになった児童や行動に問題のある児童について継続的に話し合い対処していく。

② 同和教育を基底にした学校教育の内容を創造しよう。

・一人いじめについて、教師に報告するのみでなく子ども自身がその矛盾に気づき、みんなの前で提起し、解決していくような場を作り、指導する。そのことについては、学級会、終わりの会には出せるようになったが、児童への提起の指導が必要である。

③幼稚園から6年生まで、縦割り集団の班活動が少しずつ定着し、上級生、下級生の間のいざこざは自分たちで解決できている。

放課後、あるいは休み時間に共に行動するよう指導する。

④生活の中で気づいた問題を見つけ、日記帳などに書き、学級会、道徳の時間の中で、その問題を解決するようにしたが、全校のものとするまでには至らなかった。今後は全校へ輪を広げていく取り組みをしなければならない。

⑤生活指導。縦割り集団で、高学年としての行動の仕方について、子どもを含めて話し合い、進んで仕事ができ、下級生の面倒が見られるようにするにはどうすればいいのか、職員が意思統一して指導していく。

<豊島幼稚園・豊島小学校>

「実践の具体目標及び手立て」

幼稚園

1. 言語

ア. 話す

- ・毎週月曜日に生活発表の時間を設け、課題について全員に発表させる。
- ・毎日、当番2名にみんなの前で前日のできごとを話させる。
- ・絵本や紙芝居の感想を発表させる

イ. 聞く

- ・毎日、テレビ鑑賞。
- ・毎日、絵本の読み聞かせや紙芝居を行い、よく聞かせる。

ウ. 読む

- ・自分の氏名は読める

エ. 書く (年長)

- ・五十音を1字ずつ書く。
- ・自分の氏名が書ける。

2. 集団づくり

- ・誰とでも楽しく遊べる
- ・きまりを守る。
- ・生活の基本的習慣を身に付けさせる (手洗い、歯磨、挨拶など)

小学校

1. 言語認識

学校全体の統一目標

ア. 話す

- ・発表の仕方を身に付けさせる (別資料)
- ・「声のものさし」を身に付けさせる (①独り言・つぶやき、②二人で、③グループ・班で、④学級の皆の前で・全校集会で)

イ. 読む

- ・教科書読みを徹底させる (授業で、家庭で、朗読集会で)
- ・読書に親しませる (図書の実、図書委員による図書紹介等)

ウ. 書く

- ・文字を正しく丁寧に書かせる (平仮名、片仮名、漢字)
- ・日記を書かせる。

低学年に応じた指導の具体的目標

ア. 話す

- ・発表の仕方を身に付けさせる
- ・みんなの方を向いて分かるように話す。
- ・語尾まではっきり話す。

イ. 読む

- ・教科書を覚えるまで毎日読ませる (暗唱させる)
ゆっくり (句読点に気を付けて)、はっきり、大きな声で、気持ちを込めて
教師が毎日点検する (授業中、本読みカード)
- ・読書に親しませる (読み聞かせをするよう心掛ける/給食準備中、給食後に読書する習慣を付けさせる/読書カード、読書グラフを作って奨励する)

ウ. 書く。

- ・1時間のうちに必ず書く作業を取り入れる。
- ・文字を丁寧に書かせる。(筆順を押さえる)
- ・短い文を作らせる。(表現、表記の基礎練習として)
- ・日記を書かせる(書くことに慣れさせる／正しい表記法(て・に・お・は等)／習った漢字を使う／生活を見つめる 等)

中学年に応じた指導の具体的目標

ア. 話す

- ・発表の仕方を身につけさせる。
筋道を立てて分かりやすく話せるようになる／1日に1回は発表させる／1時間に最低2回は発表させる
- ・日直などの仕事を通し、司会をすることに慣れさせる。

イ. 読む

- ・授業中、なるべく大勢に読ませる。(大きな声ではっきりと／発音やアクセントを正しく)
- ・詩は暗唱させる。
- ・時には家族の人に本読みを聞いてもらう。
- ・单元ごとに録音し、聞かせる。
- ・読書に親しませる。(推薦図書コーナーを設ける／読書カード・感想カード・競争カードを作って活用する)
- ・読書表を作って奨励する。

ウ. 書く

- ・毎日漢字練習をさせる。
- ・漢字の筆順を正しく覚えさせる。
- ・平仮名、片仮名書き取り競争。
- ・板書の視写、本の視写を度々させる。
- ・テレビノート、聞き取りメモを書かせる。
- ・日記を書かせる。(作文を書く時の約束／誤字脱字／正しい表現方法／漢字を使う／生活を見つめ表現する)

高学年に応じた指導の具体的目標

ア. 話す

- ・発表の仕方を身につけさせる。
話し合いの中で、友達の意見に対して単純に同調しないで、賛成と疑問の所、反対の部分ができるだけ細かく聞き分ける習慣を付けさせる。
- ・司会者を中心として、学級会の提案に対しても意見を述べるルールを作り実施していく。

イ. 読む

- ・教科書読みを毎日行い、必ず評価点検させる。

- ・読書カード、読書記録表を作り、自己評価させる。

ウ. 書く

- ・漢字ドリルテストを毎日行い、間違いを正していかせる。
- ・教科書の視写を毎日させる。
- ・日記、班ノートを毎日書かせる。
身の回りのできごとに関心を持たせる／生活に対する意見交流をさせる
- ・作文、詩を書かせて文集を作る。

2. 集団づくり

(学校統一目標：1. 清掃の手順、2. 給食のきまり)

低学年

学習面

- ・みんなに分かるように話す。
- ・人の話を最後までしっかり聞く。
- ・友だちと（2人組、4人組）力を合わせる。

生活面

- ・誘い合って仲良く遊ぶ。
- ・友だちと力を合わせる（係活動、給食の配膳、清掃等）
- ・朝の会、帰りの会で1日の生活を見つめさせる。

中学年

学習面

- ・自分の意見を分かりやすく発表する。
- ・友だちの発言をきちんと聞き、自分の考えときちんと比べる。
- ・班長を中心にみんなで話し合って意見をまとめる。

生活面

- ・班を作り、班長に協力する。(班に責任を持って仕事をさせる／役割を分担させる／全員班長になれるようにする)
- ・日直が1日学級委員となる。
- ・朝の会、帰りの会で1日の生活を見つめさせる。

高学年

学習面

- ・聞く力、話す力を付ける。(グループの中で話し合う機会を多く持たせる／友達の発言を聞くことにより、自分の発言力を育てる)

生活面

- ・朝の会、帰りの会の充実を図る。
- ・班ノート、日記、学級ノートを書かせ、朝の会、帰りの会で読む。(1人の問題を自分の問題として考えさせる／身の回りの事に関心を持たせる／生活に対する意見交流を図る／日記を通して

共感を持たせる)

- ・意見が出たら必ずそれに対して意見を述べさせる。
- ・清掃、給食の手際よい手順を身につけ、協力して行う。

資料：話し方の目安（案）

- 1年 みんなの方を向いて大きな声で話す。（「はい、・・・です」「わたしは・・・だと思います」
聞く人は話す人の方を見て聴く。
- 2年 みんなに向かってはっきり話す。（「はい・・・です」「ぼくは・・・だと思います。そのわけ
は・・・です」「〇〇さんに付け足します」「〇〇さんに尋ねます」
話す人の方を向いて終わりまでしっかり聞く。
- 3年 大事なことを臆さずに話す。（「はい・・・です。そのわけは・・・です」「・・・について・・・
と思います」「〇〇さんに尋ねます。・・・ですか」「・・・の所はどういうことですか」
何がどんな順序で話されているか注意して聞く。どこが大事か考えながら聞く。
- 4年 考えをまとめてから話す。（「わたしは・・・とおもいます。そのわけは・・・です」「ぼくも
〇〇さんと同じです。そのわけは・・・です」「わたしは〇〇さんと違います。そのわけは・・・
です」「・・・の所をもう一度言ってください」「・・・とはどういうことですか」
相手の言おうとすることをまとめながら聞く。
聞いたことについて自分の意見を持つ。
- 5・6年 相手に分かっているか確かめながら話す。（「ぼくは・・・とおもいます。そのわけは・・・
です」「私は〇〇さんに付け足します。・・・について・・・と思います」「ぼくは〇〇さんと
同じです。ぼくは〇〇と思います」「〇〇さんは・・・と言いましたが、ぼくは・・・と思
います」「〇〇さんに質問しますが、・・・ですか」「〇〇さんの言ったことは・・・ですか」「・・・
の所をもう一度言ってください」「・・・とはどういうことですか」
相手の言おうとすることを、まとめながら聞く。聞いた事柄に自分の意見を持ち、重要なこ
とはメモする。

<久比幼稚園・久比小学校>

「言語認識」への取り組みについて

本校は昨年度に続き、理解（聞き取り方）表現（話し方）を重点的に取り組む。理由は本校児童の欠点として前から問題となっている表現力の不足である。一例をあげると、児童が運動場で100円拾ったので、職員室に「先生100円」と言ってきた。そのことが起点となって言語力の基本である、聞く、話す力を付けていくことになった。

確かな言語力を付けるには、第一に聞く事から始まり、次に話す、読む、書くというように言われている。本稿は、その基本である聞く、話すの点が不足しているため、次の2つの具体目標をあげ実践していく。

1. 話す子どもを育てる（朝の会、終わりの会、学級会活動の充実）

(1) 気楽に話せる雰囲気づくり

- ①良い聞き手を育てる。相手の意見は顔を向けて最後まで聞かせる。
- ②失敗しても絶対に笑わせない空気を作る。
- ③自信を持たせるために、隣人や前後の人と共同で意見を出させる。
- ④一人の問題でもみんなの問題として取り上げ、助け合い励まし合うような空気を作る。
- ⑤小集団での話し合いを多く取り入れる。

(2) 教師の態度について

- ①教師の態度・表情がその場の雰囲気に影響を与えるので、落ち着いて柔和な態度、表情をとるようにする。
- ②声の小さい児童やまとまりのない発言者には補助する。
- ③教師は学級の一員として話し合いに加わる。
- ④発表内容について称賛の言葉をかけ励ます。
- ⑤生徒に問題解決の成功感やその喜びを味わわせ、その実績を踏ませる。
- ⑥学校生活における様々の問題を教師自身確かに把握しておく。

(3) 発言形式の検討

話す材料を持っていても、まとめることのできない児童も多く、まとまりにくい。そこで昨年度の実践と国語教材の系統から発言形式を学年別に検討し、国語学習の時間を中心に全学習の場において指導していく。

・発言形式の例

低学年	中学年	高学年
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを述べる時 「私は～だと思えます」 「それは～だから～です。(そのわけは)」 「～が～です」 「～が～に～を～です」 「～は～より～です」 ・賛成するとき 「わたしは～さんにさんせいです(～にさんせいです)」 ・反対するとき 「わたしは～さんにはんたいです(～にはんたいです)。それは～だからです」 ・付け加えるとき 「私は～さんの意見に付け加えま 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見を出す時 「私は～だと思えます」 「私は～したらいいと思えます」 ・賛成意見 「私は～さんの意見(すること)に賛成です。それは(理由)～だからです」 ・反対意見 「私は～さんの意見(すること)に反対です。それは(理由)～だからです」 「それで～したらよいと思えます。それは～だからです」 ・付け加えるとき 「～さんに付け加えて～もあると思えます」 	<ul style="list-style-type: none"> ・人の意見に応じて発言するとき 「～さんの意見について～と思えます。それは～や～であり、～なるからです」 「僕は～と思えます。それは～のように～だからです」 ・賛成と反対を著すとき 「私は～に賛成(反対)です。理由は～です」 「私も～さんに同感です。～な場合に～になる」ことがあります」 ・付け加えるとき、訂正するとき 「付け加えます。～は～だったから～です。理由は～だからです」 「～さんの発言にさらに付け加えたいことがあります」

<p>す」</p> <p>・尋ねるとき</p> <p>「～さんにききます(しつもんします)。どうして～ですか」</p> <p>「はい、わかりました」</p> <p>「～ではありませんか」</p> <p>「～はよくわかりません。もういちどはなしてください」</p> <p>・同じ考えの時</p> <p>「わたしは～さんとおなじ考えです。それは～だからです」</p> <p>「わたしは～さんの発表とおなじです」</p> <p>・考えが変わるとき</p> <p>「わたしは意見がかわりました。～さんの意見とおなじです」</p> <p>・代わりにいう時</p> <p>「～さんをたすけてあげます」</p> <p>「～さんにかわっていいいます」</p>	<p>「今のことに付け加えて～もあると思います」</p> <p>「～も入れたほうがよいと思います」</p> <p>す」</p> <p>・質問するとき</p> <p>「～さんに質問します」</p> <p>「～さん、～さんはどうですか。教えてください」</p> <p>「～をもっと詳しく説明してください」</p> <p>「～は～ではないですか」</p> <p>「よくわかりました。しかし～になるのはどうしてですか。説明してください」</p> <p>・比較するとき</p> <p>「～の方がよいと思います。～だからです」</p> <p>・新しい意見</p> <p>「僕は～したらよいと思います。皆さんはどう思いますか」</p> <p>・代わりに発言するとき</p> <p>「～さんに代わって言ってあげます」</p>	<p>「訂正します。～は～だったが～です。理由は～だからです」</p> <p>・質問するとき</p> <p>「今の意見について二つの疑問があります。その一つは～です。次は～です。これについてはどう思いますか」</p> <p>「はじめのしつもんについては～と思います。二つ目の質問については～と思います」</p> <p>「わかりました。私も今のようなことであればよいと思います」</p> <p>「私は今の意見について別な意見を持っています」</p>
---	--	---

2. 2 点目として、地域の言語環境の不足からくる面は学校として補足教材を作成しなければならないのが当然であるが、時間的にそれは無理である。そこで、

「放送教材(国語教室)を取り上げ、継続利用して聞く、話す力を付けていきたい。」

学習指導要領国語科の目標に示されている「国語による理解と表現を通して知識を身につけ、心情を豊かにする」という人間形成の上からも、また「国語による伝達の役割を自覚して社会生活を高める能力と態度を養う」うえからも「聞くこと・話すこと」の指導は重要である。

「聞くこと・話すこと」の指導は本来具体的な音声言語を通して行われるべきであり、印刷された活字による教科書での指導では充足できないものである。

(1) ねらい

- ①聞くこと、話すことに基本的な技能の習熟を目指す(繰り返し練習の工夫)
- ②聞くこと、話すことのための知識、理解に関する者(わかるための指導法の工夫)
- ③聞くこと、話すことの習慣、態度の養成を目指す。

(2) 内容

- ①主として聞くことに関する単元
- ②主として話すことに関する単元
- ③聞いたり話したりする単元
- ④言葉に関する単元
- ⑤表現活動に関する単元

(3) 聴取指導にあたって

①聴取前

- ・ねらいの確認。
- ・テープ聴覚を補うための視覚教材の準備。
- ・ねらいに沿って児童の経験や意見などを発表させ、テープを聴収する受け入れ態勢を児童側に整えておく。

②聴取中

- ・教室内の雰囲気把握。
- ・教師の助言。
- ・理解を容易にするための補助手段（板書・絵・OHP・図表等）

③聴取後

- ・内容について、感想についての話し合い。
- ・発展的な練習。
- ・内容を平素の色々な学習活動や習慣と結び付けていく。

④取り扱いの時間の位置づけ

- ・週1回、国語の時間の最初に取り入れる。

幼稚園

年間目標

- ・人の話を聞く正しい態度を養う。
- ・人にわかることばを使おうという意欲を育てる。
- ・言葉の正しい使い方を身につける。

1. 毎日の保育生活の場の中で指導する

- ①「はい」の返事、挨拶、自己紹介等口を大きく開けて声を出す。
- ②先生や友達の話に注意して聞く。
- ③ラジオ、テレビ、紙芝居、童話など、友達と一緒に喜んで聞く。
- ④簡単な指図を聞いて行動する。
- ⑤したいこと、してほしいことを言葉ではっきり言う。
- ⑥見たこと、聞いたこと、感じたことなど素直に話す。
- ⑦生活発表、終わりの会など、相手に分かるようにゆっくり話す。

2. 教師の態度について

- ①ペープサート、人形劇など効果的に利用し、肌の触れ合いと語りかけの場を持つようにし、一人一人への言葉かけを大事にする。
- ②子どもの反応をよく聞こうとする態度で接する。
- ③子どもが落ち着いて話せる雰囲気を作る。
- ④子どもの興味や関心を高め、活動により意欲を持たせるような環境の整備と構成に努力する。
- ⑤子どもの反応に対して認めたり、確認してやることの話し上手、聞き上手になり、称賛の言葉をかけ励ます。

<豊小学校>

「1981年度計画」

- ・実態調査の分析と訂正（6月中、及び1学期）→（各クラス）
- ・その結果について話し合いと今後の対策（6月中）→（全体またはブロック）
- ・7月頃より実施、学期ごとに反省する。とくに、3月末には1年間のまとめをして、来年度の計画を立てる。

言語認識を高めるために

- ・ドリル時間活用（毎週、水、金）。
- ・10字テスト（週に2、3回くらい）。
- ・百字練習日記（毎日）。
- ・放送朝会（火）か給食の時間に学級順に一人ずつ何か話さずか読ます。
- ・読書ノートの使用（深い読み）。
- ・よく聞かせたり見させたりするために、TVノートを使用したり、話を聞いた後ノートなどに書かせる。
- ・発言形式を検討して本校に合うものを作成し、実施する。
- ・本読みカード（進度表）を作成し、家庭でもっとしっかり本を読ます。
- ・「ことばに関する事項」が各クラスともかなり弱いように思われるので、指導後は文法的な問題を作成してドリルする。

集団づくりのために

- ・昨年度と同じように月に2回くらい（毎月、水曜）事例研をする。
- ・「人間」「道徳」の時間などで人権を尊重する態度を育成する。
- ・複式学級の教材化。
- ・一人も残さないという観点より、授業中のひとつの評価法として、アナライザー、手信号（わかっている→手を広げる、考え中→手を握る、分かっていない→人差し指と親指を伸ばし後の指は握る）、カラー表示四角柱（理解→青、考え中→黄、理解できない→赤）などを使用する。
- ・グループ学習。
- ・係活動、集会活動を活発にする。

- ・集団登校（今までずっと続いている）。
- ・週番活動（4年以上、各クラスより2名ずつ当番にあたる）。
- ・終わりの会、朝の会などの活用。
- ・生活指導、学級指導などの活用。
- ・特に体育、特活等の時間は集団づくりに大なる効果が期待できる時なので、うまく利用する。
- ・休憩時間の縦割り（今年より）。
- ・掃除の縦割り（6年と1年、5年と3年、4年と2年）（今年より）。
- ・球技大会（毎年6月末か7月上旬の日曜日、男子ソフトボール、女子フットベースボール）。
- ・夏休み中の各区のキャンプ及び遊泳会（キャンプ・4年以上から5年以上、遊泳会・全員）。
- ・豊町親善球技大会（盆の3日目）。
- ・下島陸上記録会（5、6年）。
- ・遠足。
- ・番組朝会（隔週の土曜の朝）。
- ・各番組における道路掃除（毎週、水・土の登校前）。

<豊浜中学校>

「地域課題をふまえた教育のあり方」

教育活動の全領域で言語認識を

共に生きる集団づくり

具体的教育活動

	活動内容	ねらい
教科	・バズ学習の徹底 熟語の解説、百字帳の提出、漢字テストの実施、読書指導、作文指導	・言語認識を育てるためには、言葉や文字を自由に使いこなせることのできる力を育てなければならないが、語彙が少ないために断片的な発言が多く、そのために自分が考えていることがなかなか表に出せない。 そこで、話し合いによる確かめ合い、情報の交換のできるバズ学習方法に求めた。 ・漢字力を付ける。 ・読書力、表現力を付ける。
町内バズ	・水曜日6時間目、町内10カ所の会場で年間プログラムに従って、教科、地域活動、町内清掃活動を保護者、教師も参加して実施。 ・生徒、保護者共に反省ノートの記入。気づきの発表。	・保護者や地域住民の学校教育に対する関心を高めると共に、三者の人間関係を高める。 ・学年、学級の枠を越えた活動の中に地域課題を見つけ、解決の方向を共に見つけ出す。 ・自己の課題をつかむとともに家庭学習の習慣化を図る。
クラブ活動	集合－瞑目－挨拶－主活動	心身を鍛えるとともに、目標に対し協力することによ

	集合—1日の反省（発表）—瞑目— ありがとうございました	り、人間関係の向上を図り、集団の質を高める。
給食指導	・給食当番は服装を整えて準備にかかる。他は外に出て運動。 ・食前、食後は瞑目して挨拶。 ・日直は掃除をする。	栄養のバランスのとれた食事をさせるとともに、学校生活を明るく豊かにし、好ましい人間関係を育成する。
掃除活動	始まりの会—重点目標、役割を確認 終わりの会—目標、分担などの反省	・先生と生徒が一体となり、清掃活動を通じて勤労と協力の喜びを知る。 ・人前で発表したり意見をまとめたりすることにより、国語力を高める。
生徒会	・専門委員会を開き、自主的活動をする。 ・毎週土曜日は生徒朝会を生徒自身の手で立案し、活動していく。 ・生徒会行事	・多くの生徒の意見をまとめ、発言できるようにする。 ・自分たちの集団を自分たちの手で運営できるようにする。
学級・学年・学校行事	遠足、キャンプ、運動会、修学旅行 学年行事	学年、学級、学校行事を通して体験学習をさせ、集団に対する意識を高める。
HR活動	短学活から ・日直の一日の反省 ・班反省 ・私の意見発表 ・レクレーション ・人権学習の日 ・教科委員活動 ・復習バズ ・係活動 生活の記録	・誰でもみんなの前で司会ができる。 ・班内で司会ができ意見が言える。お互いの気持ちがわかり合える。 ・人前で意見がはっきり言える。一人一人がクラスの一員であることを認め合う。 ・ゲーム、スポーツ、歌を通して集団のすばらしさを知る。 ・相手の立場を分かる。人権意識の高揚。 ・進路によって正しい発表力を付ける。 ・班内で教え合い、励まし合う。 ・役割を果たし、集団を高める。 自由欄に書くことによって自分の考えが出せる。 個から集団への高まりを期待する。

＜豊中学校＞

「具体的実践計画」

1. 「教育活動の全領域で言語認識を」について

- ①教師が話をしているときは黙って聞くという指導をしていくと同時に話し方の工夫もしていく。
- ②話す前にメモをするなど、言いたい事の内容を整理させる。

- ③発表をする場合は、よく聞こえるようにはっきりとゆっくりと語尾まで言う習慣をつける。できるまで繰り返しやらせる。
- ④漢字の読み書きの練習をしっかりと指導していく。
- ⑤本読みの時、本を持ってみんなに聞き取れるようにはっきりと読む指導をしていく。
- ⑥ノートがきちんととれているかを点検、指導する。
- ⑦授業、全体の場合、公式の場合などで正しい言葉遣いをしていく。
- ⑧正しい敬語の使い方ができるようにする。
- ⑨お互いに挨拶しよう。
- ⑩お互いを理解し、受容していく態度を養う。

2. 「共に生きる集団づくり」について

- ①月曜日の集い：生徒会の役員を中心にし、全校的活動として行い、集会活動の仕方、あり方を学ばせる。集会では各委員会の活動の評価及び課題の報告と提案、週間実践の評価及び課題と重点目標の提案、学級活動状況の報告（意見発表）を行い、そのあと全身体操をする。
- ②30分学活：自主・協同・創造の態度や能力を培う。問題解決の能力や態度を磨く。集団に所属し、集団の一員としての役割を果たしていき、力を養うことを狙いとし、身の回りの生活を見つめ、問題をみんなで解決していく。教科で分からないところを出し合い、練り合い、確かなものにし、理解を深めていく内容を取り扱っていく。
- ③学級で：自分たちの身の回りの生活をよく見つめ、その中で不合理、矛盾を出し合い、指摘し合い、皆で解決していこうとする意欲、主体性を培い、差別を許さない明るく楽しい生活ができるような仲間づくりをしていく。そのために班ノートの活用、30分学活における課題解決バズを指導していく。
- ④生徒会活動で：学級での問題点、取り組みの状況を、学級内にとどまらず生徒自らの問題として受け止め、生徒会に投げかけ、生徒自らの手で問題を解決していこうとする活動を援助していく。週番や係の位置づけ、活動内容を明確にし、週番活動や係活動を進んでやっていくことを通して集団の一員としての自覚を高め、自分の役割を果たしていく力を付ける。そのために、放課後、委員会活動を位置づける。

<豊高校>

「推進協実践目標の具体化について」

1981年度、推進協実践目標「共に生きる集団づくりを」「教育活動の全領域で言語認識を」の具体化にあたって本校では大きく2つの段階に分けて討議を行ってきた。

その1つは、実践目標をどのように捉えるかという事と、実践に関わっての教職員の体質、言い換えれば教職員集団はどうかという事です。この事が教職員集団として共通に認識されない限り、具体化の計画ができたとしても取り組みの視点が曖昧となり、取り組みに有機的な繋がりがなくなってしまう最終的には個々の教職員の意図とは別に生徒集団は「共に生きる集団」どころか分裂集団になってしまうであろうという事が容易に想定できるからです。

2つ目は、第一の段階についての共通認識の上に立って、実践目標を「聞く→話す→集団づくり」へと焦点化し、以下に具体化していくかという事についてです。

1. 実践目標に関わって次のように意識統一してきました。

(1) 現状認識

実態調査報告書において、言語力の向上が要請されていますが、その具体的な現象として教科活動における言語力の低さという側面もあるものの、人間関係を基盤とした集団づくりの側面から見たとき、学級規模での討論など話し合いがほとんど成立していなくて集団としての機能の基盤の欠落が見えます。そうした現状から考えるとき、人間関係に極めて重要な影響をもつ言語力の向上と集団づくりとを不可分な関係にあるととらえなければなりません。従って、この両者が統合された取り組みにならなければなりません。

しかし、現状は生徒達の話し合いの稚拙さをカバーしようとして、あるいは話し合いができないものとして、常に教師主導型になっている傾向があると思います。民主的手続きを体得させるためには、民主主義の持つ極めて非能率な側面があることを踏まえて、長期的展望に立った積み重ね、即ち生徒たちに根気よく話し合う場を提供していくことを基本としなければなりません。

(2) 取り組みの前提

現状に基づいた基本的な方向づけがなされたとしても、その取り組みを持続させることができるかどうかは教職員の姿勢にかかっています。その姿勢づくりは、教職員自らの集団づくりがなされるかどうかにかかっています。つまり、教職員自らが体現者でなければ、生徒への働きかけは実効あるものとはならない筈です。今日の職員会議等における教職員集団の態様と、学習集団の態様とは極めて酷似していると言えます。そうした認識を教職員集団共通のものとし、まさにバズ集団へと高まる営みこそが出発点とならなければなりません。

(3) 共に生きるとは

人間関係を決定づけるのは、どのような場合でも、その出会いの場とその場での仕事の中身であると言えます。具体的には、何かの仕事を協同して行い、相互に成就が持ち合える状況を積み重ねることであり、連帯しているという意義がまさに実感できるかどうかではないかと言えます。

もちろん、その基盤は人間を人間として認め合うという人格性が必要ですが、逆に協同して課題解決にあたることで、それが培われるとも言えます。この2つはそうした相互作用の関係にあると言えます。そうした人間関係の中で、各々主体性を持って生きることが共に生きることでありたいと思っています。

(4) 共に生きるためには

共に生きる人間関係が培われる道筋は、主要には相互の意思疎通にあります。その意思疎通の手段は、原則として言語を媒介にして行われます。つまり、話し合い、了解点に達し、そして協同作業を遂行します。しかし、意思伝達の手段である言語の大部分は、非常に広い意味内容を包摂しており、必ずしも話し手の意志が聞き手に正直に伝達されるとは限りません。曲解、誤解という用語は、その多さを示しているとも言えます。従って、言語活動において意思の疎通を可能にさせる共通の言語観念を持ち合うような設定が必要であると言えます。

2. 「聞く力→話す力→集団づくり」の筋道の具体化を

言語力としては、読む、書く、話す、聞くの領域が考えられます。しかし2つの実践目標を前述のように捉え、2つの目標が統合されるものと考え、全領域で具体化していくためには、統合の視点をより明確にし、実践していかねばなりません。その視点として、「聞く→話す→集団づくり」の道筋を考えています。

(1) 集中力（聞く力）の養成は、教職員の研修から

「聞く」という事は、個においても集団においても、その後の思考や行動を決定していく出発点と言えます。それだけに、個としても集団としても「聞く」作業に集中しなければなりません。

そのためには、生徒たちを管理し、静かにさせて話をする、とか、同じことを何度も繰り返さない（聞いていなかったら困ることに気付かせる）ことで生徒たちに聞くことの必要性を感じさせる方法もあります。しかし、もう一步突っ込んで考えた時、教職員がいろいろ工夫し生徒たちに、集中して聞くことを体験させることが重要ではないかと考えます。そのためには「他人の話は静かに集中して聞くものだ」の前提を捨て、教職員が「聞かせる工夫」、即ち、話し方、情報提供の技術の工夫をし、自らがモデルとなって生徒たちに体験させていくことが必要と考えられます。そのための研修の方法を考えています。

(2) 話し合いのモデルづくりを

聞かせる工夫は話し方の工夫でもあります。現状を見た時、発表の仕方、質問の仕方、質問に対する答え方、話し合いを深めていく上でのルール等、不十分なままで集団づくりを試みようとしています。この解決のためには、話す方法、話し合う方法の手引き（モデル）を作成し、それに基づいて話すこと、話し合うことを積み重ねていく必要があります。そのために、小学校、中学校の力を借り、系統だったモデルづくりを行います。

(3) 全領域で読書を仕組む

話すためには、どれだけの言葉を知り、使用できるかが1つのベースになります。この力は何にも増して読書量に尽きると思います。そのため、全領域で読書の素材を生徒たちに提供し、読書の機会を作ることが必要です。

(4) まとめる作業は書くことで

現在各クラスで取り組んでいる学級通信を用い、また教科の中でのまとめや発表に生徒の手による文章化（作文）の方法を多用していきます。

(5) 共に生きる課題づくりを行う

聞かせる工夫、話し合いのモデルづくりは言い換えてみれば教職員が集団づくりのリーダー役を務めることでもあります。集団づくりと、集団がより進化していくためには、教職員と生徒が1つの集団として各々を認め、それぞれの役割を持ちながら共同作業をしていくことが最も大切です。そのための課題づくりが急務と言えます。

<'81 年度春季合同公開研究会>

1981 年 6 月 8 日

各学校長 殿

関係教職員 殿

広島県豊高校区教育推進協議会

豊町立沖友小学校長 平田 福德

豊町立久比小学校長 服部 秀峰

豊浜町立豊浜中学校長 山根 正

広島県立豊高等学校長 新田 正彦

広島県豊高校区教育推進協議会 81 年度 春季合同公開研究会 御案内

謹啓 島を包んでいたみかんの花の香りも盛りを過ぎる候となりました。

諸先生方には、教育活動に御精励の毎日と拝察申し上げます。

さて、私共が地域に根付く教育を志向し、「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を命題に、豊・豊浜両町に所在する幼・小・中・高 9 校 5 園の全教職員が結集し、広島県豊高校区教育推進協議会を組織致しましてから第 4 年目を迎えました。幸い地元両町の深い御理解と御支援を得て、当面の目標である幼・小・中・高一貫教育態勢づくりもどうやら一定の前進がみられる段階となり、実践の日常化が日程にのぼって参りました。皆様方にお越しいただいて、私共の日頃の実践を点検いただき、御批判、御指導を賜っています公開研究会も定例化致すことができました。

本年度も春秋に分けて公開研究会を開催させていただくことになりました。つきましては、春季合同公開研究会を下記要項の通り 4 校で開催致しますので、ぜひ御参加下さり御指導下さいませよう御案内申し上げます。

敬 具

'81 年度 春季合同公開研究会開催要項

1. 主 催 広島県豊高校区教育推進協議会
尾道教育事務所管内へき地複式教育研究連盟
豊町立沖友小学校／豊町立久比小学校／豊浜町立豊浜中学校／広島県立豊高等学校
2. 後 援 豊町ならびに豊町教育委員会／豊浜町ならびに豊浜町教育委員会／各校 PTA
3. 期 日 1981 年 6 月 25 日(木) 沖友小学校会場
6 月 25 日(木) 豊浜中学校会場
6 月 26 日(金) 豊高校会場
7 月 7 日(火) 久比小学校会場
4. 講 師 名古屋大学名誉教授 塩田 芳久 先生 (豊浜中・豊高校会場)

尾道教育事務所指導主事 小池 和馬 先生 (沖友小会場)
 島田 泰治 先生 (久比小会場)
 中 正彦 先生 (久比小会場)

5. 研究主題 '81年度 豊高校 区推進協実践目標

＜共に生きる集団づくりを・教育の全領域で言語認識を＞

実態調査集約結果をもとに、'81年度推進協加盟全校における共通実践目標 として上記 2 項が決定され、その実践目標の具体化が本年度の各校共通の研究主題である。

【6. 日程、7. 参加、8. 昼食、9. 連絡先、10. 交通案内 は略】

沖友小学校会場 6月25日(木)

1. 日程

11.00	11.15	12.00	12.50	14.10	14.30	16.20	16.40
受 付	公 開 授 業	昼 食	研 究 討 議	移 動	基 礎 実 験	講 座	閉 会 行 事

2. 研究主題

問題との出会いを大切に、課題をもって追求する子どもを育てる。

幼稚園 自然と遊ぼう。

低学年 発見したり試したりして、成功の喜びを味わわせる。

高学年 経験をもとに課題をつかみ、すじ道をたてて確かめる。

3. 研究課題

- ・教育工学的指導案の分析
- ・発問の工夫
- ・主体的にとりくむ授業の創造 (問題 との出会いをいかに課題化させるか)
- ・学習規律の育成
- ・教育機器の効果的活用

4. 単元名

学 年	単元名	指導者 (略)
1年	石ころ	
2年	土であそぼう	
3年	夏の草木や虫	
4年	こん虫	
5年	魚のふえ方	
6年	わたしたちの体	

5. 講 座 初任者を中心とした小学校理科基礎実験の学習。

(豊高校区推進協 本年度活動課題 その 1)

久比小学校会場 7月7日(火)

1. 日程

	9.00	9.30	9.45	9.55	10.40	11.05	11.50	12.40	14.00	15.50
受付	音楽朝会	公開授業	業間体育	公開授業	昼食	体育研究協議		実技研修		
						音楽研究協議		実技研修		

2. 研究主題

体育 からだをきたえるたくましい子ども

十分運動を行い、柔軟度を高め、筋力・持久力・調整力のバランスのとれたからだを育てる。

音楽 美しさに感動できる子ども

正しい発声法を身につけ、歌唱力を高め、すなおに表現する心情を育てる。

3. 授業内容

		体育		音楽			
	学年	題材	指導者		学年	題材	指導者
1校時	2	きかいあそび		1校時	1	たなばた	
	4	器械運動(跳び箱) うでたてとびこし			3	かえるのびよんた	
2校時	6	器械運動(跳び箱) 台上前転		2校時	5	小鳥のマーチ・ワルツ	

4. 実技研修

体育 ミニバスケットボールの指導力を養う(運動のできる用意をしておいで下さい。)

音楽 合唱、合奏の指導力を養う(たて笛をご持参下さい。)

豊浜中学校会場 6月25日(木)

1. 日程

	10.00	10.30	11.20	11.30	12.20	13.30	14.30	14.40	16.30
受付	公開授業	授業反省	昼食	分科会	研究討議	全体会		講演	

2. 研究主題

地域課題をふまえた指導のあり方—支え合う集団づくりをめざして—

推進協の実践目標の具体化をめざして、今一度バズ学習の原点に立ち返って指導のあり方を
集団づくりにしぼって追求する。

3. 公開授業教科

クラス	3年	2年	2年	1年	1年
教科	社会	数学	美術	理科	技術(男)

4. 分科会構成(公開授業を受けて次の3分科会とする)

第1分科会 理科・数学

第2分科会 社会

第3分科会 美術・技術

豊高校会場 6月26日(金)

1. 日程

8.00	8.20	8.35	8.40	9.25	9.35	10.20	10.45	11.30	11.40	12.10	13.30	15.00	16.30
受付	朝バズ		全公開授業年		全公開授業年	掃除		第2学年研究		第30分学年活	昼食	分科会	全体会

2. 研究主題

ユニット学習法を全領域へ広げるための「課題の創出」

3. 学習活動内容

	1-1	1-2	2-1	2-2	3-1		3-2	
1時限	化学	古典	数学	英語	政経		日本史	
2時限	生科	商一	体育	倫社	被服	商英	古典	
3時限			物理	数学				
30分学活								

4. 分科会構成 第2学年の2クラスの学習活動を授業研究、30分学活を軸に行なう。

第1分科会 2-1/第2分科会 2-2

<'81年度秋季合同公開研究会>

1981年10月20日付、豊高校区教育推進協議会と豊島小学校長の吉井要氏、豊小学校校長の越田正記氏、豊中学校校長の中岡正男氏、豊高校長の新田正彦両氏名での案内である。

期日：1981年11月17日 豊中学校会場

11月18日 豊高等学校会場

11月20日 豊島小学校会場

11月26日 豊小学校会場

12月8日 大浜小学校会場(別途案内)

主催：広島県豊高校区教育推進協議会 尾道教育事務所管内へき地複式教育研究連盟
豊田竹原小学校視聴覚教育研究会 豊田竹原小学校理科教育研究会
豊浜町立豊浜幼稚園 豊浜町立豊浜小学校 豊町立豊小学校 豊町立豊中学校
広島県立豊高等学校

後援：豊町教育委員会 豊浜町教育委員会 豊田竹原振興会 各校 PTA

講師：名古屋大学名誉教授・南山大学教授 塩田芳久先生（豊中・豊高会場）

広島大学助教授（福山分校） 吉原博之先生（豊島小会場）

尾道教育事務所指導主事 片山富次郎先生（豊小会場）

〃 岸田早苗先生（豊中・豊小会場）

〃 島田恭治先生（豊島小会場）

〃 山本輝明先生（豊小会場）

〃 小池和馬先生（豊小会場）

研究主題

‘81年度豊高校区推進協実践目標

《共に生きる集団づくり》 《教育活動の全領域で言語認識を》

<豊中学校会場>

研究主題 単元見通し学習による基礎学力の充実

日 程	9:00～ 9:30	受付	13:00～13:50	研究討議
	9:30～10:00	30分学活	14:00～14:30	開会行事
	10:10～11:00	研究授業	14:30～15:30	講演
	11:10～12:00	分科会	15:30～15:40	閉会行事
	12:00～13:00	昼食		

公開授業 2B：体育／3A：社会／3B 学級活動

講演 学習態度形成の基礎概念 講師 名古屋大学名誉教授 塩田芳久先生

<豊高等学校会場>

研究主題 ユニット学習を全領域に広げるための「課題の創出」

本研究会主題 学級通信を軸にした学級経営のあり方

日 程	8:00～ 8:20	受付	11:40～12:10	第1学年 30分学活
	8:20～ 8:40	朝バス	12:10～13:00	昼食
	8:40～ 9:25	全学年公開授業	13:00～14:30	研究討議
	9:35～10:20	全学年公開授業	14:30～15:30	まとめ
	10:20～10:45	掃除	15:30～16:00	閉会行事
	10:45～11:30	第1学年授業研究		

公開授業 1、2時間目の通常時間割表を掲載

分科会 1学年両クラス協働した取り組みであるので、分科会は設定しないが、人数によっては分散会を設ける。

<豊島幼・小学校会場>

研究主題 進んで体づくりにはげむ子どもをめざして

- ・ひとりひとりが課題をもち、力いっぱい体育学習にはげむ子
- ・強い意志とたくましい体づくり
- ・集団を信じて仲間とともに伸びる

日 程 9:00～10:20 受付 12:00～13:00 昼食
 10:20～11:05 公開授業 13:00～14:00 研究討議
 11:15～12:00 公開授業 14:10～15:30 実技研修

公開授業

校時	学年	題材	校時	学年	題材
1	4歳児	エスポーであそぼう	2	3年	基本の運動（マット運動）、なわとび
	1年	基本の運動ゲーム（歩・走・跳）		6年	ボール運動（バスケットボール）
	4年	姿勢を正しくしよう			

研究協議会 幼稚園、低学年、高学年の3部会

実技研修テーマ とび箱、マット運動の指導力を養う、

<豊小学校会場>

研究主題 人間形成をめざす学習指導の改善—やる気を育てる教育機器の活用

日 程 9:00～ 9:55 受付 14:00～14:20 開会行事
 9:55～10:40 公開授業 14:20～14:40 経過報告
 10:55～11:40 公開授業 14:40～15:20 研究発表
 11:40～12:20 昼食 15:20～16:00 講評・閉会行事
 12:20～13:50 協議会

公開授業

校時	学年	教科	単元名	校時	学年	教科	単元
1	1	社会	おうちのひと	2	2	算数	三角形と四角形
	1	算数	かたちづくり		4	社会	さまざまな土地のくらし
	2	国語	かさこじぞう		4	理科	空気や水のかさと温度
	3	算数	三角形		6	国語	石うすの歌
	4	書き方	筆順と字形		6	算数	対称図形
	5	理科	光				

研究協議会 教科別（国語、算数、社会、理科）

全体会 (1) 経過報告／本年度の研究の概要

- (2) 研究発表 「流れる水のはたらき」の自作ビデオを使って 本郷町理科部会
「食塩水のこさと重さ」 豊田、東野小
「授業改善と評価」 豊小

<公開研究会 12月6日>

各教育委員会教育長殿
各 学 校 長 殿

昭和 56年 11月 6日

広島県豊田郡豊浜町立大浜小学校長 松浦 宏 守
広島県豊田郡豊浜町立斎小学校長 藤原 恒 雄

公開研究会のご案内

日一日と秋も深まり、野山の紅葉が一段と映えわたる時、益々ご清栄のこととお慶申し上げます。
さて、本校におきまして、「子どもの能力を高める授業の創造」を研究主題にかかげ、関係各位のご指導のもとに教育実践にとりくんでおり、このたびつぎのような公開研究発表会をもつことにいたしました。その成果はまことにささやかなものでございますが、貴職をはじめ関係各位多数のご参加をいただき、ご指導賜りますようご案内申し上げます。

敬 具

記

1. 主 催 広島県豊高校区教育推進協議会（主管）
尾道教育事務所管内へき地小規模校教育研究連盟
広島県豊田郡豊浜町立大浜小学校／広島県豊田郡豊浜町立斎小学校
2. 研究主題 「子どもの能力を高める授業の創造」
3. 期 日 昭和 56年 12月 8日（火）
4. 会 場 広島県豊田郡豊浜町立大浜小学校
5. 日 程
9:00～ 9:30 受付 13:30～14:10 開会行事、研究発表
9:30～10:15 公開授業（1年国語、5・6年算数） 14:10～15:10 指導主事講話
11:20～12:10 国語研究協議、算数研究協議 15:10～15:20 閉会行事
12:10～13:30 昼食、アトラクション
6. 研究発表 「子どもの能力を高める授業の創造」 大浜小教諭 中島 棟幸
7. 司会並びに 尾道教育事務所主任指導主事 片山 富次郎 先生
指導助言者 尾道教育事務所指導主事 山本 輝明 先生
広島県豊田郡瀬戸田南小学校長 小早川 智三 先生
広島県豊田郡瀬戸田西小学校長 橋浜 克司 先生

【参加申し込み要領等略】

資料 37 推進協実践具体案

広島県豊高校区教育推進協議会 1981 年 度実践目標 《共に生きる集団づくりを》《教育活動の全領域で言語認識を》 実践具体案

広島県豊高校区教育推進協議会 実態調査研究委員会

まえがき

広島県豊高校区教育推進協議会は、「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」をテーマに結集され、当面、幼・小・中・高一 貫教育態勢づくりをめざして活動してきました。教育課題をより科学的に明らかにするために、'79 年度から 5 ケ年計画で実態調査を実施してきました。そして'80 年度、第一次実態調査報告書「教育課を求めて」を刊行すると同時に、その具体化をめざして、実態調査研究委員会が設置されました。以後、実態調査研究委員会は、委員会と学校現場との討論を交互に行う中で、具体的な実践目標の模索を続け、'80 年度末 2 項目の実践目標を設定しました。即ち、〈共に生きる集団づくりを〉〈教育活動の全領域で言語認識を〉でありました。

直ちに、第 22 回推進協協議会に諮られ、'81 年度推進協実践目標として各校共通して取り組むことが決定されました。'81 年度総会において、この実践目標をどのように各校の実践と結合させるかを、各校で討論した資料を持ち寄り、7 分散会に分かれ内容を深めました。その集約を受けて、実態調査研究委員会は 2 学期をめどに、実践目標をより具体的な実践へと展開するための目安として、実践具体案を作成し、全会員に配布することを決定しました。その文案づくりは、今年度設置が認められた実践目標研究会に委託し、その草案を討論して、予定より遅れましたが、本冊子の刊行となりました。本冊子は、あくまでも具体案であり、各校現場の実践の中でより深められた内容となることを期待しています。

こうした実践が展開できるのは、言うまでもなく、豊、豊浜両町の深い御理解と御支援の賜物であり、改めて感謝の意を表したいと思います。また、休日を返上してまで取り組んでくれた、実践目標研究会の有志にも感謝致します。なお、本文において、その引用を逐一お断りしていませんが、塩田芳久先生編著「学習と指導の心理学」をはじめ多くの著書の助けをお借りしたことを記し、お許しいただきたいと存じます。

1981 年 10 月 1 日

目 次

まえがき

第 1 章 総論

1. 実践の基本的な構え
2. 〈共に生きる集団づくり〉にかかわって
3. 〈教育活動の全領域で言語認識を〉にかかわって
4. おわりに

第 2 章 小学校における実践案

1. はじめに
2. 学級集団における言語活動と集団づくり
3. 言語力を高めるための手だて
4. おわりに

第 3 章 中学校における実践案

1. 自発的な行動や発言ができる場（雰囲気）をもつ学級づくり
2. 言語の獲得や拡大深化を図る授業づくり
3. 言語量をより多く身につけさせる手だて

第 4 章 高等学校における実践案

1. はじめに
3. 自主性を触発させるために
3. 集団討議を行うために
4. とりくみの具体例

第 1 章 総論（推進協会の主体を確立するために）

1. 実践の基本的な構え

本年度、本推進協が設定した実践目標は、児童・生徒を同和教育の観点から民主的な社会人に育成するための目標である。そして、その目標は実態調査の結果に基づいた科学的な資料によって裏付けられている。しかも、本年度推進協総会において、相互に確認し合ったように、まず何よりも私たち自身の実践目標であると捉えることである。即ち、私たち自身が＜共に生きる教師集団＞であり、＜生き生きした言語活動者＞であることの確認である。私たちの教育活動の基底であると同時に、最も緊急な教育課題である被差別部落の完全解放を達成する教育内容の創造は、私たち自身が自己との関わりにおいて部落問題が捉えられるかどうかには起点がある。つまり、私たち自身が限りなく解放者へとようになっていくことが前提である。また、教育が人間関係を基盤にして成立するものである限り、最も基本的な構えにおいては、私たち自身が体現者でなければならないことを示している。そうした私たち自身の実践目標を捉えたい。

次に、二つの実践目標は教育活動における二つの分野の目標設定ではないという確認である。基本的に統合論の立場に立っているのである。統合論とは、一見異なっているかに見える領域や分野の事象を集め練り上げて新しい内容を創り出すプロセスと捉えている。従って、二つの実践目標がより深く関わっている側面に着目し、その類同性を追求することから始めなくてはならない。差異を強調するところから導き出せる結論は、常に困難性の正当化になってしまい、私たちの創造を培うことにつながらない。このことを直視した取り組みの要請である。最後に、この実践目標具体案は、私たちの創造的な取り組みへの第一階梯であって、全てが今後に託されていることを確認したい。そのためには、私たちは今まで以上に柔軟な思考力と謙虚な学習態度を身に付けることに集中しなければならない。

2. <共に生きる集団づくり>に関わって

集団という概念を明確に規定することは、現在の私たちの水準ではかなり困難な作業である。従って、私たちのいう集団とは、当面、実態として存在している学校集団、学級集団、そして教職員集団等を意味するとしておきたい。また、私たちはしばしば「集団づくり」ということばをあたかも共通する概念を持っているかのように特定しないまま使用している。つまり、集団づくりといえ、どんな集団づくりなのかはお互いに理解できているつもりになっている。しかし、一步踏み込んでみると、その内容は曖昧であると同時に各人で違っているのが実状である。そこで、私たちの集団づくりを<共に生きる>と規定した、その内容を掘り下げておく必要があるように思う。

集団規範

どのような集団においても、その集団のほぼ全員によって共有されている、共通の行動の型や思考の様式があり、それを集団規範といっている。特に学級集団においては、この集団規範の質が学習態度形成などにおいて重要な要因であるとされている。集団規範は、その集団において自然発生的にも形成されるが、必ずしも望ましい規範が成立するとは限らない。また、集団規範から外れる者に対しては排除しようとするといわれている。たとえば、勉強はほどほどにしようではないかという集団規範ができ上がると、主体的な学習意欲を持っている子どもは、いい格好をするなどということになり、学級で疎外を受けるか、勉強をさせないように他の子どもが働き掛けるという事態が生じるようになるということである。従って、私たちはより望ましい集団規範づくりの指導者もしくは援助者としての役割を果たさなければならない。

集団決定

そうしたより望ましい集団規範づくりに有効な方法として、集団決定方式があるとされている。

集団決定とは、集団において、ある議題について集団討議をし、ほぼ考えがまとまった段階で、全員が一種の決意表明をする形の発言をし、集団決定する方式である。決定した瞬間に、新しい集団規範が発生するといわれている。それは、その集団の成員が自ら討議に参加し、決定に参加したという、自我関与の意識に支えられているからである。また、集団決定は個人的にはよいとわかっていても、なかなか行動として実行できないような場合、特に有効であるとされている。集団決定によって確立した集団規範が、より望ましい集団を形成し、そのことがまた新しい提起を呼び起こし、また集団決定され、より高い集団規範を創り出すという道筋を、一つの見通しとして持つ必要がある。

共に生きる

前述のような集団づくりの基本を押さえた上で、<共に生きる>をめざした集団づくりを考えてみたい。共に生きる集団づくりという発想は、いうまでもなく<同和教育の観点>から導き出された発想である。同和教育は、今日までの社会的な差別構造が生み出した諸矛盾のうち、被差別部落に集中的に現象している差別実態と、それに照応して作り上げられてきた社会意識として作られてきた社会意識としての差別観念とを、教育の側から解消しようとしている教育運動である。すなわち直接人権にかかわる緊急課題である。全教育活動を通じて、被差別部落の完全解放に寄与する社会的態度を育成することである。差別の実態を教え、差別の歴史を教えるといった知的な理解だ

けでは実態として存在する差別の解消につながらないことは、すでにこれまでの実践が明らかにしている。何よりも、差別の解消につながる具体的な行動を起さなければならない。そのためには、部落問題と自己との関わりを認識する、つまり自分の問題にならなければならない。そうならない限り同情的、恩恵的な取り組みに終ることになる。そこに眼を据えたあり方を、共に生きるという表現したのである。すなわち、誰かを「生かす」という他動詞ではなくて、自らが「生きる」という自動詞である所に着目したいのである。私たちが生徒を解放者にするのだという発想ではなくて、私たち自身が解放者になろうとする営みの中で、生徒と共に生きるのである。生徒も私たちも、全ての主体者を包含した構えを表現していると、私たちは絶えず確認をくり返すことが必要であろう。

そこで、この目標達成のために、どのように取り組みを推し進めていくかが課題となる。基本的には、誰もが相互に人間として認め合える人間関係を確立することである。こうした社会的態度を身に付けるためには、一つの課題をみんなで分担し合ったり、援助し合ったりして達成する。いわゆる協同事態を創出し、その成就感を共有させることが基盤である。今日の社会は、常に競争事態にあるといっても過言ではない。その中で、児童・生徒は、丁度社会意識としての差別観念から、知らず知らずに身に付くように、競争意識を身に付けていると考えなければならない。その結果、非常に早い時期から勝者敗者の選別が始まり、自己疎外を起しているのが現状であろう。

と、すれば、学校教育では、基本的に協同が基調でなければならない。従って、私たちは学校現場において、とりわけ学級集団を常に協同事態に置くように配慮しなければならないことになる。具体的には、学級集団がグループ活動などを軸に、お互いに協力し合って、始めて達成し得る課題を可能な限り創り出していくことである。その創造への道は、私たち自身が共に生きる教職員集団へと高まっていく道筋にあると考えられる。すでに、何度も確認してきているように、教育内容の創造は、教師自らが主体的な学習者であることが前提である。この場合も例外ではあり得ないし、特に態度的な学習である本実践目標においては、教師自らが具現者であることが必須条件である。

次に、私たちの最も遅れている分野であり、早急な進展を図らなければならない課題として評価がある。課題に対して協同した取り組みがなされても、その進展度、達成度等をチェックし、フィードバックとしていく機能としての評価システムの確立がなければ真の成就感を共有することは困難であろう。特に態度目標の自己評価システムの確立が成否のカギを握っているように思われる。課題解決への見通しを、協同事態の中で自ら計画し実践していく力は、自己評価力の裏づけなしには身に付かないのではなかろうか。そのことを考える時、実践目標達成のために、これから展開される実践を通じて、児童・生徒の自己評価力をどう高めるかが追求されなければならない。

3. <教育活動の全領域で言語認識を>にかかわって

はじめに述べたように、私たちは統合論の立場に立っている。共に生きる集団づくりは、生き生きとした言語活動を媒介にしてはじめて成立することはいうまでもない。その言語について考えておきたい。

言語認識

私たちは実践目標において、「言語認識」ということばを使った。私たちはここで認識論を展開

する力量は持ち合せていないが、やはり認識とは何かという共通理解が必要であろう。それは、今日かなり安易に「認識」ということばが使われ、言語認識でいえば、ほとんど言語活動ということばと同義語であるかのように使われている傾向があるからである。認識とは、国語辞典的な解釈においても、真実を見究めることであり、物事の本質を知覚することである。私たちがここでいう言語認識も同じである。言語を本質で捉えきるといふ、いわば最終到達目標を示していると解すべきである。従って、当面の私たちの取り組みとは、認識にまで高めていくプロセスの問題であり、日常的な用語としては、「言語・認識」と「言語活動」とを明確に使い分けることを提唱したい。

言語機能

言語は大きく分けて二つの機能を持っているとされている。つまり、相互に意志伝達をする、すなわちコミュニケーションの道具としての機能と、思考の道具としての機能とがある。もちろん、この二つの機能は密接な相互関係にあって、対象を他者に向けた場合と自己に向けた場合との違いであるといっても過言ではない。私たちの知識は、ほとんどの場合言語によって獲得されるのであり、特に人間の特性である抽象的な思考は言語なしでは成立しない。すなわち、言語の語彙の貧弱さは思考の貧弱さであり、論理や認識の低位性を意味しているのである。また記憶もできない。新しい言語を獲得するということは、同時に新しい概念を獲得することである。ただ、自分たちが獲得した語彙表現には差があるとされている。つまり、他の言語表現を理解することができる理解語彙と、自分が表現に使用することができる使用語彙とがあり、理解できるが表現することができない語群があるとされている。

表現力訓練とは、この使用語彙を増やす訓練ということにもなる。また、言語の獲得の道筋は、論理的思考を高める道筋でもある。幼児の一語文から二語文へ、単文から複文へと、より複雑な文章が理解でき表現できるということは、論理的思考が高まっていることを意味する。たとえば、「もし明日雨ならば・・・」という場合の「ならば」という表現が正しく使用できるようになるということは、仮定の論理を習得していることになるといえる。

このように考えていくと、私たちは児童・生徒に対してわかり易く表現してやる配慮が必要であると同時に、一方では彼らの論理的思考を高めるための、新しい言語の獲得を援助してやらなければならないことになる。私たちは、常にこうした基本的な押さえをしておきたい。

4. おわりに

本章では、きわめて概論的に基本的な構えを述べてきた。次章以降、それぞれの発達段階に対応した具体的実践案を提案しているのであるが、幼稚園の部が欠落している。これは実践目標研究会のメンバーに幼稚園教員の参加がなかったこともあるが、現推進協組織としての就学前部会において精力的に研究が進められており、その成果を待つという考えに立っている。

就学前部会においては、人間を豊かにふくらます「遊び」をどう創り出すががテーマになっていて、公開保育を軸に研究が進められている。私たちの求める、幼・小・中・高一貫教育態勢づくりの起点は、いうまでもなく就学前部会にある。この提案をたたき台に、最終的な実験案が作成される段階では合流され、一貫性のある態勢が確立されるはずである。そのためにも、本提案を日常の

具体的な実践とのつき合せの中で練り上げていくことを期待している。

実践目標の達成は、私たち自身が主体的な具現者になるかどうかにかかっていることを、最後に再び提唱して本章を終えたい。

第2章 小学校における実践案

1. はじめに

第1次実態調査報告書において、言語の向上が要請された。このことは、地域産業の斜陽が過疎に拍車をかけ、しかも親の労働過重が子供達の表現力、語彙力を奪っていることに起因するであろうが、教師がその欠落部分を共通な地域課題としてとりあげ、その解決の方策を求めて実践しなかったことも大いに影響していると反省する。そこで、確かな言語力をつけるには、第1に正しく聞きとる力をつけ、次に相手に自分の意志が伝わるように話したり書いたりする力、正しく読む力を養わせなくてはならない。

しかも、人間関係に極めて重要な影響をもつこれらの言語力を向上させるには、教科活動のみならず、人間関係を基盤とした集団づくりとの統合による取り組みがなされなくてはならないと思う。そこで、人間づくり、教育活動の基礎になる小学校、殊に低学年においては、自発的な活動や自治的な活動の芽を大切にしながらも、基本的なことを具体的に教え、実行させ、教えた通りにできたことを評価（ほめる）しながら、確実に身につくまで躓きたい。その日常的積み上げにより、中高学年ともなると教師が教えたよりも優れた考えや活動ができるようになり、仲間に働きかけたり、援助したり、激励したりして集団が高まり、学力も高まるものと思える。今年で、推進協結成以来4年目を迎えた。幼・小・中・高が計画的に、しかも継続的、系統的に教育活動をやっていくことの必要感に迫られ、以下、実践のための資料を作成した。自在にご活用いただきたい。

2. 学級集団における言語活動と集団づくり

(1) 気楽に話し合える雰囲気集団をつくる

① よい聞き手を育てる。相手の意見は、顔を向けて最後まで開かせる。

② 失敗しても、絶対に笑わせない空気をつくる。全員参加の授業をするために、初めは発言の質より量をふやすことに力点を置き、類似発言や的はずれの発言も許しながら、発言に抵抗をもたない子供に訓練する。また、まちがった発言、低次の発言、ピントのはずれた発言を授業の本流の中に位置づけて、授業の質を深めていく。そのために、まちがいこそ学習活動を活発にし、学習内容をより深めるために有効であることを学級全体で確認し合う。

③ バズセッションにより、全員参加の学習を押し進める。

班員相互の援助と連帯による発言運動に取り組む。

・リーダー育成（だれもができる）

リーダーを固定させず、だれでもリーダーになれるよう輪番制にして、一人ひとりの資質を高めるようにする。

・記録の仕方、まとめ方の指導

段階	リーダーを養成するための指導
①	リーダーとはどういうものか、教師が身をもって示し、ごく簡単な仕事について子供達に行わせる。……ごく少人数で(2~4人)
②	リーダーを教師が指示し、少人数のグループで簡単な仕事について活動させる。
③	仕事を少しずつ難しくしていくが、教師の指示や援助が多く必要。グループは教師が決めリーダーは互選させる。……4~6人で
④	班長を互選し、メンバーズは班が相談で決める。この班は、生活、学習全てにわたってできるだけ同一のものとする。……4~6人で
⑤	メンバーズを自由に相互選択し、リーダーも互選する。班の性質は④に準ずる……4~6人で
⑥	リーダー、メンバーズの選び方は、⑤と同じ。班の編成は、目的によって子供達が考えることもできるようにしていく……6人で

<班員としての任務>

- 1) 進んでグループの中に入ろう・・・仲間意識が大切。まずグループの中の一員であるという意識をもたせるように指導する。
- 2) 何のためにやるかをいつも忘れないようにしよう・・・集団を構成した目標、ねらいを確かに捉えさせ、逸脱した行動、活動や枝葉末節に囚われないように指導する。
- 3) 進んで発言しよう・・・集段のコミュニケーションを図らないと一致した活動はできがたいので、特に話し合いは積極的に行うように指導する。
- 4) 相手の話は終わりまで聞こう・・・話し合いは、相手に終わりまで話させ間違いなく聞きとらせるために「もう、おわりですか」と確かめるような指導をする。
- 5) 相手の意見を確かめよう・・・相手の立場に立ち、相手の意見をよく理解するように指導する。
- 6) 自分の考えをしっかり話そう・・・聞き終わったら話す番。聞く、話す、この順番をきちんと守ることによって、無駄のない効果的な話し合いができるように指導する。
- 7) 自分の意見の修正、訂正にこだわらないようにしよう・・・どうしても通さなくてはいけない正しい意見は別として、相手の意見によってなるほどと思うことは、感情にこだわらないで修正、訂正できる柔軟な態度を作るように指導する。
- 8) まず実行しよう・・・話し合いで決まったことは、たとえ自分の意見が違っていても、全力をあげて実行するように指導する。
- 9) 自分の役割分担をはっきり捉えよう・・・役割分担は所属感や仲間意識を高めるために効果的。役割、分担を作り、責任をもってやり遂げるように指導する。
- 10) 協力して仕事を進めよう・・・集団活動の成果は、協力し合うことによってその効果を高めていくので、協力したり、協力してもらったりという指導をする。
- 11) 相手の失敗をなじったり、けなしたりしないようにしよう・・・目的集団は、集団としての成果や向上も1つの習いなので、構成員みんなの失敗というように受けとめ、特定の個人に失敗の責任をかぶせないように指導する。

12) 互いに称揚し合ったり、労をねぎらったりしよう・・・「ありがとう」「ごくろうさん」「助かった」等々のことばをかけ合うように指導する。

13) 判断に迷うときには実践してみよう・・・活動の途中で判断がわかれたり、迷うことがあるが、実践して成功することがよくあるので、実践の大切さをわからせるように指導する

14) リーダーを盛り立てよう・・・子供達はみんなリーダーの経験をしていながらリーダーの苦労を忘れてしまいがちである。集団がよりよく活動し、効果をあげるようにリーダーに協力し、盛りたてていくように指導する。

15) 活動の成果を確かめよう・・・それぞれ個人として、また集団としての効果を確かめることは、次の集団活動をしていく上でも特に必要である。

—1年生の話し合い指導の例—

- 1) お話の仲間にはいろいろ。
- 2) さあ、こんどは聞く番、しっかり聞こう。
- 3) もう終わりですか、と確かめよう。
- 4) わからないことは聞き返そう。
- 5) さあ、こんどは話す番。順番を守ろう。
- 6) 相手にわかるように、はっきりと最後まで話そう。
- 7) 相の顔を見て聞いたり、話したりしよう。

④ひとりの問題でもみんなの問題としてとりあげ 助け合い励まし合う空気を作る。

授業の中での発言の場づくりについては、教師が厳しいまでに深い教材解釈と子供達の生活把握の上に立って発問の精選を行うと子供の集団思考が多様化するので、教師の姿勢も大いに影響する。

(2) 目的やねらいを協同して達成する集団を作る

目的集団とは、目的をはっきり持ち、班員が互いに協力し合って、意味のある行動をする集団のことである。

<所属集団の一員としての満足度を>

- ①よくわかる (認識)
- ②うまくできる (技術と作業)
- ③よくなる (態度)
- ④楽しい (解放感)
- ⑤役に立つ (責任感)
- ⑥認められる (承認)

<押さえておきたい役割、分担づくりの要点>

係活動等で、時には仕事をしているように見えない子がいる。注意したり理由を聞くと「やるものがない」「何をやったらよいかわからない」「〇〇さんがやってしまう」「みんながやっちゃって、ぼくのやるものがない」などという答えが返ってきたりする。これでは、集団の中で自己を伸ば

すどころか、集団の向上を阻害していることになる。しかし集団自体が何のためにできているのかを自覚していない場合は論外として、目的やねらいに向かって活動している集団が一向にその効果があがらない原因の1つに、構成員の役割分担がはっきりしていない場合が多い。だから、構成メンバー一人ひとりに役割分担を持たせ、集団の中で自分のポジションをはっきりさせて、そのことをやり遂げなければ集団自体が困るということを自覚させれば、所属感、責任感もわき、やる気を起こすようになる。そこで、その役割分担を作る時、特に次のことがらを押えておきたい。

- ①何のための集団か (目的・ねらい)
- ②何をやる集団か (活動内容)
- ③どこでやるか (活動場所、役割、分担、場所)
- ④いつやるか (日時、集団として、役割分担として)
- ⑤だれがやるか (集団として、役割分担として)
- ⑥どのような方法でやるか (集団として、役割分担として)
- ⑦やった結果をどうするか (集団として、役割分担として)
- ⑧次の活動をどうするか (集団として、役割分担として)

<授業規律の育て方の一事例>

授業を教師と共に作っていくことが、自分達が大切にしなければいけない権利なのだと思えらるる子供に育てたい。しかし、授業を始める前にすでに分裂が始まっている。前時までの学習がわかっていない子、テレビも見ているような虚ろな目で挨拶をする子、教科書等の学習に必要なものを忘れてきた子、ノートや教科書を開こうとせず、スタートダッシュのきかない子等々いるのである。

だから、こうした分裂の様相を明らかにし、それに対応した指導をしなくて、全員参加、全員集中の授業を作り出すことはできない。

—全員参加の授業をつくるために—

1) 管理的目標を立てる。

授業を成立させ、同時に子供達が自分達の手で自分達の集団を管理する力をつけるために、ベルが鳴ったら席に坐り、道具をそろえ、日直によって授業が開始するというような管理目標を立てる。

2) 「教えたこと」「教えねばならないこと」を、子供達が学びたいものに転化する。

3) 子供達を個々ばらばらの群れの状態おかないために、教え合い、協力し合う関係(関わり合い、応答し合う関係)を作り出す。

このような関係の中で、全員参加の学習活動を子供達に保障することができると思える。

—生活の立て直しを— (学外の生活の充実を)

自己管理能力に欠け、生活にメリハリがない子、授業中集中力のない子の背景には、子供達の生活のリズムの乱れがある場合が多い。両親の協力をもとに、「生活のリズム調査票」をつくり、学校外での生活=家庭生活を確かなものにする。

—自分にこだわることから—

忘れものをして、零点をとっても平気な無感動な子がいるが、こだわらぬ性格が学習意欲を欠く要因になっていると思える。そこで、教師は学級づくりの中での集団的な活動の中で豊かな感情を育てるように仕組み、教科的な中でも「くやしい」「できるようになりたい」「できてうれしい」などの経験を積み上げさすよう配慮する。

—学習を記録する—

子供の内側からつき動かすものをしっかりと育て、より積極的に目的意識的に学習に参加する姿勢を育てることをねらって「学習記録ノート」を作らせる。まず始めは、その日の学校での授業を記録（学習したことわかったこと、わからなかったこと）させる。次に、授業に対する感想をも書かせる。さらに、何がわかり、何がわからないのか、分からなかったのはどうしてなのか、できなかったのはなぜなのか、今度はと、自分の授業への取り組みを分析させ、わかるため、できるための努力をし、さらに記録していくように指導する。

また、その日の授業で結論の出なかった問題や、読みとりの違いなどの課題を投げかけ、それについての意見を書かせる。子供の学習記録は、教師の授業の記録でもある。授業への要求が出されると、それをみんなに返し、討論を組織する。こうした学習スタイルは、子供達の学習したいという要求に支えられ、本物になっていく。これにより、授業を妨害する者に対して怒りをぶっつけ、怠け者へは厳しい批判をし、学ぼうとする意欲のある者へは、暖かい援助をさしのべるという学習規律ができる。

<きまりを守らない子に対する配慮と手だて>

乱暴、けんか、約束を破る、規則の無視、うそ、反発反抗など、反社会行為をする子の特性

- ①極端な情緒的障害が自己抑制をきかなくさせている。
- ②自己の価値を見失わせている。
- ③対人関係に礼を失わせている。
- ④利己的、自己中心的な判断をさせている。
- ⑤生活の乱れに気付かず、耐久性を失わせている。

—問題行動をする子に対する見方、考え方の基本—

まず、「問題行動をする子」に対する集団指導の基盤として、「問題を背負わされている子」として捉える必要がある。次に、「この子がいなかったら、このグループがずっとよくなるのに」「この子が学級にいるので、トラブルが絶えない」といった排他的な発想をもつのでなく、「A君の問題が、私達にじっくりと考えを与えてくれた」「A君の意識の改革はグループみんなの成長の核となっている」という考えをさせる。

—問題行動の奥にあるものをさぐり出すまで話し合う学級集団に—

話し合の過程で、問題の結果だけで論議するのではなく、A君に問題を起こさせた原因や動機をたしかめてみよう」といって一石を投じ、同じ弱い人間として客観的に判断させる。

—人権学習、学級会、学習指導等をつなげ、内面化や実験化を図る—
—心の通う個別指導を—

- ①家族の人と本音を語り合い、互いにもつ問題点を明らかにする。
- ②作文や日記を通して、子供と心の通じ合いをする。
- ③子供に「まちがいはまちがいで」として納得できるまで注意し、一貫した態度で厳しく当たる。
- ④行為の理由や背景を問い正し、注意した後は親の心を聞かせる。
- ⑤平素から帰路をもとにしたり、校外での行動をもとにし、本人の考え方をつかむように努める。
- ⑥やる気を起こさせるために、日常生活や学習のできそうなめあてを与え、そのめあてに近づく学習の仕方や行動について教える。

—きまりを守らなかったために、本人自身が悔むような事実を体験させる—

- ①できたことを認め合う集団をつくる。
- ②本音を書く日記指導をする。
- ③逃避する子に、心の支えとなる友達を近づける。
- ④逃避者をグループで認める機会や場を多くつくる。
- ⑤劣等感を除去するために、直接劣等感を感じる分野以外で良さをほめたたえる。
- ⑥逃避的、非社会的な行動のもとになる家庭へアドバイスをする。

—グループ落書帳・グループ新聞—

グループにそれぞれ落書帳を渡し、その落書帳には何の制限も加えないで、何を書いてもよく、記入者もグループに一任。しかし、落書帳は毎日提出させ、担任は必ず目を通す。そして、書かれている内容の中で、教師の指導が必要だと思われる問題がある時には、随時話し合う時間を見つけて話し合う。すると、回を重ねるごとに、子供の学級意識、グループ意識が定着してくるが、それに、この落書帳をもとに、グループ新聞を月1回とか2回というように発行する方向へ指導する。担任は、グループカラーのいっばいの記事の中からグループの意見として載せられている部分を取り上げ、クラス全体の話題として取り上げる。すると、グループ相互の意見の交換も生じ、学級内の問題に生き生きと取り組む雰囲気生まれる。また、グループへの所属感も強まり、自己の立場もグループを通して認識していくようになる。

—学級日誌の活用に工夫を—

学級日誌は、その日のできごとや問題点、感想意見だけに内容を絞って形式を作る。この日誌を、担任は必ず目を通しておき、翌日記入者によって発表させ、全体の意見を求めさせる。すると、一人ひとりが学級集団に適応し、一人ひとりの人格が生かされ、しかも集団の目的に向かって生き生きと活動できる学級になる。

<豊高校区の小学校での取り組み>

過疎の中にあって児童も減少の一途をたどり児童数が2名しかいない斎小では、週に1日大浜小で生活を共にさせることにより、社会性を育てようとしている。また、沖友小では、SFを利用して意見交換の場がもてるような学習指を試みている。また、登校時、休憩時の集団活動、業間体育、

掃除などで縦わり集団を作って活動させている学校もある。

一人ひとりが大事にされ、向上するためには、困難なこと、我慢をすることもあろうが、互いの願いを支え合っているように教師と子供の連帯による学級を作るよう取り組もう。

3. 言語力を高めるための手だて

今回は、「話し方」「聞き方」に焦点を絞って、小学校として身につけさせたいことを記載してみた。つまり、下記のような集団思考を意識した発言形式をのみこませ、発言訓練をそれぞれの学習での具体的な状況の中でさせるのである。そして、これらの形式が身についたら、個性的発言ができるよう指導していきたい。

<話し方、聞き方の指導>

		低学年	中学年	高学年
話し方	話	みんなの方を向いて、大きな声で語尾まではっきり話す。	大事なことをおとさずに考えをまとめながら話す。	相手にわかっているかを確かめながら話す。
	自分の意見を述べる時	はい～です。 僕は～だと思います。	僕は〇〇だと思います。そのわけは～です。	僕は〇〇だと思います。その理由は～です。
	付け加える時	〇〇さんに付け足します。	〇〇さんにつけ加えます。	今のことに付け加えて～もあると思います。
	質問するとき	〇〇さんに尋ねます。	〇〇さんに質問します。～とはどういうことですか。	〇〇さんの言ったことは～ですか。 ～の所をもう一度言ってください。
	賛成・反対を表す時	僕は〇〇さんに賛成（反対）です。それは～だからです。	僕は〇〇さんに賛成（反対）です。それは～だからです。	僕は〇〇さんに賛成（反対）です。それは～だからです。
聞き方	話す人の方を向いて 終わりまでしっかりと聞く。	相手の言おうとすることをまとめながら聞く。聞いたことについて、自分の意見をもつ。	相手の言おうとすることをまとめながら聞く。聞いた事柄に自分の意見を持ち、大事なことはメモする。	

表のように、発達段階に即して発表の仕方を身に付けさせることが大切である。しかし発言形式にこだわりすぎると、内容が希薄になることもあるので、まず自分の意見がはっきり言える子供にすることが先決である。

<発言しない子どもの指導>

発言しない子どもについては、内気か、怠惰か、生育歴か学級集団に問題があるのか、その要因を探り、その理由に立っての意欲づけが大切である。

<字が読めても内容が理解できない子の指導>

身体を通して動作化、劇化させたり、吹き出しなどに書かせると、自分の気持ちが表現しやすいのではないかと。

<豊高校区の小学校での取り組み>

読字、書字力をつけるために、ドリル時間を設けている学校、読書記録表を作ったり朗読集会、放送朝会をしたりして読むことに力を入れている学校、自分の気持ちをうまく話せ、しっかり聞きとる子に育てるために、1分間スピーチをしたり、表現朝会をしている学校、生活をしっかり見つめて表現できるように、日記、班ノート、学級ノートを書かせている学校等々あり、各校共、言語指導に力を入れているようである。継続指導することにより、効果が現れることを期待して・・・。

5. おわりに

教育は、毎日毎日生き物であり、後戻りができない作業である。だから、我々教師は、子供個々の成長、発達に責任をもった営みをしなくてはならない。このことは、自主的に集団の中で伸びていくことができるような学級経営により、子供達にみんなと共に勉強する楽しさ、考える楽しさ、活動する楽しさ等々を味わわせることができると思う。そしてどの子も、言うべきことは言い、やるべきことはやり、自分のことだけでなく、他の人のことをも考える子に育ててほしい。そして、さらに少しづつよい方向へ変わっていく自分を常に見出せる子に育ててほしい。そのために、我々教師は、子供の仲間になろう。子供の身なって考え、子供に自信をもたせよう。結果を急がず、プロセスを見守ろう。助言を適切に与えよう。そして、地道に息長く実践していこう。

第3章 中学校における実践案

はじめに

豊高校区内の児童、生徒の言語力にいくらかの低位性が、実態調査を実施する中で指摘された。この実態の背景の中には、いかほどかは、この地域のもつ実態はあるとしても、これらを克服しようとする教育活動の中の欠落していた部分が、その背景となつてはいなかったかを問う事である。それは、豊浜、豊町内の幼・小・中・高という校種の違いや、小地域による多少の実態の差異性はあるとしても、共通な実態としての「言語力」の問題が共通な地域課題として積極的且つ具体的な教育実践目標として設定され、協同的に解決への方策を一貫して求めようとした事はなかったという事である。しかし、豊高校区教育推進協議会が1978年4月「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を研究主題として発足し4年目に至った1981年度に共通実践目標としてとりあげられ、その解決の方策を求めて実践に向かう志向が確認された事は、地域の教育づくりの道を辿りはじめた事である。

課題の把握

さて、「言語力」の問題を課題とするという事は、何をどのように内容とするかを明確にする事が必要である。それは、言語は、一人で考える時も思考の媒体として働き、また対人関係の中で相互に情報を伝達し合う媒体として働き、相互間の認識を高め、理解を深める役割を果しているからで

ある。更には、このような言語力も、基本的には、所詮人間は集団的であるという条件や、集団内の人間として、よりよく生きるという活動の中で生まれ、育ち、高まる性質を内蔵している以上、「ともに生きる」とか「ともに伸びる」「ともに学び得る」という集団の形成や成長を抜きにしては課題とはなり得ない。

従って、I. 言語が生きて働く、言ってみれば、言語が使い合える、そしてさらにより広く深く正しく育ち、自己の内容概念としての言語として学習され、磨き合える、こうした共に鍛え高まり合える場としての集団づくりへの方策と、II. 言語の基盤となる生活経験の拡大深化を図る授業づくりへの方策等に焦点をおいて実践目標の具体化を進める。

I. 自発的な行動や発言ができる場（雰囲気）をもつ学級づくり

(1) 学級の社会的構造の捉え方と実態

学級は、単に枠づけをされ所属した集団（所属集団＝メンバーシップ・グループ）から、構成員個人が、自分自身と共通の興味・関心・価値の方向を内蔵していると感じ、また、その個の行為や行動への案内・示唆・援助、即ちガイドし合えることを期待する事のできる一定の評価の基準ともなる集団、即ち準拠集団（リファレンス・グループ）へと形成・発達へ向かうものである。このような成長過程にこそ、言語が自由に使い合え、集中（収斂）思考（一つの正答を求める思考）から、拡散思考（多様な方向で思考する創造的思考）を経緯して、言語は拡がり深められ、正され、育つ条件が具備されているといえる。従ってまず、学級がどのような社会集団構造を現にもっているかを具体的に捉える事が、学級づくりの一步でもある。それには、教師の観察もさることながら、何程かの測定手段も有効である。

幸いにも'79年度より実施されている実態調査にはこの社会的構造の調査も含まれ、'79年度段階の実態の現状の概要も提示されている。調査の実施と整理の仕方等についての詳細は、実態調査研究報告書（1979年）pp.55～75に譲るとして、枠組みと、その年度次における中学校の実態傾向を資料として、今後の学級集団づくり（形成と発達）への方策を求めたい。

(2) 構造的に捉えようとする枠組み

領域 ①学習指導領域 ②生活指導領域 の2つの側面を捉える。

次元 ①対人的接近次元：対人的な感情的結合関係の次元（これにより、成員間の心理的な索引－反発の関係を知る次元）、②勢力状態の次元：成員が他の成員や学級集団に対して影響を及ぼし得る潜在的な力（勢力）がどのくらいあるかの次元（集団内の成員間のリーダーシップと深く関わる次元）、③目標志向の次元：個々の成員が目標（授業でいえば内容の習得目標）に向かってどれ程積極的な活動をしているか、また積極的な態度をしているかに関する次元である。④更には、集団の凝集度：集団内の成員間の心理的結びつきの度合いである。

(3) '79年度の実態調査時点での中学校の概要

①対人的接近次元

- (ア) 学習指導領域と生活指導領域の結果は非常に類似した傾向を示した。
- (イ) 全般に小学校に比べると、学級差が小さい。
- (ウ) しかし、年齢発達の面で後のものが、相対的に社会的構造が未発達という傾向が伺える。

②勢力次元

- (ア) 両領域でともに標準偏差の軸で学級差が大きい(標準偏差が大きいという選択の数にバラツキが大きいということであり、この軸で学級差が大きいということは、被択数が似通っている学級、バラツキの大きい学級とで、その差異が大きいという事である)
- (イ) 全体に1年生は分布の中間に位置していた。
- (ウ) 2年生で一部に低い値を示す学級がある。
- (エ) 3年生は、勢力が一部の者に集中する学級もみられた。

③目標志向次元

- (ア) この次元の分布は①②に比して最も広い。(学級の分布が広がっている)
- (イ) 3年生は右上寄り(一部の者に非常に多く選択が集中しており、被選択の少ない者との間にその差が大きいことを示し、少数のスターが存在する構造である)
- (ウ) 2年生は左下寄り(平均値、標準偏差値ともに小さい学級である。学級としては最も未発達な構造であった)
- (エ) 3年生で一部生活領域でも右上寄りに位置づく学級もあるが全体的には、生活指導領域での目標志向活動は低調である。

④凝集度からの考察

- (ア) 凝集度には学級間で差がみられる。
- (イ) 相互選択推定値も低く、左上に位置する学級も、必ずしも望ましい学級構造を意味していない。
- (ウ) 生活指導領域では、全体にさらに低いところに分布している。
- (エ) 凝集度がほとんど0に近い学級があるのは好ましい傾向ではない。

等と、ある時点での学級集団の状況がさまざまに描き出されている。これらの実態をもとにして、学級の社会的構造を、学習指導、生活指導の両領域において偏りなく、より発達させるかが課題である。

(4) 学級の社会的構造を発達させるには

集団の成長や発達を捉える窓として以上の①～④の次元をとりあげた。しかし、これらは分析的視点であって、その要素は単独に存在するものではなく、相互的に的に関わり合い且つ統合的に発達を促進している事を理解しておきたいが、所属集団を準拠集団へと発達させる実践目標設定の視点としたい。

①実践目標達成への方策

- (ア) 対人的接近を深める
- (イ) 勢力状況の均衡のある発達を図る

(ウ) 集団の目標志向を高める

(エ) 凝集度の評価

(5) 対人的接近を深める

人は誰でも新しい事態に当面すると、強度な緊張感に見舞われるものである。とりわけ人間関係が未発達な場面では特にそうであるし、所属集団についていか程かの先入の情報があると一層と警戒するものである。このような防衛的心情からか互いを支持しようとする社会的心情に変容しようとする営みが学級経営や学習経営の基本である。いってみれば、どのようにして対人的接近を深めるかである。この初点でいくつかの実践目標を挙げる。

①出会ったら互いに声をかけ合う

非常に単純なことであるが、対人的親近感を作り出す効果は大きい。とくに例えば、前日に気まぐずくしていた者に意図的に声をかけると自分でも相手に少しは近づいた感じになるし、相手の気持も緩和していくものがある。

②バズ集団を育てる

生徒はだれでも、集団に所属することにより何か自分に満足するものを求めているわけである。それは、「自分の持っている課題や目的が達成される期待」であり、「自分が自由に参加でき、何か自分が役立っていると感じ、またそれによって それらが正当に承認されることで自己を知りたいと期待し、その満足を求めている」に違いないという事である。

しかし、1学級という大きい所属集団 の中では、なかなか自発的な行動をおこしにくいものであるし、自分の活動する場も限定され勝ちで、期待や満足が与えられない事が多い条件がある。そこで、気楽に自由に話したり聞き合ったりすることのできる対話集団（バズセッションが活発に行なわれる集団という意味でバズ集団）づくりを提案するのである。そのために

(ア) 人員 対話の交流度からいうと二人でという事も考えられるが、内容の広さ、深まりを考慮したり、対人的接近を拡大するという見地からすると、2倍の4人、3倍の6人が有効であるという研究がある。

(イ) 目的 バズというと自由に対話するといった事から、種なしで自分勝手に話すといったものでない。前述したように、個人に社的態度を形成させるための手だてである。従って必ず一定の課題が位置づき、その課題の解決のための手だてである。従って必ず一の課題が位置づき、その課題の解決のための社会的活動である。

③社会的活動をさせる仕組み

(ア) 役割づくり バズをうまく進行させるための司会的役割はまず欠かせない。普通バズ長と呼んでいる。そのほかには状況によって記録の役割や活動状況を評価する役割を設けることや、活動の流れや評価をまとめて書記的役割とまとめた分担を作ることも、色々な立場の役割を経験する機会を与えるという意味で大切である。

(イ) 課題づくり 課題が明確であることは最も基底であるし、更には個々の生徒がその課題を充分納得している事である。どこから課題が出るかは多様であるが、大まかには、①学級として

取り組む課題、それを下位集団として取り組む、②グループが受けもつ役割として取り組む課題、③グループ自身の成長のために発生してくる課題、④成員からグループに提示される課題等になるかと思えるが、小人数の中で充分バズ等によって共有化させる操作は欠かせない所である。

(ウ) 規範づくり 規範というのは所属している成員がやるから当然自分もやらねばならない。自分もするからその成員も行うという集団がもっている規準のことである。このような規範は、バズ集団で自分達の社会的活動を評価し、より高い集団となるために、どこをどのようにするか目標を設定し、じゃあこうしようとバズを通して設定し、一定期間の社会的活動を経て集団の成長を評価し、漸次発展的につくらせたいものである。その基本的な視点として

- ・私たちのグループは気持ちがよく合うか、よく合うようにするには
 - ・私たちのグループは、発言に偏りはないか、気楽に発言できるようにするには
 - ・私たちのグループは、個人が課題に取り組んだが、お互いに励まし合うようするには
 - ・私たちのグループは、みんながわかったり、できるようになったか、そうするためには
 - ・私たちのグループは、どんなグループの状態か、より高めるためには、
- 等をあげて、グループの活動を促進させる。

④話す、聞くことの訓練

まず話す、聞くことの訓練で、常に強調しておかなければならない事は、

(ア) 話す立場とそれをうけとめる立場、即ち聞く立場を厳然とすることである。そのために、挙手をして、「私に言わせて」とか「私が言います」とか発言する事を明らかにさせる事である。そして聞く人を自分の方にひきつけさせるためには

- ・自分の立場を明らかにして話させる。例えば、前の発言に対して自分は、賛成、反対、質問、補足、修正、確認、まとめ等の立場を明らかにさせる。
- ・自分の発言の立場を明らかにして話させる。例えば、提案、意見、感想、報告、説明、あるいは個人の意見とか、グループの意見等を明らかにさせる等。具体的には、次に示すような前置きのことばを使って話させる。

「わたしも〇〇に賛成です、なぜかというと・・・」

「〇〇さんにつけ加えて・・・」

「〇〇さんの答え（意見）と似ていますが、わたしは・・・」

「わたしたちのグループでは、話し合いの結果・・・の意見や・・・の意見もありましたが次のようにまとめました。それは・・・」

「〇〇について、わたしの調べたことを発表します。それは・・・」

- ・言葉のおしまいが消えないように話させる。
- ・相手のことを考えて（聞きとってくれたり、メモをしったりする人もいる等）ゆっくりと相手を見ながら話させる。

以上は話す立場の堅持のための訓練の視点をあげた。

(イ) 聞きとろうとする態度や技能を訓練する。

これは自発的な問題意識を高める事にほかならないが、まず他を認める態度を高める事でもある。

- ・わけでも、バズセッションにおいては、小人数であり、物理的にも近接であることなので、話し手に気楽に話させるという態度、うなずくとか相槌をうちながら聞かせる事は大切である。
- ・自分の経験や既知のものと比較しながら、共通している点、新奇なところ、わかるところ、わからないところ等、メモをしながらうけとめさせる。
- ・何が言いたいのか予想しながら聞く。
- ・どんな順序で話したかを追いながら聞きとる。
- ・人の話しをうけとめたか否かは、質問や聞きかえしができたり、まとめができたり、次は自分が発言者となり得る情報づくりができたかどうかで自己評価できるわけである。大変難しい事であるが、メモのしかた等も指導したい、しかし、あまり強調すると聞きとる力を阻害するおそれもあるのでできるだけ最小限度とした方がよい。

(ウ) バズセッションの指導

(ア) (イ) では、話し方、聞き方の原則的な訓練の視点についてのべたが、これらを基本として、小人数でのコミュニケーションの訓練では

- ・全員参加（全員発言）を目標とする。
- ・発言を独占しない。
- ・脱線や巻き戻しに気づくと進行を助ける発言をする。例えば「〇〇さん、話しをもとにもどすかどうか」とか「まとめるとどうなりますか」と、か「〇〇さんの意見は・・・」とか、丁度司会的発言に含まれる内容ではあるが、メンバーのだけでも進行的発言が促されるよう留意する。
- ・コミュニケーションが切れ目なく進んでいくためには、話した後、「次の人どうぞ」とか「〇〇さんどうぞ」等のようにほかの発言を誘引するよう強調する。
- ・とくに発言の少ない人に発言を誘うような努力をバズ長には訓練をする。
- ・グループでは、バズセッションのまとめをする事は大切であるが、一つの正答を求める事を焦らず、わからないところ、不十分と思えるところがどんな点やどんな所か等がメンバー全員に共通点として把握される方が大事である。それは、グループの問題として、他のグループへ問題として提示し、学級集団として解決していく課題提示となるからである。
- ・ことに留意したい事は、「わかりません」「考え中」という発言を是正させるために「〇〇の点がわかりません」とか「〇〇とも考えられるし、〇〇のようにも思えて迷っています」といったように、考え中、わからないことの内容を発言するよう強調する。
- ・バズセッションの評価 バズセッションの評価は、実は、参加メンバーが、いかに目的をもって集団に参加し、問題や課題の解決の方向に協同し、相互の高まりへの期待へ到達しようとしているか等、集団の社会的構造の発達のバロメーターともいえるし、その状況を把握することは個人の学習態度や生活態度の指導の視点の手掛かりともなる。したがって、バズセッションのもとになる、話す、聞く態度や技能の自己評価の視点を挙げる。

発言の条件

聞く条件

発言者の準備は

→ 何を言おうとしているか関心を持つ。

受け止めてくれる状況 → 相手の方に姿勢を正した。
発言を促してくれる状況 → うなずいたり、あいづちを打ちながら聞いた。

発言者の立場は 聞く準備
自分の立場を明らかにした。 → 目当てを持って聞いた。
自分の発言の立場を明らかにした。 → 質問や聞き返しができるように。

発言の種類は 応答の準備をする聞き方
説明をした（細くした、修正した）。 → 共通点を見つける。
質問をした。 → 差異点やその根拠をまとめながら聞く。
まとめ的な発言をした。 → 受け止めて、同意、反論、補足を考えた。
進行的な発言をした（ほかの発言を促す） → どうすべきかを考えた。

発言の仕方 まとめながら聞く
相手を考えながらゆっくり話した。 → 相手を見ながらメモ等しながら聞いた。
しまいまではっきりと言った。 → うなずきながら聞いた。
順序立てて話した → 何をどんな順序で言おうとするか考えて聞いた。
等、話す立場では、また聞き取る立場ではどうかの基本的なことをある時期に自己評価させることにより、その態度や技能に関心を持たせるようフィードバックさせる。

(6) 勢力状況の均衡のある発達

リーダーシップを高めるということである。最も必要なことは、集団指導における教師の立場と態度である。学級経営にしろ、授業活動を促進するにしろ、最も影響を与えるのはこれらに対応する教師の態度である。すべての勢力が教師に集中していると、生徒は受容的態度を示し、言われなければ活動しなくなる。したがって管理はしやすいが、自主自発的能動的な集団形成は難しくなる。

どの段階でどの範囲と内容で、教師の勢力を生徒に分散し彼らの役割と責任と協同によって開かれた集団へと発達させるかがこの次元の課題となる。そのために、

①係活動の役割内容とその役割の位置づけを明らかにする。そのためには、教師は集団で達成しようとする目標を十分に理解させ、そのためにどんな役割分担を組織したらよいか、そしてそれぞれの役割内容の方向を示唆し、役割分担を決めさせ、さらに「私はこれこれをします」等と自分の役割内容をみんなの前で自己表示させる。このようなことを集団決定させるという。こうすることによって、自他ともに、参加（責任）、リーダー性と受容（承認）、フォローア一性の関係が成り立つようにする。

②係活動の実践を評価する。

係活動に意欲を持たせることは、個人を安定させるためにも欠かすことのできない指導の部面である。教師は個人の活動の状況を常に観察し、やってくれたこと、発想に富んでいること等を、本

人に、さらにはグループや学級全体の中へ提示したりすることにより、即時的な評価をする。

また、グループでは、係の活動をそれ相応に評価させるようにする。ところが案外けなし合うことが多いようであるが、そんな時は、教師は係の立場に置かれている側に立って、助言や支持をしてやる指導が大切である。

係活動の自己評価や相互評価（A・B・Cの3段階評価）

- ・何をするかわかっていた
- ・どのようにするかわかっていた
- ・何をするかみんなに表示した
- ・どの程度役割を果たしたか
- ・認められたか
- ・どうしたらよいか
- ・役割はやりやすかったか
- ・みんなの応援があったか
- ・みんなの協力はあったか

等、個人が自己評価して、グループ等で相互評価させる。教師はそれをもとに指導の視点をつかみ、承認したり、助言や指示等を与える。問題を強く感じるグループ等は教師が参加してグループ相談等の指導を与える。その際、とかく個人を否定的に見たり考えたりする意見が出がちになりやすいが、そんなときは教師が司会的役割をして、個人の良いところをメンバーに一つずつ述べさせ、教師がそれをまとめて、本人やメンバーに返してやるなど、個人を理解させる方向に助力することが必要である。

このことにより、本人はもちろん、他のメンバーも、教師の指導を理解するような方向に変わってくる。ことにこうした指導の後、どんな変容を示すか、本人に「どうだその後は」とか「〇〇は協力してくれているか」等の発問をして、指導の手を続けるようにしたい。

③グループの組み換えは、一定の期間を置いて、そのグループはどんなグループに発達したかの評価を行って実施する。

- ・誰でも気軽に思っていることを出せたか（自由さがある）
- ・どんな考えでもよく聞こうと努めたか（受容性がある）
- ・司会の世話やまとめに力を合わせたか（役割が果たされる）
- ・考えを一層よいものにしようと努めたか（志気や高まりがある）
- ・約束はみんなで作ったか（規範がある）

3段階程度に自己評価し、さらにそれを出し合って、ありのままの自分たちのグループをイメージ化して、次の組み替えではどの点でどのようにする等の集団決定をさせて「じゃまたね」等ことばを交わして組み替えに移る。

新しいグループになると「これから〇〇期間、私たちのグループは」と目標を立てさせ、そのために私はどの頃のどんなことに努力するかを表示させてグループの規範を決めて活動させる。このような手立てをする中で、あるグループではリーダーシップをとりにくかった生徒もリーダーシッ

プをとるようになる。従って、学級内の勢力が偏ることなく均衡化してくる。

(7) 集団の目標志向を高める

今まで对人的接近を深め、集団内での自己の持つ役割活動を促進し、集団内の勢力状況の幅を持たせ、均衡のある安定したものにするべく、ことにコミュニケーションを盛んにするための手法としてバズを活用したグループ作りを強調したが、個人の目標が集団内の相互作用によってより達成した満足感や成就感を得ることなくしては、集団への価値感や所属感も薄らぐことになる。したがって、個人の願いや目的がどう共通化し、焦点化しているかが第1点であるし、次には集団の規範によってより集団を高めようとする協力体制が作られるかである。

①何としても、中心となることは「取り組むべき課題」が明確であることである。そして「課題が明確である」ということは、

- ・より具体的であるということであり、
- ・取り組みの見通しができるということである。
- ・見通しがあるということは、できそうか否か、どうしようとするのかの態度を決めるということであり、
- ・その態度とは、解決に向かおうとする意欲があるということであり、
- ・そして、一人ではできないが、〇〇となら、とか、〇〇を参考にすればひょっとしていけるかもしれないという洞察や企てがある状態のことである。

したがって、課題づくりと課題の提示（課題をしっかりと理解させる）のあり方は教師の重要な役割である。ことに、生徒に課題をしっかりと理解させないでは、生徒は取り組みに当惑する。

②そこで、提示の仕方の基本を提示しておく。

- ・課題とその目的を明らかにする（この課題をやると～ができる。分かるようになる等）
- ・課題への取り組み方を示唆する（一人で、〇〇を用いて、等）
- ・停滞した時の取り組み方を示唆する（ノートに印をつけておきなさいとか、まず一人でやる、次にバズでやるから～しておきなさい等）
- ・初めから課題をグループ等で共通化させたり、分担して取り組ませたりするときは、何を解決するか、どこが一番の問題点なのか、何をを使うか等を示唆する、とか、まとめはどうするかを具体的に指示する。
- ・全員に指示が徹底しているかを確認すること、等である。

生徒が係活動などで課題を提示するときは、上記の要領をしっかりと納得させて提示する指導を重視する。

③集団の規範作り

グループであれ、学級集団であれ、集団の目標志向を高めるためには全く欠かせないものである。これは十分な教師の配慮のもとに、その集団自体でバズをさせて設定させる。そして規範の良しあしは、そのため集団がどう発達したかをまた集団で評価させることである。この時「～はしない」といったような禁止的、否定的な内容でなく、こんなときは「～しよう」というような発展的、肯

定的な発想で規範作りをして、それに基づいて自己評価、相互評価をさせ、それをもとに集団決定をさせる。そして、だれがどのように頑張ったか等の事実を多く記録させ、自分たちのグループや学級の自信を獲得させる。

II 言語の獲得や拡大進化を図る授業づくり

1. はじめに

言語の獲得や拡大深化を図るためにというテーマでまず、言語が気楽に使え、交流する中で役に立つ言語も習得されるものであるという考えで、集団をどのように発達させるかを取り上げた。

しかし、何といても言語の拡大や深化は授業を通して錬磨され、習得されるものであることには違いない。とはいつても学習が成立していない集団づくりをくどく強調し、とりわけバズグループ活動を適切に活用することを力説した。そこで、授業の中で、何を目標として、どこで、どのようにバズグループを活用するのかの実践目標を提示する。

- ①全員参加の学習状況を実現する集団形成を図る。
- ②その中で、個々の認知目標を達成するために見通しをもって立ち向かわせ
- ③同時にそのために仲間と協同して立ち向かう社会的態度を身に付かせる。
- ④情報を集める、まとめる、確かめるといった生産的思考様式を身に付かせるために。

2. バズグループ活動を生かすポイント

①基本的な課題の取り組みとバズグループ活動の位置

教師による課題の提示（提示の仕方は明確に）

↓

個人の取り組み（グループに意見、疑問点が出せるように）

↓

バズグループ活動（相互作用を通して課題解決のための情報交換、「出し合って集める」「学び合って整える」「まとめ合う」「確かめ合う」=生産的思考

↓

- ・相互援助により「覚え合う」「説明し合う」
- ・全体へ提起の準備を整える＝誰でもできるようにノートしておくよう支え合う

学級全体での取り組み（教師の司会で時には教科委員（司会、記録等の共同で）発表、討議

↓

全体でまとめ確かめる）

個人の取り組み（まとめのノートをする。この際、不足、疑問点を明らかにして、補充、修

↓

直し合う）

評価（わかったか（認知側面）、楽しかった、うまくいったか（態度的側面）の評価）

②効果的な活用には、何をさせるか目的をはっきりさせる。

- ・学習課題の意識化（共有化）をさせるとき
- ・学習計画を立てるとき

- ・補充し合うとき
- ・評価活動を行うとき

③更にバズグループの活動を思いきって導入し、生徒が自己のペースと他との相互活動を生かして学習を自分のものにするためには、単元見通し学習への実践を進める。

④話し合いをスムーズに運ぶには

◎司会の仕方

- ・問題は〇〇です（問題提示）
- ・意見を言ってください（発言を誘う）
- ・～の意見ですが、どうですか（発言の中の問題点）
- ・違った意見はありませんか（比較意見を誘う）
- ・〇〇のところは共通した意見で××のところは違った意見のように思いますがどうですか
(分類提示)
- ・〇〇だという意見のところをもう一度考えてみてください（問題提起）
- ・〇〇という意見や××という意見も出ましたが、～をもとにすると〇〇のようになると思いますが、いいでしょうか。（整理まとめ）
- ・では、〇〇というまとめにします（確認）

◎バズに参加する各メンバーの話し方

- ・〇〇が、提案（発表、報告等）の立場をはっきり言う。
- ・～と思います。それは～だからです（結論を先に、理由をつける）
- ・〇〇さんと同じです。その訳は～だからです（内容と立場をはっきり）
- ・〇〇さんに付け加えます。それは・・・という事（反対意見）です。その理由は～だからです
- ・〇〇さんとは反対です。それはこういうことです。その理由は～だからです
- ・今までの意見をまとめると～ということ（まとめの確かめ）ですか

◎話し合いの約束

- ・聞いてもらう方向に向いて、適当な声量でゆっくり話す
- ・まず自分から進んで
- ・わからないところをはっきりさせて聞く
- ・わかったらまず言う
- ・〇〇さんと同じです、と簡略化しないで、同じ事でも自分の言葉で言う
- ・分かりませんと逃げないで、〇〇のところは分かりません、とか、
- ・〇〇のことか、××のところは分からなく迷っている等のように言う
- ・発言中の人の話を横取りしない
- ・しまいまではっきり言う
- ・しまいまで続けて言うように誘う
- ・話を独り占めしないで、〇〇さん、どうぞと早くバトンタッチする等

IV 言語量をより多く身に着けさせる手立て

1. 熟語、用語は正確にさせる。特に教科で使用する用語は、一度その内容を自分の言葉で表現させてみる
2. 初めて出る用語などはふり仮名をつけて板書しておく
3. 授業前に課題として提示し、ノートに辞書や辞典で調べさせておく
4. 漢字や熟語を覚えさせるには、短文を作らせる
5. ノート等を点検し、既習漢字のところは_____をして漢字にさせる
6. 朗読会、暗唱発表など、バズグループ等で評価させながらする
7. 意見発表など、バズグループで練習をさせて発表するようにする
8. 学級会等の意見発表等多くの機会を与える
9. 教室掲示等の誤字を無くさせる
10. 意図的に誤字発見等をさせる

第4章 高等学校における実践案

1. はじめに

豊高校は、本推進協における幼・小・中・高一貫教育態勢づくりの最終段階を受け持つという任務を負っている。従って、少なくとも中学校段階における実践の深化を図り、民主的社会人として社会に送り出せる所まで高めなくてはならない。そのためには、中学校までの実践の積み上げをそっくり受け継がなくてはならないのである。しかし、現状は必ずしもそうした方向に進んでいない。つまり、今日の状況をその背景とともに明らかにしていく作業から始めなくてはならない。

豊高校は下島分校当時より、解放運動に学んで明確な展望を持ってきた。それは、この地域の教育疎外の歴史を撥ね返し、地域の子どもの進路保障を達成しうる地域高校の創造であった。その第一段階として、今日の高校教育における集中的な行政差別である分校差別撤廃の戦いを、教育活動を中心にして組織し、独立校化を勝ち取ることにしてきた。それは同時に、この地域において既に社会意識になっていると言ってもいい、下島分校に対する差別意識の解消にもつながることであった。

当時生徒たちは教育疎外を受け続け、疲れ果て、低位という烙印を押されて下島分校にたどり着いたと言っていい状況であった。そうした差別に対する怒りはあっても、教育疎外の中で眠らされ、ついには自己疎外まで起こしている状況があった。今日の選別体制下における踏み台にされてきた彼らには、傷の舐め合い的な団結はあるにしても、およそ協同を志向する学習活動は弱く、いわゆる弱者いじめ的な行動が日常的にあった。当時教師たちも、その差別実態の中で、やはり自己の勤務する下島分校に対して強烈な差別意識の持ち主にさせられていた。生徒はこんな学校に来たくなかったと思い、教師は一日も早くこの学校からの脱出を願う。

こうした日常からの転機は、この地域における解放運動であった。まず教師が、自己の差別性に気づかされることから始まった。徹底した相互点検学習会の中で、自分が何をしなければならないのかを考え始めたのであった。それが尾三地区高校分校部の運動へとつながっていった。そして、独立校化を達成し、他の地域には見られない一貫教育態勢づくりが展開される所まで来た。

ところが、普通科2学級になり、独立校への展望が開けた時点での、自分たちが新しい高校を創るのだと胸を張って入学し、独立を目前にして巣立っていった生徒たちの、あの意気込みも今は継承されているとは言い難い。授業中に活気なく、やれと言われればやるが主体性がなく、いわゆる他者依存型の生徒が増加し、しかも依存する相手がいないためうろろしている。そして、結局自分勝手な行動をお互いにして気にもならないといった状況がいまだに克服されていないのである。

その大部分の生徒は、豊、豊浜両中出身ではあっても、中学校当時とはその成員が違い、しかも選別がかけられている現状では、単なる成員集団であって、準拠集団への高まりがほとんど見られないのである。その強弱の差はあっても、本質的な変革をなしえずに今日に至っていると言わなくてはならない。もちろん、生徒を取り巻く地域の状況に大きな変革が見られない以上、あるいは当然かもしれないが、その直接的な背景といえる私たちの所へ一度返して考えてみなければならない。

まず第一に、私たち自身が一度は克服したかに考えていた、私たち自身の生徒に対する差別意識の問題である。〈共に生きる〉へ至る過程として、私たちがどこまで生徒の枠組みに参入できるかという課題の前提条件でもある。もう一度、分校部運動の原点であったこの問いかけを、点検を、自らに課し、相互に点検しなければならない。

第二に、やはり私たちの体質に関わる問題であるが、私たちは大なり小なり選別体制の中で勝ち残ってきたのであり、その成長過程において協同事態よりも競争事態の経験者であることの問題である。生徒へ協同を呼び掛けている教師が協同の体現者、もしくは実践者でないとしたら、今日の状況を変革することは到底不可能なことである。私たち自身が協同事態に置かれているとき、主体的に参加しているかどうか。さらに進んで、自らが協同事態を創り出しているかどうか。

今年度、本校の実践目標を「課題の創出」としたのも、必然的に協同しなければならなくなる課題を創り出そうということであった。まず、私たち自身が実践を通じて変革しているか、あるいは変革しつつあるのかという点検を再度行うことを起点にしたい。

2. 自主性を解発させるために

本校は教育指標として「自主」「協同」「創造」を掲げている。しかし、前節において述べたように、現状は極めて不十分であり、まず自主性を育てるところから始めなければならない。

私たちが自主性を身につけなさいと、たとえお題目のように唱えたところで、それによって生徒の自主性が形成されるはずがないのは言うまでもない。彼らが具体的な活動を通じて、自ら体得していかなければならない性格のものである。そこで、そのための手立てをどう仕組むかということが、私たちの課題でなければならない。

これまでの取り組みは、生徒に他者依存的な傾向が強いとしながらも、一方では、あたかも自主性が身に付いているかのような、いわば建前で押し通していたことになるのではなかろうか。ある時には、君たちが自主的に取り組みなさいということが、結果的には私たちの逃げになったこともあるのではなかろうか。そのあたりを見据えて、自主性を触発させる媒体としての学級集団をどうつくるかを考えてみたい。

自主性を促す学級集団の集団特性としては、次のような条件が考えられる。

- ①小集団が基盤になっていること
- ②集団目標が明確であること
- ③集団目標への到達手段がはっきりしていること
- ④集団目標と個人目標とが大筋において一致していること
- ⑤集団規範と個人的欲求とに大きなずれがないこと
- ⑥非公式性の強い集団。すなわち参加の自由な集団であること

このような条件を学級集団に創り出すことが必要であるとされている。現実においてこれらの条件には程遠い状況にあることは言うまでもない。従って、そうした条件づくりをどのように推し進めていくかが、現在の緊急の課題である。

そのためにまず、実態に対応した学級運営の方法を考えなければならないが、やはり基本的には集団決定方式を積み上げなければならないだろう。集団決定の基本的なパターンは次のようになる。

- ①課題の提示
- ②第1回小集団討議（結論を出す必要はない）
- ③討議内容の報告とその要約（各小集団からの討議内容の報告と問題点のまとめ）
- ④情報の提供（まとめられた問題の解決に必要と思われる情報の提供と方向づけ）
- ⑤第2回小集団討議
- ⑥第2回討議内容報告
- ⑦全体討議（集団内に問題解決のための方策や考え方などに一定の方向性が明瞭になる。即ち集団規範や集団の方向づけがある程度決まり、それが成員に認知されるような段階までよい）
- ⑧全員発言（集団内で各自が今後自分の行いたい行動を公表し、全体に約束する手続きである）

この集団決定方式は、集団の成員が自ら討議に参加し、決定に参加したという自我関与の意識に支えられ、特になかなか行動に結びつかないことに対して有効であるとされている。

次に、集団の成員の特性を考慮しなければならない。集団への誘引度を高めることを考える時、成員の特性が十分考慮されたグループ構成になることが望ましい。しかし、現状では無作為に籤引きによる構成と一定期間での交代が定着しており、この変更はかなり困難である。最終的にあるべき姿が先行してしまった状況である。従って、現状を維持しながらも、そのことを常に考え、創意工夫を凝らす必要がある。

最後に、前節でも述べているが、学習集団の一人ひとりが参加でき、集団討議を生き生きと行うことができる適切な集団課題が提示できるかどうかにかかっている。適切な課題提示、思考を高める情報提供、これらの準備があつての取り組みでなければならない。集団決定によって、より高い集団規範が作られ、その集団規範によって、より望ましい行動が始まる。そして、また新しい集団規範を求めようとするといった方向へ進むためには、まず、生徒が集団決定に至る過程での粘り強い点検と指導が必要である。ややもすると、いわゆる答えを与える形になってきた私たちの、これまでの指導の中身を抜本的に洗い直す作業が当然伴うはずである。その点からも、まず私たちの学習が大切である。

3. 集団討議を行うために

今年度、第1学年において、学級活動での話し合いがどうしてもうまくいかないということから、全員にアンケートを行った。その集計によると、中学校当時、確かに順番で司会をした経験は全員が持っているが、司会がうまくやれたと思っている生徒は殆どいないという結果が出ている。そして何よりも話し方が分からないと言っているのである。毎日、朝バズにおいて日直が司会をし、各係や日課の伝達などを行うのであるが、殆どうまく司会できないのが現状であった。

そこで、司会の話し方のパターンを学級通信によって提示をした。すると、毎日日直は学級通信のファイルをもって前に立ち、大部分の生徒はそれを読み上げるという所からスタートした。そのファイルを持たないで、いくらか応用して司会ができるようになったのは2学期になってからであった。高校段階においてそうしたパターンを提示しなければならないことはいささか抵抗を感じるが、これが実態である。

実態調査において、言語力の弱さが指摘され、推進協の実践目標にも掲げた通りの実態がここにも現れている。従って、集団討議のための基本話型を提示し、それに基づいて討議をさせるという訓練から始めなければならない。ただ、その基本話型を単なる話し方として覚えさせるというのであってはならない。その言葉の持つ働きを十分理解させることが大切である。なぜならば、そのことによって話し合うということが持っている意義をつかむことができるからである。

また、話し方、聞き方のルールもしっかり確認させる必要がある。それは討議に必要な態度形成の問題であり、成員の人間としての相互承認を促すものだからである。ただし、高校生という発達段階を考えれば、あまり細かいパターン提示ではなくて、骨格を示すにとどめ、それに肉づけする作業は生徒自身の手でやらせるという配慮が必要である。その作業を通して、また集団討議の意義を再確認することにもなる。

言葉が、こうした意志伝達の機能を持っていると同時に思考の道具としての機能を持っていることも常におさえておく必要がある。

①司会者の話し方

イ．．．．の意見ですが、それでいいですか。(確認)

ロ．そうですね。(肯定)

ハ．違った意見はありませんか。(補足)

ニ．今の考えでいいでしょうか(疑問)

ホ．何かおかしいところはありませんか(矛盾)

ヘ．このことをもう一度考えてください(再認)

②討議に参加する話し方

イ．．．．．と思います。その訳は．．．．です。(推量)

ロ．．．．．さんと同じです。その訳は．．．．だからです。(肯定)

ハ．．．．．さんの意見に補足します。(補足)

ニ．今までの意見をまとめて言えば．．．．です。(要約)

ホ．それは．．．．です。(断定)

へ.さんの意見に反対です。それは.だからです。(反対)

ト.さんの意見と少し違います。それは.だからです。(補正)

③話し方のルール

- イ. はっきりした表現で丁寧に話す。
- ロ. 大声で押し付けるような話し方をしない。
- ハ. 発言の機会を独り占めしない。
- ニ. みんなが順に話せるように心がける。
- ホ. 話さない人を話し合いに誘い込むよう心掛ける。
- へ. ほかの人の発言の内容と同じことを繰り返さない。
- ト. できるだけ短い時間で発言する。
- チ. 話し合いの要点から逸れないようにする。
- リ. 感情的な態度や他人を軽んずるような言葉などは避ける。

④聞き方のルール

- イ. 相手の話を熱心に聞く。
- ロ. 相手が話しやすいような態度を心掛ける。
- ハ. 相手の立場や意図を考えて聞く。
- ニ. 相手の話を途中で遮るようなことはしない。
- ホ. すぐに不平を口に出すような聞き方をしない。
- へ. すぐに賛成してしまうような自主性のない態度はとらない。
- ト. 理解できないのにそのままにするようなことはしない。
- チ. 理解できていない点は丁寧に聞き直す。
- リ. 自分の意見と対比しながら聞く。

4. 取り組みの具体案

これまで<共に生きる集団づくり>へと高めていくための前提条件というべき点にのみ触れてきた。これは残念ながら今日の実態から考えてみてやむを得ないことであるが、やはり一方では具体的な展望を持たなければならない。

本校においては、これまで一貫して授業改善に取り組んできたし、授業改善を軸に今後の教育活動を推進することも変わらない。しかし、あらゆる学習活動の基礎的な学力ともいうべき国語力を飛躍的に伸ばすための特別な手立てが要請されている。その国語力の向上と、学級集団づくりとを統合した取り組みを考える時、全クラスで現在発行されている学級通信がカギを握っているように思われる。各クラス共、生徒自らの学級通信にさせることを志向しながらも、現状では担任の側からの意志伝達や情報提供が中心になっている。

この学級通信を生徒たちの手に委ねる手立てを講じることである。現在、どのクラスにおいても、生徒の側が発行する場合、大体において班単位で編集されているが、1ヶ月に1度発行の約束のあるクラスにおいても、いつも遅れがちになっている。また、内容的にもあまり高まりがみられない。

その背景は、かれら自身何を書いたらいいのかを、班での話し合いの未熟さもあって、自分たちでは引き出せないところにある。従って、班ごとの編集会議を設定させ、その編集会議に担任が参加し、内容を引き出してやることから始めたい。30分学活において、ひと班ごとに研修会議を設定するのである。副次的に討議の訓練にもなるはずである。これが第1の提案である。

次に、本校では懸案事項でありながらいまだに前進が見られない評価システムの改善がある。端的に言って、現状では評価は認知的側面においてのみ行われていると少なくとも生徒は受け止めており、したがってテストの点数が全てであるということになっている。生徒が自己実現を目指して努力しうるかどうかは、彼ら自身が自己評価力を身に付けているかどうかにかかっていると言える。

そのためには、学習態度形成の重要性を認識させるためにも、全学習活動の評価システムを明示する必要がある。これまで完全なものを追求しようとした結果停滞を読んでいたと考えられるので、大胆に次のような提案をしたい。

最終的な総合評価を100とすると、認知的な評価50、態度的な評価50と設定するのである。これを前提にして、態度的評価として現状において測定可能な項目を取り上げ、自己評価も含め到達度を自分で知ることのできる評価表を作成し、生徒に解説と共に呈示するものである。

また、私たちもとかく生徒の問題点の指摘に終始してきている感のある日常活動を反省し、積極的な評価活動をする必要がある。具体的にはいい点を取り上げて褒めることから始めたい。そうした評価活動の活性化の中で、文化的な刺激の拡大を図りたい。

今直ちに実行可能な活動を考えてみても、生徒の自治活動を軸に、生徒会タイムズの定期刊行、読書コンクール、討論会、音楽鑑賞等、いくらでもあるのではなかろうか。いずれにしても、私たちの明確な指導計画があることは言うまでもない。

6 1982年度の豊高校区教育推進協議会の活動

資料 38 1982年度総会開催要項

1982年5月29日

広島県豊高校区教育推進協議会

1982年度総会開催要項

代表幹事 吉井 要／平田福德／新田正彦

1978年度に「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を研究主題に、当面幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを課題にスタートした本協議会も第5回の総会を迎えることができました。

豊、豊浜両町の教育に対する強い期待と御支援による歩みではありますが、あくまで私たちの自主的、主体的な立ち上がりによる研究推進組織であることを確認し合って、総会を成功させるべく全員参加くださるようご案内申し上げます。

開催要項

日時 1982年6月2日 13時45分～16時30分

会場 豊町立久比小学校体育館他

日程	13時30分～13時45分	受付	14時50分～16時30分	分散会
	13時45分～14時45分	全体会	16時40分～17時10分	司会者集約

分散会構成

1. 就学前教育部会
2. 小学校低学年部会
3. 〃 中学年部会
4. 〃 高学年部会
5. 中学校・高校部会
6. 〃
7. 〃

分散会研究テーマ

推進協実践目標 <共に生きる集団づくりを><教育活動の全領域で言語認識を>

上記実践目標を受け、昨年度実態調査研究委員会において刊行された「実践具体案」を踏まえ、各校の今年度教育活動を突き合わす中で、今年度具体的に何を実践するか集中した討論を行い、いわゆる一点決議をしてもらいたい。

討議資料 推進協「実践具体案」をぜひご持参ください。総会資料は当日お渡しします。

<総会資料>

日程ならびに分散会会場案内【日程は案内と同様、会場案内は略】

豊高校区教育推進協議会会員名表【139名、氏名・所属省略】

1981 年度決算報告

収入の部

		予算額	決算額	摘要
助 成 金	豊町	1,650,000	1,650,000	
	豊浜町	1,350,000	1,350,000	
	県教委	500,000	125,000	
会費		158,400	158,400	1,200×132名
雑収入		90,100	10,786	
計		3,748,500	3,294,186	

支出の部

	予算額	決算額
実態調査関係費	1,949,200	1,883,281
公開研究会関係費	400,000	289,300
就学前教育部会関係費	200,000	153,735
領域別研究活動関係費	200,000	178,160
全国バズ学習研究集会派遣費	549,300	448,780
事務局費	450,000	340,930
計	3,748,500	3,294,186

特別会計報告

年度	金額	摘要
1979 年度	-114,456	第一次報告書用印刷費不足分
1980 年度	380,330	
1981 年度	371,681	
計	637,555	

1982 年度予算書

収入の部			支出の部	
助 成 金	豊町	1,650,000	実態調査関係費	2,160,000
	豊浜町	1,350,000	就学前教育部会関係費	100,000
	県教委	150,000	領域別研究活動関係費	200,000
会費		156,000	全国バズ学習研究集会派遣費	400,000
雑収入		15,000	事務局費	461,000
計		3,321,000	公開研究会関係費	-
			計	3,321,000

広島県豊高校区教育推進協議会 1982 年度 教育活動の方向

— '81 年度総括をふまえた基調提案—

はじめに

広島県豊高校区教育推進協議会は、本日、結成 5 年目の総会を迎えることができました。'77 年 8 月、自主的な小・中・高合同合宿研修会が、国民宿舎「きのえ」において 1 泊 2 日で持たれた際に、最後の全体集会で恒常的な研究推進組織を作ることが、一般参加者から提案され、満場一致で決議されました。その決議を受けた形で、豊、豊浜両町の幼・小・中・高代表者による結成準備委員会が結成され、協議が重ねられていきました。

それから、翌 '78 年年度当初に本推進協が結成されるまでの経過をふまえれば、すでに満 5 年がやってこようとしています。今回、結成当初の会員もすでに大半は入れ替わっており、本推進協が私たちの自主的な研究推進組織として結成された経緯がすでに忘れられようとしているという提起がありました。これまでも、このような集会の度毎に、資料として必ず書いてまいりましたが、お互い十分承知の上の事であるという前提で特に取り上げるという事は致しませんでした。しかし、このような提起が出てくるような状況が確実に進行していることも事実であろうと思われま

す。いかなる組織もマンネリ化の危険性を常にはらんでいます。初発の意志を貫くために、本総会において、なぜ推進協が組織されるに至ったかを、もう一度確認しておきたいと思

結成への背景

本推進協が結成されるに至った背景は、大きく分けて二つの流れがあったと思います。まず一つは、今日最も緊急な教育課題であると同時に、教育の根幹にかかわる教育内容の問題である、被差別部落の完全解放を達成し得る教育内容の創造の営みです。即ち、同和教育運動の展開であります。

今更申し上げるまでもありませんが、同和教育運動は紛れもなく事実に基づいた自主的な教育運動です。自ら、人間の尊厳に気づいた被差別部落大衆の立ち上がりがあり、解放運動が進展する中で、学校教育が差別を温存助長している事実の糾弾が行われ、自分たちの教育活動がまさに指摘の通り差別教育であったことを認めた教師たちによって起こされた教育運動であったのです。今日、同和教育運動があるという事自体が今日なお差別教育が克服されていないことを示しているという原点を見つめなければなりません。

しかし、今日の差別構造社会の中で生育した私たちは、当然にも差別意識を十二分に持たされています。差別意識を持たされているという事は、別の表現をすれば、日常の言動に現象している差別行為を差別と見抜けなくなっていることです。差別をしようとしているのではないのに、差別をし、人を傷つけているという事実は、それを物語っていると言えましょう。ましてや、自己が被差別の状況におかれていれば立つ瀬がないという意識が増幅されてきます。この地域における同和教育運動が、実に 69 年部落解放同盟豊支部の結成されるまで停滞していたのも、ここに起因していると言えるでしょう。いささか遅い立ち上がりではありましたが、それ以後の同和教育運動が極めて不十分にせよ、日常化が本推進協結成の大背景であったと捉えるべきでありましょう。本推進協の組織母体は、すでに校種を越えて組織され、日常的な活動が行われていた豊町、豊浜町の同和教育研究組織であり、それに豊高校が合体したものであると言えます。もし同組織がなかったとしたら、

内容的にも組織的にも本推進協が結成されていなかったとも考えられます。したがって、本推進協の活動は明確に同和教育運動の一環であると位置づけているのです。

次にもう一つの流れがあります。この事については、一昨年第 20 回へき地小規模教育研究大会の会場を引き受けた際に、推進協資料にも引用しましたが、'76 年度豊浜中学校「バズ学習の歩み」第 9 集の序文を紹介させていただきたいと思います。

はじめに

本校がバズ学習を取り入れて以来 10 ヶ年の歳月が流れました。その間、これに取り組んだ教師の総数 80 人が試行錯誤しながら復習バズ、教科バズ、町内バズ、全領域でのバズとその領域を広げて、教育効果をあげようと努力してまいりました。われわれの力不足や未熟なため充分目的は達せられませんでした。子どもの学力の向上、生活態度は確かによくなってまいりました。

しかし、ここ 2、3 年、何か行き詰まりを感じながら歯を食いしばり、効果の上がらないのは我々の技術や取り組みのまずさからである、と反省しながら頑張っただけでまいりました。前々から、これ以上のものを望むには、どうしても小学校の御理解ご協力を得て、地域挙げての取り組みの必要性を塩田先生をはじめ県教委、三原教育事務所の諸先生のご助言ご指導もあり、我々中学校もそのことを強く感じておりました。

一昨年より、遂時その態勢もでき上がり、また 2、3 年前より大崎高校下島分校（豊高校）でもその取り組みが熱心になされ、豊中学校も交え、下島分校で数回に及ぶ共同研究が持たれるようになりました。

本校としても長年にわたり願っていた幼・小・中・高の一本化の態勢ができ上がりました。この地域をあげての態勢で、我々教師が真摯に取り組めば、必ず将来光明が開けるものと信じます。ご指導ご援助下さった諸先生や、関係の方々のご恩に報いるべく、我々教師は全力を振り絞って頑張ることをお誓い申し上げます。今後とも、今までに倍するご指導、ご援助をお願いいたします。

いささか長い引用になりましたが、推進協結成前夜の各校が持っていた思いがよく出ているように思います。そして、幼・小・中・高一貫教育態勢の発想は、その前年全国へき地教育研究大会、豊浜中会場において、豊浜中が提起したのが最初でした。せっかくきちんと仕上げたのに受け継いでくれていない、もっとしっかりやっておいてくれなければ困るといった、一種の玉突き状態ではどうにもならないのだという思いが出てきていたことを示しています。また、そのための共通基盤としてのバズ学習への取り組みがあったことも見逃せない事実であります。

子どもたち一人一人は一貫して生育しているのです。当たり前のことです。それにも拘らず私たちの取り組みが一貫していないとすれば、これは不正常極まりないこととなります。いってみれば、当たり前のことを当たり前にするために、これだけの時間を必要としたことになると思います。つまり必然の流れです。

結成の前後

前述のような背景の中で、はじめに述べました'76 年 8 月、小・中・高合同合宿研修会が国民宿舎「きのえ」で持たれました。ただ、この合宿研修は誰が発起人で、どこが推進させたのかとなる

と、実は判然としない、いわゆる自然発生的な集会でありました。何かしら、各校がてんでに集まってきたといった印象の強い集会でした。もちろん、研究交流が強化されればいつも時間不足を感じるという事もありましたし、何かもう一つ遠慮があるといったこともあったでしょう。また優れた教育実践のベースに合宿研修が位置づけられていく作風が広がっていたこともあったと思います。

この集会の決議が、各校代表による研究組織の結成準備委員会へと発展していく経緯も、どこにリーダーシップがあったのか、これもはっきりしません。しかし、大きな流れがみんなをしてテーブルに着かせたと言えましょう。ただ、それからはなかなか進展を見せませんでした。結成に反対する学校はないのに結成に踏み切れない。この状態がどうして続いたのかは、結成後気づくことですが、皆が協同して何を推進するのかという具体的な目標が明確でなかったことにあるようです。だから、それぞれがそれぞれの位置でイメージし、その結果これまでの研究態勢に屋上屋を重ねることに、いわゆる研究会倒れになるのではないかという危惧を持っていたように思われます。

年度末に、全国バズ学習研究会から、全国バズ学習研究集会を第4回集会の豊浜中に続いて、当地で開催してもらえないかという意向打診がありました。その申し入れを準備委員会に提案したところ、この申し入れが満を持していた準備委員会の具体的目標となり、本推進協の結成が決議されました。そして、第13回全国バズ学習研究集会の地元実行委員会も引き受けることが決定したのです。名称は、この準備委員会に終始出席してもらえた両町教委、とりわけ豊浜町前教育長北恵長右エ門氏から、折から独立を果たした豊高校を名前に冠したらどうかという提案があり、広島県豊高校区教育推進協議会に決まったのです。そして、6月結成大会が全員参加によって開催され、全国バズ学習研究集会の成功へ向けて始動したのです。

しかし、このような生みの苦しみを受けて誕生したのではありますが、その間の経過の中で、必ずしも学校現場と準備委員会との相互討議がうまくいっていませんでした。ある学校現場では極めて唐突に天下った組織かのような印象を与えたことも事実のようです。このことが、私たちの建前と本音との亀裂の正当化の道具として使われてきたという側面もありました。このようにして結成された推進協は第13回全国バズ学習研究集会に向けて突っ走りはじめます。

夏には1泊2日の全員合宿研修会を2回も開き、バズ学習についての俄仕込みの嫌いはあるにしても学習が継続され、塩田先生にもお出でいただいて各校ごとのご指導もいただきました。そしてともかく10月20日、21日の当日を迎えることができました。私たちの実践のスタート台を、全国の仲間に見てもらおうという当初の目標はどうやら達せられ、その推進態勢は全国的に見ても類のないものとの評価も受けることができました。しかし、挨拶に立った各代表幹事は、5年後を約束する形で言葉を閉じざるを得なかったのも現実でした。全国集会の総括を終え、いよいよ日常的な活動へ移る段階で、また何をどのように進めてよいかで行き詰まります。

それが現在実施中の実態調査へとつながっていくのですが、このあたりは「教育課題を求めて」第1次実態調査研究報告書の冒頭、調査の目的と意義を読んでいただいていますからお分かりいただいていると思います。端的に言って、このような推進態勢ができ、授業研究を軸に活動を進めようとして、どこに焦点を絞ったらいいかを考えた時、初めて出現した壁でした。「私たちは本当に子どもを捉えているのであろうか」。最終的には私たち自身の眼です。子どもたちをありのままに捉え

切ることのできる眼です。それは確かに主観ではありますが、私たちの恣意的な主観ではなくて、可能な限り科学的な客観性に裏づけられた主観でなければなりません。その問い掛けに応えきれない自己を認識することが必然であったと思います。そして、それはかつて豊島小を中心に行われた実態調査と、それ以後の取り組みへと発想はつながっていき、今回の実態調査となったと言えます。こうして今日の推進協の作風が確立されたのでした。より科学的に教育課題を明らかにしていく実態調査と、その結果から導き出される実践課題を、日常的な教育活動において、とりわけ授業研究を軸に推進することです。

1 昨年度末やっと実践目標「共に生きる集団づくりを」「教育活動の全領域で言語認識を」が確立され、昨年度、それに基づいた実践具体案が出された段階であります。その流れの大筋において、私たちは一つ確かさを見いだすことができます。それは、私たちの眼前の子どもたちと、その背後の親たち、地域の人々の熱い思いが私たちをゆり動かしていると言えましょう。私たちを取り巻く条件は相変わらず厳しいのですが、私たちの専門性をかけた主体的な実践であることを確認し合いたいと思います。

昨年度総括をふまえた今年度の活動方針

去る5月12日、第26回推進協協議会において'82年度の活動方針が決定されました。その内容は'81年度活動方針の深化発展につきます。そこで、昨年度総括をふまえながら、各領域の克服すべき課題を例示しておきたいと思います。

(1) 実態調査の活用を

2次、3次の実態調査報告書の刊行が遅れていますが、報告書は概括的な分析考察が中心です。私たちの最も有用なのは、この実態調査の基礎である個票であるはずですが、5ヶ年間、継続して記入できる個票によって、各児童・生徒の変容を的確につかむところが原点でなければなりません。現実には十分な活用がなされていないくらいがあります。学力検査と知能検査から成就値を、その成就値の背景をAAIで探り、それを支える学級集団を学級調査で探っていく。その中でまだまだ多くの教育課題が見いだせるはずですが。

小学校では担任の座右においての活用を、中・高では担任と各教科担任との連携の中で活用を。しかし資料の取り扱いには慎重に。

(2) 公開研究会の深化を

公開研究会は日常活動の検証の場であると同時に、次のステップへの跳躍台として、私たちの実践に欠くことのできないものであることは今更言うまでもないことです。しかし、現状は停滞気味であるように思われます。つまり、何か見てもらうものがないといった感じになっているのではないのでしょうか。それは主にどこに問題点があるのか。これが今年度の課題です。この課題解決の方向は、言うまでもなく先進校の実践を物差しにする以外にないように思われます。印象的に言えば、全体的な目標構造の不明確さと、そこからくる評価活動の弱さが要因のように思われます。謙虚な学習活動が要請されています。また、協同研究態勢づくりも引き続いての課題です。

(3) 就学前部会への参加を

昨年度推進協組織として位置づいた就学前教育部会は、公開保育を軸に7回の部会を持ちまわり

で開催しました。常任講師が途中病気で辞任されるという事態になりましたが、全幼稚園で必ず1回は公開保育を行うという目標は達成されました。今年度は昨年の実践を踏まえ、系統的な研究へと発展することが期待されています、一貫態勢づくりの要に位置づけられている公開保育に、特にバトンタッチされる小学校教員の多数の参加が要請されます。

(4) 領域別研究活動を

本推進協の活動を躍動化させるのは会員自らの研究課題の追求が基底であるという確認に立って、自主的な研究グループの育成を呼び掛けてきました。そして、推進協の研究主題に沿った諸活動に対して実績主義を原則としています。助成を行ってきました。実践目標研究会を除いては、昨年度3回という寂しさでした。可能な限り、横につながった研究グループの創造を期待しています。

なお、昨年実績のある社会科部会、理科部会をはじめ、教科部会の活動も期待しています。

(5) 基礎講座の開設を

昨年度、理科部会との連携で基礎講座を開きました。今年度はより多くの基礎講座を開設し、教育活動の基礎的概念を共通の認識にする努力をしたいと考えています。しかし、会員の要求に根差さない講座では、私たちのものになりません。従って、会員からの要求を期待しています。

(6) 地域教育づくりを

私たちの活動が、真に「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」に高まっていくためには、地域の教育状況の変革が条件となることは言うまでもありません。いいにつけ、悪いにつけ、学校教育も地域と共に歩んでいます。今私たちの所から進めていける変革の道筋は、子どもを通して親たちへのアプローチであろうと思います。その道筋を命題化したのが、次の言葉でありました。

「私の子から私たちの子へ」

いってみれば、親と親をつなぐ営みです。親たちの意識がこの方向に動いた時、初めて今日の分裂状況が克服されていくことになると思います。私たちの同和教育運動からも重要な視点です。まず、私たちが仲間としての連帯感を持ち、協同する態勢が前提となりましょう。

(7) 第18回全国バズ学習研究集会

’82年度総会での課題

毎回申し上げているように、推進協における総会は、機関決定の場としてあるのではなくて、会員が一堂に会して、今年度1ヶ年間の活動を確認し合うところに最重要点が置かれています。先日ご案内いたしました開催要項に、分科会研究テーマとして書かせていただきましたように、本日からこの分散会において可能な限り一点決議の方向で討論いただくようお願いしたいと思います。つまり、実践目標の具体化として、昨年度実態調査研究委員会によって提示された「実践具体案」を基礎にしながら、各校の教育活動計画を出し合い、全体がこれだけは今年度どうしても実践するという具体的な下位目標を確立することを狙っています。可能ならば、集団決定方式をとっていただきたいと思ひます。なお、集団決定方式については実践具体案の2～3ページに記載してありますので、参考にしてください。

このような方式を今年度取らせていただく背景について申し上げておきたいと思ひます。実践具体案は、まえがきを書いてありますように、あくまで案であって、いわゆる叩き台として会員に提

示したのです。ところが、この具体案に対する批判、逆に補強意見といった反応が極めて弱いのが現状です。この具体案が一つの作文で終わってしまうという危惧をそこから感じているからです。念頭に子どもを置いた討論を、短い時間ではありますが集中的に行っていただくことをお願いして基調提案を終わります。

豊高校区教育推進協議会会員名表

会員指名列挙（略）

会員数、146人

<各校からの資料>

齋小学校

1. 教育重点目標における子ども像

(1) 健康で、最後まで頑張りとおす子ども

ア. 体力づくりの具体的目標を樹立し、実践していく。

イ. 無医地域という実態を意識し、具体的に健康管理をしていく習慣を養う。

ウ. 正しい食事のあり方を体得させる。

エ. 頑張りとおすことについて、その習慣化を図り、日常生活における具体的事実を認め合う。

(2) 広く見、深く考え、正しく判断する子ども

ア. 基礎学力の充実を図る。

イ. 話し合い朝会を通し、自己表現の機会の拡充と論理性を養う。

ウ. 学校においてニュースを視聴させ、社会の動きに関心を持たせる。

エ. 読書に親しむ。

(3) 進んで物事を行い、力を出し合う子ども

ア. 楽しい学校づくりをするために、奉仕活動を進んで行う。

イ. 飼育栽培活動を推進し、働く喜び、育てる喜び、命の尊さを学ばせる。

ウ. 掃除時間以外の掃除を大切にする。

(4) 暖かい心情で、命、物を大切にする。

ア. お互いの長所を認め合い、相手の立場を考えさせる。

イ. 気持ちのよい言葉遣いができるようにする。

ウ. 子どもと教師の対話を大切にする。

エ. 学校の備品、公共物を大切にする。

2. 本年度学校経営の方向

(1) 研究主題

学校、学級実態に即応した学習指導の創造

(2) 学級実態から

児童が2名（4年生女子、1年生女子）で姉妹である。集団思考という形態がとれず、集団の中

での磨き合いが期待できない。自然の恵みや、その厳しさに触れる機会が多いが、都会的生活とは隔絶し、社会的経験を深める機会が少ない。

- ①自学自習の仕方を学ばせる。
- ②視聴覚機器の活用を図る。
- ③近接校の集団で学ぶ機会を作る
- ④普段の生活領域とは異なる地域社会に触れる機会を作る。
- ⑤教師と子どもが共に学ぶ態度で学習や生活をする。

(3) 逞しい子どもを作る

- ・体力づくりの効果的な方法に取り組んでいく。
- ・健康教育の充実を図る。
- ・他人との望ましい触れ合いを考える。
- ・読書活動を進めていく。
- ・勤労生産活動を重視し、責任の持てる子どもを育てる。

(4) 地域の文化センターとしての役割を考える

- ・地域住民に学校を知ってもらおう努力をする。
- ・老人集会所の行事などに協力する中で、学校と地域住民とのつながりを図っていく。

(5) 職員の和を考え、協力して学校運営をする

- ・小人数ではあるが、お互いに意見を出し合えるようにする。
- ・実践を大事にし、そこから学んだものをもとに実践を積み重ねる。

3. 本年度の研究

(1) 研究教科「算数」

校内研究として、次の3つを目標に研修を進める。

- ①自学・自習を進めるための基礎指導及び学習過程のあり方
- ②思考・推理の力を伸ばす指導のあり方。
- ③発表・表現の力を高める指導のあり方。

(2) 研究の具体的計画と内容

4月 本年度の学校経営・教育研究の方向について

集合指導の反省と計画

5月 校内研修「同和教育」、授業研究「算数」(変則複式)

6月 研究会参加、校内研修「同和教育」、授業研究「算数」

7月 授業研究「算数」指導主事

8月 各種研究会参加、自主研修

9月 校内研修「自主研修の交換」、集合指導の反省と計画

10月 校内研修「同和教育」、授業研究「算数」

11月 校内研修「同和教育」、各種研究会参加

12月 各種研究会参加

- 1月 校内研修「同和教育」、集合指導の反省と計画
- 2月 授業研究「算数」指導主事
- 3月 本年度の反省、次年度への課題

4. 週中行事計画

月	お話の日／奉仕の日	火	漢字ドリルの日	水	朗読の日
木	読書の日	金	音楽の日	土	健康・安全の日

豊島小学校

1. 校内研修計画

公開研究期日 昭和57年6月24日

	研修内容	推連助言者
4月	研修計画、研究主題の取り組み	助言予定者指名(以下同様)
5月14・24日	授業研 14日(担当者3名)、24日(担当者3名)	
6月3・24日	公開授業研 3日(担当者3名)、24日(担当者3名)	
7月	授業研 中学年	
8月	体力づくり施設	
9月	体力づくり研究	
10月	授業研究 高学年	
11月	授業研究 低学年	
12月	授業研究 中学年	
1月	授業研究 高学年	
2月	授業研究 低学年	
3月	本年度の反省 来年度の課題 研究収録	
主題：進んで体力づくりに励む子をめざして <ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が課題を持ち、力いっぱい体育学習に励む子どもをめざして ・地域課題をふまえた授業内容の創造(保健意識) ・進んで体力づくりに励む子どもを推進していく ・授業研究を進める中で喜んで参加できる指導法の研究 		

公開授業研究までの日程

準備日程を記載(詳細は略)

沖友小学校

教育実践目標—学習指導は科学的に効率を上げ、生徒指導は愛情を持って細やかに—

1. 生活指導をより充実させる

- ・基本的なことばの習慣化(人より先に挨拶。……です。……します)。
- ・進んで仕事をする(私がします、と言える子)。

- ・生活にけじめをつける（チャイムが鳴ったらすぐ次の行動に移る）。
 - ・責任を持って物事をし、報告できる（・・・のようにしておきました）。
2. 健康安全指導の強化を図る
- ・諸種の体力テストを計画し、個々の子どもに目標を与え、旺盛な気力と逞しさを育てる。
 - ・業間体育の充実を図り、柔軟性を養うと共に運動に対する興味を持たせる。
 - ・健康状態を正しく把握し、阻害のある子は全職員で適切な処置をする。
 - ・正しい運動の仕方と健康の知識を身につける。
 - ・校舎内外の設備、遊具等の安全点検を実施する。
3. 学習指導の効率を高める。
- ・複式授業における指導法の研究。
 - ・教育機器を活用し、学習効率を上げる。
 - ・学習のマナーと方法、発表の仕方を身につけさせる。
4. 職員研修の内容を深める
- ・個々の教科とテーマを定め、それを達成するため授業研究をし、教育機器、個人カードの活用に取り組む。
 - ・自己満足に陥らないよう、常に刺激を求め、進んで研究会に参加する。
5. 本年度研究教科

音楽

- 問題点
- ・楽しんで歌を歌わない。
 - ・高学年になると声が出ない。
 - ・生活の中に歌が浸透しない。

研究主題 音楽の美しさを感じ、自ら表現しようとする子どもを育てる。

体育

- 問題点
- ・学習が遊びにならないような指導。
 - ・記録の伸びが個人に分かるような評価の仕方。
 - ・固定施設を使った遊びの工夫。

研究主題 自分から進んで体力や運動能力を高めようとする子どもを育てる。

6. 研究計画

- | | |
|---------|--------------------|
| 4月 | 昨年度の反省と研究教科の決定 |
| 5月 | 研究主題の検討と研究計画の作成 |
| 6月 3日 | 体育授業研究 |
| 6月 11日 | 音楽授業研究 |
| 7月 | 問題点の整理と課題への取り組みの検討 |
| 10月 | 授業研究 体育・音楽 |
| 11月 11日 | 公開研究会 体育・音楽 |
| 11月下旬 | 研究会のまとめ |

大浜小学校

1. はじめに

児童たちは、地域の産業に対しても正しい労働観を持っているとは言えない。このような労働に対する偏見は、柑橘の斜陽化する中で育ったものと考えられる。汗を流して働く、そのことは聖なる母である大地に呼応して、素晴らしい果実を実らせている。この素晴らしい果実の製品価値は現在下降線を辿る一方であるが、その事は労働の価値の下降を意味することであり、延いては労働の価値を軽視するものである。地域のこのような重大な課題が残されていることを忘れてはならない。

2. 教育目標

人間の尊さを、成すことによって学び、地域に根差した生き方を思考し、自主的に行動できる子どもの育成に努める。

3. 研究テーマ

主体的授業の創造（読むことを通して表現力を豊かにする）

4. 授業研究

5月28日 2、5・6年生／6月上旬 1、3・4年生／10月上旬 2、5・6年生／
10月下旬 1、3・4年生／11月26日 公開授業（全学年）

久比小学校

1. 研究主題

一人一人に意欲を持たせ、効率を上げる学習指導法の工夫—学習は科学的に効率を上げて愛情をもって***授業

【***部、不鮮明】

2. 授業研究を中心とした研究推進の視点

- ・教科の本質を見極める教材研究
- ・意欲を高める教材教具
- ・目標の明確化

3. 到達目標

- ・発言力を付ける 多面的な表現力、筋道の通った発表ができる
- ・認め合う集団 自己評価、相互評価

4. 研究教科

算数

ことばの時間年間学習計画表

***部分は印刷不鮮明部分

		1学期	2学期	3学期
	1年	・簡単なお話を聞くことができる。 ・挨拶などが分かり、名前を呼ばれたらすぐに返事ができる。	・簡単なお話の大体が分かる。 ・終わりまではっきりと話すことができる。	・相手の話を聞いて、分かるように受け答えができる。

聞く・話す	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・お話を聞いて大事な所が分かる。 ・恥ずかしがらずに尋ねたり、答えたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・物語や話の大事な所を落とさず・に聞ける。 ・自分の経験などを簡単にみんなの前で話すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の話をよく聞いて、話し合いに進んで参加できる。
	3年	<ul style="list-style-type: none"> ・話を楽しく、知っていることと比べて聴くことができる。 ・大事なことを落とさずにはっきり答えたり、明るい挨拶ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話のあらましを順序、要点に注意して聞き取ることができる。 ・相手にわかりやすいように順序良く意味のまとまりに気を付けて話せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の話や意見をよく聞いて受け答えをしたり発言したりできる。
	4年	<ul style="list-style-type: none"> ・物語や伝記を味わって聞ける。 ・話し合いなどで決まったことをまとめて報告することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・物語の要点を聞き取ることができる。 ・感想をよくまとめて発表できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意図を相手に分かるように話せる。
	5年	<ul style="list-style-type: none"> ・説明や報告などの内容を聞き取ることができる。 ・相手の意見を尊重しながら話し合える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話を鵜呑みにしないで事実と意見とを区別できる。 ・相手や場に相応しい言葉遣いができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手が話しやすいように気を使いながら受け答えをし、話し合いの進行に合わせて****できるようにする。
	6年	<ul style="list-style-type: none"> ・話の主題を聞き取り要約できる。 ・目的や内容を考えて適切な受け答えができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの発言の中から事実と意見を区別して聞き取り、賛成、反対の意見を述べるができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いによって互いに理解を深め、考えを広げられる。
言葉の学習	1年		<ul style="list-style-type: none"> ・口をよく動かして正しい発音ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・似ている音をはっきりと区別して発音できる。
	2年		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の訛りや発音の癖に気を付けて話すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発声や発音に気を付けて、はっきり話すことができる。
	3年	<ul style="list-style-type: none"> ・発音練習が大切なことが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発音練習したことを生活に生かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発音練習したことを生活の場に生かせる。
	4年	<ul style="list-style-type: none"> ・発音の訛りや癖に気付き、正しく発音するための方法を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・正しく発音するために、発声練習をするように努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な時共通語で話せるようにする
	5年	<ul style="list-style-type: none"> ・土地により、人によって**の訛りや癖のあることに気付き、それを直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発音練習により正しい発音で話せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・土地によって発音のアクセントの違う言葉のあることを知り、共通語と方言の特徴が分かる。
	6年	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の抑揚や強弱に注意して正しく言うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時代によって言葉が変化してきたことを理解し、言葉の機能について関心を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・土地によって語法にも違いがあることに気付き、必要に応じて共通語が話せるようになる。
音読	1年		<ul style="list-style-type: none"> ・拾い読みではなく語や文として音読できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はっきりと話すように音読できる。
	2年		<ul style="list-style-type: none"> ・人に分かるようにはっきりと声に出して読むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を気持ちを入れて読める。

朗 読	3 年	・聞き手に分かるように音読できる。	・朗読するときに息継ぎ、区切り、句読点の大切なことが分かる。	・文の意味を考え、気持ちを込めて皆に分かるように言える。
	4 年	・記録文などを聞き手に分かるように音読できる。	・会話文を自然な口調で朗読できる。	・朗読の楽しさを味わえる。
	5 年	・説明文などを要点がよく分かるように音読できる。	・人物の心情や**の情景がよく分かるように朗読できる。	・詩や**を**をこめて*** **ことができる。
	6 年	・文章の**を****や**** **を音読できる。	・作品の**や**が**所を注意して朗読できる。	・作品の**や**の優れたところを****できる。

****は判読不明箇所

豊小学校

教育研修計画

昨年度までの 研究の概要	48年度 教育機器の整備と調整 49年度 学習指導の効率化 50年度 フローチャートの書き方と教育機器の活用 51年度 フローチャートによる授業展開と OHP による資料提示技術の研修 52年度 フローチャート一時中断 53年度 教育機器の効果的な活用 54年度 分かる授業（充実感と満足感）の創造 55年度 子どもを生かす授業（目標行動と評価） 56年度 やる気を育てる教育機器の活用			
現在抱えている 問題点	フローチャートによる授業展開と授業分析、教育機器の活用については慣れてきたが、分かる授業、よい授業の創造についての研究をもっと深めなくてはならない。			
研究主題	人間形成を目指す学習指導の改善—やる気を育てる教育機器の活用			
研究教科領域	視聴覚教育 特に国語、算数、理科で			
本年度の研究推 進計画	5月26日	算数科授業研究	10月14日	国語科授業研究
	6月9日	国語科授業研究	10月19日	理科授業研究
	6月16日	理科授業研究	10月27日	国語科授業研究
	9月16日	社会科授業研究	11月19日	公開研究授業（国語・算数・理科）
	10月7日	算数科授業研究		
公開予定日	57年11月19日（金）		（公開範囲：尾道教育事務所管内）	

豊浜中学校

年間計画表

研究主題	支え合う集団づくり（地域課題をふまえた指導法）			
本年度の	4月上旬	研究目標の設定 研究推進計画	10月5日	校内授業研究

推進計画	5月26日	同和教育校内研修	10月8日	同和教育校内研修
	6月7日	校内授業研究	12月3日	校内授業研究
	6月10日	校内授業研究	1月11日	同和教育校内研修
	9月7日	校内授業研究		
公開予定日	11月26日			

豊中学校

(資料欠損)

豊高校

(1982年度教育活動基本方針)

今年度は基本的には昨年度の活動方針の上に立って、活動の日常的な積み上げを行うことを確認してきた。それは、授業改善を軸に教育活動を推進することを大前提とし、個が埋没することのない教職員集団づくりと、学習会（研究態勢）づくりを目指すことである。

この確認に立って、まず推進態勢づくりの基盤としての機構の検討を行い、そして研修態勢に関わって、次の5点を確認してきた。

- (1) 部落問題学習会の継続強化
- (2) 春季、秋季公開研究会の持ち方の再検討
- (3) 自主トレの多様化の促進
- (4) 教育相談技術の再学習
- (5) 推進協実践目標の具体化

また、本校における教育活動のめざすものを明らかにし、部分的な活動が総合的な活動のどこに位置し、どんな役割を持っているかを常におさえていくために、本校教育の全体構造を次ページのように考えてきた。

このような全体構造の中で、教育活動を進めていくという事は、推進協実践目標具体案に示されている実践の基本的な考え、即ち

「推進協実践目標は、まず何よりも私たち自身の実践目標であると捉えることである。即ち私たち自身が<共に生きる教職員集団>であり、<生き生きとした言語活動者>であることの確認である」「教育が人間関係を基盤にしている限り、最も基本的な構えにおいては、私たち自身が体現者でなければならないことを示している」

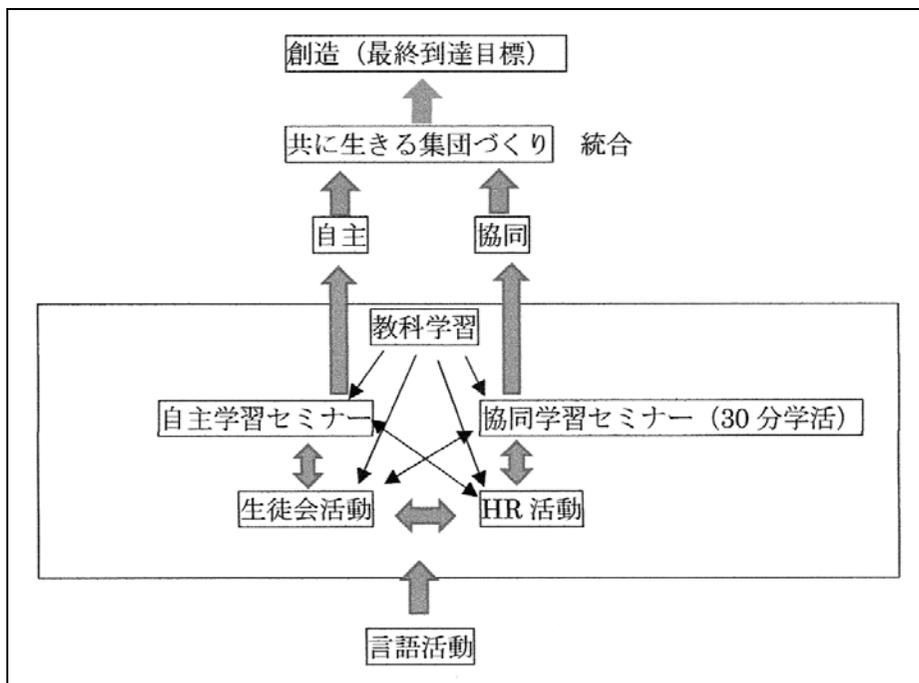
にもあるように、まず、私たち教職員がこの全体構造を自分たちのものとして実践していくことであると見え、例えば、次のようなミニコミ紙づくりの取り組みも進めている。

(ミニコミ紙の取り組み)

全クラスで発行されている学級通信を活用することにより、国語力の向上と学級集団づくりを図っていく。それは、教師中心の学級通信を生徒の手に委ねると共に内容を高める手立てを講じる事でもある。そのためには、生徒たちの編集会議に教師が参加するなど、現状では担任の指導が必要

になってくる。

そこで、まず教職員自らが、自分たちの手で学級通信（ミニコミ紙）を作り、学級通信の内容をより高めることを実行していき、その体験をHRにおける生徒指導へ反映させていく機能を持たせるものとしてミニコミ紙づくりを始めた。方法としては、「教職員集団を1つのHRとみなす」「HRを3つの班に分ける」「班長会議を開き共通課題を明らかにする」「月1回発行する」「各般の編集会議の記録を残していく」。そこでできた学級通信（ミニコミ紙）をもとに、その分析検討を行い、教職員の取り組みをHRでの実践に反映させていく取り組みとして進めている。



資料 39 1982 年度研究会案内

<豊島小学校・幼稚園公開研究会案内>

青葉若葉の季節、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、本校におきました「進んで体づくりにはげむ子どもをめざして」を研究主題に掲げ、関係各位のご指導の下に教育実践に取り組んでおり、この度次のような公開研究発表会を持つことに致しました。その成果は誠にささやかなものでございますが、貴職をはじめ、関係多数の御参加をいただき、ご指導賜りますよう、ご案内申し上げます。

記

1. 主 催 広島県豊高校区教育推進協議会
広島県豊田郡豊浜町立豊島小学校・幼稚園
2. 後 援 豊浜町教育委員会 豊島幼稚園・小学校 PTA
豊田竹原教育振興会 尾道教育事務所
3. 研究主題 「進んで体づくりにはげむ子どもをめざして」
4. 期 日 昭和 57 年 6 月 22 日 (火)
5. 会 場 広島県豊田郡豊浜町立豊島小学校・幼稚園
6. 日 程 9:50~10:15 受付 12:40~13:00 アトラクション
10:15~11:00 公開授業 13:00~14:00 研究協議
11:15~12:00 公開授業 14:00~15:30 体育実技
12:00~12:40 昼食 15:30~15:40 閉会
7. 指導者 広島大学福山分校助教授 吉原博之先生
尾道教育事務所体育指導主事 島田恭次先生

8. 公開授業

	学年	題材	指導者 (略)
1 校時	幼 (4 歳児)	マット遊び	
	3 年	ゲーム (ドッジボール)	
2 校時	1 年	基本の運動	
	5 年	体の発育	

9. 実技研修 跳び箱の指導力を養う (参加される方は運動のできる用意をしておいでください)

<豊高校春季公開研究会案内>

謹啓 何かもう一つじっくりしない時候のこの頃でございますが、先生方にはご健勝のことと拝察申し上げます。

私どもが教育活動の推進態勢を確立するために、公開研究会を定例的に開催させていただくようになりまして、10年の歳月が流れました。研究は遅々として進みませんが、今回いくらか新しい試みが出せるのではないかと考えております。ご多用中とは存じますが、これまで通りぜひお出で下

さって、ご指導いただければ幸いに存じます。

敬具

記

- 1 研究主題 豊高校区推進協主題「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」
推進協実践目標<共に生きる集団づくりを><教育活動の全領域で言語認識を>
上記目標をふまえて、授業改善を軸に「バズ学習による、ユニット学習法の深化」
をめざす
- 2 主 催 広島県豊高校区教育推進協議会 広島県立豊高校
- 3 後 援 豊町ならびに豊浜町教育委員会 広島県立豊高校 PTA
- 4 期 日 昭和 57 年 6 月 25 日 (金)
- 5 会 場 広島県立豊高校
- 6 講 師 名古屋大学名誉教授 塩田芳久先生
- 7 日 程 8:20~ 8:30 朝バズ 11:25~12:20 昼食
8:40~ 9:25 1 時限 公開授業 12:30~14:30 分科会討議
9:35~10:15 2 時限 公開授業 14:40~15:50 全体会講評
10:15~10:30 受付 15:50~16:00 閉会行事
10:40~11:25 1 年 授業研究

8 授業内容

(公開授業)

【授業者名略】

(授業研究)

	1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2
1 時限	理科	社会	国語	物理	食物	事務 数学
2 時限	保健	生科	倫社	英語	国語	保健

1-1	1-2
数学	英語

(追伸)

研究会翌日、6月26日(土) 10:00~14:00

「バズ学習入門」 実践者のパネルディスカッション形式の学習会

講師 塩田 芳久先生

パネラー 滋賀県五個荘小学校教諭 高村 博先生

姫路市白鷺中学校教諭 高磯 忠実先生

その他 地元教員

<基礎講座開催通知>

今年度推進協の柱の一つに、昨年度から始まった基礎講座をより充実発展させ、研究推進態勢を確立していくことが挙げられました。今年度は可能な限り会員の要求をくみ上げて、実践に役立つ講座を創り出していきたいと考えています。

今年度第1回の基礎講座を下記の通り開催いたしますので、できるだけ多数の会員の参加を要請します。

記

講座名 「バズ学習入門」

期 日 1982年6月26日(土) 10:00~14:00

会 場 広島県立豊高校

講座のねらい

当地域におけるバズ学習の取り組みは、すでに16年前、豊浜中学校において始まっており、豊中学校、豊高校へと広がり、本推進協の結成と関わって、第13回全国バズ学習研究集会を推進協が実行委員会になって開催いたしました。そうした経過を見ると、この地域においてはバズ学習が一定の定着を見ていることになります。

しかし、今自分たちが取り組んでいる実践が果たしてバズ学習になっているのであろうか。バズ学習とはほかの教育活動とどこが違うのであろうか。といった素朴な疑問が多く出されています。初発の取り組みにあった必然性も薄れ、大多数の教職員も異動している現状の中で、改めて原点に立ち返った学習は、この地域の伝統から考えても極めて意義のあることと考えて、標記のように講座名を設定しました。

講 師 名古屋大学名誉教授 塩田 芳久先生
滋賀 五個荘小学校教諭 高村 博先生
姫路 白鷺中学校教諭 高磯 忠実先生

講座の持ち方

実践者によるパネルディスカッション形式の学習会にして、推進協会員もそれに加わっていく方法をとりたいので、参加者は各自の課題をもってご参加ください。

申し込み、昼食 (略)

追加事項 日程の都合上、土曜日の開催になりました関係で、14時閉会にしておりますが、講師の先生方はおられますので、閉会后時間的に都合のつく方は残っていただければ、学習会を続行したいと思います。ご承知おきください。

第2回基礎講座は「教育相談入門」を予定しています。

<第1回推進協 小学校低学年部会 こくご授業研究 ご案内>

冠省 先週26日開催しました基礎講座「バズ学習入門」には、土曜日という条件にも拘らず会員の約半数にあたる56名の方に参加していただき、所期の目的が果たせたと喜んでおります。ご苦労様でした。子どもに返していける実践へつなげていただきたいと思います。

さて、去る6月2日に開催いたしました82年度推進協総会において、小学校低学年部会では、推進協実践目標を受けて、教科書だけはせめて読めるようにしよう、そのためには話し方、聞き方の研究実践を積み重ねようと申し合わされました。そして、その手始めとして、豊浜町同教、言語認識部会と結合して、下記の通り国語の授業公開による研究会を開催することに致しました。

豊浜町においては、他部会との関連もありますが、一貫態勢づくりの観点から低学年部会だけでなく、広く会員に呼びかけさせていただくことにしました。ふるってご参加ください。

記

- 1 日 時 1982年7月8日(木) 13時15分より
- 2 会 場 豊浜町立大浜小学校
- 3 日 程 13時15分～14時00分 1年 大きなかぶ
14時10分～14時55分 2年 海をあげるよ
15時10分～16時30分 研究協議

<'82年度秋季合同公開研究会>

謹啓 秋冷の候となりましたが、諸先生方は御健勝にて御精励のことと存じ上げます。

さて、お蔭様で私ども推進協も5年目を迎え、今秋は合同の名に値する事前の共同作業もいくらかでき、恒例の研究会を開催させていただき運びとなりました。御多用中とは存じますが、ぜひお越しくださり、御指導賜りたく存じ上げ、御案内申し上げます。

開催要項

- 1 主 催 広島県豊高校区教育推進協議会 豊浜町立豊浜中学校 豊町立豊中学校
広島県立豊高等学校
- 2 後 援 豊町ならびに豊浜町教育委員会 各校PTA
- 3 期 日 1982年11月24日(水) 豊高校会場
25日(木) 豊中学校会場
26日(金) 豊浜中学校会場
- 4 講 師 名古屋大学名誉教授 塩田芳久先生

(豊高校会場)

- 1 日 程 9:50～10:20 受付 12:10～13:00 昼食
10:20～11:05 授業公開 13:00～14:30 分科会研究討議
11:25～12:10 授業研究 14:30～16:00 全体会・講評・閉会
- 2 研究主題 豊高校区推進協主題「地域の教育課題をふまえた教育内容」
推進協実践目標<共に生きる集団づくりを><教育活動の全領域で言語認識を>
上記目標をふまえて、授業改善を軸に「バズ学習によるユニット学習法の深化」
- 3 公開授業ならびに授業研究
授業公開
1-1(理科)、1-2(数学)、2-1(数学)、2-2(英語)、3-1(日本史)、3-2(保健)
授業研究
1-1(国語I)、1-2(商業経済)
- 4 分科会
授業記録をもとにした研究協議

(豊中学校会場)

- 1 日 程 10:50~11:20 受付 13:00~14:00 クラブ発表 (公開)
11:20~12:10 研究授業 14:10~15:00 分科会
12:10~13:00 昼食 15:10~15:40 全体会
- 2 研究主題 授業改善を軸に集団の質的向上と自主性の育成
- 3 公開授業 1A (社会)、1B (理科)、2A (美術)、2B (音楽)、
3A (国語)、3B (数学)、3C (英語)
- 4 クラブ発表 クラブ活動の元凶と成果の発表、ならびに作品展示
- 5 分科会 ①単元見通し学習
②クラブ
③学級集団づくり
- 6 助言者 尾道教育事務所指導主事 中 正彦先生

(豊浜中学校会場)

- 1 日 程 11:00~11:20 受付 13:00~14:30 分科会・研究討議
11:20~12:10 公開授業 14:40~15:30 全体会・講演
12:10~13:00 昼食
- 2 研究主題 授業改善を軸に、地域課題をふまえた指導のあり方
- 3 公開授業 1年 (国語)、2年 (英語)、3年 (数学)
- 4 分科会 1分科会 (国語・学級づくり・町内バス)
2分科会 (英語・学級づくり・町内バス)
3分科会 (数学・学級づくり・町内バス)
- 5 助言者 尾道教育事務所指導主事 植木 章弘先生

<沖友小学校教育研究大会>

さわやかな好季節を迎え、皆様方には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度も地域の教育課題をふまえて、小規模校の特性を生かした教育研究会を開催いたしますので、多数ご参加くださいまして、ご指導くださいますよう、ご案内申し上げます。

要項

主 題 地域の教育課題をふまえた授業

研究主題 音楽 音楽の楽しさを感じ、自ら表現しようとする子どもを育てる
体育 自分から進んで体力や運動能力を高めようとする子どもを育てる

期 日 昭和57年11月11日

会 場 豊田郡豊町立沖友小学校

主 催 豊高校区教育推進協議会 豊町教育委員会 豊町立沖友小学校

後 援 尾道教育事務所 豊田竹原教育振興会 尾道管内へき地教育研究連盟

指導講師 尾道教育事務所指導主事 中 正彦先生
島田 恭次先生

日 程 11:15~12:00 公開授業
13:00~15:00 分科会・指導講話

公開授業 体育 1・2年 「とんだりころんだり」
音楽 3・4年 「あわてんぼうのうた」
体育 5・6年 「せ支持腕立て前転」
分科会 音楽 体育

<久比小学校教育研究会>

晩秋の候、益々ご健勝にて教育の道に御精進のこととお慶び申し上げます。

さて、今年度、下記研究主題を設定し、新たな意欲を持って取り組んでおります。本校のささやかな教育の営みの一端を発表して、諸先生のご批正、ご指導を仰ぎたいと思います。ご多忙のところ恐縮に存じますが、ご参加下さいますようご案内申し上げます。

記

研究主題 一人ひとりに意欲を持たせ、効果をあげる学習指導法の工夫

—学習は科学的に効率をあげ、愛情をもって授業—

授業研究を中心とした研究推進の視点

- ・教科の本質を見極める教材研究
- ・意欲と効率を高める教材教具の工夫
- ・目標の明確化

到達目標

- ・発表力をつける
- ・多面的な表現力
- ・筋道の通った発表ができる
- ・認め合う集団
- ・自己評価
- ・相互評価

研究教科 算数科

期 日 1982年12月7日(火)

会 場 広島県豊田郡豊町立久比小学校

主 催 広島県豊高校区教育推進協議会 豊町立久比小学校

後 援 豊町教育委員会 広島県尾道教育事務所 豊田・竹原教育振興会
久比幼稚園・小学校 PTA

日 程 9:00~9:30 受付 11:30~12:20 昼食
9:30~9:40 発表朝会 12:20~13:50 分科会・研究協議
9:45~10:30 公開授業(1年、3年、5年) 14:00~15:40 全体会・講話
10:30~11:25 公開授業(2年、4年、6年) 15:40~15:50 閉会

指導内容 1校時 1年「かたちづくり」 3年「重さ」 5年「文字を使った式」
2校時 2年「かけざん」 4年「直方体と立方体」 6年「メートル法」

分科会 低学年・中学年・高学年

講 話 子どもに意欲を持たせる算数科の学習 尾道教育事務所指導主事 山本輝明先生
助 言 者 山本輝明先生（教育事務所） 大下美津子先生・浦島啓先生（広大附三原小）

<第6回豊小学校視聴覚教育研究大会>

秋涼の候、皆様益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度も視聴覚教育研究会を開催いたしますので、交通不便の地ですが、多数ご参加の意を賜りたく、ご案内申し上げます。

要項

研究主題 人間形成をめざす学習指導の改善—やる気を育てる教育機器の活用

期 日 昭和57年11月19日（金）

会 場 豊田郡豊町立豊小学校

主 催 豊町教育委員会 豊高校区教育推進協議会 豊町立豊小学校

後 援 尾道教育事務所 豊田竹原教育振興会

日 程 9:30~10:00 受付 12:30~13:30 協議会
10:00~10:45 公開授業 13:30~13:40 開会行事
10:55~11:40 公開授業 13:40~13:50 経過報告
11:40~12:30 昼食 13:50~16:00 講演・閉会行事

公開授業

1校時		2校時	
1-1	国語「たぬきのいとぐるま」	1-2	算数「ひきざん」
2-1	算数「かけざん」	3-1	理科「風車」
3	算数「分数」	3-2	国語「力太郎」
5-1	算数「面積」	4	国語「吉四六話」
5-2	習字「文字の組み立て方」	5-2	理科「酸素と二酸化炭素」
6	理科「水溶液」		

協議会 国語、算数、理科の3分科会

助言者 国語 片山富次郎（尾道教育事務所指導主事）

算数 山本 輝明（同上）

理科 関本 益夫（同上）

*当日配布の要項（全48ページ）あり。11件の公開授業の学習指導案を掲載。全授業がフローチャートを活用したスタイルとなっている。児童の思考の流れを予想した流れになっているが、一方、小ステップで教師主導の色の濃い授業計画となっている。

<大浜小学校公開研究会>

日一日と秋も深まり、野山の紅葉が一段と映えわたるとき、益々ご清栄のこととお慶び申し上げ

ます。さて、本年度の公開研究会を次のように持つことに致しました。貴職をはじめ、関係各位の多数の御参加をいただき、ご指導賜りますようご案内申し上げます。

記

研究主題 子どもの能力を高める授業の創造—読むことを通して、表現力を豊かにする

期 日 昭和 57 年 11 月 26 日 (金)

会 場 豊田郡豊浜町立大浜小学校

日 程 9:00~9:30 受付 12:20~13:10 昼食
9:30~10:15 一校時 13:30~14:40 開会行事・研究協議
10:25~11:10 二校時 14:40~15:05 講話・閉会行事
11:20~12:20 アトラクション

公開授業

1校時		2校時	
1年	国語「チックとタック」	3・4年 複式	国語「力太郎」 国語「吉四六話」
2年	国語「くまの子ウーフ」	5・6年 複式	国語「木龍うるし」 国語「附子」

協議会 国語 助言者 片山富次郎指導主事

指導講話 尾道教育事務所指導主事 片山富次郎先生

7 1983年度の豊高校区教育推進協議会の活動

資料40 「学寮」要覧

<学寮の概要>

名 称 豊浜町立豊浜学寮

所 在 地 広島県豊田郡豊浜町大字豊島 3082 番地 5

設置主体 豊浜町

設置種別 児童福祉法による養護施設

収容人員 10名

設置目的 長期出漁のため、不在家庭の児童を収容する。

特 色 1.収容児童は町内の児童か、本町に本籍を有する家庭の児童。
2.長期出漁のため、不在家庭の児童と欠損家庭の児童を収容している。

沿 革

昭和 20 年代後半頃の豊田郡豊浜村（現在豊浜町）は人口約 7,000 人の内約 4 割が漁撈者であった。漁撈者は、当時わが子を幼少時から技術修得と経済的理由により同船させることが慣習となっていた。このため、児童が基本的な生活習慣を身につけにくい、学校を長期欠席する児童が増加する問題が生じた。これをみた教師が 2、3 名の児童を預かり通学させた。その後、民生委員、教育委員会、教育関係者等の協力により養護施設の設置を決定し、設立準備委員会を数回にわたり開催した。こうして地域の問題を解決するべく地域ぐるみの運動の上、地域に望まれて設立された。

昭和 30 年 4 月 1 日 児童福祉法による養護施設として設立認可される。定員 40 名

昭和 32 年 4 月 1 日 入所児童増加のため増築、定員 80 名に変更

昭和 35 年 6 月 1 日 定員 100 名に変更

昭和 52 年 5 月 25 日 寮舎老朽化のため施設としての機能が低下したため、近接する埋立地に新築移転し現在に至る。

基本方針

豊浜学寮に職を奉ずる我々 23 名は同一目標達成のため、同じ釜の飯を食う、所謂同志である。強い団結の絆の下、互に切磋琢磨し、協力しながら師弟同行、教生一体の精神で全力を振り絞って子供への指導に当る。

努力目標

- 1.人権尊重の精神を尊び、勤労を厭わず、あらゆる苦難に打ち克ち、進んで困難に立ち向い、自ら問題解決のできる思いやりのある自主性に富んだ子供に育てる。
- 2.寮生の行動、言語、態度、学力の向上を通じ、町民、父兄、地域の人々の信頼を得るような子

供を育てる

3.自ら子供の意欲を沸き立たせるような、外来者に対しても信頼を得、好感を持たせるような魅力ある環境の創造に努める。

指導の具体例

1. 健康管理に留意する

- イ. 朝の体操（ラジオ体操、柔軟体操、マラソン）自主的に実施
- ロ. 身長、体重測定（月例）
- ハ. 身体を清潔にする（洗顔、入浴、散髪、洗髪、洗濯）
- ニ. 病気の予防（手洗い、うがい、病気の早期発見・早期治療）
- ホ. 環境の美化（朝夕の掃除、植樹、花壇の作成）

2. 家庭的雰囲気を味わわせると共に、日常生活の基盤を奠ける

- イ. 各部屋の児童を縦割りに配置する。但し中高男子は別室とする。
- ロ. 毎晩就寝前に集会を開く（各部屋毎に）
- ハ. 隔月誕生会を実施する。
- ニ. 食事は部屋単位とする。
- ホ. 日課表による行動を活発にする。
- ヘ. 日常の生活習慣形成に努める。

3. 物を大切にし、感謝の念を深める。

- イ. 食前食後の瞑目合掌
- ロ. 公共物のあつかい（大切に、後片づけ）
- ハ. 全体集会の講話（月、水、金、土、日）
 - ・献立 ・節水 ・節電 ・掃除用具 ・運動用具 ・支給物資
- ニ. 小遣いを無駄に使わない。

4. 言葉遣いを良くする。

- イ. はい、いいえ、ぼく、わたし、君、さん、あなた、ありがとうです、でした
- ロ. 発音、アクセントの矯正指導
- ハ. 敬語の使い方指導
- ニ. その場での直接指導
- ホ. ことばカードの利用

5. 勤労を厭わない子供の育成に努める。

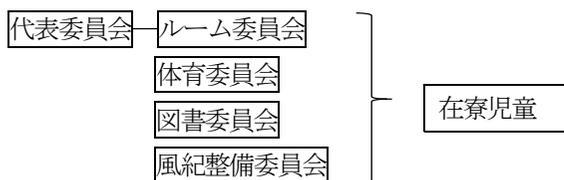
- イ. 日々の清掃活動を重視する。
- ロ. 日曜日等の休日を利用して花壇、畑の耕作等作業指導を行なう。

6. 子供の自主、創造性を養うことに努める。

- イ. 子供会の活動を活発にする。
- ロ. 子供会目標

子供会はすべての児童が協力し、正しく明るい学寮を作り、心身共に健全な児童として学寮内の生活の向上をはかることを目的とする。

ハ. 子供会 組織図



7. 集団生活としてのきまりを重視する。

- イ. 豊浜学寮管理運営規則の活用
- ロ. 日課表をよく守って行動する。
- ハ. 職員の教えを素直に聞く。
- ニ. 自主的な行動を活発にする。

8. 地域社会との関連を深める

イ. 学校関係

- ・授業参観 ・懇談会 ・PTA 総会に出席する ・学年地域別教育集会の会場提供
- ・中学校町内バズ学習の会場提供

ロ. 子ども会関係

- ・町内子ども会連合会に加入 (役員、リーダー選出) ・地域子ども会に遊び場の提供
- ・地域子ども会との合同行事をもつ

ハ. 体協関係

- ・運動場、用具の提供 ・体協主催の諸行に参加 (ソフトボール、排球、その他)

ニ. 婦人会関係

- ・学習会場の提供 ・運動場の開放 (ママさんバレー等)

ホ. 民生委員会、児童委員会関係

- ・集会、研修会の会場提供 ・各種会合に出席する。

ヘ. その他

- ・教育委員会 ・社会同和教育推進委員会、婦人会 ・商工会
- ・PTA 等の主催する、各講演会には職員は出席し学習する

9. 両親が安心して、生業につける寮にする

- イ. 出漁地の連絡所を明確にしておく。
- ロ. 子供に近況を手紙で報告させる。
- ハ. 帰宅させる場合は必ず迎えに来ること (職員との連絡)
- ニ. 親より子供に連絡があった時は、職員が立会する。
- ホ. 保護者会の開催 (冬季・1月4日、夏季・8月17日)
- ヘ. 保護者会には児童の作品を展示する。

学寮関係諸行事

1. 日中行事

イ. 平日

6時 起床・朝会・掃除・朝食
7時20分 学校給食
12時 登校・登園
15時 おやつ
16時 入浴
17時 掃除
18時 夕食
19時 学習
20時 集会
21時 就寝

ロ. 休日

7時 起床・掃除
8時 朝食
9時 学習
12時 昼食
15時 おやつ
16時 入浴
17時 掃除
18時 夕食
19時 集会
21時 就寝

- ・幼児は19時以後自由に就寝する
- ・土曜日は22時消燈
- ・冬季は朝会を省略する

2. 週間行事

イ. 全員集会一月、水、金、土、日

ロ. 男子集会一火

ハ. 女子集会一木

二. 子供会一日曜日 10時より

(月、週の努力目標の設定及び反省)

20時より

(土一夕食直後 日一19時)

3. 月中行事

イ. 職員会 (1日、15日) ロ. 避難訓練 (適時) ハ. 散髪 二. 誕生会

ホ. 身体、体重測定 ヘ. 職員運動 (15日) ト. 処遇会議

4. 年中行事 (暦による年中行事も重視する)

イ. 新入寮児歓迎会 ロ. 部屋替え ハ. 花見 二. 仲良し運動会参加

ホ. 寮内球技大会 (2回) ヘ. 総合キャンプ参加 ト. 保護者会 (2回)

チ. 少年ソフトボール大会参加 リ. 魚釣り大会 ヌ. 水泳指導 ル. 大掃除 (2回)

オ. 施設球技大会参加 ワ. 飯盒炊さん 力. 遠足 (社会見学) ヨ. クリスマス会

タ. 餅つき会 レ. ひな祭り ソ. 退寮者壮行会

児童の状況

- ・児童収容定員及び現在員

イ. 収容認可定員—100名 ロ. 在籍児童数—90名 (男子43名、女子47名)

- ・在籍児童数の学年別男女別 (昭58年5月1日現在)

学年	幼稚園				小学校							中学校				高校				計
	3歳未	年少	年長	小計	1	2	3	4	5	6	小計	1	2	3	小計	1	2	3	小計	
男	1	4	3	8	4	5	3	4	2	5	23	3	4	2	9		1	2	3	43
女		3	7	10	2	3	5	4	2	7	23	3	5	3	11	2		1	3	47
計	1	7	10	18	6	8	8	8	4	12	46	6	9	5	20	2	1	3	6	90

・兄弟関係

	1人	2人	3人	4人	5人	8人	計
組数	19	15	5	2	2	1	44
人数	19	30	15	8	10	8	90

家庭状況

1. 職業状況

世帯総数 50世帯／漁業者 42世帯（84％）／その他 8世帯（16％）

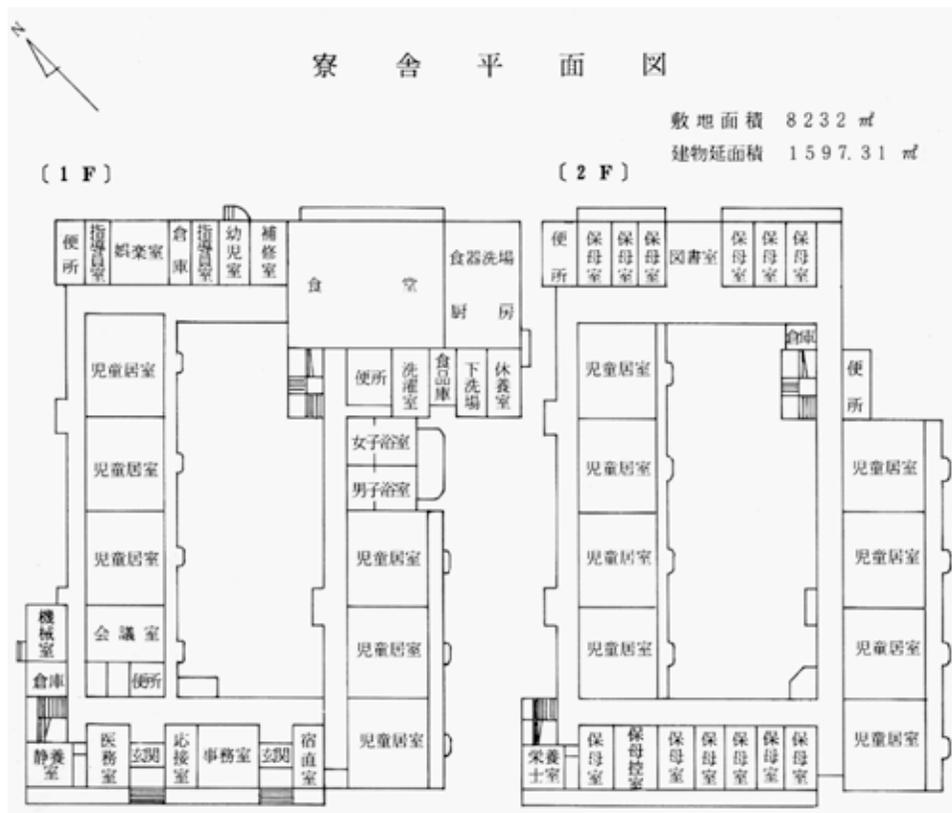
2. 家族関係

両親健在 43／父親のみ 3／母親のみ 1／両親なし 3

3. 主な出漁先

・近海 ・愛媛県 ・福岡県 ・長崎県

学寮職員一覧（氏名略）、寮長1名／指導員4名／書記1名／保母12名／栄養士1名／調理師4名



資料41 豊浜中学校とバズ学習

*昭和58年度「学校要覧」より

1966年4月1日	第8代校長、長谷川敏着任
1968年2月21日	第1回バズ学習研究大会開催（豊浜中主催 同名大会以下同様）
1968年11月22日	第2回バズ学習研究大会開催
1969年11月15日	バズ学習の研究により学習研究社賞受賞
1970年1月23日	第3回バズ学習研究大会開催
1970年10月28日	第4回バズ学習研究大会開催
1971年12月3日	第5回バズ学習研究大会開催
1972年8月2～3日	第4回全国バズ学習研究集会（第6回バズ学習研究大会）開催
1972年10月20日	第12回広島県へき地教育研究大会開催
1973年1月26日	豊田・竹原学校給食研究会開催
1974年10月24日	道徳教育研究大会（第7回バズ学習研究大会）開催
1975年10月22～23日	第12回広島県へき地教育研究大会（第8回バズ学習研究大会）開催
1976年11月26日	第9回バズ学習研究大会開催
1977年11月17日	下島地区秋季公開研究会（第10回バズ学習研究大会）開催
1978年10月20～21日	第13回全国バズ学習研究集会共催
1979年11月26日	長谷川校長、文部大臣賞受賞
1980年4月1日	第9代校長、山根正着任
1980年11月22日	豊高校区教育推進協議会共催バズ学習公開研究会開催
1980年12月9日	豊田・竹原学校給食研究会開催
1981年6月25日	豊高校区教育推進協議会共催バズ学習公開研究会開催
1981年10月22日	学校給食指導優良校として文部大臣賞受賞
1981年11月15日	第12回豊田・竹原同和教育研究大会豊浜中学校区大会開催
1982年11月26日	豊高校区教育推進協議会共催バズ学習公開研究会開催

資料 42 姫路市立安室中学校視察に向けての配布資料

学校視察参加会員 各位（中・高）

1983.6.10 推進協事務局

第 31 回推進協議会において、懸案の第 19 回全国バズ学習研究集会開催地引き受けが、両町当局の賛意を受けて決定されました。そして、来年度に向けて、全国集会を成功に導く日常実践の充実をめざす取り組みを 2 ヶ年計画で行うことになり、今年度は私たちの研修の教科を重点目標とすることになりました。

そして、その第 1 段階として、先進的なバズ学習研究校へ全員行かせていただき、研究交流をさせていただくことから始めることになりました。去る 6 月 14 日、小学校は加西市立北条小学校へほぼ全員参加による研修を行いました。大変有意義な研修会でした。ここで中、高の視察学校が決定するまでの経緯をまず最初に報告させていただきます。

決定を受け、予算の関係もあり、姫路市とその周辺（高丘中の実践から始まり、今日中播バズ学習研究会会員約 50 名を擁している）から学校を選定するために、現全国バズ学習研究会事務局長（高丘中学校長）牛尾照夫先生にご相談申し上げました。姫路の現状は、ここ 2 ヶ年ほどの間に大幅な人事異動があり、第 15 回全国バズ大会開催校の白鷺中学校においても当時の教師は 30 歳台にわずか 3 名いるだけという事に象徴される状態となり、今年度はどこともに大なり小なり荒れの状況があり、立て直しの中で、1 学期中に受け入れは困難であるという事でした。ただその中で、高丘中が急激な生徒増のため、3 年前分割され新設された安室中学校が、その時点での荒れを克服するためにバズ学習に取り組み、まだ年月は浅いけれど生活バズはかなり成果をあげているので、そこへの依頼をしてみてもあげようかとおっしゃっていただきました。早速お願いすると同時に、こちらからもお願いいたしました。

安室中では、本推進協第 13 回大会に参加された先生方もおり、あの先進地域の先生方にお土産になるものは何もないという事から、辞退したいという事でしたが、牛尾先生からの再度の要請などで、学年ごとの討議を積み、再度検討していただきました。その結果、学習バズは 2 学期からの取り組みなので、生活バズに限って公開させていただくというご返事をいただくことができました。その時点で安室中にお邪魔し、いろいろお願い申し上げた結果、全授業の公開はとてできる状態ではないのだがと断られた上で、いくつかの授業を指定して公開していただけることになりました。詳しくは後日という事でまだご連絡はいただいていませんが、その方向でお願いできると思います。

安室中の先生方から、くれぐれも先生方にお伝えしてくれという事で、次のような伝言がありました。「安室中はまだ取り組みが浅く、やっと少し形ができた段階で、とてご参考になることはありませんし、現在の計画では生活バズを何とかして 1 学期で仕上げ、2 学期からは学習バズへと進めていこうとしているところです。したがって、とにかく苦闘している姿を見ていただいただけだと思いますので、先進校視察などという名目ではなく、あくまでも相互に研究交流をするという事でおいで下さい。私たちも、色々知恵を貸して下さるようお願いします」。つまり、1 学期の段階であえて引き受けたのは、同じバズ学習仲間として、お互いに交流し合う事で、相互にプラスになる

のではないかとこの観点で特設して下さるとこの事です。

とじ込みの別紙プリントは、全国バズ学習研究会機関誌「バズ学習」8号に掲載されている安室中の昨年度取り組みのレポートです。会員各位は事前にしっかりと読んでおいてください。なお、27ページにある朝バズ、終バズも公開されます。当日の日程は次の予定です。

8:15～ 8:55 朝バズ

8:40～ 9:30 授業公開 (指定授業)

9:40～10:30 終バズ (全クラス公開)

10:40～11:30 集団訓練 (各学年ごとに行う、全公開)

11:40～12:00 研究交流

12:40～ 昼食

*旅程及び注意事項は略

資料 43 1983 年度総会資料

1983 年度総会資料 第 19 回全国バズ学習研究集会を成功に導く日常実践の充実を

期日 1983 年 8 月 27 日

会場 豊町立久比小学校

総会次第

開会

代表幹事あいさつ

来賓あいさつ

常任講師紹介 名古屋大学名誉教授 塩田 芳久 先生
中京大学教授 杉江 修治 先生
南山大学講師 石田 裕久 先生
広島文教女子大講師 土屋 孝子 先生

来賓紹介

基調提案

決算報告及び会計監査報告

実態調査結果報告

討論

昼食解散

総括会議（実態調査研究委員会）

1982 年度活動概要

- 4 月 30 日（金） 第 15 回実態調査研究委員会（豊高）
- 5 月 中旬 実態調査実施
- 5 月 12 日（水） 第 26 回協議会（豊高）
- 6 月 2 日（水） 第 27 回協議会
- 6 月 2 日（水） 1982 年度総会（久比小）
- 6 月 25 日（金） 豊高校春季公開研究会
- 6 月 26 日（土） 基礎講座 I 「バズ学習入門」（豊高）
- 6 月 30 日（水） 実践目標研究会
- 7 月 21 日（水） 第 1 回就学前教育部会（豊高）
- 7 月 30 日（金） 全国バズ学習研究集会提案打ち合せ（豊高）
- 8 月 9 日（月） 第 2 回就学前教育部会（豊高）
- 8 月 27-28 日（金・土） 第 17 回全国バズ学習研究集会（三重大）

- 9月13日(月) 第3回就学前教育部会(豊島幼)
- 10月27日(水) 第24回広島県国公立幼稚園連盟研究大会(福山)
- 11月8日(月) 第28回協議会(豊高)
- 11月上旬 実態調査実施
- 11月11日(木) 沖友小公開研究会
- 11月19日(金) 豊小公開研究会
- 11月24日(水) 豊高秋季公開研究会
- 11月25日(木) 豊中公開研究会
- 11月26日(金) 豊浜中公開研究会
- 11月26日(金) 大浜小公開研究会
- 12月7日(火) 久比小公開研究会
- 12月8日(水) 就学前教育部会 公開保育(豊幼)
- 12月10日(金) 第29回協議会(豊高)
- 1月22-23日(土・日) 全国バス役員会
- 2月1日(火) 斎小公開研究会
- 2月9日(水) 第30回協議会(豊高)
- 2月上旬 実態調査実施
- 2月24-25日(木・金) 理科部会技術講習会

1982年度 一般会計決算報告

収入の部

		予算額	決算額	摘要
助成金	豊町	1,650,000	1,650,000	
	豊浜町	1,350,000	1,350,000	
	県教委	150,000	100,000	
会費		156,000	151,200	1,200円×132名
雑収入		15,000	6,466	
計		3,321,000	3,257,666	

支出の部

	予算額	決算額	摘要
事態調査関係費	2,160,000	1,899,870	報告書印刷代60万円は特別会計へ
就学前部会関係費	100,000	124,871	
領域別活動費	200,000	255,815	報告書印刷代10万円は特別会計へ
全国バス学習派遣費	400,000	472,400	
事務局費	461,000	491,190	実践目標具体案印刷代13万円は特別会計へ
計	3,321,000	3,244,146	

差引残高 13,520 円

1982 年度特別会計報告

	金額	摘要
前年度繰越	637,555	
実態調査報告印刷	600,000	実態調査関係費より
基礎講座報告書印刷	100,000	領域研究活動費より
実践目標具体案印刷	130,000	事務局費より
計	1,467,555	

会計監査報告 (略)

1983 年度予算書

収入の部

	予算額	摘要
前年度繰越	13,520	
助成金		
豊町	1,900,000	
豊浜町	1,600,000	
県教委	100,000	
会費	150,000	1,200 円×125 名
雑収入	10,000	
計	3,773,520	

支出の部

	予算額	摘要
事態調査関係費	1,900,000	
就学前部会関係費	150,000	
領域別活動費	300,000	
全国バズ学習派遣費	450,000	
事務局費	473,520	
計	3,773,520	

1983 年度 推進協役員

(略)

1983 年度豊高校区教育推進協議会会員名簿

幼稚園 11 名 小学校 62 名 中学校 36 名 高校 22 名

(氏名略)

<基調提案>

第 19 回全国バズ学習研究集会を成功に導く日常実践の充実を

はじめに

1978 年 6 月 13 日、豊高校体育館において、推進協結成総会を開催しスタート致しまして 6 年目、即ち 5 周年を迎えることができました。豊町、豊浜町、ならびに両町教育委員会をはじめ、関係各位の深い御理解と多大な御支援によるものと感謝申し上げますと共に、会員の皆さんの平素の御努力に対して敬意を表します。

決して順調な進展とは申せませんが、「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を研究主題に

し、同和教育の観点に立ち、当面幼・小・中・高一貫教育態勢づくりをめざしてまいりました。会員の皆さんの討論を期待しての提起であります。幼・小・中・高一貫教育態勢づくりというサブテーマの「態勢づくり」は、もう下していいという段階に来たように思われます。少なくとも、第19回全国バズ学習研究集会を開催する来年度には、次の発展を示すサブテーマにかえられるようにしたいと思います。

今年度は、大変総会の開催が遅れました。その理由については、すでに会員の皆さんはご存知のように、新年度当初から今年度の活動が始まっています、しかも学校見学を受け入れて下さった学校のご都合などの調整、準備、そして実施と全く日程が立てられない状況があったためです。くわしくは、今日お手元に届けました「座標」*をお読みいただきたいと思いますが、推進協としては大変な行事を1学期にこなしたくて、したがって、今回の基調提案は、冒頭に掲げましたように、第19回全国バズ学習研究集会を成功に導く日常実践の充実に焦点づけて提案させていただきたいと思っています。

*「座標」：広島文京女子大付属幼稚園及び加西市立北条小学校、姫路市立安室中学校に研修に出た教員による報告集。幼稚園は13名、小学校は55名、中学校は32、高校は14名のレポートが掲載されている。B5版、2段組み、84ページ。

これまでの経過

昨年度総会におきまして結成5年で、すでに会員の半数以上が入れ替っている状況なので、これまでの取り組みの流れを中心に提案するよりの協議会の提示にしたがって、結成への背景とその流れを提案させていただきました。そして、今年度の活動方針として、7項目をあげました。その7項目の最後の7に、第18回全国バズ学習研究集会とだけ書いてあって、口頭で課題提案であることを申し上げました。

そのいきさつについては、私たちの推進協結成の糸口になった第13回全国バズ学習研究集会において、5年後の開催を約束し、全国のバズ学習研究会員もそのつもりでおられることなどについてお話しただけでした。第18回大会開催の提案を協議会にはかりましたのは、第26回協議会で課題提案をしたのがはじめてでした。そして、総会直前の27回協議会で協議致しました。その時の結論は次の通りでした。

第18回大会を開催することは時期尚早の感が強いが、会員のバズ学習に対する理解を深めるなかで再度検討していくという、いわゆる保留ということでした。もちろん、両町のご賛意とご援助がなければ開催は不可能でありますし、そうしたお願いや準備が開催の前提条件としてあります。しかし、一番配慮しなければならないのは、会員のみなさんにまた天下りの行事が押しつけられたというような受け止めにならない手だてが必要だということでありました。推進協の結成の背景から、今日に至るまでの経過中で、同和教育とバズ学習の統合を課題にしていまいりましたし、いずれにしてもこれまでの活動にひとつの節目を入れる時期が来ていることも事実であります。そうした状況を会員の皆さんは的確に掴んでいただき、当然の帰結として、地域の方々に対し、全国の仲間の方先生方に対し、現状をみていただこうと決断をしてもらいたいと願ったからでありました。

昨年 17 回大会が三重県津市の三重大学で開催されました。その会場において、おそらく正式に第 18 回大会開催の要請があるだろうと考えながら参加を致しました。ところが、この大会において新潟県五泉市五泉南小学校が、最終的な態度決定はしていないが第 18 回大会を開催したいという申し出がありました。結局大会では、本推進協と五泉南小学校とが候補にあがっているという報告だけに終わりました。もちろん、本推進協では態度決定がされていませんので、その要請を受けて帰るという形になりました。その後、五泉南小の出方をみてまいりましたところ、10 月上・下旬で開催するという決定がされたことの連絡がありました。私たち推進協は島という立地条件があります。1 学期の濃霧、2 学期始めの台風と、全く予測のつかない自然の条件をかかえており、しかも地域の主産業であるみかん採集時期などを併せて考えてみる時、やはり 10 月開催以外にありません。

したがって、この時点で第 18 回大会は全国にバズ仲間を広げる意味からも、新潟で開催していただくことにし、第 19 回大会開催へと変更することに致しました。そして、第 19 回大会ならば、実態調査 5 ケ年計画終了後であり、その最終報告をさせてもらえるということと、両町のご援助も得やすいという、ふたつのメリットもあります。そこで、第 28 回協議会において、その方向での提案を致しました。各校での討論を積み重ね、第 19 回大会開催を最終的に推進協として決定致したのは、3 月 8 日、第 31 回協議会でありました。その間に、くわしくは「座標」をお読みいただきたいと思いますが、今年度予算についての説明など、両町の町長さんをはじめ理事者の方々をお願いする会を持たせていただいた席で、第 19 回大会開催についてもお願い致しましたところ、全面的なご賛意をいただき、その準備の予算がいるだろうと増額を申し出ていただいたのでした。その予算をもとに 1 学期の全員研修が実現できたのでした。この背景に、今日のきびしい財政事情にもかかわらず地域の教育づくりに対する深いご理解をお示し下さっている、両町の理事者の方々、またそれを支えている地域の人々の、私たちに対する熱いまなざしを感じざるをえません。やると決めた以上、その期待にこたえる創造をなし遂げましょう。

同和教育とバズ学習の統合を

私たちの推進協は、その結成への背景として、町同教を軸にした幼・小・中の連携と、バズ学習で結ばれた中・高の連携の二つがあったことは、これまでくり返し確認し合ってきました。同和教育の観点に立って、地域の子どもの進路保障を考える時、幼・小・中・高へと、ひとりの子どもが完全に受け継がれていかなければならない。つまり子どもの生育における一貫性に着目したのは必然的なものでありました。

現実はいきびしい状況を内包しています。去る 5 月、豊高校において差別事件が起きています。そして、豊高校では差別事件が起きるのではなくて、隠されていたものが表面に表れるという意味で、「露呈」ということばで表現しています。つまり、隠されていた差別事象がたまたま表面に表われるという、地域の差別性に根ざした差別事件が度重なっているということです。

第 1 回の点検学習会が終了した時点では、当然推進協への提起もありましょう。地域の差別性に根ざしているとはいっても、人間がまさに人間であることを相互に認め合い尊重し合うという、人間社会の当然の原理が、教育の本質が歪められているという事実の象徴的あるいは集中的な現象で

あります。ひとり学校教育において解決が可能とは思われませんが、少なくとも私たちの手で、学校における差別事象の一扫は可能なことであります。子どもの側からみて、先生が差別的であると感じさせない取り組みは、私たち自身のきびしい内部点検によって達成されます。そして、具体的な展開はバズ学習によって可能であることを、これまでの数多くの実践は証明しています。

これまで、同和教育とバズ学習には、矛盾や対立する中味は何一つないことを言い続けてきました。ただ現実には、同和教育は同和教育であり、バズ学習はバズ学習であると分断する発想を克服し切れていません。生活指導と教科指導矛盾していたりする現実もあります。子どもの全人格的発達は、それらの全てが統合されてはじめて可能であるはずで、そのことを考える時、何としても「統合」の発想を私たちが身に付けることが急務であると思います。そこに当面の緊急課題があります。

一貫教育の要として就学前教育を

'81年度に推進協内組織として就学前教育部会が発足しました。このねらいは、一貫教育の要として幼児育を位置づけようとするのと、幼稚園教員の研修保障がきわめてむずかしい状況にあることの解決策としてでありました。常任講師の先生をお願いし、学習活動を続けてきました。幼稚園の先生方は、その中で人間の発段階における幼児期において、「あそび」がどれだけ不可欠な栄養素であるかを認識されたように思います。しかも、過去には地域が持っていた教育力といいましょうか、地域においてたて割り子ども集団で身に付けてきた中味までも、幼稚園教育の守備範囲に入ってきている現状があります。ますます幼児教育の重要性が増大しています。

しかし一般には、いわゆる子守をしてくれればよいという感覚であったり、逆に小学校の教育の先取りを要求したりというのが現状ではないでしょうか。これからの重要な課題として、そうした地域の幼児教育に対する啓蒙活動がありますが、その前に私たち自身の幼児教育に対する認識を深める仕事が残っているように思います。それぞれの発達段階に対応した教育活動のスタート台になる所は何であるかを、人間理解を深める上でもぜひともつかんでいただきたいと思います。そして、幼稚園におけるバズ学習とはどうあるべきかを創造していかなければなりません。将来協同して何かをしなければならぬ時が来たら、進んで協同できる資質を育てるためにどうしたらよいかという事です。

全会員に就学前教育に対する深い認識をするよう呼びかけ、就学前教育部会への積極的参加を要請しましても、結局は幼稚園の先生方の実践活動に待つ以外にはないことも事実です。その時はやり今日の幼稚園教員の過酷な勤務条件が問題になろうと思います。すでに3園では1人の先生になっています。年休すら取れない状況があります。その改変を切望して止みませんが、他の会員の協力もお願いしたいと思います。

今年度の活動方針

はじめに述べましたように、すでに1学期が経過しています。その1学期には全員研修と、新会員研修、そして沖友小学校ならびに幼稚園の公開研究会開催が活動の全てでありました。基本的には昨年度の活動方針とおなじであります。ただ、今年度は来年度第19回全国バズ学習研究集会開

催という、より明確な目標に焦点づけがされています。そして、この開催へ向けての2ヶ年計画としては、今年度は私たち自身の研修に重点を置くという大まかな方向づけがされているだけです。これまで、公開研究会を軸に、授業改善を中心にすすめた活動をすすめてきましたが、これが中心課題であることはいまでもありません。しかし、昨年度の活動を通して考えますと、それぞれの学校現場で実質的な成果が上っているのは、むしろ月例の校内授業研究であったように見受けられ、今年度は可能な限り校内研の交流を図りたいと考えています。また、来年度へ向けての取組みの中で、各校においてさまざまな試行も始まってはいますが、よくわからないということばに象徴的に表われている、第三者的な態度の克服が大きな課題であろうと思います。その背景には前に述べました。統合の発想の弱さもたしかにあるとは思いますが、それだけではないように思われます。端的に言えば教員ひとりひとりの主体性の問題だということになってまいりましたが、そう言ってしまうと何の解決にもなりません。やはり、具体的な実践を通して変革へ向かう以外にないと思います。

ところが、ここで立ち止まってしまふ。つまりどんな方法でやればいいのか分からないという現状があるのではないのでしょうか。たしかに目標が定めれば、自ずと達成のための方法は考え出されていくものだといえましようが、どんな方法があるのかを知らなければ、やはり創意工夫も困難であるという側面もあるように思います。そんな基礎的なハウツーが意外とわかっていないのに、ノウハウ（こつ）を追い求めているような傾向があるのではないのでしょうか。こんな時どうするのがよりいいのかは、なかなか尋ねにくいことのようにです。ここに焦点をあてた基礎講座を、2学期以降精力的に開催していきます。

最後になりましたが、ご承知のように今年度は実態調査5ヶ年計画の最終年度であります。一部を除いてすでに今年度の調査も終了していますし、2・3次実態調査報告書もすでに会員の皆さんにお渡ししています。また、昨年度の4次調査についても、この総会資料に入れさせてもらっています。本日、お越しいただいている塩田先生、杉江先生、石田先生をはじめ研究者の先生方の犠牲的なご協力とご指導の賜物です。一方では、直接的な経費だけでも1000万円を越える両町のご援助があって初めて可能であった調査でもあります。一地域の幼・小・中・高全児童生徒の悉皆調という点でも、きわめて貴重資料であろうと思います。私たちは報告の標題を「教育課題を求めて」としましたように、より科学的に私たちの教育課題を明らかにしようとしたのです。つまり、この資料は私たちのための資料であり、そこで得られた課題が具体的な実となつて、児童・生徒ところへ返っていかねばならないのです。しかし、この実態調査結果が本当に生かされた実践がなされているのでしょうか。たしかに、こまかい分析と課題づくりがされている学校もありますし、クラスで活用されている先生もおられます。だが、全体的にはその実践が姿として表われていないことをきびしく自己に問いかけてみる必要があります。それは学校態勢においても同様であろうと思います。本日の総会の学習テーマを、実態調査研究に設定した理由もそこにあります。

再び言わせていただきます。教員の変革なしで、子どもに変革を迫ることはできません。この同和教育の基調を、私たち自身が真に具現することを確認し合うことで基調提案にかえさせていただきます。

<82年度 各校総括>

◎沖友小学校・沖友幼稚園

昭和58年度実践目標—学習指導は科学的に効率を上げ、生活指導は愛情を持って細やかに

はじめに

子どもとの毎日の出会いを大切にしながら、学区の実態を通して教育活動に専念する中で、一人一人の子どもを見つめ、お互いに人間として人権を認め、進路の保障につながる学力を身につけさせなければならない。昨年度に続いて、本年度も日記指導により、子どもの生活実態や地域の実態を探りながら適切な指導のもとに子どもの進路保障につながる学力を身につける取り組みをしていく。そのために、①子どもたちに暮らしの中から真実を見つけさせ、集団の関わりを通して、ものごとに対する正しい見方、考え方の指導、②自己の暮らしと人権について確かな認識を築いていくための表現力の指導、③身近な生活の中から、不合理矛盾に気づき、それを解決しようとする実践力を養うこと、に重点を置いて実践していく。

問題点・今後の課題

教育活動の全領域で言語認識を

- ・発言（発表）をするときは、最後まではっきりと発言すること。友達の発表を真剣に聞く態度を育てていく。
- ・話し合い活動がスムーズに進められるように、特に司会者となる児童には力量をつけていかなければならない。そのためには、児童と教師が事前に打ち合わせをし、会をどの方向に進めるか、どんな発問をしたらよいかなどアドバイスがいる。また、発表のし方も機会を捉えて指導を続けていく。
- ・基本的な言葉が正しく使えていない子に対しては、最後まではっきり正しく言える様に指導していく。職員も児童への対応のし方に気をつけていく。

共に生きる集団づくりを

- ・縦割り班で、子ども達が仲よく喜んで行動できることは、自立、自律におおいに役立つ。そのためには、高学年のリードによって中味の充実した班活動が望まれるので、リーダーの養成をしながら班員のあり方についても考えさせていく。
- ・集団づくりについて、小集団のもつ良さを知らせ、話し合い、実践へと指導していかなければならない。
- ・大きな集団に出合った時、自分の殻の中に逃避したり意欲を失ったりする弱さ脆さがあると思われる。どんな集団にも入っていける適応性を養いたい。

◎大浜小学校

豊高校区実践目標の反省と今年の課題 について

本校では、地域の課題として、①為すことによって学ぶ、②働くことを身体で知る、③みんなと

共に伸びる態度を学ぶ、④正しい物の見方、考え方を身につける、⑤進んで行動する、ということが挙げられているが、昨年度の課題である「変遷する地域の今日的課題をふまえて生産教育を中味とした教育を推進する」という点では、ただ意気込みだけで終始したという感が強い。父母の理解を得て農繁休業（3日間）をカリキュラムに取り入れることができただけに止まっている。児童の家庭生活を見ると、生産活動からは無関係な位置におかれていて全く地域に背を向けているといった生活実態である。このような実態の中で本年度は生産に関心をもたせ、今親はどんな仕事をしているのかを理解させなければならないと考える。そのためには「年間の生活表」を作成し、仕事の内容を標示し、それを廊下に掲示するコーナーを設け、それを活用することによって労働に対する関心を深めたい。もっとも廊下に掲示するだけでは効果的でないので「おうちの仕事」というテーマで作文を朝礼時に朗読させ、定着させたい。

次に考えられる課題としては「社会事象が正しく判断できる人間形成」である。人間疎外に向けて利害が追求される社会構造の中で、子供たちの生活の中でも人間疎外の様相が露呈されている。そういった児童の姿から吾々は学び、「共に生きる集団」とは何であるかを考えていきたい。共に生きる集団とは、雑な考え方をすれば、弱者の論理が展開される中で連帯意識が育たなければ生きることへの幸せは保障されないのではなかろうかと考える。ともあれ、排他的でなおかつ保守的な物の考え方の中では連帯意識が生まれてこないことは確かである。個を大切にするというか個の存在を認めるということから「みんなに伝えたいこと」を5分間（朝の会）設けているが、共に悩み共に生きることへの支えとなることを願っている。また、このことが各教科でどう生かされ、どう扱えられなければならないかという問題であるが、そのために国語科・文学教材で人間愛と連帯観を、算数科・すじ道の通った考え方を、社会科・農業・漁業の単元では「生活と人権」を、工業単元では「公害と人権」を、道徳・生命の尊厳、平和、平等、労働、真実を、体育・健康と安全を、以上のように視点をあてて今後実践していきたい。

◎久比小学校

昭和57年度は「ひとりひとりに意欲をもたせ、効率をあげる学習指導法の工夫」を研究テーマにあげて算数科の研究にとりくんだ。そこで、授業研究の中心とした研究推進の視点を、①教科の本質を見きわめる教材研究、②意欲と効率を高める教材教具の工夫、③目標の明確化。以上の事を視点におき、小規模校としてまた小集団学級として消極的な学級にならぬよう積極的発表力を子どもに身につけさせるよう課題を持って推進してきた。その反省と課題として

- ・昭和57年度の研究は計画どおり推進できた。この力を更に深めるよう前進していきたい。
- ・到達度目標の「発表力をつける」は、各学年とも全員発言ができ、高学年では、筋道のおおた発表ができるようになり、成果があった。
- ・体育科から算数科に転換し、学力がつくためにと教職員、児童が一体となつてとりくんだことは意義深く、今後も新たな課題解決にとりくんでいきたい。
- ・児童の気づきや願いを大切に教育計画を立案しなければならない。また児童が本当に学習したいという発想から出発し、教師はこれに応えるよう、次年度の課題として考えていきたい。

昭和 58 年夏、教育研究計画推進

本校の児童は小さな集団の中で育てており、消極的な集団に陥らないよう、また、大きな集団活動に対応できる子どもを育てていきたいと願っている。そのためには、児童の主体性を伸ばす必要を感じて、本年度の研究主を「個の問いかげに答え、磨き合う学習集団づくり」とした。そこで、各学年の段階も考え、研究の視点、教科、実践を次のようにとりくむことにしている。

①研究の視点

低学年：なかまづくり

- ・なかよし学級づくり—教えあいから話し合いへ

中学年：効果的な話し合い学習

- ・支えあう学習集団づくり—学習過程の工夫改善

高学年：思考を深める相互作用

- ・個人思考と集団思考—人間関係を高めつつ

②研究教科：算数科

③研究実践

6月23日（木） 1年、6年の授業研究

7月6日（水） 3年、5年の授業研究

9月2日（金） 算数指導案と教材研究

10月7日（金） 2年、4年の授業研究

10月26日（水） 公開研究会

本年度は、教師が教えるという姿勢でなく、児童を十分に活動させ、意欲をもたせ、児童の間か
げに答えるという姿勢でとりくみ、児童の主体性を育てていきたいと願っている。

◎豊浜中学校

旧年度より「単元見通し学習法」についてとりくんでいる。まず教師個々が単元を通しての指導案を作り、そのでき上がった指導案をもとに研修を積み重ねた。最初のとりかかりでは、自分は教科が違うから他教科の指導案を見てもわからないといったような発言もあったが、教科の内容でなく、目標、目標分析、そして提示課題が一貫性があるかどうかといった視点で検討していくわけで、誰でも参加することができたし、生徒の立場に近い位置でのチェックというメリットもあり、教科を越えての討議を行なうことができた。

本年度は、でき上がった指導案をもとに移った年度当初の計画では、1学期中にせめて半分位の教科が授業研究を行なう予定であったが、推進計画の不徹底も重なり、5教科しか消化されていない。2学期には、1学期の遅れをとりもどすべく、計画をねりなおし推進していく。本年度の校内研修計画は、下記の通りである。なお、表の外に、単元見通し学習による授業研究の交流を行なう。

6月10日 特別活動及び生徒指導

6月15日 理科

6月17日 音楽
9月6日 美術
9月22日 国語
10月4日 英語
10月27日 同和教育

<成果と課題>

①単元見通し学習の指導案を書いてみて、今まで、いかに細切れの授業をやっていたかに気づいた。今学期は、1単元、4〜5時間を単位にまず書いてとりくんだが、継続して研究を進めていくことは非常努力を要することである。一人ひとりの生徒の学力をつける上に於いても、継続して研修を積み重ねる。

②単元見通し学習にとりくむことにより、教師、生徒共に課題一覧表により、次のステップ（課題）の見通しができ、意欲的な学習の姿勢がでてきた。

③プリテストの実施により、生徒の既習内容、学力等の実態把握ができ、学習を進める上で、又、内容の精選などに非常によい。

◎豊高等学校

[授業研究を月例化]

来年度、第19全国バズ学習研究集会が、推進協主催で決定されたのを機に、再度、授業研究について検討をした。'69年に賤称語差別事件が起き、それを契機として部落解放同盟豊支部が結成された。解放運動に参加する中で、生徒の行動には、すべて背景があることを学び、その背景をつかむことで生徒理解を深めようと、教育相談的方法を用いての事例研究会が組織された。なによりも、生徒のつまずきの要因を明らかにすることであった。その作業を通して、生徒のつまずきの要因には、家庭環境等さまざまな要因が複合されているが、その大部分は学校教育とかわる部分でのつまずきであることが見えてきた。つまり、全て、問題行動は学力疎外に始まっていると捉えたのであった。そして当然のことながら、その克服をめざす教育内容の創造に向けて取り組みが始まった。そうした取り組みが進む中で、'74年度、やっと中学校との連携がとれるようになり、'75年度、バズ学習に学校体制として取り組み始めた。しかし、将来の民主的な社会人を育てるために、協力し相互交流できる態度学習の指導をめざしながら、バズを方法としてしか捉えていないことが明らかにされた。これを克服するために、'78年度には、バズ学習の基本的学習を進めることをテーマの一つとして取り上げ、それをより深化させるため、授業研究を月例化し、相互に研修を行なった。自らをどうしてもやらねばならない状況に追い込むということで、私達の弱さを克服しようということも大きなねらいの一つであった。

同時に、常に授業を公開していることを立て前としていた。それは、授業をみてもらって意見をもらうというより、参加者があることによって、生徒の状況にいい意味での変化があるだろう、つまり「手伝ってもらう」発想であった。もう一つのねらいは、誰かが参加することになれば、お互いにやっつけてしまっている手抜きができなくなるだろうという、自己のしぼりでもあった。

しかし、これも時間がたつにつれて、積み重ねというより、後退すら感じる部分もでてきたことから、'80年度より、形式化した定例化をやめて、春、秋の中高合同の公開研へ向けて集中する方法でこれを克服しようとしてきた。ただし、公開研以外のところでの授業研が全く姿を消したのではなく、「自主トレ方式による授業研究」は研修基調として確認され続けられた。だが、自主トレ方式による研修は何年も相互に確認し合ってきたが、結果はほとんど前進をみることができないで来た。そこで、今年度は、学校体制として自主トレという形の研修の場を持たないというところから出発することが確認された。つまり、これまで授業研究の月例化から、公開研への集中とやってきたのだが、点で終わってしまい、つながっていないことが確認された。それならば、点を多くし、その集合が線となるという仮説から考えてみても、また、自分の弱さを克服するための枠をはめるためにも、当初やってきた月例化の方法は正しかったという見直しをし、下記の通り、月例の授業研究を推進することを決定した。

6月22日 1-1 数学、1-2 商業経済

9月28日 3-1 現代国語、3-2 政治経済

10月26日 2-男 体育、2-1女 家庭一般、2-1女 体育

11月22日 2-1 数学、2-2 生物

12月6日 1-1 現代社会、1-2 英語

1月25日 2-1 国語、2-1 英語

2月22日 1-1 理科(地・力)、1-2 生活科学

(研究授業は6校時を充て、該当クラス以外は放課とする。研究討議は原則として15:30~17:00とする。討議の司会は原則として同教科の教員がする。指導案は「学習指導案のモデル」に従って作る。)

◎齋小学校

[齋小学校の教育計画]

1 はじめに(本年度の本校の状況)

(1) 職員

4月の定期移動で、4か年本校に勤務してきた校長は退職し、教頭は、本校が極小規模のため廃止になったので転勤となり、前年度就任した養護教諭が引続いて勤務する中へ、校長と2名の教諭が就任した。したがって、前年度まで教頭が学級担任をしていたのが、本年度からは学級担任に教諭があたることになった。学校や地域の実態が十分把握できにくい状況の中で本年度の歩みを始めた。

(2) 学級、児童

昨年度は4年生1名(女児)と1年生1名(女児)の計2名による1学級編成(複式)で、この2名は姉妹である。前述の通り学級担任は教頭であった。本年度は、男児1名、女児1名、計2名の入学があり、その結果、5年生1名、2年生1名、1年生2名の計4名となった。5年生1名で1学級、1・2年生3名で1学級の計2学級の編成となった。3名の女児は姉妹で、1名の男児の

み別の家庭である。

2 学校経営の基本方針

学校、学級の実態に立って、教育内容を高めていく。過疎、年齢層不均衡、離島等からくる地域実態4名という小人数学校という学校実態から、次のような問題点がある。

- ①集団思想という形態がとれず、集団の中での磨き合いが期待できない。
- ②自然の恵みや厳しさに触れる機会が多いが、都会的生活とは隔絶し、社会的経験を深める機会が乏しい。

上記のことから

- ①学び方を身につけさせ、みずから進んで学ぶ子に育てる。
- ②視聴覚機器の活用をはかる。
- ③近隣校の集団の中で学ぶ機会をつくる。
- ④ふだんの生活環境とは異なる地域社会にふれる機会をつくる。
- ⑤教師と児童が共に学ぶ態度で学習や生活をする。

3 本校の教育方針

人格の完成をめざし、国及び社会の形成者として、心身ともに健康な人づくりをおこなう。そのために、経営の近代化をはかり、あらゆる機会あらゆる場所において、生活実態に即した教育実践により、たくましい実践力を持った児童の育成につとめる。

4 教育重点目標

(1) 健康で最後までがんばり通す子どもを育てる。

- ①体力づくりの目標を定め、実践していく。
 - ・筋持久力、柔軟性を高めていく（サーキットトレーニング・登山・砂浜ランニング・石なげ・磯歩き等）
- ②無医地域という実態を意識し、自分から健康管理をしていく習慣を養う。
 - ・衣服、身体の清潔、運動、採光等
- ③正しい食事のあり方を体得させる。（給食指導）

(2) 広く見、深く考え、正しく判断できる子どもに育てる。

- ①基礎学力の充実をはかる。
 - ・国語科を重点教科とし、言語表現能力を高める。
- ②話し合い朝会を通して、自己表現の機会を拡充する。
 - ・自分の生活、自分の意見、自然の変化など。
- ③教育機器の活用や社会見学を重視し、広い知識を身につけさせる。
- ④読書に親しませる。

(3) すすんでものごとを行ない、力を出し合う子どもに育てる。

- ①お互いの長所を認め合い、相手の気持ちを考えさせる。
 - ・奉仕活動、スポーツ、人権教材等。
- ②気持ちのよい言葉づかいができるようにする。

- ・生活態度を高めていく。
- ③子どもと教師の対話を大切にする。
 - ・認める。励ます。教師も共にのびていく態度。
- ④学校の備品や公共物を大切にする。
 - ・愛校心、郷土愛の育成

5 校内研究計画

(1) 研究主題 (教科)

豊かな言語表現能力を育てる指導のあり方。(国語科)

(2) 具体目標

- ①伝えたい内容を相手に理解してもらえるように筋道だてて正しく言える
- ②学習したことが文章表現に生かして使えるようになる。
- ③読書活動をすすめる。
- ④言語環境を整える。
- ⑤教育機器の効果的利用をすすめる。

(3) 研究方法

- ①授業研究
- ②研究会、講習会への参加
- ③読書研究
- ④職員研究協議

(4) 月別計画 (2学期以降)

9月	研究協議	算数研究会 (27日)、同和教育研修会	集会指導の反省
10月	公開研究	国語化 (11日)、同和教育研修	
11月	研究協議	同和教育研修	
12月		同和教育研修	
1月	研究協議	集会指導の反省	
2月	研究の反省とまとめ		
3月		集会指導の年間反省と次年度への課題	

5 朝会予定

月 (お話)、火 (読書)、水 (朗読)、木 (読書)、金 (音楽)、土 (保険・安全)

・月曜日の朝会では日曜日にあったできごとをみんなの前に立って一人一人話し、質問も受ける。話したことを作文にまとめたり、時には話す前に書いてみたりする。小人数の前でも、大きな声を出して発表できるように即事指導を行なっている。水曜日の朗読朝会では、教科書の習っている単元の文章を、気持ちをこめて適切な声の大きさに認めるようにという目的で行なっている。

◎豊小学校

昭和47年、豊小学校新築に当り、伝統ある理科教育を基盤に教育の科学性を追求するために様々な視覚聴覚教育機器の充実が図られ、それらの機器を駆使しながら、工学的手法による授業の研究を重ねて10余年の歳月が流れた。その間、「教育機器の整備と調整」「学習指導の効率化と教育機器の活用」「ひとりひとりの能力を自己開発し学習効率を高める方策」「わかる授業」「子どもを生かす授業」「人間形成をめざす学習指導の改善」「やる気を育てる教育機器の活用」等のテーマのもとに授業改善が進められてきた。56年度より、豊高校区教育推進協議会の実践目標として「共に生きる集団づくりを」「教育活動の全領域で言語認識を」が掲げられ、この目標達成のために本校では次のような指導重点目標が決定され、各教室に掲示された。

- 1 全員が聞く態度ができてから話す。
- 2 みんなの方を向いて、大きな声で終わりまではっきり話す。
- 3 放送のチャイムが鳴ったら立ち止まって放送を聞く。
- 4 終わりの会が終わったら大きな声で本読みをする。
- 5 友だちが失敗しもわらわない。

この目標達成のため、授業研究や集会活動の工夫はなされた。

57年度は、この定着を図るための活動が続けられた。音楽朝会、発表朝会、放送朝会、ドリル朝会、七夕集会、弱い者いじめを無くす工夫などが実践され、授業研究では、学習小集団の活動のようす、担任が指定した児童の学習状況のチェック、授業案の下位目標行動の相互関連の検討や形成評価など視点をしばっての研究を続けた。57年度の総反省をする中で、全国バズ研準備を急ぐことが問題となり、3月に加西市北条小学校へ4名の視察団を送り込んで研修した。58年度の研修計画は次の通りである。

○研究教科は、国語、社会、算数とし、全職員を教科ごとに分けて研究をする。

○全担任が1学期に1回、2学期に1回、11月の公開研と、3回の授業研究をする。

○研究の重点は、フローチャートで教案を書く、教育機器を効率的に使う、話し合い場面を設計する。学級会や清掃や番組朝会などでも自己表現力をつけていく。

上のような計画のもとに実践し、1学期が経過したが、北条小学校へ研修に出かけた後の授業研究では、児童の学習活動が活潑になり、学習規律もしっかりしてきて、共に生きる集団に、言語認識の高まりを目指す全国バズ学習研究大会への見通しが少しずつ明るくなってきている。2学期は、単元全体を見通した1時間1時間をはっきりつかみ、課題—個人学習—グループ学習—全体学習の定着を図るように努力したい。

◎豊島小学校・豊島幼稚園

1 本校の教育目標

人格の完成をめざして、平和的な国家及び社会の形成者として真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に満ちた、心身ともに健康な国民の育成を期す。

・同和教育を学校教育の基底にすえ、真の部落解放教育に学びながら、実生活に即し、ひとりひ

とりの子どもを大切にする教育を創造し実践する。

- ・地域進出に始まって進路の完全保障に終わるということを基本にすえ、地域の実態や親の願い、子どもの願いを正しくとらえ、ひとりひとりの能力や可能性を最大限に伸ばすために、それを妨げるさまざまな実態をとりのぞくことを積極的に行う。

- ・日々の実践を通して、自己や教職員集団の点検活動をきびしくくり返しながら、よりよい教職員集団を形成し、同和教育の本質をふまえた教育内容をより確かなものにしていく。

2 学校経営の基本方針

時代の要求に即応した堅実な教育の実現を期すため、地域社会の特性と児童の個性に立脚した教育を重点に置く。

本校教育の推進に強い使命感をもち、理解と協力のもとに、教育目標達成につとめる。

3 教育目標

- ・物事はよく考え、ねばり強く学習する子どもを育てる。
- ・進んで約束を守り、仲良く助け合いをする子どもを育てる。
- ・自分から進んで体をきたえる子どもを育てる。

4 求める児童像

- ・真剣に学習にとりくむ子ども。
- ・協力して、ともに伸びようとする子ども。
- ・進んで、強い心と体をつくる子ども。

5 具体的実践目標

- ①基礎学力の充実をはかり、個の能力と特性を培う。
 - ・実態に即した学習指導の創造。(バズ学習方式の実践)
 - ・基礎的な事項の反復練習。
 - ・基礎的な学力の補充。
- ②仲間づくりを通して、人間尊重の精神を養う。
 - ・朝の会、終わりの会を中心にした生活バズの充実
 - ・授業、特活の組織化
 - ・基本的生活習慣の確立
 - ・差別に対する科学的認識の培養と日常実践化
- ③健康で安全な生活を営む態度を養う。
 - ・体育施設並びに環境の充実と遊具器具の点検整備
 - ・体力づくりの計画と実施
 - ・子どもが力いっぱい体育学習にはげむ授業の確立

6 本年度の努力目標

- ①基礎学力の充実と徹底
- ②仲間づくりと差別に対する科学的認識の育成
- ③体力づくりの推進

④バズ学習方式の研修を充実させる。

7 本年度の研究主題

進んで学び、考えて行動できる子どもをめざして

- ・ひとりひとりが課題をもって、仲間と共に学び行動し、共に高まっていく子どもをめざして
- ・進んで体力づくりにはげむ子どもをめざして。

8 研究推進計画

①全領域、全教科で、バズ学習にとりくむ。

②国語科を中心にした授業研究を通して、授業内容を深め、表現能力、理解能力を高める。

③年間を通して、全員 2 回以上の授業研究を行い、11 月に公開研究会を開催する。

9 研究の基本的な方向

- ・学力にかかわらず、どの子どもも真剣にとりくむ学習
- ・考えを出し合い、確かめ合って、考えを変えていく学習
- ・高まろうとする意欲のある学級
- ・すみっこで、ひとりひとり残された子のいない学級

児童の相互作用をとoshi、ひとりひとりを生かす学習指導

◎豊中学校

[教育研究推進計画]

1 はじめに

'83 年度当初、校内研修委員会において前年度の教育実践を振り返り、反省を踏まえるなかで '83 年度の研究テーマや公開研、校内研のもち方など教育実践の全体計画について協議し、その原案を職員会議に諮り、本校における向う 1 か年間の取り組みのおおよその方向性を決定した。

特に、今年度は '84 年、第 19 回全国バズ大会へ向けて大会を質の高い実りのある大会にする為の体制をあげ個々の実践を積みあげ、より一層の充実を図っていかねばならない。毎年、校内研、公開研を開催し、本校の教育実践を世に広く問いかけ研究の積み上げはしているもののマンネリ化の傾向にありはしないだろうか。バズ学習に取り組み始めて以来、地域の一贯態勢の中でバズ学習を伝統的に継承する事のみに終わっていないだろうか。また、毎年、何人か人事異動があるなかで、バズ学習に対する認識に差があり、「バズ学習」という掛け声だけに終わり実践が弱いのではないか。こうした教職員集団の意識のバラつきはそのまま個々の姿勢となり、そのことが生徒バズに対する構えに如実に表われている。マンネリ化から形骸化の道をたどっている現実を厳しく反省しなければならぬ。こういった現状のなかでの、PTA 視察旅行や安室中学校視察研修は本校の取り組みを反省する大変よい機会であった。特に安室中学校の非行を生みださない土壌づくりをめざし、荒廃した学校を立て直す為、生徒指導にバズを取り入れ集団の中で相互に支えあいながら共に高めあっていこうという生活バズは大変参考になった。今回の視察を機に、バズを取り組み始めた時の原点に立ち返って教職員集団の意識統一を図り、共通の目標に向かって一体化し、共同歩調をとることが今の重要な課題である。

2 研究テーマ 「単元見通し学習による基礎学力の充実」

実践目標 「評価を軸とした授業改善」

3 研修計画

ア. 校内授業研

9月：国語 10月：美術、体育、数学 11月：公開研（国語、理科、音楽、クラブ）

12月：社会 1月：社会、英語

イ. 校内定例研修

第1木曜：学区同教 第2木曜：同教研修 第3木曜：教育相談、生徒指導

第4木曜：授業研、バズ学習

4 課題

ア. 班ノート 第2学期より全学年統一した班ノートを作成し、各班で班ノートを中心にして生徒個々の学習、生活について相互に評価（点検）する評価活動に取り組む。

（*班ノートの様式は後掲）

イ. バズ学習の手引 第2学期よりバズ学習の手引書を作成し、バズの原点に戻り、バズ学習について、生徒、教職員集団ともにバズ学習の深化、定着を図る。

ウ. 週時程の変更 班ノートの評価活動にかかわって、第2学期より、月、木の現行10分間のHRを10分間延長し20分間とする。

エ. 木、30分学活（教科バズ、生活バズ）のより一層の充実を図る。

<'82年度実態調査から>

*実態調査データの掲載

- 1 各学年の知能偏差値及び標準偏差（次ページ 表1）
- 2 各学年の知能評定段階の割合（略）
- 3 各学年の学力偏差値の平均及び標準偏差（次ページ 表2）
- 4 全学年の各教科の評定段階の割合（略）
- 5 各学年における成就値の平均及び標準偏差（次々頁 表3）
- 6 学習適応性検査（AAI）結果の学年別一覧（次々頁 表4）
- 7 1982年度被調査学級及び児童生徒数（略）
- 8 学級の凝集度結果（全学級のソシオメトリックテスト事前事後調査結果 略）

表1 各学年の知能偏差値及び標準偏差

	学年	平均	S D
幼稚園	年少	49.81	17.20
	年長	52.92	18.47
小学校	1年	50.93	8.82
	2年	50.02	9.92
	3年	45.10	9.30
	4年	48.78	10.64
	5年	44.50	11.65
	6年	47.25	10.58
中学校	1年	49.12	10.08
	2年	48.41	9.44
	3年	48.85	10.39
高校	1年	40.71	7.76
	2年	43.27	8.25
	3年	45.86	7.31

表2 各学年の学力偏差値の平均及び標準偏差

学年	教科	国語		社会		数学(算数)		理科		英語	
		平均	S D	平均	S D	平均	S D	平均	S D	平均	S D
小学校	1年	49.76	13.52	51.24	13.46	46.63	20.38	48.54	15.74	-	-
	2年	52.33	11.87	50.48	13.05	52.08	14.03	51.10	10.41	-	-
	3年	45.98	10.13	48.86	13.26	45.14	11.62	48.83	13.32	-	-
	4年	46.99	9.99	47.47	10.19	48.72	10.58	46.26	10.43	-	-
	5年	43.56	11.01	43.75	10.41	46.72	10.95	42.69	10.78	-	-
	6年	47.03	9.03	44.74	10.03	47.90	9.04	48.79	10.03	-	-
中学校	1年	45.41	11.08	46.72	10.29	46.88	9.10	45.82	11.59	-	-
	2年	46.10	8.00	46.97	7.91	45.10	7.60	45.04	8.33	43.81	8.80
	3年	43.34	8.22	46.95	10.90	40.92	8.47	43.65	9.12	41.28	7.42
高校	1年	42.68	8.15	39.85	10.18	38.89	5.35	37.00	5.66	37.88	6.37
	2年	31.74	8.24	-	-	37.17	6.31	-	-	34.81	3.67
	3年	33.01	9.05	-	-	36.73	7.16	-	-	37.91	4.28

表3 各学年における成就値の平均及び標準偏差

学年	教科	国 語		社 会		数学(算数)		理 科		英 語	
		平均	S D	平均	S D	平均	S D	平均	S D	平均	S D
小 学 校	1 年	- 1.16	11.05	0.32	12.03	-4.30	18.56	-2.24	12.83	-	-
	2 年	2.31	8.94	0.47	10.21	2.07	11.20	1.08	9.34	-	-
	3 年	0.88	6.17	3.76	10.00	0.03	6.85	3.73	10.38	-	-
	4 年	- 1.79	6.60	-1.31	7.25	-0.06	8.05	-2.53	8.06	-	-
	5 年	- 1.04	6.49	-0.75	7.60	2.11	6.37	-1.81	8.29	-	-
	6 年	- 0.22	6.07	-2.50	8.09	0.59	7.15	1.48	9.35	-	-
中 学 校	1 年	- 3.71	7.76	-2.40	7.83	-2.24	6.35	-3.30	9.39	-	-
	2 年	- 2.50	7.86	-1.50	7.40	-3.44	7.47	-3.49	8.58	-4.86	8.95
	3 年	- 5.50	7.84	-1.98	9.33	-7.92	8.23	-5.20	8.19	-7.54	8.66
高 校	1 年	2.08	5.67	-0.55	6.63	-1.73	7.07	-3.69	5.34	-2.78	7.13
	2 年	-11.77	6.11	-	-	-6.06	6.70	-	-	-8.37	7.76
	3 年	-12.88	8.43	-	-	-9.18	6.63	-	-	-8.46	7.37

表4 学習適応性検査 (AAI) 結果の学年別一覧

学 年	全体偏差値	下位テスト別 パーセンタイル得点							児童数	
		勉強の態度	授業の受け方	勉強の技術	家庭環境	学校環境	心の健康性	からだの健康		
小 学 校	1	54.73 12.10	71.06 21.98	72.91 29.49	63.55 30.47	57.82 28.79	61.51 29.01	-	-	99
	2	49.62 11.58	53.07 29.97	54.92 27.73	50.26 27.11	63.09 30.01	61.57 29.85	-	-	118
	3	46.09 8.01	46.88 28.06	42.99 25.38	34.59 27.56	40.51 28.34	37.12 25.27	37.96 25.88	46.93 29.86	118
	4	45.00 9.91	44.91 30.19	34.59 27.82	34.11 25.92	39.45 29.15	38.96 29.64	38.60 27.58	48.54 30.73	122
学 年	全体偏差値	領域別偏差値							児童・生徒数	
		学習態度	学習技術	学習環境	精神・身体健康					
小 学 校	5	44.93 10.30	45.24 11.20	44.74 10.03	46.37 10.79	46.11 10.71				149
	6	47.19 10.10	47.81 10.44	45.84 8.76	46.93 9.96	49.70 11.24				113
中 学 校	1	47.16 10.02	48.44 10.63	45.24 9.40	47.18 9.73	49.36 10.44				140
	2	47.00 9.56	47.08 10.93	46.58 10.84	46.17 9.42	49.47 9.76				156
	3	48.79 9.62	48.05 9.74	47.85 9.11	49.26 10.29	50.33 10.40				186
高 校	1	41.19 10.24	45.65 12.09	39.06 12.63	42.17 9.53	47.30 8.52				54
	2	44.76 11.21	45.54 10.80	44.98 11.43	44.32 10.11	47.27 12.38				63
	3	45.86 9.97	45.35 9.88	44.75 10.40	44.49 9.99	50.69 9.83				72

班ノートの様式

○大変いい
 △普通
 ×もっと努力しよう

毎日の生活記録												月	日	曜日	
週 目 標												記録者氏名			
氏名	点検内容	遅刻	服装	不要物	忘れ物		昼食時	清掃	学習の準備	学習態度	チャイムの合図	班の話し合い	聞く態度	週目標	
					ノート	提出物									
学習について	教科	学 習 内 容						評価	課題、わからなかった所						
	1														
	2														
	3														
	4														
	5														
	6														
終バ															
一日の反省															
明日の連絡、準備															
思っていることを何でも書こう															
担任の意見													担任印		

資料 44 実態調査の実践活用事例（第 14 回豊竹同教研究大会報告書）

「実態調査を利用して自然認識をどのように高めたか」 二宮力（豊中学校）

1 はじめに

(1) 地域の実態

豊町派遣の南部、愛媛県境に面し、人口約 5000 人、大崎下島の中部以東を本島とし、三角島などを属島として構成されている。

かつて瀬戸内航路の要所に位置した御手洗港は、港町、商業の街として栄えた歴史を持っている。明治 30 年代に、着色の早い温州みかんを地域に適した作物として導入し、全国的にも良質美味で有名な大長みかんが誕生した。畑地として開墾可能な土地は傾斜面までも全て切り拓き、過酷な労働に耐え抜いて、みかんを栽培してきたのである。

現在、豊町の農業就業者数は約 3000 人で、農家の生活形態は、朝早く、子どもたちが寝ているうちに家を出て、夕方家に帰るという状態である。そのため、親が子どもたちに接することができるのは、夕食時くらい家庭もある。

(2) 豊同教自然認識部会

現在 7 人の部会員で構成されており、活動目標は次の通りである。

- ・指導案を持ち寄るとか、研究授業を利用しての研究討議を十分に作る。
- ・実態調査をもとにして、算数・数学について取り組み、他の認識とのかかわりについてさらに研究していく。
- ・毎月の部会で一人ひとりの児童を中心にしてつまづきを明らかにし、手立てを出し合っていく。

(3) 推進協

広島県豊高校区教育推進協議会は、1978 年 4 月、広島県豊田郡豊町、豊浜町に所在する全幼、小、中、高、9 校 5 園の全教職員によって「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を研究主題に発足した教育活動推進組織である。推進協は、同和地区の完全解放を期する同和教育運動と人間関係を基盤とした教育の科学化をめざすバズ学習との統合を図る中で、幼、小、中、高一貫教育態勢をつくっている。その具体的な取り組みとして、児童・生徒の実態を把握し、教育課題を明らかにするために、実態調査を実施し、実施目標には「共に生きる集団づくり」「教育活動の全領域で言語認識を」という二つを掲げている。

個人表をもとに、5 か年計画で毎年実施した実態調査も、今年が最終年度である。実態調査の内容は、知能検査、学力適応検査、標準学力検査、学級調査で、全て年度初めに調査をし、さらに学級調査については年度末にも調査をした。調査の結果は『教育課題を求めて』という報告書にまとめられている。

さらに、公開研究会も、授業研究をもとにして行われ、幼、小、中、高との交流を図りながら、各校で研究が進められている。

2 算数・数学の実態調査

(1) 中学校における問題点

1) 新訂教研式学年別知能検査と教研式全国標準中学診断的学力検査を使用し82年度と83年度の一部を比較してみた。

年度	知能偏差値	数学偏差値	成就値	備考
82年度	50.93	46.89	-4.04	小6→中1
83年度	51.63	50.73	-0.90	中1→中2

上記のように、数学に関しては全般的に見ると著しく向上している。

2) 検査問題の中で基本問題と思われるものを15題ピックアップして正誤分析をしてみた。

(※15の問題について生徒の回答傾向を分析した記述あり。略)

3) 正答率の比較 (全国と学級)

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
全国	70	77	58	44	79	41	39	40	38	19	35	11	29	42	26
学級	73	84	49	19	89	51	46	41	35	32	32	16	20	27	14

4) 分析の考察

- ・基本問題の中で悪いのは、4, 12, 13, 15の問題である。内容で見ると、数と式で、負の数に分数のわり算が加わったもの、それに図形で立体に関するものである。

- ・文章題が悪い。これは言語能力に関係しているのではないかと思われる。島の中で使用される言い不足、十分に話さなくても用が足せる社会環境が起因している。豊高校区推進協では言語認識を高めることを課題としている。

(※15問のSP分析表が付けられている)

(2) 小学校の実態調査

検査問題の中で基本問題を選んだ。その問題と誤答例を示す。

(※5名の児童の誤答傾向を分析した記述あり。なお、児童の所属学校については記述なし。略)

(※取得の程度の低い1名の児童を抽出。具体的な対応については後述)

3 取り組み

(1) 中学校数学科の授業について

調査により、方程式の基本問題の正答率が50%前後であることが分かった。これをさらに向上させるために、不等式の単元を通して指導を試みた。図形については10月下旬より始める図形の単元で補強してきた。

「バズの深化による単元見通し学習の充実」をめざして、実践・研究を進めている本校の方針に従い、単元見通し学習という学習法をとった。この単元見通し学習とは、学習者に課題意識を持たせて自主的に取り組みせ、仲間と協力してより豊かな学習を行わせようとするのがこの学習法である。ただ1時間ごとの授業に埋没することなく、1単元全体の中の1時間として捉えさせることを目標にしている。生徒にこれから何を学ぶのかをプリテストを通して捉えさせ、ポストテストによ

り補充、強化する。

以下に、単元を見通した学習指導案と本時の内容を示した指導案をあげる。なお、本校の方針として、適時バズ学習を取り入れたが、指導案にはいちいち書き入れていない。また、本時の指導案の中に一人ひとりの能力に合わせた指導を試みるためにブランディング学習法を取り入れた。このブランディング学習法とは、自己評価カードにある問題を解き、解答と比べて自分を評価し、補充コース、深化コース、発展コースを自分で選ばせるものである。そして、選んだコースの問題をもらいながら学習する方法である。

(※15時間分の単元構想資料、1時間分の指導案、自己評価カード、コース決めのテスト、コース決めに際しての生徒の判断理由リスト、単元のプリテスト・ポストテストの様式とSP表、全般の誤答分析、一人の生徒の行動分析、の掲載あり。略)

(2) 小学校の取り組み

(※学級内で正答率の最も低かったM児の、1982年から83年にかけての事例研究報告 略)

4 おわりに

推進協全体の一般的・概括的な調査のまとめは、5か年の調査の中から第1次、第2・3次まで、研究者よりまとめていただきましたが、各学校で同時に計画される調査の整理と実践活動に関するフィードバックの取り組みは本日発表いたしましたように、実に遅々たる歩みであることを認めざるを得ません。

例えば生徒の解答に対して×をつけてもその理解の程度には色々あり、どこでつまづいているか見つけ出し、ここに対応した個別指導が必要になってくる。ここでは、算数数学を中心にして研究してきたが、基本問題のつまづきのほか、文章題を一般的に苦手としている。これは、国語力、言語能力と大きな関係がある。特に、この地域の児童・生徒の学力を高めるためには、全領域の中で、言語認識を高める教育活動を考え、学校・学区の一致した指導で当たることが大切である。

教師の姿勢が児童・生徒に大きく影響を与えることは、私たちの作る学級集団がどのように意欲づけられているかという視点に立ってみれば、明らかとなる。われわれは「共に生きる集団づくり」を実践目標に今日最重要の教育課題である。被差別部落の完全解放をめざして児童・生徒の進路の保障に取りくんでゆき、課題を追求してゆきたいと思っている。

資料 45 各種研究会案内

<久比小学校教育研究会>

1983年9月27日

広島県豊田郡豊町教育委員会

広島県豊高校区教育推進協議会

広島県豊田郡豊町久比小学校校長 望月 和夫

教育研究会のご案内

秋冷の候、益々ご健勝にて教育の道に御精進のこととお慶び申し上げます。

さて、今年度、下記研究主題を設定し、子どもたちが主体的に取り組むことをめざして推進しています。本校のささやかな教育の営みの一端を発表して、諸先生のご批正、ご指導を仰ぎたいと思っております。ご多忙の所恐縮に存じますが、ご参加くださいますよう御案内いたします。

記

1 研究主題 「個の問いかけに答え、磨き合う学習集団づくり」

研究の視点 ・低学年 なかまづくり

なかよし学級づくりー学び合いから話し合いへ

・中学年 効果的な話し合い学習

支え合う学習集団づくりー学習過程の工夫改善を

・高学年 思考を深める相互作用

個人思考と集団思考ー人間関係を高めつつ

2 研究教科 算数科

3 期 日 1983年10月26日

4 会 場 広島県豊町立 久比小学校

5 主 催 広島県豊町教育委員会 広島県豊高校区教育推進協議会 豊町立久比小学校

6 後 援 広島県尾道教育事務所 豊田・竹原教育振興会 久比幼稚園・小学校 PTA

7 日 程 9:20～ 9:50 受付

9:50～10:05 発表朝会

10:15～11:00 公開授業 (1・3・5年)

11:10～11:55 公開授業 (2・4・6年)

12:00～13:30 昼食・アトラクション

13:30～15:30 分科会 (実践報告、研究協議、講評)

15:30～15:35 閉会

8 指導内容

1校時			2校時		
学年	単元	指導者 (略)	学年	単元	指導者 (略)

1	たしざん(2)		2	かけざん(1)	
3	わり算のひっ算		4	面積	
5	分数		6	いろいろな四角形	

9 分科会

低学年、中学年、高学年

10 助言者 山本輝明先生(教育事務所)、木下美津子先生・浦島敬先生(広大附三原小)

<豊島小学校教育研究会案内>

1983年10月8日

広島県豊田郡豊町教育委員会

広島県豊高校区教育推進協議会

広島県豊田郡豊浜町豊島小学校校長 吉井 要

教育研究会のご案内

秋冷の候、益々ご健勝にて教育の道に御精進のこととお慶び申し上げます。

さて、今年度、下記研究主題を設定し、子ども達が主体的に取り組むことをめざして推進しています。本校のささやかな教育の営みの一端を発表して、諸先生方の御批正、御指導を仰ぎたいと思います。ご多忙のところ恐縮に存じますが、御参加下さいますよう、御案内いたします。

- 1 研究主題 話す聞くことを通して表現力を高める
- 2 研究教科 国語科
- 3 期 日 1983年11月15日(火)
- 4 会 場 広島県豊浜町立豊島小学校
- 5 主 催 広島県豊浜町教育委員会 広島県豊高校区教育推進協議会 豊浜町立豊島小学校
- 6 後 援 広島県尾道教育事務所 豊田竹原教育振興会 豊島幼稚園・小学校PTA
- 7 日 程 10:15~11:00 受付
10:15~11:00 1校時(1-1、3-2、4-2、5-2、6-1、6-3)
11:15~12:00 2校時(2-1、3-1、4-1、5-1、5-2、6-2)
12:00~13:00 昼食
13:00~14:40 分科会(低・中・高)
14:50~15:30 開会行事、指導講話
15:30 閉会行事

8 指導内容

1校時			2校時		
学年	題材	指導者(略)	学年	題材	指導者(略)
1-1	ものなまえ		2-1	かさじぞう	
3-2	力太郎		3-1	力太郎	

4-2	小さな青い馬		4-1	小さな青い馬	
5-2	木龍うるし		5-1	わらぐつの中の神様	
6-1	最後の授業		5-2	いろいろな木の実	
6-3	空いろのたね		6-2	言葉の変化	

9 分科会

(助言者、司会者、記録者リスト略)

10 助言者 片山富次郎先生(教育事務所) 廿日出俊先生・広近先子先生(大浜小)

<'83年度秋季合同公開研究会>

1983年10月20日

広島県豊高校区教育推進協議会

豊浜町立豊浜中学校長 山根 正

豊町立豊中学校長 中岡 正男

広島県立豊高校長 新田 正彦

83年度 秋季合同公開研究会 御案内

謹啓 秋も深まり、みかんも色づき始めております。諸先生方にはご健勝にてご精進なさっていらっしゃるものと存じ上げます。

お蔭様で、推進協活動も6年目を迎え、中高による合同研究会も恒例化することができました。ご多忙中とは存じますが、ぜひおいで下さり、私どものためにご指導いただきたく存じ上げ、ご案内申し上げます。

83年度 秋季合同公開研究会 開催要項

- 1 主 催 広島県豊高校区教育推進協議会 豊浜町立豊浜中学校 豊町立豊中学校
広島県立豊高等学校
- 2 後 援 豊町ならびに豊浜町教育委員会 各校PTA
- 3 推進協研究主題 「地域の教育課題をふまえた教育内容」
実践目標 <共に生きる集団づくりを><教育活動の全領域で言語認識を>
- 4 期 日 1983年11月9日(水) 豊浜中学校
10日(木) 豊中学校
11日(金) 豊高等学校
- 5 講 師 名古屋大学名誉教授 塩田 芳久先生

豊浜中学校会場

- 1 日 程 11:00~11:20 受付 13:00~14:00 分科会・研究討議
11:20~12:10 公開授業 14:10~15:30 全体会・講演
12:10~13:00 昼食
- 2 研究主題 授業改善を軸に、地域の教育課題をふまえた指導のあり方

- 3 公開授業 1年 国語・社会
2年 英語
3年 数学・理科
- 4 分科会 (授業内容及び生活指導を中心とした研究討議)
国・社・数・理・英の5分科会
- 5 助言者 尾道教育事務所主任指導主事 片山富次郎先生

豊中学校会場

- 1 日程 10:50～11:20 受付 13:10～14:30 分科会
11:20～12:10 研究授業 14:40～15:30 全体会
12:10～13:10 昼食
- 2 研究主題 評価を軸とした授業改善
- 3 公開授業 1年 国語 2年 音楽 3年 理科
- 4 分科会 国、音、理の3分科会
- 5 助言者 尾道教育事務所指導主事 片山富次郎先生
植木 章弘先生

豊高校会場

- 1 日程 9:45～10:15 受付 12:10～13:00 昼食
10:15～11:05 授業公開 13:00～14:30 分科会・研究討議
11:20～12:10 授業研究 14:30～16:00 全体会、講評、閉会
- 2 研究主題 授業改善を軸にバズ学習によるユニット学習法の深化をめざす
- 3 公開授業ならびに授業研究
授業公開：理科 (1-1)、生活科学 (1-2)、英語 (2-1)、数学 (2-2)、
保健 (3-1)、政治経済 (3-2)
授業研究：保健 (1-1)、数学 (1-2)
- 4 分科会 第1分科会 保健、第2分科会 数学

<視聴覚教育研究会案内>

昭和58年11月1日

各教育委員会教育長 殿
各市町立小学校長 殿

豊町教育委員会教育長 佐伯 得三
豊高校区教育推進協議会
豊町豊小学校長 小林 恵一

昭和58年度第7回視聴覚教育研究会のご案内

秋冷の候、皆様益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、視聴覚教育研究会を下記の通り開催致します。交通不便な地ですが、多数ご参加の配慮を賜りたく、ご案内申し上げます。

研究主題 人間形成をめざす学習指導の改善—やる気を育てる教育機器の活用

- 1 期 日 昭和 58 年 11 月 25 日
- 2 会 場 豊田郡豊町立豊小学校
- 3 主 催 豊町教育委員会 豊高校区教育推進協議会 豊町立豊小学校
- 4 後 援 尾道教育事務所 豊田竹原教育振興会
- 5 日 程 10:00～10:30 受付 14:50～15:00 開会行事
 10:30～11:15 公開授業 15:00～15:10 経過報告
 11:25～12:10 公開授業 15:10～15:50 講評
 12:10～13:10 昼食 15:50～16:00 閉会行事
 13:10～14:40 協議会

6 公開授業

1 校時				2 校時			
教科	単元名	使用機器	学年	教科	単元名	使用機器	学年
算数	ひきざん	OHP	1	社会	ゆうびんのしごとをする人々	OHP	2-2
算数	かけざん	OHP	2-1	国語	わらぐつの中の神様	OHP	5
国語	小さな犬の小さな青い服	OHP	3-1	算数	小数のかけざん	OHP	4-1
社会	買い物調べ	OHP	3-2	算数	分数のたしざん	OHP	複式
国語	ごんぎつね	OHP	4-2				
国語	やまなし	OHP	6-1				
算数	場合を順序良く整理して	OHP	6-2				

7 協議会

* 「国語」「社会」「算数」の3部会

- 8 経過報告 本年度の研究の概要
- 9 講 評 尾道教育事務所指導主事 片山富次郎先生

資料 46 第 19 回全国バズ学習研究集会準備資料

豊高校区教育推進協議会

代表幹事 松浦 宏守

小林 忠一

新田 正彦

第 19 回全国バズ学習研究集会実行委員長 山根 正

昭和 59 年度助成金申請書

豊町ならびに豊浜町、町当局、教育委員会に置かれましては、豊高校区教育推進協議会発足当初より深い御理解をお示しくださり、物心両面に亘って多大なご援助を賜り、厚く感謝申し上げます。

「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を研究主題に、所謂、地域教育づくりの活動をはじめまして、早くも 6 年が経過しようとしております。その活動に一つの節目を付けるために、すでに昨年度両町にご了承いただきました、第 19 回全国バズ学習研究集会開催の年度を迎えることになりました。この第 19 回大会を成功に導くために、本推進協におきまして過日実行委員会を組織し、今年度からそこに焦点を当てた活動を開始することに致しました。

もとより、教育活動には終着点はありませんが、これまでの活動の成果は成果として、今後の課題は課題として、広く全国の教育関係者の批判を受けることは、今後の活動に極めて有意義であると考えております。今日、財政的に非常に厳しい状況にありますことは十分承知しておりますが、これまで同様に御理解いただき、御援助賜りますよう、お願い申し上げます。

昭和 59 年度活動計画

59 年度は、これまでの活動の成果を問う第 19 回全国バズ学習研究集会を開催するのであるから、第 19 回全国集會を成功に導くという目標に焦点を当てた活動計画とする。従って、大会終了時までを前期とし、以後を後期とする 2 期に分けた活動計画とし、前期は 58 年度 3 学期からの継続した取り組みとする。また後期は、全国集會総括と今後の課題を明らかにする期間とする。

I 第 19 回全国バズ学習研究集会開催

開催期日 昭和 59 年 10 月 26 日（金）、27 日（土）

会 場 研究授業校 推進協内全校園（但し、大浜小、斎小は集合教育）

全体会場 豊小学校

II 第 19 回全国集會を成功に導く諸活動（前期）

（1）実践講座の開設

ア. 実践交流

全国各地の実践家を招き、授業研究を中心に実践交流を行う。

イ. 学習指導案作りを中心のトレーニング

常任講師を中心に学習指導案作りから、その学習指導案による実際の授業展開まで協同して行い、トレーニングとする。

（2）推進協内研究会の開催

実践講座と連動しながら1学期中に全国集会の予行の意味を含めて校内研究会を行い、相互に交流する。

(3) 夏季強化学習会の開催

1学期の実践の整理と2学期の計画を立て、全国集会の準備を最終的に行う。

III 実態調査追跡

教育課程を科学的に明らかにするために、5か年計画で実施した実態調査は58年度で終了し、最終報告書作成の段階に入ったが、その後の動向をつかむために、小学校6年、中学校3年、高校3年の各学年において1学期当初に前年度を対象に各検査を実施する。これによって各校種最終学年の課題を明らかにすることも併せてねらいとする。

IV 就学前教育部会の充実

引き続き常任講師を委嘱し、研修態勢を強化するなかで、就学前教育の確立を図る。就学前教育の重要性を地域に啓蒙する活動を行う。

V 領域別教育研究の推進

実践講座とも関連させて、推進協内の自主的な研究活動を推進する。必要に応じては、各研究テーマに沿ったプロジェクトチームの編成を考える。

(追記) 但し、第19回全国集会に直接的にかかわる活動計画以外は、今後の継続的な活動内容であり、単年度計画ではない。

第19回全国バズ学習研究集会 開催計画

1 実行委員会構成

実行委員長 山根 正 (豊浜中学校長)

副実行委員長 推進協代表幹事

事務局長 推進協事務局長

事務局次長 推進協事務局次長

2 開催期日

昭和59年10月26日(金)27日(土) 2日間

3 会場

授業研究の部 推進協内全校・園(但し、大浜小、斎小は集合教育)

全体会・分科会の部 豊小学校

4 日程

第1日 10:00~10:30 受付 16:30~17:30 全国バズ総会

10:30~14:00 各校授業研究 18:00~20:00 交流会

15:00~16:30 全体会・開会行事

第2日 8:30~9:00 受付 11:00~12:00 全体会・講演・閉会

9:00~11:00 分科会

昭和59年度予算案

収入の部

		昭和 59 年度 予算額	昭和 58 年度 決算見込額
助 成 金	豊町	1,900,000	1,900,000
	豊浜町	1,600,000	1,600,000
	県教委	200,000	100,000
	諸団体	900,000	全国バズに 対して
全国集会参加費		600,000	2000 円 × 300 名
推進協会費		150,000	153,000
雑収入		24,000	50,000
総計		5,374,000	3,803,000

支出の部

費目	金額
全国集会運営費	2,600,000
実践講座関係費	986,000
推進協研究会	576,000
夏季強化学習会	192,000
実態調査追跡費	450,000
就学前教育部会	150,000
事務局費	420,000
総計	5374,000

8 1984年度の豊高校区教育推進協議会の活動

資料 47 1984年度 広島県豊校区区教育推進協議会 総会資料

期 日 1984年4月25日

会 場 豊町立久比小学校 体育館

総会次第

代表幹事（実行委員長）挨拶

来賓祝辞

来賓紹介

基調提案

会計報告ならびに会計監査報告

第1回実践講座で学んで

第19回全国集会各校研究テーマ報告

討論

閉会

1984年度 活動日誌

4月	20日	第32回協議会
	25日	第1回事務局会議
5月	6日	実態調査委員会
	13・14日	先進校視察打合せ（姫路市、加西市）
	中旬	実態調査実施
	20日	新会員研修会
	30日	先進校視察打合せ（姫路市安室小）
6月	3・4日	先進校視察（加西市北条中）
	10・11日	常任講師との打ち合わせ
	21日	沖友小学校公開研究会・就学前部会
7月	1日	第33回推進協議
	4・5日	先進校視察（文教女子大付属幼稚園）
	15～19日	名古屋大・南山大教育研究実習
8月	27日	83年度総会・就学前部会
10月	7・8日	第18回全国バズ学習研究集会（五泉市）
	11日	斎小学校公開研究会・就学前部会
	26日	久比小学校公開研究会
11月	1日	第34回推進協議会

	9日	合同公開研究会（豊浜中・豊中・豊高）
	10日	同（豊中）
	11日	〃（豊浜中）
	15日	豊島小学校公開研究会
	25日	豊小学校公開研究会
	29日	大浜小学校公開研究会、就学前部会
	30日	第35回推進協議会
1月	13日	豊浜町予算申請
	14・15日	全国バズ学習研究会役員会
	17日	豊町予算申請
	24日	推進協事務局会議
2月	20日	実践講座打合せ
	28・29日	実践講座（豊島小・豊浜中）
3月	1～3日	同上
	21日	第36回推進協議会

1984年度 豊高校区推進協ならびに実行委員会役員

第19回全国バズ学習研究集会実行委員長

推進協代表幹事	山根 正（豊浜中）
副実行委員長 推進協代表幹事	中岡 正男（豊中）
同上	近藤 健次（豊高）
実行委員 推進協協議委員	平田 福德（沖優勝）
同上	小林 忠一（豊小）
同上	信田 敏之（斎小）
同上	藤登 哲郎（大浜小）
同上	中石 照明（豊島小）
同上	望月 和夫（久比小）
会計監査	惣明 修市（豊町）
同上	佐々木力也（豊浜町）
事務局長	越智 昭孝（豊高）
事務局次長	花本 喬二（豊町 小学校）
同上	二宮 力（豊町 中学校）
同上	谷水 永（豊浜町 小学校）
同上	横手 茂（豊浜町 中学校）
事務局員（氏名略）	8名
各校連絡委員（氏名略）	各校1名、計9名

1984年度豊高校区教育推進協議会 会員名簿（氏名略）

小学校・幼稚園 72名、中学校 36名、高校 22名、合計 130名。

1984年度 予算書

（略：資料 45 参照）

1983年度 一般会計決算報告

（決算額のみ）

収入の部

費目		決算額	
前年度繰り越し		13,520	
助成金	豊町	1,900,000	
	豊浜町	1,600,000	
	県教委	80,000	
会費		156,000	1200円×130名
雑収入		55,507	
計		3,806,027	

支出の部

費目	
実態調査関係費	1,852,565
就学前部会活動費	70,000
領域別部会活動費	132,100
全国バズ派遣費	454,480
事務局費	555,651
会員研修補助費	700,000
計	3,763,796

差引残高 41,231円

1983年度 特別会計

収入の部

	金額	
前年度繰り越し	1,467,555	
実態調査報告書印刷	600,000	実態調査関係費より
計	2,067,555	

支出の部

総会資料および座標印刷	429,000
実態調査報告書印刷	750,000
計	1,179,000

差引残高 888,555円

1983年度 会計監査報告（略）

第19回 全国バズ学習研究集会 開催要項

- 1 開催期日 1984年10月26日・27日
- 2 会場 広島県豊田郡豊町・豊浜町
授業研究校 推進協加盟全校・園
- 3 日程

- | | | | | |
|------|-------------|----------|-------------|-----------|
| 第1日目 | 10:00～10:30 | 受付 | 16:30～17:30 | 総会 |
| | 10:30～14:00 | 授業研究(各校) | 18:00～20:00 | 交流会 |
| | 15:00～16:30 | 全体会・開会行事 | | |
| 第2日目 | 8:30～9:00 | 受付 | 11:30～12:30 | 全体会・講演・閉会 |
| | 9:00～11:30 | 分科会 | 12:30～ | 昼食・解散 |
- 4 主 催 全国バズ学習研究会／広島県豊高校区教育推進協議会
- 5 主 管 第19回全国バズ学習研究集会現地実行委員会
- 6 後 援 広島県教育委員会、豊町、豊浜町、豊町・豊浜町教育委員会、
豊田・竹原教育振興会、その他

基調提案 第19回全国バズ学習研究集会で全ての実践を

はじめに

1978年、豊高校区教育推進協議会は、同和教育の観点に立って「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を研究主題に、幼・小・中・高一貫教育態勢づくりをめざして発足致しました。そして、推進協初の活動は、第13回全国バズ学習研究集会を推進協の主管で開催することでした。

バズ学習の実践は豊浜中学校から始まって、この地域に10年以上の歴史はありましたが、当然にもこの集会在新しいスタート台でありました。第13回集会上において、本推進協を代表されて挨拶をされた先生方は、日々に5年後に再度開催し、その後の成果をみていただくことを、全国から集まって下さった先生方の前で約束されました。それから6年の歳月が流れました。推進協結成に参画なさった校長さん方も、昨年度末をもって全員退職なさいました。そのことに象徴されますように、当時からの会員もまた数少なくなっていますし、この6年間の歩みも決して順調であったとは言えないと思います。しかし、来たる10月26日27日の両日開催されます、第19回全国バズ学習研究集会は、こうした推進協の流れの中で私たちの約束を果たす集会です。

別の視点から言えば、今回はもう何の言訳もできない位置に私たちは立っていることとなります。私たちは、まず、そのことを確認し合いたいと思います。すでに今年度の活動は前年度3学期から開始していますが、本日の総会がやはり出発点であろうと思います。本日から10月26日まで、丁度半年間です。その間に私たちは何ができるのか、そして何をしなければならぬのかを、本日はじっくり見極めておく必要があるように思います。また、私たちの推進協は5園9校の協議体であり、協同体であります。しかし、そうした組織体であるために、1校での取り組みのような相互間の連携がどうしても困難です。その壁を破るためにも、本日のような全員集会が必要であり、より密接な協同態勢の確立の場にしたいと願っています。

昨年度総会では

昨年度総会では、ご承知のように、8月27日、この同じ久比小体育館で常任講師の先生方もお迎えし、実態調査研究報告会も併せて開催しました。大変遅い開催でした。それは、今年度開催する第19回集会上に向けての活動がすでに開始されており、全員による先進校視察という取り組みの第1段階を完了させるためでした。そこに至る経過は、昨年度総会資料ならびに全員研修旅行報告

書「座標」によって、会員の皆さんはご承知のことと思います。昨年度総会資料表紙に推進協実践目標「共に生きる集団づくりを」「教育の全領域で言語認識を」を掲げると同時に、総会スローガンとして「第 19 回全国バズ学習研究集会を成功に導く日常実践の充実を」を掲げ基調提案のテーマもそれに致しました。これは基本的に第 19 回全国集会の位置づけを次のように捉えたからでした。

私たちの日常実践は全て学校の主人公である児童・生徒のためにあり、しかも児童・生徒は 1 回性のものである以上、常により良い実践をめざす責務が私たちに課せられています。つまり、私たちの実践は、常に眼前の児童・生徒 に注がれていなければなりませんし、そのための研究であり、研修でなければなりません。そのように考えますと、第 19 回集会を成功させることが目標ではなく、日常実践の総和としての結果が成功として評価を受けるかどうかにかかっています。第 19 回集会の成功は目標ではなくて結果であり、過程なのです。そのことを成功に導く日常実践と表現したのでした。それから今日まで、現実にはどのようなレベルアップがなされたか、これは会員ひとりひとりの自己評価からスタートします。

今年度総会からは

今年度総会のスローガンは標記しましたように「第 19 回全国バズ学習研究集会で全ての実践を」と致しました。昨年度からの必然であろうと思います。しかし、その全ての実践をどのように切り出して公開していくのかに、推進協で統一的にやろうという問題ではありません。各校が、地域の教育課題をふまえて自校の実践の上にどのような創意を凝らし、より高められた内容にするかで進めていただくことなのです。ただ、土台は、あるいは根っこは一つであることが要請されます。それはこれまで繰り返し繰り返し訴えてきましたように、本推進協が結成され、今日までの歩みの基盤である「同和教育とバズ学習の統合」です。そして、本推進協の貫通研究主題である「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」へ向けてどう近づいているかです。

昨年度、教育課題をより科学的に求めるための実態調査 5 ヶ年計画が終了しました。現在最終的な集計と分析が行われていますが、最終報告書が出なければ活用できない問題ではありません。それぞれの学校には、この 5 年間のひとりひとりの児童・生徒のカルテがあるのです。そのカルテに、今度は指導記録が加えられていく時がきました。この実態調査は、直接経費だけでも、豊・豊浜両町から 1000 万円以上の投資をしていただいたのです。そのこともふまえて、実態調査結果が教育課題としてきっちり反映している取り組みになっていなければなりません。そうした土壌の上に、各校の花が咲き乱れるのでなければなりません。

バズ・単元見通し学習へ

今推進協内において、ひとつの合意が得られつつある学習方式があります。それはバズ学習にかける単元見通し学習方式の導入です。この地域における単元見通し学習方式の導入は、塩田芳久先生のご指導によって、すでに 10 年の歴史を持っています。しかし、私たちのところではその裏づけ となっている、塩田先生を中心とする研究者と実践者による教育の科学化への協同研究の内容がよく理解できていないのです。したがって、単元見通し学習が単に学習指導案の書き方のように受けとめてきたというのが最も正直なところであろうと思います。'81 年に、滋賀県五個荘小学校における長年の実践研究がまとめられ「バズ学習による授業改善」が刊行されました。この実践の中

で、単元見通し学習方式の有効性が具体的に立証されました。もはや有効性を論じる段階ではなく、それぞれの教科において、また単元において、その目標を達成するための学習課題と、その学習課題解決のための方法 - 手段との関係を明確にし、どのように学習活動を組み立てるかに専念すべき段階であろうと思います。

この後、すでに今年度事業として実施致しました第1回実践講座において単元見通し学習方式による学習指導案づくりトレーニングの結果として、本冊子に掲載されています指導にもとづいての発表があります。そこで詳しくは学習していただきます。先程、これまでの取り組みにふれて、文脈上おかしい表現を使いました。バズ学習の内容がよく理解できていなかったと表現すべきところを、理解できていないという現在形で表現しました。つまり、これまでは理解できていなかったが、今はどうやら理解できてきたと言えない現状があるという認識です。たしかにほぼ30年に亘るバズ学習研究に、塩田先生を中心に数多くの研究者が、そして数え切れない程の実践者が、これまで積み上げられてきた実践研究の全容をつかむことは不可能でしょう。しかし、研究者と実践者によってこれまでに立証されてきた基本的な理念を、自己の実践との関わりでつかむことは、それほど困難な学習ではありません

とかく斜に構え批判な言動をする人たちは、反問に代わるべき体系化された理論を持ってはいません。塩田先生がいつもおっしゃる「いたずらに差異を強調するのではなく、その類同性にこそ着目すべきだ」は、すぐれて実践者である私たちの基本的な態度でなければなりません。あえて言わせてもらいます。バズ学習の全国大会があるからバズ学習の勉強をするものではありません。同和教育の観点に立って児童・生徒の進路保障をめざす時、私たち実践者も研究に参加できる研究態勢の中で、ほぼ同一の観点での実践研究であるからです。「同和教育とバズ学習の統合」をめざすと言いつける内容だからです。本章のはじめに、ひとつのコンセンサスが得られつつあると言いましたのは、掘り下げていけば、やっとなら私たちが着目するようになったことを意味していると思います。決して強制されたものではなくて、ひとつの必然の帰結として、バズ単元見通し学習があると認識していただきたいと思います。

なおこれまで、中学校では単元単位見通し学習と呼称し、高校ではユニット学習と呼んでいました。いずれも塩田先生のお許しを得てのことではありましたが、今後は「バズ・単元見通し学習」という名称に統一することを提唱致します。全国的に今まで何の申し合せもされていませんが、ほぼその方向に落ち着きつつあると思われるからです。もちろん、私たちが内部的に使う場合はいちちバズという冠詞をつける必要はありません。

第19回全国集会までに

今回の全国集会については、現時点では10ページに掲載していますように、その大綱が決定しているだけで細部に亘る計画はこれからです。しかし、開催期日は、後半年に迫りました。いずれにしても近日中に全ての計画を確定しなければなりません。その作業に並行して、全国集会までに可能ならば日常実践をも1段階レベルアップさせたいと全ての会員が考えておられます。その目標に応えるために、今年度実践講座を開設しました。もちろん、全国集会終了後も継続的に実施していく構えであります。当面全国集会に焦点を絞って、1学期に集中的に開設します。すでに、年

間計画の前倒しを決定し、先程申し上りましたように、第1回の実践講座は2月29日・3月1日、豊島小を会場に、続いて3月2日・3日、豊浜中を会場に実施しました。その学習内容を全員のものにするために、本日発表していただきます。

この実践講座は二つの柱で計画されています。ひとつは本日発表される指導案づくりトレーニングです。目標は本推進協常任講師の先生方と一緒に指導案づくりを行いながら、基本的な実践の方向を学習するのがねらいです。つまり、具体的な手仕事の中で、具体的にバズ学習をつかもうとしているのであります。ただ単に指導案の書き方の講習会ではありません。もうひとつは実践交流です。これまで全国各地でバズ学習の実践をし、多くの成果をあげておられる実践家の先生方においでをいただき、私たちの実践をみていただいた上で、相互に実践交流をさせていただこうという講座です。

次に、やはり1学期中に実施が計画されている、推進協内研究会があります。この推進協内研究会とは、秋の全国集会を見通しつつ、いわばプレ全国集会的な性格を持たせた校内研究会です。その校内研究会へ各校から参加していただき、会員相互の研究交流をしていただき、横の連携を深めることもねらいのひとつです。可能な限り、全会員がどこかひとつは他校の研究会へ参加していただくことを原則としています（言うまでもありませんが、実践講座、推進場内研究会、それぞれ単独に実施することは、日程上不可能なことです。そこで、推進協内研究会の日程に合わせて実践講座を開設するべく現在取り組み中です）。

推進協内研究会は、いよいよ明日の豊島小学校からスタート致します。これから実践講座と研究会とを組み合わせながら、1学期の活動がフル回転をしていきます。現在予定している日程は講師の先生のご都合で若干変更があるかも知れませんが、全ての日程を消化したいと思います。そして夏休みに入ります。全ての資料は夏休み中に仕上げて書かなければなりません。1学期の活動を総括し、全国集会への準備をするために、「夏期強化学習会」を開催します。まだ具体的な計画は立てられていませんが、全国集会当日の学習指導案や、分科会提案資料など、討論しながら作成し終えるような組み立てを考えます。学習会の持ち方に対する要望があれば早目に提出して下さい。

就学前教育部会は

'81年度に私たちがめざす一貫教育の要としての位置を重視し、推進協内の組織として就学前教育部会が発足しました。昨年度総会においても提起致しましたが、地域の現状からみてもますます幼児教育の重要性が増しています。それにもかかわらず、教育条件の整備が進んでいません。教員の勤務条件にしても、やはり年次休暇さえも取れない状況もあります。こうした中での全国集会参加です。逆に言えば、幼稚園の参加がなければ、推進協が主催する集会の意義は半減してしまいます。幼・小・中・高一貫教育態勢づくりを当面の課題として掲げてきた過去6年の活動は見せかけに過ぎなかったこととなります。もちろん、分科会を設定します。就学前教育部会の緊急に取り組んでいただく課題です。

しかし、昨年度を訴えましたように、各幼稚園は教員だけで、補助してくれたり分担してくれたりする人員は1人もいません。特に小学校の会員に訴えます。今日の幼稚園の状況を常に頭に入れて、可能な限りの協同態勢を組んで下さい。また全国集会第1日目の各校の授業研究において、必

ず幼稚園を組み込んだプランを立てて下さい。そこに見事な結実があった時に幼・小・中・高一貫教育態づくりは一定の定着を果たしたと、初めて言えるのだと思います。

実態調査の追跡

教育課題を求める実態調査 5 年計画が終了し、そのデータを日常の教育実践に反映することを先程要請しました。しかし、5 年計画の悉皆調査が終わったと言っても、児童・生徒は日々成長しまた流動していきます。その後がどうなっているのかの追跡は、この 5 年間の積み上げを生かすためにも不可欠の条件であろうと思います。そこで抜き取りによる追跡調査を今年度から実施します。

その抜き取りの対象は、小学校 6 年、中・高 3 年の 3 学年群にし、これまでと同じように前学年度の教科を中心に実施します。追跡のための通過学年をここに設定したのは、それぞれの校種における最終学年で、いわゆる仕上げの学年だからです。そこで、前学年度までで積み残しているものがあれば、最終学年として取り戻しておく必要があります。その仕上げのためのデータとして活用できることもねらいとして含めたからでしたし、この追跡調査の対象学年を通過していく児童・生徒のデータが、より好ましい方向に移っていく時、初めて実態調査が生きてくるのだと思います。この追跡調査は現時点では推進協の今後の継続的な事業として取り組むことにしています。

おわりに

私たちの推進協の貫通する研究主題である「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」は、必然的に地域の教育課題に根ざした自主教材編成へと向っていきます。幼・小・中・高一貫教育態づくりが完成したら、その次の中心課題になっていくであろうと思います。昨年度総会において提起しましたように、一貫教育態づくりは第 19 回全国バズ学習研究集会で一応決着がつかなければなりません。こんなしんどいことをしなくてもといった、子ども不在の発言は完全に姿を消したと思います。つまり、私たちの態勢（かまえ）ができてきたことを意味します。私たちは今やっとその位置に到達しました。

最後に再び繰り返して訴えます。第 19 回全国バズ学習研究集会が成功したかどうかは、当日子どもたちどのようにすばらしく動いてくれたかどうかにかかっています。私たちの姿が表面に現われているような活動では、まだ本物ではないのです。当日、本当に子どもが生き生きと動き回っている学校に、なんとしても創り上げていきましょう。

第 1 回実践講座報告（略）

【小学校の部（国語、社会の 2 教科の実践計画事例が付けられている）・中学校の部（数学の実践事例が付けられている）】

資料 48 第 19 回全国バズ学習研究集会ですべての実践を

第 19 回全国バズ学習研究集会開催は、あと 100 日に迫ってきました。

昨年 3 月 8 日、豊・豊浜両町の御賛同を得て、本推進協が第 19 回集会開催を決定してから、今日まで取り組んできました。第 19 回全国バズ学習研究集会を成功に導く「日常実践の充実を」を実践スローガンにし、何よりも児童、生徒が生き生きと活動する学習集団づくりを目ざして実践の積み上げをしてまいりました。今年度計画していました、研修計画の日程もほぼ消化し、いよいよ最終段階を迎えるに至りました。会員各位のご努力の賜物と感謝致しております。この重要な時期を迎え、2 ヶ年計画で取り組んできましたこれまでの経過と、これから来る 10 月 26 日、27 日の大会当日へ向けての具体的な取り組み日程を、全会員に確認していただくために本資料を刊行することになりました。会員各位におかれましては、その内容を充分ご理解いただいて、万全の構えで当日が迎えられるようお願い申し上げます。

第 19 回全国バズ学習研究集会 実行委員長 山根 正

第 19 回全国バズ学習研究集会へ向けて

開催決定

本推進協結成の背景は、当地域の同和教育運動の盛り上がりの中で、進路保障の観点から地域ぐるみの教育の発想にあった。そして、同じくこの地域におけるバズ学習の取り組みが、やはり地域ぐるみの教育への発想で取り組まれていた。その両者が結合した形での教育推進組織が考えられ、'77 年結成準備委員会が町教委と各校代表者によって組織されたが進展がみられなかった。

その折に、第 13 回全国バズ学習研究集会をこの地域で開催して欲しいとの要請があり、それがきっかけとなって本推進協が結成された。そうした経緯の中での第 13 回全国集会であり、全国の仲間これから推進しようとする態勢の公開であった。

当然にも第 13 回全国集会においては 5 年後ぐらいに再び開催し、その後の経過を公開することを約束した。したがって、全国の仲間は近い時期に開催されるものという期待を持っていたし、その事情を知っている両町の理事者もそのつもりでいてくれた。また、本推進協としても両町の多大な援助のもとでの活動に、一定の節目を入れなければならない時期となっていた。そうした状況のもとでの第 19 回全国バズ学習研究集会開催要請であった。本推進協、協議会において開催への方角で論議は進められていったが、まず 両町の下承を得ることが必要であることと、なによりも全会員がいわば天下りの印象を持たないように、これまでの経過と実践の中で会員の合意が得られるように十分な時間を掛けることが話し合われた。

このような経過の上に立って、'83 年 3 月 8 日（火）第 31 回協議会において、第 19 回全国バズ学習研究集会 '84 年度開催が決定した。

昨年度の取り組み

第 19 回全国集会開催は明年度であるので、その成功をめざして 2 ヶ年計画の取り組みとすることになった。1 年目即ち '83 年度は会員の研修に重点を置き、バズ学習に対する理解を深めること

からスタートすることとなった。

全員参加による学校視察

研修を始めるにあたって、まず実際に先進校を見学し、その実践を肌で感じる必要があるのではないか、またそうした行動を全員参加態勢で行うことで会員相互の連帯感を高めることができるのではないかという視点で、両町の助成を基金にやりくりして、全員参加による先進視察が決定した。日程は次の通りであった。

小学校の部 6月3、4日 加西市立北条小学校 (参加 56名)

中・高の部 6月24、25日 姫路市立安室中学校 (参加 48名)

就学前の部 7月4、5日 文教女子大学附属幼稚園 (参加 14名)

その内容は報告書『座標』を参照されたい。

'83年度総会 (8月27日)

第19回全国バズ学習研究集会を成功に導く「日常実践の充実を」。スローガンとしてこれを掲げ、各校公開研究会開催へと進んでいく。

公開研究会で

バズ学習における実践研究の成果である、単元見通し学習方式を取り入れていこうとする実践が多くなり、一定の合意が得られてきたという顕著な傾向がみられた。

公開研究会は全校日程通り実施された。

第19回全国集会現地実行委員会結成

第34回協議会(11月1日)において、現地実行委員会構成が決定した。実行委員長は山根正豊浜中学校長に決定する。副実行委員長は推進協代表幹事とし、代行権を持つことになる。他の役員は、推進協役員をそのまま移行する。開催期日は'84年10月26日(金)27日(土)の2日間とする。大会構成は、第1日を各校授業研究とし、第2は分科会を中心とする。主会場は、豊町立豊小学校に依頼する。第35回協議会において、'84年度活動計画、ならびに第19回全国集会運営費を含めた予算案を決定する。

今年度1学期の取り組み

今年度、全国集会へ向けての取り組みは、次の二つの活動を軸に進めることとするが、スケジュールが過密になるため、'83年度3学期へ前倒して推進することが確認される。

- 1 実践講座の設置(指導案トレーニングと実践交流)
- 2 推進協内研究会(各校プレ全国集会的な性格を持たせて)

'84年度総会 (4月27日)

第19回全国バズ学習研究集会で「すべての実践を」をスローガンとした。ほぼ全体的に同意の

得られてきた学習方式の名前を「バズ単元見通し学習」に統一することを提唱する。

単元見通し学習、学習計画モデル提示については、詳しくは '84 年度総会資料を参照されたい。

実践講座ならびに推進協内研究会

主軸の二つの活動を統合した形で次の通り実施した。

2月29日, 3月1日	実践講座	豊島小
3月2・3日	〃	豊浜中
4月26日	推進協内研究会	豊島小
5月25日	〃	豊浜中
〃 〃	実践講座	豊中
〃 26日	推進協内研究会	豊高
〃 28日	実践講座(算数)	久比小
〃 〃	〃 (国語)	豊小
〃 〃	〃 (体育)	沖友小
6月20日	推進協内研究会	久比小(実践交流)
〃 21日	〃	豊中 (〃)
〃 27日	〃	豊小
7月5日	〃	大浜小(実践交流)
〃 6日	〃	沖友小 (〃)

残念ながら、スケジュールが過密のためか、全員他校への1回以上の実践交流という目標は達成できなかった。

推進協内研究会を終えて(事務局私見)

今回全校の研究会を通して参加した事務局の私見ではあるが、全体を通して昨年度公開研究会との比較でその傾向についてまとめておきたい。なお同時進行の場合参加できなかった授業や、別の校内研究会もあることを断っておく。

- 1 全ての授業研究が単元見通し学習方式によって行われた。
- 2 その背景として、単元見通し学習の有用性が認識されてきている。
- 3 児童、生徒の活動が昨年にくらべて生き生きとしてきた。
- 4 その裏に、バズ学習の基本理念である、認知目標と態度目標の同時達成をめざして、特に態度目標に対する目的意識的 実践の積み上げがある。
- 5 特に小学校においては、推進協では課題になりつつも実践されていなかった、単元見通しの要諦である学習計画を児童自身が立てるという段階にまで踏み込んでいる。
- 6 これは不断の学習技能習得のための実践が結実しようとしていることになる。
- 7 話し合いのルールが確立されつつある。
- 8 単元見通し学習によって、これまで気に掛かってはいても個別指導に時間を割けなかったの

が克服されつつあるという有用性も見い出している。

9 全体的に全員参加の学習活動になってきている。

10 一方、プリテストが教員の側の資料だけにとどまっている傾向がある。

11 また、全員の取り組みになっていない状況もある。

12 特に中・高においては教科担任制であって、その単位クラスを担当する各教科の学習に一貫性がない場合、そのクラスの向上は困難である。その傾向が残念ながら克服されていない。

今後の課題

単元見通し学習方式は、これまでの実践と、その裏づけになってる理論研究によって、同和教育の目標達成のためにも、より自然な学習法であり、よりすぐれた学習法であるという合意が得られてきたのである。しかし、それよりもよりすぐれた学習法があるならば、直ちに取り入れていかねばならない責務が私たちにはある。なぜならば、同和教育の観点に立った時、さらにベターなものを切っていくことは、差別教育につながっているからである。今、そうではないという観点に立っている以上、単元見通し学習についてのより深い理解と実践が要請される。

第19回全国集会へ向けての準備状況

開催期日、会場、日程、主催等については'84年度総会資料10ページに示した通りである。主催団体に、尾道教育事務所管内へき地・複式教育連盟が加わる。後援団体については助成金等の援助要請と合せて折衝中である。ただし、幼稚園においては、各園での公開保育終了後直ちに参観者と共に全体会場に移動し、翌日の分科会と同一の形式で研究を行う。各園での司会者、助言者などの役員確保の見通しがないためと、参加者が少ない見込み等の条件を勘案して決定する。

第1日 授業研究、10時30分～14時までの時間は、各校の独自性において運営する。

すでに各校において計画立案されている。

第2日 分科会構成は推進協案通り全国バズ学習研究会役員会において了承され、全国事務局において、提案者・司会者・助言者の人選が行われ、現在7月末をめどに折衝中である。

分科会一覧は別掲の通りであり、第3分科会から後の分科会において、各分科会地元提案を各校に割り当てる方式をとったのは、第1日の授業研究と統合的にとらえ研究を進めていこうという考え方であった。背景には、別の研究態勢をつくる物理的余裕がなかったことと、やはり授業改善を最重点にしていく考え方があった。

全国からの参加者受け入れ態勢は次の通りである。

1 参加費 1人 2,000円

2 宿泊費 1泊 2食 6,000円（現時点で、地元を中心に200名分確保）

3 弁当代 1食 800円（地元会員も希望があれば注文を受ける）

4 交通費（三原から）5,000円（山陽観光の見積りによる）（船、バスなど貸切の形を取り、会場毎の交通費算出という訳にはいかないの、一括した料金とする。竹原については検討中）

5 交流会費 1人 5,000円（地元会員については、できるだけ参加を望みたいので、特に地

元会員の機敏な協力をお願いする)

今後の日程

開催要項(案内状)を9月初めに全国へ届くようにし、申し込みの〆切りを大会1ヶ月前に設定する。大会資料に関しては、入念な校正を行うためにも、原稿を遅くとも8月末までには完了させておかなければならない。以上の絶対的な条件を基にして、今後の日程がたてられている。

開催要項に関して

各校共に、開催要項に掲載する次の原稿を、7月24日までに提出していただきたい。

1 各校授業研究について

10:30~14:00までの時間配分表

授業内容、および授業者名

2 分科会について

提案者名、および記録者名

3 学校紹介

400字以内を目標に、第1日目、どの学校へ参加するかを、全国の参加者に判断してもらう資料ですので、特色をきわだたせるようにする。

大会資料に関して

大会資料は次のような編集計画を立てている。

1 大会資料(1)

目次

大会日程

役員表

分科会一覧表

実践報告(基調提案)

実態調査報告

分科会、地元提案要旨(全国の提案は各自印刷して送付、こちらで合冊にする方式)

各種案内

2 大会資料(2)

目次

各校の取り組み

各校の公開授業、学習指導案

(各校の取り組みと指導案を合わせた各校別の編集)

3 大会資料の様式

横書き B5版、タイプ印刷とする。

1 ページ字数は、1行 43 字×36 行、計 1548 字とする。(原稿用紙は専用紙を配布するが、線を入れる場合、その線が 1 行になるので、升目の中に引くこと)

各原稿の標準枚数は次の通りである。

- 1 分科会提案要旨 4 ページ
- 2 各校取り組み 4 ページ (標題は自由に)
- 3 学習指導計画 1 教科当り 4 ページ

(当日の指導細案ではなくて、単元見通し全体構成で提出)

以上の原稿についての枚数は、あくまでも標準であって、必要があれば超過してもいいが、ページだけで編集するので、1 ページの大半が余白になることは極力避けていただきたい。タイプ印刷は 4 ページが 1 セットになるので、校正などの都合上可能な限り 4 ページが 1 単位になるように努力願いたい。

夏期強化学習会と原原稿〆切り

夏期強化学習会 期日 6 月 23 日 (木)、24 日 (金)、25 日 (土)、3 日間

会場 未定 (涼しい場所を選定中)

今回の学習会は、上記取り組みの中での疑問や不安、あるいは点検等の必要性を感じた場合参加する形態をとる。学校別の時間配分等は未定であるが、終了時点が原稿の〆切りである。

輸送計画表 (略)

分科会一覧

校種	分科会	研究主題	研究内容	提案者	司会者	助言者	記録者
全	1	同和教育	地域の実態と教育活動	推進協事務局			
全	2	幼稚園教育	遊びの中で経験を通して生き生きと活動できる保育を考える	推進協就学前部会			
小	3	複式教育のあり方	複式学級における授業改善のあり方 集合教育の実践のあり方	沖友小・大浜小・(斎小)			
	4	やる気を育てる授業改善	国語を中心に	豊小			
			社会を中心に	豊島小			
算数を中心に			久比小				
中高	5	特別教育活動	学習集団と生活集団の統合をめざす	豊中			
	6	授業改善	単元見通し学習による授業改善	豊浜中			
	7	集団づくり	基礎学力の充実をめざす学習集団づくり	豊高校			

昭和 59 年 8 月 20 日

各教育機関所属長殿

各幼小中校学校長殿

全国バズ学習研究会

名誉会長 塩田 芳久(名古屋大学名誉教授)

会 長 永井 辰夫(稲沢女子短期大学教授)

第 19 回全国バズ学習研究集会

実行委員長 山根 正(広島豊浜中学校校長)

第 19 回全国バズ学習研究集会 御案内

1978 年 10 月、第 13 回全国バズ学習研究集会の開催を契機に、地域の教育課題にこたえるべく、豊・豊浜両町に所在する幼・小・中・高の全教職員が結集した広島県豊高校区教育推進協議会が、その後の活動状況を見ていただくために再び開催地となりました。

教育の本質を究めるために、教育実践者と教育研究者との協同研究を積み重ねてきました。バズ学習研究も新しい段階に踏み込んでいきたいと願っています。

本研究集会において、全国の先生方との実践交流を行い、より確かな教育実践の創造へと高めていきたいと存じますので、ぜひ御参加下さるよう御案内申し上げます。

開 催 要 項

- 1 開催期日 昭和 59 年 10 月 26 日 (金)27 日 (土) 2 日間
- 2 研究主題 地域の教育課題をふまえた教育内容の創造 ー共に生きる集団づくりを
- 3 主 催 全国バズ学習研究会／広島県豊高校区教育推進協議会／広島県尾道教育事務所管
内へき地複式教育連盟
- 4 主 管 第 19 回全国バズ学習研究集会実行委員会
事務局 広島県豊田郡豊町久比 広島県立豊高等学校 内 Tel.08-4666-2130
- 5 後 援 広島県教育委員会／豊町ならびに豊町教育委員会／豊浜町ならびに豊浜町教育委員
会／豊田・竹原教育振興会／広島県高等学校教職員組合／広島県高等学校教職員組
合竹原地区支部／広島県尾三地区高等学校同和教育推進協議会／広島県下島地区
PTA 連合会
- 6 会 場 全体会場ならびに分科会会場 豊町立豊小学校
授業研究会場 (推進協内全加盟校園)
 - (1)豊浜町立大浜小学校 同幼稚園 (大浜小学校において齋小学校集合教育)
 - (2) " 豊島小学校 同幼稚園
 - (3)豊町立沖友小学校 同幼稚園
 - (4) " 久比小学校 同幼稚園
 - (5) " 豊小学校 同幼稚園

(6)豊浜町立豊浜中学校

(7)豊町立豊中学校

(8)広島県立豊高等学校

7 日 程 第1日 26日(金)(各校会場→全体会場) 17:30 18:0

10:00～10:30 受付(各会場) 16:30～17:30 全国バス総会

10:30～14:00 授業研究(各会場校) 17:30～18:00 会場移動

14:00～15:00 移動 18:00～20:00 交流会

15:00～16:30 開会行事・全体会

授業研究の各校の日程は各校紹介(7ページ以降)に掲示しています。

幼稚園だけは、公開保育終了後直ちに全体会場に移動し、合同で研究協議を行います。

第2日 27日(土) 全体会場

8:30～9:00 受付 11:30～12:30 全体会・閉会行事

9:00～11:30 分科会 12:30 昼食・解散

8 分科会構成

分科会一覧表は下に掲載しています。

今次集会においては、各分科会における地元提案は、第1分科会以外は、第1日の授業研究の内容と連動した提案内容になっています。したがって、可能な限り参加分科会は、第1日の授業研究参加校提案の分科会にさせていただきたいと思えます。なお、第1分科会(同和教育)におきましては、地元推進協のこれまでの活動を同和教育の観点に立って総括したいと考えていますので、第2日とは関係なく御参加下さい。

9 授業研究校、分科会参加について

各会場校の中には、複式学級の小規模校もあり、参加いただく方を一定数で制限させていただかなければならない場合もあります。したがって、参加希望を変更させていく場合が起るかも知れませんので、参加申し込み時に、第1希望と第2希望を会場校の頭の数字でご記入下さい。

分科会も同様に数字でお願いしますが、第4分科会はA・B・Cでご記入下さい。

*「10 参加申し込み期日」「11 申し込み方法」「12 参加費」「13 昼食」「14 宿泊費」「15 宿舎について」「16 交流会費」「17 交通について」「会場案内図」は略。

分科会一覧

校種	分科会	研究主題	提案者 (所属のみ)	司会者	助言者
全	1	同和教育：地域の教育課題をふまえた教育内容の創造に向けて。	兵庫姫路 推進協事務局	岩田好(兵庫の形小) 谷本永(推進協豊島小)	塩田芳久(名誉会長) 新田正彦(元豊高校長)
全	2	幼稚園教育：遊びの中で経験を通して生き生きと活動できる保育を考える。	推進協全園		土屋孝子(文教女子大)
小	3	複式学級のあり方：複式学級における	推進協沖友小	森本俊和(兵庫男鹿小)	梶田正巳(名古屋大)

		授業のあり方。集合教育の実践のあり方。	推進協大浜小		池上誉雄（徳島里浦小学校） 島田恭次（尾道教育事務所） 橋浜浩（尾道教育事務所）	
4	やる気を育てる授業改善	A：国語を中心に。	加西市北条小 春日井西山小 推進協豊小	丸山正克（愛知平尾小） 北村艶子（徳島八万小）	鹿内信善（北海道教育大） 稲垣菊夫（愛知高森台中校長） 柴山吉宣（尾道教育事務所）	
		B：社会を中心に。	滋賀愛知川小 新潟保田小 推進協豊島小	大関巖（新潟南中野山小） 中村鐘章（愛知松平中）	小石寛文（神戸大） 吉田武男（兵庫御国野小校長）	
		C：算数を中心に。	春日井小野小 鳴門里浦小 推進協久比小	高村博（滋賀五個荘小） 山本剛（兵庫城洋小）	太田信夫（筑波大） 松本重雄（愛知松山小校長） 山本輝明（尾道教育事務所）	
中高	5	特別活動：学習集団と生活集団の統合をめざす。	盛岡河南中 春日井中部中 推進協豊中	堀場正美（愛知鷹来中） 塩田博久（広島安浦中）	市川千秋（三重大） 白井仁（愛知元豊川中部中校長） 森田利夫（愛知西山中校長） 植木章弘（尾道教育事務所）	
		6	授業改善：単元見通し学習による授業改善	姫路書写中 三重朝明高 推進協豊浜中	近藤慎平（岐阜泉中） 渡川敏行（推進協豊浜中）	石田裕久（南山大） 望月和三郎（東京清瀬5中校長） 岡本益夫（尾道教育事務所）
				7	集団づくり：基礎学力の充実をめざす 学習集団づくり	土岐泉中 推進協豊高

第1日 授業研究 各校紹介ならびに各校日程

（小学校の部）

豊浜町立斎小学校

本校は県内南端二番目の斎島にある唯一の文化センターである。町の中心の豊島から更に南の斎島の玄関口に木造ながら古い歴史を秘めて静かに立っている。かつて男子は島外で働いていたが、現在は多くが阪神方面へ移住し、児童数は4名、職員は5名である。「地域にへき地はあっても、教育にへき地があってはならない」という認識に立って、幾多の悪条件にめげず努力を続けている。

昨年度からは国語科を重点教科として「言語表現能力の向上」をめざし、発表朝会で全員が生活経験や願いなどを話し、これを文にして更に話し方を工夫している。今年からは短作文の研究、実践に入っている。水泳に取り組んだ結果その成果はめざましい。山越え、岩場歩きの体力づくりは理科や図工にもつながる。昨年度から郷土の民話から影絵劇上演をはじめ、今年も張り切っている。

豊浜町立大浜小学校・幼稚園

1 本校の実態とその歩み

本校は、へき地一級地で広島県の最南端の島嶼部に位置し、柑橘栽培を営む戸数 209、人口 628。大部分の農家と数戸の漁業家庭で構成され、園児 12 名、児童数 50 名の小規模校である。数年前、地域の課題を幼小中高という共通の場で解決するため、豊高校区教育推進協議会が結成され今日に至っている。従来はこの地域にみられる表現力の弱さのために国語科の研究を重ねたが、一定の成果を得たとの判断で本年度より算数科「計算力を高め、筋道を立てた考え方」のテーマを設定した。

2 本校の教育課題

・学習は教わるものということから、学ぶものへという発想が、地域の開鎖性を解消して原動力となるか。

・バズ学習は複式学級の原点といえるか。

・集合指導の試みとそのあり方はどうか。

○研究授業と時間配分(斎小学校と大浜小学校は集合教育を行います)

10:00～10:30	受付	12:10～13:00	昼食休憩
10:30～11:15	1校時授業	13:00～14:00	研究協議
11:25～12:10	2校時授業	14:00～	移動

○授業内容

学年	教科	単元	学年	教科	単元
1・2年複式	算数	1年 たしざん 2年 かけざん	5・6年複式	算数	5年 分数 6年 対称図形
3年	算数	三角形	幼稚園		おはなしづくり
4年	算数	面積			

豊浜町立豊島小学校・幼稚園

豊島は周囲 12 kmの瀬戸内海の小島であり、産業は小型漁船による水産業が主なものであるが、柑橘の栽培もかなり行われています。平地が全くなく、入りくんだ家並の中に私たちの学校があります。本校は、かつては 1000 名に余るマンモス校でありましたが、現在では児童 240 名、園児 73 名のこぢんまりとした規模となっています。漁業者の多くが、遠く四国宇和島方面から、九州長崎方面にまで出漁し、子どもたちは祖父母の世話になったり、兄姉とだけの生活をしています。また 55 名の子どもは豊浜学寮から通っています。55 年度より「健康教育」にとりくみ、57 年度には広島県の保健優秀校として表彰を受けました。58 年度から地域の実態に即し言語力の向上をめざし、国語科を中心にした研究を行ない、本年度は更に全教科に拡げて研修を進め、今回は国語科、社会科、算数科を公開することにし、4 月からとりくみを進めています。

○研究授業と時間配分

10:00～10:30	受付	12:10～13:00	昼食
10:30～11:15	1校時授業	13:00～13:50	研究協議
11:25～12:10	2校時授業	13:50～	移動

○授業内容

学年	教科	単元	校時

幼		リズムで遊ぼう	1
1年	算数	かたちづくり	1
3年	社会	市民のつくり出すもの「農家のしごと」	1
5年	社会	わが国の製鉄所「ふえる鉄の生産と輸出」	1
4年	国語	小さな犬の小さい青い服	2
6年	社会	天下統一と鎖国「大坂と江戸」	2

豊町立久比小学校・幼稚園

久比小学校は、児童 76 名の 5 学級(3・4 年 は複式学級)、職員 9 名の小規模校です。学校の施設は、保護者の協力により、学年の森、体力づくり、交通教室と子供に役立つものが備えられています。三方を山に囲まれ、北は海を臨む狭い町ですが、美しい自然と人情豊かな生活環境の中で、子ども達は明るくのびのびと育っています。本校は小人数なので、多人数の中に入っても対応できる子どもに育てるため、子ども達の自主的運営で「発表朝会」「音楽朝会」「業間体育」「交通安全活動」等を行っています。このような実践活動をとおして、お互いが支え合い認め合い、助け合う仲間になってきています。このたびの研究大会では、研究主題「個の問いかげに答え、磨き合う集団づくり」の実践を発表し、御指導を賜わり、本校の今後の教育の推進の糧にしたいと思っております。

○研究授業と時間配分

10:00～10:30	受付	12:05～13:00	昼食・アトラクション
10:30～11:15	1校時授業	13:00～13:50	研究協議
11:20～12:05	2校時授業	13:50～	移動

○授業内容

1校時	1年	算数	2校時	2年	算数
	3・4年	算数	5年		算数
	6年	算数			
	幼稚園	のりものづくり			

豊町立沖友小学校・幼稚園

白砂青松、風光明媚なここ沖友は、南向きの斜面の段々畑に 良質のみかんを産し、学区全部が農家である。しかしみかん産業の不振と過疎、交通不便という現象や環境の中での複式学級小規模校である。子供はそれぞれ素直で明朗に育っているものの、他地域へ出た場合、萎縮して自分を表現できにくいへき地性のあることは否めない。この子供達に、体で覚えるたくましい表現力を身につけさせたいという願いから体育科を取りあげた。つまり健康の増進や、体力の向上という体育科本来のねらいに加えて、共に伸びる仲間作りを目ざしているわけである。かけがえのない生まれ故郷を愛し、地域に生きる喜びを体得させる一助として、郷上に伝わる祭囃子や、小さな願いを皆の力によってピックアップして物事をなすとげる筋道を身につけさせるための児童会話し合い活動の一部も、あわせて披露したい。

○研究授業と時間配分

10:00～10:30	受付	12:00～13:10	昼食・アトラクション（祭囃子）
10:30～11:15	研究授業	13:10～14:00	研究協議
11:25～12:00	児童会	14:00～	移動

○授業内容（合同授業）

全児童 準備運動

1・2年 とび箱遊び

3・4年 腕立て開脚とび

5・6年 台上前転

全児童 整理運動

幼稚園 おみせやさんごっこをしよう

豊町立豊小学校・幼稚園

本校では、ここ数年来、到達度評価の考え方を取り入れた指導プログラムを作成して、学習の効率化をはかる指導法の研究（教育工学的手法による授業研究）に取り組んできました。この指導プログラムは、目標と評価の一体化をはかり、学習過程における形成的評価を行うために目標行動をたて、フローチャートで記述しています。また、アンサーキューブを用いて授業過程における評価活動とそのフィードバックを行うようにしています。このアンサーキューブは、安堵感、緊張感を持たせたり、成功感を味わわせたりして学習意欲をかりたてています。だから、一人ひとりの学習が、子どもたち同士の相互作用によって深まるバズとの併用によって、子供たちは、更に生き生きとできた喜びを味わいながら授業に取り組んでいます。

○研究授業と時間配分

10:00～10:30	受付	12:10～13:00	昼食
10:30～11:15	1校時授業	13:00～14:00	研究協議
11:25～12:10	2校時授業	14:00～	移動

○授業内容

1年 国語 くじらぐも

幼稚園 収穫の喜びを味わおう（合同）

2年 算数 たしざん（2）

4年 国語 ごんぎつね

5年算数 面積

（中学校会場の部）

豊町立豊中学校

本校は昭和53年、第13回全国バズ研究会のメイン会場になりました。全国各地より参加された方々には御記憶新たなことと存じます。当地はミカン産業の先進地、かつての繁栄を求めて町ぐるみ振興の運動を進めています。それに呼応して、学校農園でのミカン栽培にとりこんでいます。勤

労体験学習の一環として、教師生徒ともども汗を流し収穫したミカンは、町内の学校給食のデザートとして喜ばれています。本校の生徒の消極性を打破する試みとして、毎週月曜日の生徒集会で自分の考え、意見を述べ、討議の場として活用しています。人前で堂々と自分のことが述べられる生徒の育成をめざしています。課外の部活動もさかんで、特に女子バレー部は一昨年県大会で優勝、また今年度、南部地区大会で優勝し、秋の県大会優勝を目標に頑張っています。人間性豊かな生徒、自ら進んで自己実現のできる生徒をつくるべく、全教育活動を通して努力をしています。研究会当日、ささやかながらクラブ発表もいたします。

○研究授業と時間配分

10:00～10:30	受付	12:10～13:00	昼食
10:30～11:10	クラブ発表	13:00～14:00	研究協議
11:20～12:10	研究授業	14:00～	移動

○授業内容

1年 美術 2年 国語 3年 理科

豊浜町立豊浜中学校

豊浜中学校でバス学習をはじめから 17 年になります。先輩たちは復習バスから生活バス、教科バス、町内バスなど地域実態に即したバス教育を創造してきました。在籍生徒の 40%が長期県外出漁のため不在家庭を守って通学している状況ですから、教科バスのみに的をしぼることが無理で生活の全領域、さらに町内各地域にまでバスは進出していきました。このことは結局、学習につながる態度形成や仲間づくりに大きな比重がかけられていた、ということです。こうした過程を経て生徒たちは大きく変容し、現在では教科バスに的をしぼった授業改善が安定的に進められるまでに来ています。全国バスでは単元見通し学習への手がかりを求めた実践を見ていただき、いずれは単元見通し学習が家庭学習につながっていく道筋を探りたいと願っています。貴重なご教示をお待ちしています。

○研究授業と時間配分

10:00～10:30	受付	12:30～13:10	昼食
10:30～11:20	研究授業	13:10～13:45	研究協議
11:20～11:40	移動・町内バス会場	13:45～	移動
11:40～12:20	町内バス (公民館)		

○授業内容

1年 社会 3年 理科

(高等学校会場の部)

広島県立豊高等学校

本校は、昭和 23 年に昼間定時制分校として開校し、当時の農漁村の勤労青少年に多くの夢と希望を与え、離島における教育の燈が点されたのであった。爾来地域社会とともに変遷を幾度も経て、

昭和 53 年第 13 回全国バズ学習研究集会がこの地域で開催された年に、地域の多年の念願が実現し、豊高等学校として独立したのである。教育の特色は、地域社会の教育課題をふまえた地域高校として、地域の生徒が誰でも学べ、その進路を保障しうる教育内容の創造をめざし、1 年時全員共通して基礎的な教科を履習し、その中で自己進路に合わせて、2 年時以降、生活科学（家庭科目）や情報処理（商業科目）が選択履習でき、多様な社会状況に対応できる人間の育成に努めている。本研究集会の主題にも「基礎学力の充実をめざす学習集団づくり」をテーマとし、一人ひとりが将来の目標を持ち、その実現を協同によって達成して行くことを目指している。

○研究授業と時間配分

10:00～10:30	受付	12:20～13:10	昼食
10:30～11:20	研究授業	13:10～14:00	研究協議
11:30～12:20	研究協議	14:00～	移動

○授業内容

1-1 商業経済	1-2 数学Ⅰ
2-1 世界史	2-2 数学Ⅱ
3-1 化学	3-2 英語Ⅱ

○第 13 回全国バズ学習研究集会は 次のようなねらいでした

21 世紀がそこまで近づいている今日の社会において、その 21 世紀を生きようとする児童・生徒はなによりも人間尊重の精神に基づいた民主的な社会人として成長することが要請されています。それには、学校教育においても、あらゆる教育活動を通じて、児童・生徒が相互に認め合い、協同して、自己課題を達成していける力を体得できるように援助しなければなりません。そして、その教育内容は、児童・生徒とそれを取り巻く地域の実態を直視する中で、教育課題をつかみ、幼・小・中に準義務教育化された高をも包括し、一貫した教育態勢の確立をめざしつつ創造するものでなければなりません。

その観点から、今年度結成された組織が、本研究集会の地元実行委員会である、広島県豊高校区教育推進協議会であります。この教育運動は、差別を許さない子どもを育てる同和教育と認知的学習と態度的学習の同時的達成をねらうバズ学習とが統合される中で展開されようとしています。したがって、本研究集会においては、そうした地元の運動を援助する意味も含めて、全国の幼・小・中・高、それぞれの立場での実践を出し合い討論し、共通理解の上に立って地域の教育課題とは何か その教育課題をふまえた一貫教育態勢とはなにをすることなのか、を可能なかぎり明らかにしたいと願っています。（第 13 回全国バズ学習研究集会開催要項より）

昭和 59 年 12 月 21 日

広島県豊高校区教育推進協議会

代表幹事 豊浜町立豊浜中学校長 山根 正

豊町立豊中学校長 中岡 正男

広島県立豊高等学校長 近藤 健次

昭和 60 年度助成金申請書

私ども、豊高校区教育推進協議会に対しまして、深い御理解をお寄せ下さり、常にご支援を賜っておりますことに心から感謝申し上げます。

皆様のお蔭をもちまして、当推進協の懸案事項でございました第 19 回全国バズ学習研究集会を開催させていただき、全国からお集まりくださった先生方からもご好評をいただきました。とりわけ、結成当時の第 13 回大会にも参加していただいた先生方から、前回との比較の上でも着実に前進しているとの評価をお寄せいただきました。私どもも現在まとめを続行中ではありますが、やっと基礎固めが終わり、一定の推進体制が確立されたと捉えております。なお、詳細は改めてご報告申し上げます。

私ども推進協はこれまでの成果の上に立ち、一方ではこれまでの活動の反省を十分に行い、いよいよ明年度から地道な日常的な活動を展開する所存でございます。先日来より、豊・豊浜町の町長様から、本推進協の今後に対するご提言をいただき、その趣旨を体して、今後の活動方針に対して鋭意討議を続けてまいりました。いささか時機を失した感がございますが、ようやく活動計画がまとまりましたので、ご報告申し上げ、ご検討いただくと同時に、これまで通りの御支援を賜りますようお願い申し上げます。

昭和 60 年度 活動方針ならびに活動計画

基本方針

研究主題「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」

本推進協は、同和教育の観点に立って地域の子どもの進路保障を考えると、地域が本来的に持っている教育力と学校教育を統合したいいわゆる地域ぐるみの教育活動を志向しています。従って、地域の本来的な教育要求を学校教育において具現化していく責務があります。そのためには教職員の研修を深め、より創造的な実践を高めなければなりません。その内容を目標化したのが上記の研究主題であります。

これまでの推進協活動の反省

推進協活動の当面の目標を、幼・小・中・高一貫教育態勢づくりにおき、会員の研修に重点を注いできた結果、その活動内容が組織外の方々にはよくわからない状態を作っていました。また、校内での活動も授業改善を軸に推進してきたために、教育活動の両輪であり、統合された活動でなけ

ればならない生活指導面を推進協ではあまり取り上げていませんでした。いわば、内部固めに中心を置いたために、研究主題の目指す開かれた推進協になっていませんでした。

地域の子どもの現状認識

過疎化が進行する中で、児童・生徒数の減少が著しく、小学校においては学級の複式化が進み、教育条件が低下していく傾向にあります。その中で、地域の高校である豊高校の将来展望も暗くなってきています。また、今日の教育上の最も大きな社会問題となっている、子どもの問題行動についても、この地域も例外ではありません。

いまこそ、地域ぐるみで子どもをより望ましい姿に育てていく取り組みが緊急の課題であります。そのためには、まず何よりも推進協会員が丸となって生活指導に当たることから始めなければならないという認識で一致致しました。

昭和 60 年度活動方針ならびに活動計画

これまで述べさせていただいた経緯の中から、次のように活動方針を決定いたしました。

(1) 生活指導の充実をめざす

今年度以降、事態の好転と地域みの取り組みに発展するまでの期間、推進協の最重点課題として活動の中心にします。すでに過去 5 年間の実態調査により、学力面を中心として実態把握はされていますが、今回はまず生活面での児童・生徒の実態把握をより明確にします。そのための実態調査を極力経費を伴わない工夫をして行います。また、生活指導の実践を推進していくための各校代表によるプロジェクトチームの編成を行います。実態調査結果と今後の具体的な実践の方向とを明確に打ち出すために、講師を招き、研究会を開催すると同時に、その内容を全員に周知徹底させます。

もちろん、この取り組みの進捗状況とは関係なく日常的な実践は行っていますが、可能な限り短時間で実施します。また、昨年度両町のご援助により実施させていただいた全員による実践校視察が極めて大きな成果をもたらした経験に基づいて、特に生活指導面に中心を置いた実践校視察を行いたいと考えています。経費節減の折から、今年度各校 2 名の派遣を考え、可能な限り一巡するように毎年度継続的に行いたいと思います。私たちの具体的な実践を通して、保護者へ、地域の方々への協力を求めていきます。

(2) 進路指導を地域全体の課題にする取り組み

学校教育活動の目標はより良き社会人として自立できる人間の育成にあります。学校教育の総和としての進路保障の観点に立ち、地域の子どもの地域での責任で育てるという地域ぐるみの教育を考えるとき、より良き進路指導はどうあるべきかを、教員も保護者も地域も一体となって考えなければなりません。

今、具体的には地域教育づくりの後期中等教育の核となるべき豊高校が、地域の中でそのように位置づけられていない問題です。今のままで推移すると、豊高校の存立も危ぶまれる事態が起きてきます。この問題は、ひとり豊高校の責任でもなく、また中学校の進路選択指導の責任でもなく、

地域全体が地域ぐるみの教育はどうあるべきかを考え、近い将来にやってくる地域の子どもの就学保障に備えなければならない問題だと考えています。

そのためには、地域高校である豊高校へ親元から通学し、その進路が保障される態勢づくりを、幼・小・中・高一体となって育てなくてはならないと考えています。その将来展望を明らかにし、当面保護者へ向けて共に考えてもらえる状況づくりの広報を行いながら内容を深めます。本推進協の基本理念に迫る問題であり、今日の教育課題である生涯教育論への発展を志向します。

(3) 研究会の深化を図る

今年度まで推進協の重点課題として推進してきましたバズ学習により、授業改善は一定の定着が見られたと評価しています。これまでも継続してきました公開研究会、推進協内交流研究会等の研究活動を積み重ねていきます。共通課題は講師の指導を受けながら、より素晴らしい学習活動を創造します。

(4) 就学前教育部会の広がりを図る

本推進協の要として、幼児の健全な発達が一番大切な栄養素ともいうべき「遊び」の重要性の認識と、個性伸長を図る保育についての学習と実践を積んできました。幼稚園は子守の延長とする地域の考え方を改めてもらうために、まず保護者への働きかけへと広がっていきます。子ども数の減少は、地域の子ども社会の持つ教育力を相対的に引き下げていくだけに、その重要性を啓蒙します。

(5) 領域別研究活動の育成を図る

本推進協の活動の特色の一つとして、推進協内における、教科別、問題別などの自主的な研究活動を活発にすることで教育活動を活性化しようという方針を立ててきました。過去幾つかの自主的な研究活動が行われてきました。

物理的な時間的制約などで、必ずしも継続的な活動になっていない面がありますが、教育活動活性化のために呼びかけを続けていきます。

(6) 全国バズ学習研究集会等への参加で交流を図る

今年開催いたしました第 19 回全国バズ学習研究集会に、県外から大会役員として、また一般参加として合計 101 名の先生方がご参加下さり、交流を深めさせていただきました。その答礼の意味も含めて、来年度第 20 回全国バズ学習研究集会へ組織的参加をし、多くを学び、交流によって改善を防ぎ、推進協活動のより発展を図ります。

以上の 6 項目を昭和 60 年度の活動方針として、新しく活動を推進いたします。今後は、地域に開かれた推進協活動になることにこだわり続け、地域ぐるみの教育活動への発展を期します。

また初めに申し上げましたように、児童・生徒の健全な発達を育成するために、生徒指導を最重点において実践を行います。

昭和 60 年度予算書

<収入の部>

		予算額	備考
助成金	豊町	950,000	前年比 50%減
	豊浜町	800,000	〃
	県教委	100,000	
会費		150,000	1,200 円×125 名
雑収入		10,000	
計		2,010,000	

<支出の部>

摘要	金額		摘要	金額	
	内訳			内訳	
生活指導関係費	790,000		領域別研究関係費	50,000	
	資料印刷費	100,000		資料費	30,000
	講師謝礼	150,000		用紙代	20,000
	実践校視察旅費	540,000	全国バス学習等派遣費	300,000	
進路指導関係費	250,000		印刷費	100,000	
	広報印刷費	200,000	旅費	100,000	
	資料費	50,000	通信費	50,000	
研究会関係費	100,000		予備費	70,000	
	常任講師旅費	100,000	総計	2,010,000	
就学前教育部会関係費	150,000				
	常任講師旅費	100,000			
	資料費	50,000			

昭和 59 年度決算見込書 (略)

資料 51 小・中・高校の具体的実践

以下に小学校、中学校、高校の実践事例を紹介する。数多くの実践が重ねられたが、ここでは紙数の関係で1事例ずつの紹介にとどめる。

<小学校> 1985年12月4日に豊島小学校で開催された「社会科教育研究会」での報告より。

社会科単元見通し学習指導案

1. 指導者 Y. K.

2. 学 年 第3学年(男子15名、女子14名 計29名)

3. 単 元 ちがった土地の暮らし

4. 単元の取り扱い

・児童は、これまで自分たちの住んでいる町の人々の生産活動や消費生活の学習を通して、豊浜町と他地域との結びつきの深さに気づき始めている。本単元では、自然条件から見て、豊浜町と対照的な地域を取り上げることによって、自分たちの町と異なった生活の様子を明らかにし、県内から見た豊浜町の人々の暮らしの特色を浮き彫りにさせていくことをねらっている。

・これまで児童は、直接観察を通して地域理解をしてきたが、本単元では学習地が身近ではないため、直接観察が不可能である。また、殆どの児童は、学習地を訪れたことがない。また、話し合いにおいては、積極的に発言する児童が増えてきたが、思い付きで発表することが多く、地図や資料に基づいて発表する力が不十分である。

・そこで、指導にあたっては、児童が自分たちで調べているという実感を持たせるため、手紙を使った学習展開を行っていく。また、地図やパンフレット、録音資料等の読み取りに力を入れ、より具体的に自然条件に対応する人々の暮らしの工夫や努力をつかませたい。

6. 単元の目標

認知的目標

・地図や各種の資料、手紙の返事の読み取りなどを通して、芸北町の人々の暮らしを具体的に捉えることができる。

・豊浜町と芸北町の人々の暮らしを比較して、広い立場から豊浜町の生活の特徴に気づかせる。

態度的目標

・様々な資料によって、芸北町の人々の暮らしについて、自分の予想したことや調べたいことを調べようとするができる。

・友だちの発表・意見をよく聞き、進んで発表ができる。

7. 単元学習計画

時	学習課題	実践活動
1	1. 学習課題を知り、学習計画を立てる。	・プリテスト。 ・教科書を読み、学習内容の概略をつかむ。

		<ul style="list-style-type: none"> ・各時間の学習課題を知り、狙いを把握する。
2	2. 自分たちの町（豊浜町）と周りのようすが違う土地を県内から見つけよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を確認する。 ・広島県地図を配布し、各自知っている地名を確認する。 ・各自探した地域の地形的な特徴をノートに書く。 ・それをもとにグループ学習をする。 ・全体バズでグループの意見を出す。 ・全体バズを受けて、県内の地形的特徴をまとめ、芸北町を取り上げるのだという学習の視点を持たせる。
3	2. 芸北町の友だちに手紙を書こう。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を確認する。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちの町のことを知らせよう。 ・芸北町のことについて調べたいこと、質問することを決めよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自質問すること、調べたい事を考え、ノートに書く。 ・グループで出し合う。 ・全体バズでグループの意見を出し、共通な質問事項をまとめてゆく。
5	4. 芸北町の土地の様子を、豊浜町と比べてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を確認する。 ・地形図を配布する。 ・地形図を色分けする作業を通して、個人で気づきをノートに書く。 ・グループで気づきを出し合う。 ・全体グループでグループの意見を出す。 ・全体バズを受けて、ビデオやスライドを地形図と関連付けて教師がまとめる。
6	5. 芸北町の機構の様子を豊浜町と比べてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を確認する。 ・豊浜町との土地の違いから、どんなことが違ってくるか予想させる。 ・資料を配布し、TPでも提示する。 ・資料から個人で気づきをノートに書く。 ・個人がノートをもとに発表する。 ・教師が補足して小まとめをする。 ・地形や気候の違いから、芸北町における人々の暮らしを予想し、ノートに書く。 ・グループで予想を出し合う。 ・全体バズで、グループの意見を出す。
7 本 時	6. 冬の間、仕事のできない農家の人々はどんな暮らしをしているのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を確認する。 ・資料を提示し、考えるヒントにさせる。 ・個人で考えたことをノートに書く。 ・個人がノートをもとに発表する。 ・資料を調べたり、スライドの視聴で分かったことをノートに書く。 ・グループで広げまとめていく。 ・全体バズでグループの意見を出す。

		<ul style="list-style-type: none"> ・教師が補足・説明しまとめる。
8	<p>7. 芸北町の農家の人々の夏の暮らしを知ろう。</p> <p>・コメだけでなく、野菜や牛を育てているのはどうしてだろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を確認する。 ・資料を提示し、考えるヒントにさせる。 ・個人で考えたことをノートに書く。 ・個人がノートをもとに発表する。 ・資料を配布し、OHPでも提示する。 ・農家の人々の工夫について、考えたことをノートに書く。 ・グループ学習で深めていく。 ・全体バズでグループの意見を出す。 ・全体バズを受けて教師がまとめる。
9	<p>8. 芸北町の人々は、自分たちが使うものをどこから買っているのだろう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を確認する。 ・スライドを視聴し、気のついたことをノートに書く。 ・個人がノートをもとに発表する。 ・地図・資料を配布し、考えたことをノートに書く。 ・グループ学習で広げ深める。 ・全体バズでグループの意見を出す。 ・録音資料、教師の補足説明でまとめる。
10	<p>9. 今までの学習を確かめる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体で今までの学習のまとめをする。 ・ポストテスト。

8. 本時の目標

芸北町の農家の人々は雪を生かしてスキー場や民宿の仕事をしていることを理解する。

9. 準備物 スライド、各種資料、録音テープ、OHP。

10. 過程

*「全」：学級全体、「個」：個別、「集」：グループ

	学習活動	指導上の留意点
全	1. 前時の学習を想起し、本時の学習課題を知る。	
	冬の間仕事のできない農家の人は、どんな暮らしをしているのだろう。	
個	2. 資料を提示し、考えるヒントにし、予想したことをノートに書く。	・冬になると芸北町にやってくる人が多いのどうしてか疑問を持たせる。
全	3. 個人がノートをもとに発表する。	・緩やかな斜面を利用したスキー場が6つもあることに気づかせる。
全	4. スライド、地図で小まとめをする。	
個	5. 資料を配布し、農家の人々の暮らしについてひとり調べをする。	・スキー場や民宿の仕事に関係のある所に線を引きながら考える。
集	6. グループ学習で広げ深めていく。	
全	7. グループの意見を発表し、まとめる。 ・スキー客を集めるためにしていること。	・豊浜町の人々の暮らしと比べて、どんなことで苦労しているか、とらえさせる。

<中学校> 1983年11月9日、豊浜中学校校内研修会資料より。

国語科学習指導案

指導者 E.F.

単元 伝記を読む 野口英世の母

目標 認知目標

- ・シカの間像をつかむ。
- ・シカの真摯な生き様を通して人間の生き方、自分の生き方について考える。

態度目標

- ・伝記に親しむ。
- ・自分の意見をみんなの前でまとめて発表できる。

目標分析

- ・シカの生涯のあらましを読み取る。
- ・シカの生き方に対する意見が発表できる。
- ・シカの生き方から学んだことが発表できる。

提示課題

- T1. シカの手紙を読んで、主人公がこれまでにどんな生活を送ってきたか想像してみよう。
- T2. P.196~209 を読んで、シカの生涯のあらましをワークブックの表に書き込みなさい。
- T3. シカの「苦勞に満ちた人生」とはどのようなものでシカはそれにどのように対処していたか。
- T4. 筆者はシカに対してどういう気持ちを抱いているか。
- T5. 筆者はなぜシカの伝記を書いたのだろうか。
- T6. シカの生き方について、自分の考えを述べなさい。
- T7. この伝記から考えさせられたことを発表しよう。

単元学習計画

時	提示課題	活動		評価方法	修正 事項
		生徒	教師		
1	T1	シカの手紙を読み、感想を発表する。 T1にとりくむ。気づきをノートする。	範読。 補足説明。	発表 宿題	
2	T2	p.196~204 を読んでシカの少女時代のあらましをワークブックにまとめる。(個→班)	感想を発表させる。 補足説明。	発表 机間巡視	
3	T2~T3	p.204~209 を読んでワークブックにまとめる。(個→班) 課題3をノートにまとめ発表する。	印象に残ったことを発表させる。 補足説明	机間巡視	
4	T4~T7	課題4~7をノートにまとめる。 ノートをもとに自分の考えを発表する(個→全体)	発表をもとに板書	ノート提出 机間巡視	

5	学習の課題四 言葉の学習 漢字の学習	p.210～211 を読んでノートにまとめる。 (個→班→発表)	発表をもとに板書し まとめる	机間巡視	
6	ポストテスト	シカの生き方に対する感想を書く。 漢字テストに取り組む。	机間巡視	プリント	

本時の目標 (1/6)

認知目標 手紙の内容を理解する。

手紙に込められたシカの心情をつかむ。

手紙を通してこれまでのシカの生活、生きる姿勢をつかむ。

態度目標 根拠を示しながら自分の意見をはっきり述べる。

本時の学習計画

	教師の活動	生徒の活動	留意点
準備 課題	学習課題を提示する	学習課題を確認する 学習課題をつかむ	
中心 課題	範読 2 回 難語句の説明 シカの願いとそう願う背景について考えさせる	各自シカの手紙を微音読する 印象、感想を発表する 手紙の内容をつかむ p.194 l.5～p.195 l.7 で内容を確認する シカの心情をつかむ 個→班→発表 手紙に表れているシカの生き方について考える ノート→班討議→発表	いっごろ 誰が だれに 何を 繰り返し述べられている ことがら シカの強さ、弱さ
確認 課題	本時のまとめ・次時予告	本時で学習したことを確認する ノート整理・確認	

<高校> 1984 年度豊高校校内授業研究会資料より。

英語科指導案

指導者 M.M.

1. クラス 1 年 2 組 男子 12 名、女子 16 名

2. 単元 Lesson 2 “On the way to school”

3. 目標

- 認知目標
- 1) 英文を読み内容を把握する
 - 2) 過去形を理解する
 - 3) イントネーションによる意味の違いを理解する
 - 4) want to, have to ～ を使って表現できる
 - 5) 筆記体を書けるようになる
 - 6) アルファベットが正確に書きとれるようになる

- 態度目標
- 1) 感情をこめて二人で音読できるようになる

4. 目標分析

- 1) 新出語彙・慣用句を理解する

hi, cycling, cycle(d), kilometer(s), bank, bloom, essay, custom, viewing

- 2) 下記の文法事項を理解する

- a) 平叙文（肯定）の過去形の文を作る

be 動詞 (is, am, are) → (過去) was, were

一般動詞 (規則・不規則変化) → (過去) -ed など

- b) 上記の文を疑問文、否定文にする

- 3) イントネーション (上昇、下降、平板調) による意味の違いを理解する

- 4) want(have) to ~

- a) want(have) to ~ の持つ意味を理解する

- b) want(have) to +動詞の原型 の理解

5. 提示課題

- 1) T1~T3 Lesson2 本文の helper 及び筆記体の練習
- 2) T4 過去形
- 3) T5 イントネーション
- 4) T6 want(have) to ~
- 5) T7~T9 単語テスト及びアルファベットの書き取り
- 6) T10 Practice (教科書)
- 7) T11 動詞の過去形 (小テスト)

6. 単元学習計画

時	課題	学習指導		評価	修正
		生徒	教師		
1	Pre test	個人 (テキスト、辞書等を用いて)	机間巡視、解答	プリント	L1 のポストテスト後、プリテストを実施。答え合わせ。
2	T1	Phrasing → chorus reading → 班 → 発表	説明 → chorus reading → 机間巡視 → 確認	板書	

3	T2,5,7	小テスト→chorus reading→班→発表	chorus reading→机間巡視→確認	板書	T5 を扱わず板書での確認はせず。対訳ノートを提出させる
4	T3,8	小テスト→chorus reading→班→発表	chorus reading→机間巡視→確認	板書	板書での確認をせず、対訳ノートを提出。その後1時間かけてT2、T3の訳の確認。Readingの練習。
5	T4,9	個人→班→発表	説明→机間巡視→確認	板書	T4の疑問、否定は省略。発表は次の時間へ。T4の提出は班長のみ。
6	T4,6,11	小テスト→個人→班→発表→提出	説明→机間巡視→確認→説明	板書 プリント	T11は次時に。
7	T10	個人→班→発表	説明→机間巡視→確認	板書	
8	Post test	個人	机間巡視	プリント	

7. 修正事項

4時限と5時限の間に1時間補充し、section2, section3の訳の確認、Lesson5のreadingの練習、及びアルファベット（特にD,I,R,V,Y等）の確認を行う。

8. 本時の学習計画

時間	学習課題	学習活動		留意点
		生徒	教師	
10分	前時の確認、T4	各班より指名して板書 chorus reading	説明→確認→chorus reading→T4の提示	
10分	have to～、want to～の説明	板書をノートに写す	板書→説明	
15分	T6	班で学習→発表	机間巡視	
10分	T6の確認	修正	説明	
5分	まとめ	提出提出		

T1~T11 はすべて課題の形で
 全てプリントで生徒に示され
 る。

T1,T2 のプリント→

T1

@ Section 1 (p.6 1.1- 1.7)

On his way to school on Monday, Tadashi
 meets Mary.

on his way to ~
 = on the way to ~
 ~に行く途中で

T: Hi, Mary.

M: Hi, Tadashi. Did you enjoy your
cycling trip yesterday?

Did you enjoy ~
 ~をしておもしろかったか?

T: Yes. I cycled 60 kilometers in four
 hours. I really enjoyed my lunch
under the cherry blossoms on the river
bank.

-d, -ed } ~した

1) Section 1 を対訳ノートに訳しなさい。

2) 次の単語を筆記体で _____ に書き、その意味を () 内に記入しなさい。

- (1) Monday _____ ()
- (2) enjoy _____ ()
- (3) yesterday _____ ()
- (4) cycle _____ ()
- (5) hour _____ ()

T2

@ Section 2 (p.6 1.8- 1.11)

M: Were they in full bloom?

(be) in full bloom
 満開で

T: Yes, they were at their best.

(be) at their best
 見ごころ(ある)

M: That's wonderful. I had to stay home
to write an essay on "Spring in Japan."

had to ~
 ~しなくてはならなかった
 to write 書くために

1) Section 2 を対訳ノートに訳しなさい。

2) 次の単語を筆記体で _____ に書き、その意味を () 内に記入しなさい。

- (1) were _____ ()
- (2) wonderful _____ ()
- (3) had _____ ()

編 者

杉江 修治 中京大学名誉教授
博士（教育心理学）

豊高校区幼・小・中・高一貫教育態勢の取り組みの記録
—地域の課題を追究した離島の教育とバス学習
(協同教育実践資料26)

2021年10月4日 第1刷発行

編 者 杉江修治

発 行 一粒書房

〒475-0837 愛知県半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

編集・印刷・製本（有）一粒社出版部(代表 都築延男)

〒475-0837 半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

ISBN978-4-86743-040-8 C1337

協同教育実践資料 26

豊高校区幼・小・中・高一貫教育態勢への
取り組みの記録



ISBN978-4-86743-040-8
C1337

定価 3,000円
(本体2,728+税10%)